
海の宝玉 蒼穹の欠片

招夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海の宝玉 蒼穹の欠片

【Nコード】

N9686F

【作者名】

招夏

【あらすじ】

宇宙の船が地球に辿り着いて二年後、ナンディー瑞樹の元にハル共和国からの使者がやってきた。使者の目的は？瑞樹の周囲で再び何かが動き始める

第一話 秋にやってきたハルの使者（1）（前書き）

本作品は、惑星ハルシリーズ vol. 2です。「宙の船 流転の岸」の続編になります。

このお話からでも読めるように工夫はしたつもりですが、訳わからなかったらごめんなさい。失踪していた間の瑞樹に何があったのかは、vol. 1「宙の船 流転の岸」をごらんくださると幸いです。
招夏（拝）

第一話 秋にやってきたハルの使者（1）

眩しい太陽の光はちよつと苦手だ。

瑞樹は目深に被ったつばの広い帽子をぐつと引き下ろした。外に出る時はサングラスが欠かせない。こんなに空気が澄んで気持ちがいい秋の蒼穹を自分の目で直接見られないのは、かなり残念なことだと思う。

瑞樹は二年前にある事件に巻き込まれて体から大量の色素を失った。日本人ではありえない翠色みどりいろになってしまった瞳は眩しい太陽の光を頑かたくなに拒否する。光に弱い色素の薄い外国人が、しかしそれでも徐々に光に慣れて行くように、そのうち元のように生活できるようになるのだらうと瑞樹は考えていたし、医者も最初はそう言った。しかし、いつまでたっても瑞樹が太陽光に慣れることはなかった。色素を作り出すメカニズムそのものが欠落もしくは退行しているらしいと、まもなく医者は診断を変えた。まるで太陽に捨てられた孤児になった気分。ちよつとしたお遣いにさえこの重装備だ。

UVカットの長そでブラウスは仕方がないとして、手の甲をすっぽりガードする手袋と足の甲を守るための靴下は、夏の間中瑞樹を悩ませた。日焼けによる火傷やけどを我慢するか、汗だくになることによる汗疹あせもを我慢するか夏中悩み続けて、決着はつかないまま、夏に体力をめいっばい吸い取られた。そして、ようやく迎えた、風さわやかな秋の昼下がりだ。

木綿でできたトートバッグの中には買い忘れていたアーモンドプードルとチョコレートパウダーが入っている。瑞樹は気持ちよさそうに息を吸いこんだ。昨日あたりから金木犀きんもくせいのいい匂いで町中の空気が冴えわたっていた。金木犀の匂いが町を包み込むのはほんの一週間程だ。その間だけは絶対、雨に降ってほしくないと毎年思う。

降っても照っても匂いがもつのは一週間だけだからだ。降ったら匂いが薄くなってしまう。

その時、通りの先で誰かが言い争っている声が聞こえた。懐かしい異国の言葉が耳に飛び込んでくる。

ふと目線を通りに移すと、案の定、人がもめていた。瑞樹同様、周囲よりも格段に重装備をした二人と老紳士、もう一人は恰幅かつぶくのいい年配の警官のようだ。

「身分証明書を見せてくれる？ Would you show me your passport？」

威圧的な日本語の後にぎこちない英語が続く。

「うるさいわね、このオッサン」

張りのある若い女の声が聞こえた。女は異国の言葉をしゃべっている。瑞樹は目を見張った。

「パスポートを見せなさいと言っているんですよ、アーマルターシユ」

老紳士が穏やかな声で女にそう伝える。

「Do you speak English？」

「英語を話せるかと聞いていますよ」老紳士が訳す。

「日本語も英語も話せるけど、こんな怪しいオッサンとは話しませんって言ってやりなさいよ。何？ この人、変なかつこして……」

アーマルターシユは自分のことは棚に上げて、警官の服装を胡散臭げに眺めた。

「これは警官の制服ですね。国家権力をバックにしている警備員です。怪しいことはありませんが、逆らうと面倒なことになるかもしれませんよ」

あくまでも老紳士は穏やかに異国の言葉で説明する。

「そうなの？」

アーマルターシユは肩を竦める。

「あんた、日本の社会システムのファイル見てないだろう？ しか

も警官の制服なんてどの国もこんなものじゃなかったか？」

今まで黙っていた背の高い男が口を挟んだ。

「疲れてんのよ、ここんとこずっと報道官として追い回されてたから。それに大脳コンタクトはめっちゃくちや疲れるのよ」

「負け犬の言い訳だな」

男は冷たく言い放った。

「じゃあ、あんたがこの状況をなんとかして頂戴ちようだいよ。大体、このミツシヨンは私が受けたんじゃないくて、あんたがカナメから依頼されたんでしょ」

瑞樹は懐かしい名前を耳にして、心臓がぴしやりと跳ねた気がした。

警官を全く無視してしゃべり続ける外国人三人を前に警官はじりじりしてきた様子だった。

「と、とにかく、署まで来てもらおうか」

警官は駐在所がある方を指さしながら老紳士の腕を引っ張った。

瑞樹は慌てて警官に声をかける。

「あの！ この人たち何かしたんでしょうか？」

「あなたは？」

警官はむっとした様子で瑞樹を睨みつけた。重装備の怪しい人間がもう一人増えたと彼の顔には書いてある。

「私は日向瑞樹ひゅうがみずきです。三丁目の……」

「ああ！ 日向さんちの！」

警官の目が胡散臭いものを見る目から好奇心を含んだ目に変わった。

突然失踪してから約一年後、姿をすっかり変えて戻ってきた瑞樹をほとんどの人が好奇の目で見つめた。この警官のように。

「瑞樹！」

アーマルターシュが瑞樹に嬉しそうに飛びついた。

「アーマルターシュ、どうしたの？　こんな所で……道にでも迷ったの？」

瑞樹は異国ハルの言葉を流暢に話した。

「あなたに会いに来たのよ。連絡をくれてメッセージを出していたのに全然連絡をくれないんだもの。どうして連絡をくれなかったのよ？」

アーマルターシュは無然とする。

「あれ、連絡をくれて意味だったの？」

瑞樹は眉間に皺を寄せる。

「ああ、あなたが鈍感なことはわかっていたんだけど、他に方法がなかったのよ」

アーマルターシュは瑞樹をぐっと抱きしめた。

「日向さん？　日向さん！」

警官が何度も瑞樹に話しかけているのにやっと気づいた瑞樹は警官に目を向けた。

「ああ、この人たちは怪しい人たちじゃないんですよ。最近ニュースでよく見てるでしょ？　ハル共和国の人たちなんです。あまり日本のことをよく知らないらしくって……」

次にアーマルターシュに向かって瑞樹は訊く

「パスポートは持ってないの？」

「持ってるわよ」

アーマルターシュは投げ出すようにパスポートを瑞樹に渡した。

「持ってるんなら、すぐに見せれば良かったじゃないの」

瑞樹は呆れて言った。

「だって、このオッサンが偉そうで嫌だったんだもの」

アーマルターシュは子供みたいにぷくつと頬を膨らませた。瑞樹は溜息をつく。

ハル共和国は太平洋に浮かぶ小島にある国で、人口二千万人の小

さな国だ。最近国として建国宣言をしたばかりなくせに、やたらに世界中にあらゆる提案を発して、その為に今世界中で一番注目を浴びている国なのだ。

「だからあ、火を使ってゴミ？　だったかしら……を燃やす事を止めなさいって言ってるでしょう？　何の為の分解再生装置だと思ってるのよ。今度そのゴミとやらを燃やしたら、もうあんたの国には貸さないからね！」

瑞樹が初めて聞いたハルの報道官の言葉はこうだった。驚いてテレビのニュースに釘付になる。アーマルターシュは美しい金色の髪をうず高く結い上げて飴色のフレームの眼鏡を掛けて不快感を露あらわにして叫んでいる。

「我が国と致しましては、この分解再生装置を貸し出すにあたって、不要物の焼却を行わないと言うことを条件としておりました。この条件を呑んでもらえないのであれば、大変遺憾ながら、当装置の貸し出しをお断りせねばならないと考えております」

穏やかそうなお兄さんが微笑みながらアーマルターシュの荒っぽいハル語を穏やかな言葉に訳していく。瑞樹は啞然としてテレビの中のアーマルターシュを見つめる。アーマルターシュが着ている淡いラベンダー色のスーツの胸には報道官にしては奇妙なほど大きな名札のようなプレートが付けられていた。

ヒュウガミズキの黄色い花の絵が描かれたその下に『以下の番号に電話しなさい』とハル語で書かれていて、更にその下に電話番号らしき数字が書かれていた。

「まさかね」

呟いた瑞樹に父が話しかけた。

「何がまさかなんだ？　しかし、このハルの報道官ってえらい別嬪びんさんだよなあ。こんなに怒ってなかったら、さぞかしもてるだろうに。綺麗な薔薇には棘があるって言うことかいなあ」

父は風呂上りの髪の毛をバスタオルで拭きながらニュース番組を他の局に変えた。そこにもアーマルターシュの怒った顔が大写しさ

れていて、瑞樹は顔を顰める。

「どこ見てもこの顔じゃない」

瑞樹は呆然と呟く。

「おまえ、ちっとはニュースも見とけよ。ここ一月ほどハル共和国のニュースばかり流れてるぞ」

「ふうん：で？　アーマルターシュはいつもこんなに怒ってるの？」

「そ、有名人だぞ。おまえ、今、友達みたいに名前呼んだなあ」

父は大らかな声で大笑いした。

父による情報では、ハル共和国と言うのは環境問題にとでもうるさいのだそう。ハルで開発された分解再生装置とやらを有料で借りて使用するか、自国で生じたゴミを無料でハル共和国まで運ぶかしなければ、一切の国交を断絶するとすべての国に呼びかけたらしい。当然歴史ある他の国は、何を建国したての国がえらそうにと反発した。ならば結構とそう言う国を本当に一切排除して、国交を開始したものだから、世界中がハルの意向と本来の狙いを探るべく報道官を追い回すことになっているのだという。

ハル共和国がここまで強行に世界に打って出たのには訳があった。ハル共和国が、現存している科学技術力が遠く及ばない、異質で最先端の科学技術という宝刀を持っていたからだ。異質な科学技術：それは今まで世界に存在していた科学技術と明らかに系統を異にしているとしか言いようがない独特の科学技術をハル共和国は持っていた。

しかしながら、この国が特殊なのはそう言ったさまつ瑣末な事柄なのではなかった。このことは世界中の誰もが知らないことなのだが、ハル人はすべてハルという惑星から逃げてきた宇宙人であるということなのだ。

惑星ハルは中心の恒星ジタンの終焉により崩壊した。

失踪していた約一年間、瑞樹はこのハルの宇宙船に拉致されていた。帰国当初は根掘り葉掘り訊く周囲の人たちに本当のことを話していた瑞樹だったが、誰一人として瑞樹の言を信じるものではなく、結局の落とし所として失踪していた間の記憶が定かでないと言うところに落ち着かざるを得なかった。それなのに、一年近くたった今になってハル共和国の突然の建国だ。

瑞樹としては、周囲に胡散臭げな目で見られた苦い経験から、今さらハルに関わるということは極力避けたかったし、ハルの方でも瑞樹になど用事があるわけがないと思っていたので、アーマルターシュの名札の件はあっという間に瑞樹の意識から零れ落ちたのだった。

第一話 秋にやってきたハルの使者（2）

今、正樹ただきは都内にある大学の近くで一人暮らしをしている。だからいつもは瑞樹みずきの家の隣の実家にはいなかったが、今日は正樹の誕生日なので久しぶりに帰ってくることにしていた。

正樹と瑞樹は幼馴染だ。瑞樹の家と正樹の家は隣同士であるだけでなく、父親同士が友人であった為、正樹の妹の皐月さつきも含めてほとんど兄弟のように育ってきた。だからそれぞれの子供たちの誕生日を二家族そろってお祝いをするのは恒例の行事になっている。今日は正樹の家で夕方からバスデーパーティーをする予定だ。

瑞樹の家では、母親が朝から台所を占領していたので、瑞樹のクッキー作りは昼過ぎにずれ込んでいた。いざ、作ろうとしたら材料不足だ。

「あなたは昔からドロナワ式ねえ、少しも進歩しないわねえ」
母から散々嫌味を聞かされて遮光用の重装備に身を包み外に出かければ、帰りは怪しげな外国人三名を拾って帰る事態に陥る。

「なんか、今日はついてないかも……」

瑞樹は一人ごちた。

警官は、結局瑞樹の家の前まで付いてきて母親とひとしきりおしゃべりをしてから、にこやかに帰って行った。

三人が持っていたパスポートは実に物々しいものだった。ラークスパーがハル国家主席補佐官兼通訳、アーマルターシュが報道官、そしてニシキギが特別補佐官の肩書を持っていた為、警官は顔を引きつらせながら、自ら目的地までの護衛を買ってでたという訳だった。

「ねえ、ハルの国家主席って誰？」

瑞樹は、アーマルターシュとラークスパーの後を仏頂面でついていくニシギに問いかけた。アーマルターシュは急に腰が低くなった警官に気を取り直して賑やかにおしゃべりを始め、ラークスパーはそれを日本語に訳しながら穏やかな笑みを浮かべ付いて行く。

一年前、ナンディーにいた時の、アーマルターシュとラークスパーの立場が逆転しているような気がする。肩書からするとラークスパーの方が偉そうだけど……。

「そんなこと訊いてどうする？」

ニシギはぼつりと呟くように問い返した。

「別にどうもしないけど……訊いちやいけないの？」

瑞樹は怪訝そうにニシギを見上げる。遮光服を着てサングラスをかけているのでニシギの表情はよく分からない。特に会えて嬉しいとか、久し振りで積もる話があるとかいう相手ではないけど、もう少し柔らかい雰囲気で会話できないものかと瑞樹は心の中で溜息をつく。

「あんたは知る必要がない。余計なことだ。どうせ色々無駄なことを考えて、無駄なことをするに決まっている。それに今、議会は会期中ではない。厳密な意味での国家主席はいない」

ニシギは言葉少なに返事をする黙りこんだ。

「なにそれ……さっぱり分かんない」

瑞樹は溜息をついた。訊いた相手が悪かったのだと心の中で自分をなだめる。

しかしニシギは遮光服の中で穏やかに微笑んでいた。こんな風にすっかり顔を見て瑞樹と会話するのは一年ぶりだ。だけど、ニシギはすぐに視線をそらしてしまう。

遮光用のサングラスの奥に沈んだ瞳のエメラルド。会ったばかりの瑞樹は漆黒の瞳を持っていた。その二色がニシギの中の何かを揺り起こそうとしているようで、すぐに落ち着かなくなってしまいうからだ。

瑞樹は、ニシキギが無言で通りの家々や木々や空や太陽や近くを流れる水路などを眺めているのを見つめる。初めてカナメに大腦コンタクトでこの通りの記憶映像を見せた時、彼も同じような反応をしたのを思い出す。

カナメ……甘やかで温かいものがじんわりと胸に込み上げてきた。「……カナメは元気にしてるのかな？ ナンディーにいるの？」

大した事を訊いている訳ではないのに頬が上気して熱くなるのを感じる。

ナンディーというのはハルの宇宙船だ。彼らはこの船でエクソダスを果たしたのだ。着陸できない構造の大型船で、一年前は火星の軌道を回っていた。

「カナメは地球に来ている」

ニシキギは不機嫌そうに瑞樹の顔を見つめて言った。

「地球に？」

瑞樹は目を見張る。彼が、地球にいつ行くかわからないと言っていたのは一年前のことだ。

瑞樹の家には南側にさして広くない庭があって、そこには瑞樹の名前の元にもなったヒュウガミズキの低木がこんもりと葉を茂らせている。

「ねえ、ヒュウガミズキの木ってどれなの？」

庭に踏み込んだアーマルターシュの視線が比較的大きめな木々を難^ないでいく。

「これだけど……」

瑞樹が指した低木を見て、アーマルターシュは明らかにがっかりした表情をした。

「こんなに小さいの？」

「小さくちゃいけないの？」

瑞樹は不思議そうにアーマルターシュを見つめた。

「いけなくはないわよ、いけなくはね。この木を少し分けて欲しいのよ」

更にテンションを落としてアーマルターシュは微笑んだ。

「それはかまわないけど……なんで？」

瑞樹は不思議そうにアーマルターシュを見つめる。

「そもそも、あなたがすぐに連絡をくれなかったからいけないかったのよ！」

再びアーマルターシュのテンションが上がってきた。

「あんなに大きくて不格好な名札を付けてテレビに出てたんだから、ふつー気づくでしょ？ あなたはハル語がわかるんだし……なのに連絡がないから何度も何度もあれを付けて出るはめになって、記者が気づいちゃったのよ。それはなんですかって」

「……なんであんなものを付けてたの？」

瑞樹は恐る恐る問いかける。

「あなたに連絡を取りたかったからに決まってるでしょ！」

アーマルターシュは瑞樹を睨みつけた。

「それで仕方がないから、この花はハルの国花です。この番号は代表電話番号です。何か質問等あったらここに連絡くださいって言うしかなかったのよ。あの番号はパンクしちゃったわ。で、ここまであなたに会いに来ることになっちゃったのよ。どうしてくれるの？」

アーマルターシュの目が怖い。

「だって、アーマルターシュが私に連絡欲しいなんて思わないし……」

瑞樹は身を縮めて呟いた。

「国花と言っちゃったのに、ハル共和国にヒュウガミズキが一本もないなんてのはまずいでしょ？」

アーマルターシュは腰に手を当てて溜息をついた。

そんな事情で国花を決めてしまう方がまずいんじゃないだろうか
と瑞樹も溜息をついた。

第一話 秋にやってきたハルの使者（3）（前書き）

□ 内のセリフは日本語、 □ 内のセリフはハル語になっています

第一話 秋にやってきたハルの使者（3）

アーモンドプードルを入れるのと入れないのではクッキーの味が格段に変わる。浮草みたいに頼りない甘さだったのが、しっかりと根付いたコクのある味になる。正樹ちゃんはチョコレート味が好きなのでココアパウダーもたっぷり入れる。粉だけはきちんと計^{ふる}って篩^{ふる}っておく、それが最終的なクッキーの食感を左右する。瑞樹は真剣な顔でスケールの数値を睨む。

「あんた何してるんだ？」

さっき瑞樹の部屋に案内して、そこで遮光服を脱いだニシキギがキッチンに入ってきた。

「クッキー作ってるんだけど……。アーマルターシュとラークスパー教授は？」

瑞樹はバターと砂糖をすり混ぜながら顔を上げた。うーむ、どうみてもニシキギの雰囲気は純和風の我が家のキッチンに合わないな—と思う。薄い金色の髪に碧い瞳、彫の深い顔……。人のことは言えないか、瑞樹は軽く溜め息をつく。ニシキギほど彫は深くないが、深い翠色の瞳に白すぎる肌、自分もこんな風に両親には違和感を持って見られてるんだろうなと思いつき憂鬱になる。

一年前に失踪して帰ってきた時、父も母も正樹もその家族も当然友人も誰一人として、瑞樹のことを日向瑞樹だと信じてくれなかった。瑞樹が失ったのは色素だけではなく、見た目もすっかり変わってしまったからだ。逆に瑞樹がもしハル共和国に行ったとして、ハルの人は誰も瑞樹を他国の人間だとは思わないだろう。

瑞樹はハルで受けた再生治療によってディモルフオセカ・オーランティアカというハル人にそっくりになってしまっていた。ハル人は長年にわたる地下都市生活によって、色素を作り出せない肌色の

薄い人種になってしまっていた。だから地球にいる限りハルの人たちは太陽の強い光線が降り注ぐ昼間は遮光服を着なければならぬのだ。それは瑞樹も同様だ。だから瑞樹の家のどの窓にも遮光カーテンが掛っている。

「アーマルターシユはあんたのベッドで寝ている。ラークスパーは情報処理中だ」

ニシキギはダイニングの椅子を引いて背もたれに顎を乗せるようにして座った。

小花柄のエプロンをつけた瑞樹をニシキギは不思議な生き物を見るようにジロジロと頭のとっぺんからつま先まで眺めた。この世界では……食べ物をも自分で作る、もしくは売っているものを買ってくる、もしくは店で注文して食べる。ハルの地下都市ではありえない光景。

アール・ダー村の森の民は食べ物を調理していたが、ニシキギは十歳の時、地下都市に追いやられた。それ以来、食べ物はモルオーブンから出てきたものしか摂取していない。食べ物を作っている地球人を見るのは初めてだ。

頭にかぶった赤い布から茶色いほつれ毛が零れてクルリとカールしている。悪くない……ニシキギは無表情なままそう思う。

瑞樹は背中にニシキギの視線を感じて少し居心地が悪い。アンドロイドの方がまだ表情があるような気がするんだけど……瑞樹はこっそり心の中で溜息をついた。ラークスパー教授は見かけこそ人の良さそうな老紳士だが、実は精巧にできたアンドロイドだ。だから彼は遮光服を着る必要がない。

「当然のことだが、モルオーブンはないんだろうな」

ニシキギは辺りを見回して、オーブンレンジに目を留める。ハルにはモルキュラーオーブン（分子オーブン）というものがあって、これは再生装置のお料理版みたいなもので、分子構造さえわかって

いれば、どんな食べ物でも完璧に再生される。だからハルの人は料理を作ることをしていないのだ。

「当然、そんなものはないよー。それはオーブンレンジ。このクッキーを焼くの」

「ふーん」

ニシキギの視線がキッチンのあらゆる場所を泳いで行く。

惑星ハルではほとんどの人が地下都市に住んでいた。限られた空間で生きていくために、彼らは究極のリサイクル生活と物を持たない生活を強いられてきた。その生活を可能にしたのが分解再生装置だ。その装置はすべての物を分子レベルまで分解し、同時に思いのままの物を再生することができた。つまりゴミという言葉がない暮らしをしてきたのだ。必要なものは何でも手に入るが、物に執着することを許されない、無駄を許されない暮らしだったのだ。彼らの目から見たら瑞樹の家は無駄なものだらけということになるのかもしれない。

篩ふるっていた粉を混ぜ合わせて捏こね上げ、滑らかな表面の塊かたまりにしてからラップで包み冷蔵庫で寝かせる。昨日のうちに捏ねてあったプレーンタイプのクッキーの種を取り出し型を抜いて行く。

「なんだ？この形は……」

ニシキギがつまみ上げた型は星の抜き型で、星と言うからには五つの鋭角のでっぱりが放射状に飛び出している。

「それは星型に決まってるでしょ？」

ニシキギから型を取り戻して薄く伸ばした生地を抜き取る。

「星はそんな形をしていない」

ニシキギは無表情のまま指摘する。

「地球から見たらこんな風に見えるの！地球には大気があるから。そんな厳密に星の形にしたら、ただの球か丸になるじゃん、要は形的にかわいいの！」

瑞樹はむっとして言い返す。

ニシキギはその後ハート型に事実と異なっていると文句をつけ、クマ型とウサギ型にはこんな形で食べるのは残酷だと文句をつけた。焼き上がったクッキーを取り出したところでアーマルターシュが降りてきた。

「いい匂い……何してるの？」

「クッキー焼いてるんだけど、ニシキギがうるさいからどっか連れて行ってよ」

瑞樹はチョコレート味の生地を抜きながらアーマルターシュに泣きついた。アーマルターシュは瑞樹を無視して焼き上がったプレーンクッキーをつまんだ。

「おいしー」

それを見たニシキギも手を伸ばす。

「ちよっとー、食べるのは形が壊れてるのにしてよ。形がいいのはパーティー用なんだからあ」

瑞樹は文句を言いつつも、二人にコーヒーを淹れた。コーヒーの香ばしい香りがキッチンに広がる。二人の肩書からしたら、非常に失礼な言いようかもしれないが、二人は特に気にする様子もなくいびつな形のクッキーを選んでいる。妙に真剣なその様子が小さな子供みたいにして、瑞樹はこっそり小さく吹き出す。その時勝手口が突然開いた。

「瑞樹！」

勝手口には切羽詰まった雰囲気、正樹が立っていた。

「正樹ちゃん！お帰り、早かったねえ、コーヒー飲む？」

瑞樹を確認すると、正樹はほっとした様子で軽く頷いた。

「母さんから連絡があったんだ。瑞樹んちにハルの人が来てるって」

正樹はアーマルターシュとニシキギを見つめながらそう言った。

アーマルターシュとニシキギは、何故か目を見開いて正樹を見つめていた。

「ああ、紹介するね。こちらうちのお隣さんで幼馴染の正樹ちゃん」
「正樹ちゃん、こちらはハルのアーマルターシュとニシキギ」

瑞樹が紹介し終わると同時に、アーマルターシュが流暢な日本語で正樹に話しかけた。

「初めまして、私、アーマルターシュ・サイカチと申します。ハル共和国の報道官をして

おります」

「特別補佐官のニシキギ・エウオニムスです」

二人とも瑞樹に接する時とは別人のようだ。

「なんなのよー、二人とも日本語ぺらぺらじゃない」

瑞樹は啞然として二人を見つめる。

「お会いできて光栄です」

アーマルターシュが正樹を熱のこもった目で見つめる。同様の熱がニシキギの瞳の中にもあるように瑞樹は感じて首を傾げた。

「なにになに？　なんで正樹ちゃんに会えたら光栄なの？」

正樹がたじろいでいる様子なので、代わりに瑞樹が質問する。

「似ているとは聞いていたのですが……本当に良く似ている」

ニシキギが正樹の手をがっしりと掴んで言った。瑞樹はああ！と合点する。

「正樹ちゃんはね、イブキに似てるんだよ。ハルの人」

瑞樹が横から口を挟んだら、

「あんたにイブキさんと呼び捨てにして欲しくないな」

とニシキギが顔を顰めた。

「はいはい、すみませんでした。でもニシキギだってカナメのことは呼び捨てにするじゃん。カナメとイブキって親友だったのは知ってる？」

「瑞樹がどうしてイブキのことを知ってるの？」

アーマルターシュが突然ハル語で鋭く訊いてきた。動揺した瑞樹の視線がニシキギの鋭い視線とぶつかる。ニシキギは瑞樹を睨みつけて小さく首を振った。

「あつと……カナメから聞いたんだよ。ナンディーで……」

瑞樹がしどろもどろに答えていたところに、オーブレンジの呼音がした。救われた思いで瑞樹は駆け寄った。

「日本語で話してくれないかなー、何を言ってるのかさっぱりわからないよ」

正樹はにっこり微笑んで文句を言ったが目は笑っていなかった。

瑞樹はハルの宇宙船ナンディーで骨肉腫の治療を受けた時、姿がハル人のデイモルフオセカ・オーランティアカそっくりになってしまったのは前述したが、実は変わってしまったのは姿だけではなく。デイモルフオセカ・オーランティアカの記憶と日向瑞樹の記憶を併せ持つ人格になってしまっていたのだ。このことを知っているのはカナメとニシキギだけだ。デイモルフオセカ・オーランティアカはハルでカナメの配偶者だった。

彼女はハルから脱出した六隻の宇宙船の一つ、ガルダの事故の救援に向かい……そこで死んでいた。

第一話 秋にやってきたハルの使者（4）（前書き）

「内の言葉は日本語、 □ 内の言葉はハル語という設定になっています

第一話 秋にやってきたハルの使者（4）

実家に帰る電車の駅で正樹は母親から連絡を受けた。雑踏の中で受けた電話だったにも関わらず、母親がひどく動揺していることが震える声から伝わってきた。

「正樹？ 今どこ？」

「もう駅ついた、今から歩いて帰るよ。母さん？ どうかした？」
家まで歩いて十五分くらいだ。いつもなら母親に車で迎えに来てもらうが、今日は自分のためにパーティーの準備をしてくれているだろうからと気を使って到着する時間を連絡しなかった。

「早く帰って欲しいのよ。歩いてじゃなくて、タクシーで帰ってくれない？」

「ん？ いいけど……なんかあった？」

「今、日向さんから電話あってね。なんでもハル共和国の人が瑞樹ちゃんを訪ねて来てるんだって。日向さん、ものすごく動揺してて、また瑞樹ちゃんがどこかへ連れて行かれるんじゃないかって。ほら、瑞樹ちゃん帰って来たばかりの頃、ハルの宇宙船に行ってたって言うってたでしょ、誰も信じなかったけど……」

「日向の小父さんには連絡したのか？」

正樹は眉間に皺を寄せる。

「今、連絡とってるんだけど、今日に限って外回りに出てるらしくて、まだ連絡つかないって言ってるのよ」

「すぐ帰る」

正樹は携帯を切るとタクシー乗り場に走った。

もうごめんだ、二年前みたいに突然瑞樹がいなくなってしまうのはもう嫌だ。

二年前、しし座流星群を見ていた真夜中、瑞樹は忽然と正樹のこっぜん前から姿を消した。家が隣同士で一つ年下の幼馴染。泣き虫で病氣

がちで面倒ばかり拾ってくる瑞樹。小さい頃から自分の両親からも瑞樹の両親からも瑞樹を頼むと言われ続けて育ってきた。本当の妹よりも先に妹のようだった瑞樹。自分が守らなければいけないんだとずっと思ってきた。

それを自分の目の前で見失ってしまったあの日、正樹は生まれて初めて自分の無力さを味わわれた。学校も、受験も、将来のこと、一時、意識から吹っ飛んで自分を見失った。受験を控えた正樹を思いやってか、一緒にいて守れなかった彼のことを瑞樹の両親は一言も責めなかった。いつそ責めてくれればいいのに、そんな弱音を吐くことも許されないのは分かっていた。実際、ふっと火の消えてしまったようになった隣家を見るのは辛いことだった。

誰が責めなくても自分が責めてしまう。息がかかるくらいの距離にいながらどうして瑞樹を守れなかったのかと。成績良し、スポーツ万能、人望ありで、人から見れば順風満帆だったはずの正樹の人生の初めての挫折だった。人一人失っただけでここまで道を失うものかと正樹は自分のことながらあきれ果てる。

瑞樹にはいつも「最後まであきらめるな」と口癖のように励ましておきながら、何にも手をつけられずに呆然としている自分がいた。

毎日町中を徘徊して瑞樹を探すこと以外何もできなくなっていた。なんとか立ち直れたのは父親の言葉だった。

「なあ、正樹よ。瑞樹ちゃんのことはお前のせいだぞ」

父親は静かに正樹の目を覗き込んで言った。

「真夜中に瑞樹ちゃんを一人で連れ出すような約束したのはお前の責任だ、そうだろ？」

「ああ、そうだよ」

正樹は掠れた声で肯定した。

「あの日の流星群は素晴らしかったんだってな」

正樹は静かに涙を流しながら頷いた。

「父さんはな、周りの人が言ってるみたいに、お前が悪くないなん

て思っていないんだ。それと同じに、瑞樹ちゃんがもう死んでることも思っていない。きっと帰って来るって、そう思ってる。帰ってきた時にお前が人生投げ出してたら瑞樹ちゃんはどう思うだろうな。自分のせいで正樹を苦しめたと苦しむんじゃないかな。違うか？ 瑞樹ちゃんはそういう子だっただろうが……」

正樹はこの時初めて人前で号泣することができた。

そのまま父親と朝まで話し合って、それこそ色々なことを語り合って、それまで目指していた進路を変更した。父親は無理をして家業の会社を継ぐ必要はないと言った。自分が好きなことをして立ち上げた会社だ、お前はお前が好きなことをして会社を立ち上げるなり、どこかに勤めるなりしたらよかろうと言った。そして正樹は都内にある大学の工学部に進んだ。正樹は子供のころから物作りが好きだったのだ。それを正直に話したとき、「やっぱりそう言うと思ってたよ」と父親は言って小さく笑った。

目の前にいるハル人二人はのんびりと瑞樹が作ったクッキーをつまみながらコーヒーを飲んでいる。とりあえず瑞樹を連れ去られる心配がないように瑞樹から目を離さないでおこうと、正樹もキッチンの椅子に腰かけた。隣の部屋で瑞樹の母親が心配そうにちらちら目を配りながら取り込んだ洗濯物を畳んでいる。

「小母さん、小父さんはいつ帰って来るんですか？」

正樹は瑞樹の母親に問いかけた。

「さっき連絡とれたから、もうこちらに向かっているはずなんだけど……」

瑞樹の母親は失踪前の瑞樹に似ていて黒目がちで儚げな印象の人だ。不安の為か今はより一層儚げに見えて正樹は胸が痛くなる。

「うちの母親を駅まで迎えに行かせましようか？」

正樹は堪らず口にする。

「正樹ちゃん、小母さん忙しいのにそんなことしないでいいよ。そんな急いでどうするの？」

瑞樹が吹き出した。

「正樹さん、少しお話をしたいのですが、あなたのお部屋に連れて行ってはもらえませんか？」

アーマルターシュが突然正樹に提案した。正樹が目を見張る。瑞樹の母親もぴくりと動作を止めた。

「正樹ちゃん、先に行つといていいよ。次のが焼き上がったらもう持っていくだけだし、私もすぐに行くよ」

瑞樹はオープンレンジをちらりと覗いてから言った。正樹は瑞樹をじつとりと睨んでから小さく溜息をついた。瑞樹が怯えたり、うろたえたりしているのなら決して傍を離れまいと思って慌てて帰ってきたが、いつもどおりのんびりした瑞樹に正樹は密かに脱力する。

「わかりました、どうぞついてきてください」

正樹の言葉に、アーマルターシュは優雅に立ち上がると正樹に続いた。

「あなたは行かないんですか？」

正樹はニシキギを見つめた。

「私は瑞樹と後で行きます」

ニシキギは薄く笑った。正樹は一瞬不安そうに顔を歪めた後、瑞樹の母親と視線を軽く合わせて会釈するとアーマルターシュと出て行った。

「ものすごく警戒されてるな。無理もないが……」

二人が出て行くとニシキギは苦笑してハル語で言った。

「警戒って？」

後、十五分で焼き上がる。瑞樹はプレーンクッキーを花模様のついた透明な袋に詰めて大きなリボンをかけ、チョコレートクッキー

は焼き立てなのでお皿に盛ったまま持っていこうと花模様のナプキンをお皿に敷いた。

「本人は暢気なものだ」

ニシキギは呆れた顔をした。

「あんたは何故俺達がここに来たのか、その目的が気にならないのか？」

「目的？ そっか、何しに来たの？ 私、てっきりヒュウガミズキを持ってくために来たんだと思ってた」

何気なく言った瑞樹の言葉にニシキギはびっくりした表情を浮かべた。

「なんで知ってる？　なんで知っていてそんなにのんびりしてるんだ？」

ニシキギも驚いた表情になる。

「なんでって、さっきアーマルターシュがそう言ってたじゃない。

ヒュウガミズキを私のせいで国花にってしまったからくれて……」

瑞樹の返事を聞いてニシキギはがっくりと肩を落とした。

「なに？　違うの？　何をそんなに脱力してるわけ？」

「あんたの護衛は大変そうだ」

ニシキギは小さく呟くとそれきり黙りこんだ。

第一話 秋にやってきたハルの使者（5）

正樹はアーマルターシュと二人で自分の部屋にいた。日向家の庭にラークスパーがいたので、彼も自分の家に連れて行った。瑞樹の周りから一人でも多くのハル人を離しておきたかった。ニシキギは大柄な男で力も強そうだが、たった一人では瑞樹の母親の目の前から抵抗する瑞樹を連れて行くのは無理だろう。瑞樹の父親もそろそろ着くだろうと正樹は考えた。

ラークスパーは正樹の母親を手伝うと言ってキッチンに消えたので、二人きりで話したいと言うアーマルターシュを二階の自分の部屋に連れて行った。ラークスパーにキッチンを手伝うと言われて困惑しているだろう母親のことはとりあえず放置することにする。

「瑞樹の部屋よりも随分物がなくてすっきりしているのね。落ち着くわ」

アーマルターシュは正樹の部屋を見回しながら言って、黒いキルティングのベッドカバーが掛っている正樹のベッドに腰を下ろした。「で？ 俺に話ってなんですか？」

正樹は机に押し込んであった椅子を引っ張りだして腰掛けた。

「大学で工学を専攻されているとか」

アーマルターシュは文句のつけようがない微笑を正樹に向けた。

「ええ。それが何か？」

正樹は警戒しながら問い返す。

「来年の夏には米国へ留学をなさるとか……」

「……そういうことをどこで、どうやって調べるんですか？」

正樹はアーマルターシュを睨みつけた。

「ハル共和国はそういった情報を集めるのが得意だね。ニュースとかで聞いたことがありますか？ ハル共和国の特殊な科学技術について……」

「無論、ありますよ。分解再生装置には俺も非常に興味を持っています」

正樹の言葉にアーマルターシュは心得顔で頷いた。

「ハル共和国に来ませんか？」

微笑を湛えたままアーマルターシュは問いかけた。

「え？」

正樹は一瞬ポカンとしてしまう。

「米国で学ぶのも良いことだと思いますよ。すばらしい科学技術を持っている国です。核兵器とか迎撃ミサイルとか上手に作ってますものねえ。残念ながら我ハル共和国では兵器については、全くと言っていいほど未開発分野であると言わざるをえません。しかし、それ以外の分野では他の国には見られない稀有な技術けうをたくさん開発しています。興味はありませんか？」

「それは……ないわけではありませんが、ハル共和国は現在鎖国のような状況になっていて、他国からの入国がままならないと聞いていますよ」

「そのとおりです。現在のところ観光でなら外国人を幅広く受け入れています。技術を学びたい、ハル共和国を知りたいという意味での学生、政府関係者および一般人は一切受け入れていません」

「なら、無理じゃないですか」

正樹が勝ち誇ったように言った。

「あなたをハル共和国の国民として迎える用意があると、私は申し上げているのですよ」

アーマルターシュは正樹を真っ直ぐ見つめて言った。

「国民として……」

正樹はあっけにとられる。

「もちろん、日本国籍を捨ててハル共和国の国民になれと言っているわけではありません。世の中にはダブル国籍の人なんてたくさんいるのでしょうか？」

「しかし……」

突然の申し出に正樹はたじろいだ。

「実は瑞樹もそうなのですよ」

アーマルターシュは何気なく言う。

「瑞樹がハル共和国の国民？」

正樹は啞然と問い返す。

「本人は知らないでしょうけどね」

アーマルターシュは軽く吹き出してから続けた。

「知らずにはいえ瑞樹はあまりにも深くハルにかかり過ぎました。ハル共和国の内情を知りつつ、他国民であるという状態を認めるわけにはいかなかったのです。特に現在の状況では……」

「瑞樹は……瑞樹は、本当はハル共和国に行っていたってことです
か？」

瑞樹が失踪していた間、今でこそ記憶がないということになって
いるが、最初瑞樹はハルと言う国の宇宙船にいたと言い張っていた
のだ。

誰も信じなかった。

それが、もしハル共和国に行っている間、それを瑞樹が宇宙船に
いたと勘違いしていたのであれば、アーマルターシュの説明ですべ
てに納得がいく。

「瑞樹の言葉は信じられませんでしたか？」

アーマルターシュは艶やか^{あで}かに微笑んだ。正樹はごくりと唾を飲み
込む。

「我々がここへ来た目的をあなたは感づいてらっしゃるのではない
ですか？」

「目的って……なんですか」

正樹は掠れる声で問い返す。

「瑞樹をハル共和国に連れて行く為に来たのです」

アーマルターシュの言葉に正樹は真っ青になって立ちあがった。

「落ち着いてください。瑞樹を今、無理にさらって行こうなどとは

考えていません。二年前、瑞樹を誘拐するように連れ去ったのには訳があったのです。申し訳なかったと思っています」

「そんな風に謝られても困ります。俺らがあの一年間どれだけ悲しんで苦しんで瑞樹の不在を耐えてきたか想像つきますか？ 謝罪なんて欲しくないんです。どうか瑞樹をもう二度と連れ去らないと約束してください」

正樹は立ち上がったままアーマルターシュに懇願した。握りしめた拳が小刻みに震えている。

「瑞樹がハル共和国に行きたいと望んだら、あなたは どうしますか？」

「瑞樹が行きたがるわけがないでしょう？」

「さあ、どうでしょうか」

アーマルターシュは小さく溜息をつくと微笑んだ。

「そろそろ下に行きましょうか。瑞樹達がやって来たようですよ」
無言で立ち尽くす正樹を残してアーマルターシュは階下へと降りて行った。

第一話 秋にやってきたハルの使者（6）（前書き）

□内は日本語、 □内はハル語という設定になっています

第一話 秋にやってきたハルの使者（6）

「ねえ、なんで誕生日パーティーにたこ焼きなの？」

瑞樹が啞然として呟く。

「サバ寿司も作ったよ、瑞樹ちゃん！」

正樹の妹の皐月が嬉しそうに運んできた。

「なぜにサバ寿司？」

瑞樹は苦笑する。

「たこ焼きは俺の注文だ、サバ寿司は皐月が好きで勝手に作った」

正樹ちゃんは真ん中の席で、無理やりのように瑞樹を隣に座らせて料理の説明をしてくれた。それ以外はぼっちパーティー料理だ。カナッペやテリーヌや温野菜などのオードブルの大皿と、鳥の唐揚げやスモークサーモンやシーザーサラダやミートローフなどが色鮮やかに盛り付けられた皿が、テーブルの上に所狭しと並べられている。

皐月ちゃんはニシキギがすっかり気に入ったようで、しっかりと隣に座ってあれやこれやと世話を焼いていた。皐月ちゃんはビジュアル系ロックバンドのボーカルの大ファンで、男は美しくなければ、いつも息巻いているくらいなので、確かにニシキギは彼女の好みなのだろうと瑞樹は失笑する。アーマルターシュは瑞樹の父親の横で美しい微笑を振りまいていて、すっかり相好を崩している様子のパパをママが冷たく睨んでいた。パパは後で大変なことになりそうだ。瑞樹はこっそり溜息をつく。

食事を終え、正樹のお母さんお手製のケーキと瑞樹のクッキーでコーヒーを飲み始めたところに、ラークスパーが切り出した。

「私達がこちらへやって来た理由をまだお話していなかったの、今お話してもよろしいでしょうか」

ラークスパーの穏やかだが良く通る声に一同はしんと静まった。
「まずは、二年前のことをお詫びしなければなりませんね。日向さんの娘さんを突然あのような形でハルに迎えることになってしまったこと、大変申し訳ありませんでした」

ラークスパーは頭を下げた。日本人のやり方を分析しつくしてきただろうと瑞樹は推測する。殺人でも絡んでいない限り、非を認めて謝罪する人間に日本人はとても寛容だ。外国ではそうはいかない。

「あの……一応確認をしておきたいのですが……」

瑞樹の父親が口を開いた。

「瑞樹は二年前の一年間、ハル共和国にいたと言うことなんでしょうかね」

父親は訊きづらそうに言った。

「ええ、そうです」

ラークスパーは穏やかに肯定した。

「だけど、建国したのは一年前ですよね？」

正樹が追及する。

「ええ、その通りです。建国には至っていませんでしたが、その準備段階だったとでも申しましょうか。とても混乱していた状況でした」

「瑞樹は帰って来た当初……その……ハルの宇宙船に拉致されていたと言っていたのですが……」

父親は言いづらそうに言葉を紡いだ。

「うちゅうせん……ですか？」

ラークスパーは宇宙船と言う言葉をいかにも言い慣れてない様子で口にした。

「大型の飛行機でお嬢さんを搬送したのは確かですが……」

少し困ったという様子で苦笑いを浮かべる。それにつられたように、その場の正樹を除く全員が苦笑した。

そんな言い方したら、私の勘違いってことになるじゃないと瑞樹

は叫ぼうとしたが、一言も発することができなかった。慌てて何か言葉を発そうとするが、声帯に麻酔をされているかのようには声が出ない。ラークスパーが自分の意識に何かしているのだと割とすぐに思いついた。かつてトウキという名のアンドロイドに心理操作をされた経験があった。ハルの宇宙船の中で。

「では、どうしてあのようなことになったのか……説明していただいてもいいですかね」

瑞樹の父親が静かに問いかけた。

「ええ、構いません。事態は、急を要していました。ご両親はご存じだったでしょうが、瑞樹さんの病状は思わしくありませんでした。私たちはたまたま偶然瑞樹さんを見かけたわけですが、実際、驚きました。我々が開発したばかりの医療技術ならば、今であれば助けあげられることがすぐにわかりましたから」

「それはいつのことを言っているんです？」

正樹が怪訝そうに質問する。

「あの流星群の日ですよ。あなた方は暗闇で、骨肉腫の話をしていましたね」

ラークスパーは穏やかに正樹を見つめた。それは本当の事だったので正樹は黙り込む。

「我々もあそこにいたのですよ。流星群を見るためにね」

ラークスパーは意味ありげに瑞樹を見つめて微笑んだ。

『それも嘘だ！ 何故そんな嘘を？』

瑞樹は心の中で叫ぶ。しかし、まるで精神的な猿轡さるづつわでもかまされているように声にならなかった。

「ハルの政府専用機に瑞樹さんを乗せるためには説明をしている時間がありませんでした。ですから、暗闇に紛れて連れ去ったのです。死んでしまっただけは取り返しがつきませんから……」

ラークスパーは心痛を堪えているように胸を押さえた。

「そう……だったんですか……」

そう言われては文句の言いようがなかった。瑞樹の両親としては

助けてもらったことになるからだ、引き下がるしかない。実際、瑞樹の病状は最悪で、術後の再発率は非常に高く、再発すれば手の施しようがないと告げられていたのは事実だった。

「その治療はどんなものだったんですか？ 別人になってしまったように変わってしまったって、これは治療として成功だったんですか？ 失敗じゃないんですか？」

正樹が不機嫌そうに問い詰める。

「誠に申し訳ないことになったと思っております。これを言っただけの言い逃れと取られるかもしれませんが……ハルの技術と言っても万能ではありません。我々は神ではないのですから。さらに、これを告げなければならぬのは本当に心苦しいことなのですが……」

ラークスパーは言葉に詰まって、額の汗を拭い周りを見回した。なにアンドロイドが汗かいてるのよう、瑞樹は呆然とするが当然一言も発することができない。

「瑞樹さんの受けた治療は完璧ではなかったのです」

瑞樹の両親はもちろん、そこにいたハル人以外は目を見開いた。隣の正樹ちゃんが驚いて自分を見つめる視線を瑞樹は痛い思いで受け止めた。

「それは……どうなるということですか？」

瑞樹の母親が絞り出すような声で訊いた。

「もう一度、ハルに来ていただいて治療しないと、腫瘍が再発する恐れがあるということがわかったのです」

母親の絶望した真っ青な顔を瑞樹は悲しい気持ちで見つめた。

＊ ＊ ＊

「あれ、嘘なんでしょ？」

瑞樹は自分の家に戻ってからアーマルターシュとニシキギを伴って二階の自室に行った。ラークスパーから解放されると、言葉はすんなりと瑞樹の喉を越えて出た。

「どれのこと？」

アーマルターシュは瑞樹のベッドに寝転びながらぬいぐるみのクマをしげしげと見つめた。

「ハルに行って治療受けないと腫瘍が再発するって話よ」

ブラキカム……ハルで瑞樹を診てくれたドクターはもう腫瘍が再発することはないと言っていた。それなりの年齢になればそれなりの病気にはなるだろうがねと笑っていた。

「鈍いあなたにもわかったということとは皆にもわかつちやったかしら？」

アーマルターシュは横目で瑞樹をちらりと見てから小さく笑った。

「何の為？」

瑞樹は二人のハル人を睨みつける。

「あなたにハル共和国に来てもらうためよ」

アーマルターシュはベッドの上に起きあがった。

「だったら、そう言ったらいいじゃない。あんなこと言って、両親がかわいそうだよ。また私、あんな絶望した顔をさせてしまった」
涙が溢れて来る。アーマルターシュは溜息をついた。

「あなたはまだ高校生よ。今からハルに連れて行くということは学校を休ませて、両親と離れ離れにして連れて行くということになるのよ。病気の治療以外の理由であなたを連れて行く方法があるのなら教えてよ」

アーマルターシュは真剣な目で瑞樹を見上げた。

「もう半年待ってくれたら私卒業だよ、それまで待ってもらえないの？」

「待てないのよ」

アーマルターシュはクマをベッドに静かに寝かせた。

「なんで？ 何があったの？」

瑞樹は一年間失踪していたせいで一学年遅れていて、今高校三年生だ。来年早々には受験が控えている。

「ハルは今水面下で混迷しているのよ。あなたに力を貸してもらいたいの」

その時突然アーマルターシユの胸ポケットからピーピーという呼音がした。

「トウキだわ。ちょっと失礼」

アーマルターシユは階下に降りて行った。

「トウキも来ているの？」

瑞樹はニシキギに訊いた。ニシキギが頷く。

「そう言えば、ここまでどうやって来たの？ 電車に乗って来たの？」

「いや、電車でもよかったんだが今回はシャトルで来た。報道記者がしつこすぎる」

ニシキギはつまらなそうに言った。

「シャトルで来たって、どこの空港に止めたの？ 羽田？ 成田？」

「いや、ちょっと広い場所があれば離発着可能だ」

「そんな所どこにあった？」

瑞樹は嫌な予感を感じながら訊いた。

「なんとか小学校って看板が上がってる建物の前に広場があったから、そこに停めてある」

「小学校の校庭に停めてあるの？ 見つかったら大騒ぎじゃないの！」

着いたのは土曜日の午後だ。確かに小学生はいないかもしれない。でも野球とかサッカーとかの練習で子供たちが使ってなかったのだろうか。

「小学校は誰もいなかった。ステルスシールドをかけてあるから見ただけではわからない。苦情がくればすぐに飛び立てる。その為にトウキを残してきた」

知らずにぶつかる人がいませんようにと瑞樹は心の中で祈る。

「なあ、あんた、今回の件では、あまり抵抗せずにハルに来てくれないか」

いつになく神妙な感じでニシキギが話しかけてきた。

「これはあんたに話さないでくれとカナメに言われているんだが……」

ニシキギは言葉を途切れさせた。この言葉に瑞樹がどう反応するか見てみたかった。瑞樹は目を僅かに見開いたあとごくりと唾を飲み込んだ。

「なに？」

瑞樹の声は微かに震えている。完璧だ。ニシキギは心の中で呟く。

「イベリスがナンディーで大けがをしたんだ」

「イベリスが？ 大丈夫なの？」

「両手首切断だ」

瑞樹は息を吞んで口を押さえた。

「あんたも知っての通りハルの再生医療は進んでいる。部分再生だってお手の物だ。すぐに両手は付けられて回復したが、心の傷はそう易々とは回復しない。しかもイベリスを襲った犯人がまだ見つかっていない。未解決事件なんだ」

「なんてこと……」

瑞樹はショックを隠せない。

「今、イベリスは地球に連れてこられている。ナンディーに置いておくのが心配だったし、カナメもブラキカムも今地球にきているからな。それに実を言うと、これはナンディーで起こった事件だが、我々は、俺とカナメとブラキカムは地球のハル共和国がその原因なんじゃないかと考えている」

「もしかして、それに私が関わって来るの？」

瑞樹の問いにニシキギは頷いた。

「力を貸してほしい」

ニシキギは言った。

「……わかった。私、ハル共和国に行くよ」

瑞樹は唇を噛みしめた。

ニシキギはカナメが言った言葉を思い出していた。

「もし瑞樹がどうしてもハル共和国に行くことを承知しない場合は、最後の手段としてイベリスの事件を話してやってくれ。そして、その話をする前に必ず、僕が瑞樹には話さないでくれと言っていたと告げて欲しいんだ」

「そんなことを言ったら、俺は、話すなど言われていることをべらべらしゃべる人間だってことになるじゃないか」

無然と言ったニシキギにカナメは苦笑して謝った。

「君には悪い役をやらせて申し訳ないと思ってる。ただ、それを伝えてくれれば、おそらく瑞樹なら自分が危険な立場にいるのだとわかってくれると思うから……」

カナメは辛そうにそう言った。

そしてカナメの言ったとおり、瑞樹はその言葉に反応した。

「なんか面白くないな」

ニシキギはポツリと呟くと階下に降りて行った。

カナメが私には話さないでくれと言った……瑞樹は一人自室に残って、ニシキギの言葉を頭の中で何度も反芻していた。

第一話 秋にやってきたハルの使者（7）

惑星ハルから脱出する少し前、カナメとディモルフオセカはハルの地下に広がるハル連邦唯一にして最大の地下都市ハデスで暮らしていた。

ハルには三つの種族がハル政府の管理の下、それぞれがその血を混ぜることなく暮らしていた。惑星ハル、最後の文明を担っていたのは三種族、地球人とそっくりな『一般人』、見かけは一般人と変わらないが植物を操る能力を持つ『森の民』、そして葉緑体を持ち緑色の肌をした『ファームの民』だった。

ハル大災害以降、一般人とファームの民は地下都市ハデスで暮らしていたが、森の民は、唯一残された一握りの地上の森、アール・ダー村で暮らしていた。中でも特に森の民は厳しく管理されていて、一切の現実から切り離されて暮らしていた。現実……惑星ハルに残っている森はアール・ダー村だけだということ、惑星ハルが公転している恒星ジタンが間もなく寿命を迎えること、地下都市でハル政府が科学技術力を駆使してエクソダスを計画していることなど的一切を何も知らされずに森の民は暮らしていた。

人口管理も厳しく行われていて、森の民の力を絶やさぬように婚姻にまで政府が介入し、決定権を行使した。だから、政府の定めた婚姻を拒否して地下都市に逃げ込んだディモルフオセカ・オーランティアカは国家反逆罪という立派な罪名を持った犯罪者だった。出会はずのなかった二人だった。

お尋ね者の森の民ディモルフオセカと一般人のカナメが一緒に暮らすことになったのは、全くの偶然に過ぎなかった。その偶然の出会いからハル脱出の時まで、カナメはディモルフオセカを守ること、に終始するはめになる。

たくさんの嘘について、たくさんの情報を隠して、地下都市生活のことなど何一つ知らないディモルフォセカをカナメは守って来た。だから、カナメが嘘をつく、もしくは本当のことを教えないということは、ディモルフォセカに危険が迫っているというサインだった。そのことを瑞樹は遠い昔の記憶として知っていた。ディモルフォセカの記憶をすべて持っていたからだ。時々自分でもわからなくなる。自分は日向瑞樹なのか、ディモルフォセカなのかと。少なくとも、かつてディモルフォセカだったくらいの現実感をもって、彼女の人生を内包していると感じていた。危険が迫っているのだ。瑞樹は静かな気持ちで納得した。

「ねえ、瑞樹、このクッキーの残りを貰って行ってもいいかしら？」
アーマルターシュは瑞樹の家のリビングでソファーにもたれていたが、階下に降りてきた瑞樹を見て言った。

「もちろん、いいよ。持って行って。包んであげるね」

瑞樹の両親も一緒にリビングにいたが、呆然自失の状態で座り込んでいる。心配して付いてきた正樹ちゃんがパパにウイスキーの口ツクを勧めていた。

「ねえ、私、ハルに行つて来ようと思うんだけど……」

瑞樹がキッチンでクッキーをラッピングしながら話し始めると、両親ともびくりと体を震わせた。正樹は難しい顔をしたまま身動き一つしない。

「でもね、後、二か月くらい待ってもらったら二学期が終わるし、それまで待つてもらうことはできないかな？」

「二か月……微妙ね。どう？」

アーマルターシュはラークスパーを見つめた。

「トウキを残せば大丈夫ではないかと……あまり延ばしたくはありませんがね。もし何か異常があればすぐにでも出発してもらおうという前提ですが……」

ラークスパーは思案顔で言った。

「わかったわ、そのかわりトウキをここに寄こすわ。それでいい？」
アーマルターシュは瑞樹を見つめた。

「なんでトウキ？」

瑞樹は府に落ちない顔をする。トウキはセキュリティ部門を担当しているハルのアンドロイドだ。

「何かあった時の為よ」

瑞樹は目を見開く。ここにいてさえ、何か起こるかもしれないと言っているのだ。

「なあ、あんたら日本語しゃべってても意味がよくわからないんだけど……トウキって何？」

正樹が眉間に皺を寄せて訊いた。

「トウキはボディガードみたいなものです。瑞樹に何か異変が起こった時に彼なら適切な処置ができるでしょう」

アーマルターシュは両親を安心させるように穏やかに微笑みながら言った。

「そんな急に何か起こることがあるんでしょうか？」

父親が心配そうに言った。

「それは誰にもわかりません」

ラークスパーが答える。

「それなら一刻も早くハルに連れて行った方がいいのではないですか？」

瑞樹の母親がラークスパーをすが縋るように見つめた。

「あのねえ、ママ、私にだって都合とゆーものがあるのよ」

緊張感溢れたその場の雰囲気ゆるを瑞樹ののんびりした声が緩める。

「なにのんびりしたこと言ってるの？ あんたの都合なんて大したことないでしょ！」

母親が瑞樹を睨みつけた。

「ママ、私ね、もう病気では死なないって思うんだ。だから、その点では安心しといてよ。でも、ハルに行ったら、またしばらくここに戻れないと思うよ。だったら、身の回りを整理してから行きたい

って思うでしょ。文化祭だってあるし、期末試験だっていい成績と
つとけば、三学期少しばかり休んだって大目に見てもらえるかもし
れないじゃない。受験はまだ諦められないから、できれば受験まで
には帰りたいって思ってるけど……」

瑞樹の静かな声にはある種の決意のようなものが感じられて、両
親も正樹ちゃんも口を噤んだ。

今の時点で、いつここに戻ってこれるのか、無事に帰ってこれる
のか瑞樹にはさっぱり見当はつかなかったが、少しでもまともな未
来を考えていると親に思わせたかった。普通の娘らしいことを何一
つしてこれなかった今までのお詫びに……。

「じゃあ、決まりね」

アーマルターシュが話を切り上げるように言い放った。瑞樹はラ
ッピングしたクッキーをアーマルターシュに手渡した。

「ありがとう。このクッキーは本当に気に入ったわ。ハルの国菓に
しようかしら」

アーマルターシュはにっこりして言った。

「はあ？ 何？ 国菓って」

瑞樹が素っ頓狂^{すったんきやう}な声を出す。

「国の菓子でしょ？ 国菓」

「そんなのないよー、ねえ、正樹ちゃん？」

「ドイツのバームクーヘンとかオーストラリアのティムタムとかそ
う呼ばれていることがあるけどな……」

正樹も脱力して返事をする。

「へえ、そうなの？」

瑞樹は感心する。

「ハル共和国は誕生したばかりだから、色々な細々したことがまだ
全然決まってないのよ。国花は誰かさんのせいで決まっちゃったか
ら、他のも色々考えて行きたいんだけど……。国花の他って何があ
るの？」

アーマルターシュは邪気のない顔で問う。

「さあ、そう改めて訊かれるとなあ。国歌とか国旗とか国鳥とか…なんでもありじゃないの？」

正樹ちゃんが呆れたように返事をした。

「ほーら、国菓だってありじゃない」

アーマルターシュは勝ち誇ったように言う。

「それはそんな無理に決めなくてもいいんじゃない？」

アーマルターシュと瑞樹のやりとり、みんなの笑顔が戻って来た。ハル共和国の行く末をみんなが案じ、意見を出し合い、これらの発展を祈った。国を一つ新しく作るということは、想像以上に大変で、想像以上にわくわくすることに思えた。

暇を告げたハル人三人を見送って、瑞樹と正樹は小学校へ向かって歩いていった。この小学校は瑞樹と正樹と皐月が通った小学校だ。小学校が見えてきたところでアーマルターシュが振り返った。

「ここまでで結構よ。送ってくれてありがとう」

「ここまででって、こんな所で帰り道わかるんですか？ 駅とは反対方向ですよ？」

正樹が不思議そうに言った。

「もちろんよ。じゃあ、瑞樹、ハル共和国で待っているわ」

「うん」

瑞樹はアーマルターシュを見てにっこり笑った。

「俺…瑞樹と一緒にハルに行きたいって思うんですけど…」

正樹ちゃんがアーマルターシュを見つめて言った。

「そう言ってくれると思っていました」

アーマルターシュは破顔した。

「ええー？ 小父さんと小母さんは知ってるの？」

瑞樹はびっくりして言った。

「知ってる訳ないじゃん、今決めたんだし。でも留学先が米国からハルに変わるだけだ、そう問題もないだろうよ」

正樹ちゃんは覚悟を決めたように言って、晴々と笑った。

第二話 常夏の島ハル共和国の光と闇（1）

「なーんか、護送されてるみたいだねー」

ハル共和国へ向かう政府専用機の中で瑞樹は溜息をついた。飛行機の中は正樹と瑞樹とトウキ達しかいない。飛行機の中は閑散としている。

トウキ達とは瑞樹を日本にいる間中護衛をしてくれていたトウキとそれ以外のトウキ達だ。ほとんど顔は同じなのだが目の色が違う。瑞樹を護衛してくれていたトウキは紫色の瞳をしていたが、それ以外のトウキ達は緑色の瞳をしている。同じような顔がたくさんいる光景はちよつとオカルトめいている。

「確かにな」

あまり気にもしていない様子で正樹は生返事をする、雑誌をペラペラとめくった。

ここ二カ月間、ハル共和国へ行くための準備や学校との連絡などで目一杯慌ただしく過ごした。正樹は大学との調整で大変だったらしく、その間ほとんど家には帰ってきていなかった。瑞樹としては正樹をハルのことに巻き込みたくなくて、何度が思いとどまらせようと思って連絡をしたのだが正樹の決意は予想以上に固く、瑞樹の両親まで正樹が一緒なら安心だと言いつつ始末で今に至っている。

本当は瑞樹の両親もハル共和国へ行きたいと言いつつ出していて、瑞樹は内心ヒヤリとしていたが、ハルからの入国許可は出ず、両親が行く心労に比べれば正樹なら格段に安心だろうということで自分を納得させた。

正樹なら多少のトラブルも対処できるだろうと瑞樹は思う。ハル共和国で起こっている事件がどの程度のものなのかは分からなかったが、少なくとも自分よりは機転がきく正樹がいてくれることは、

実際安心できることはあった。

離陸する為に滑走を始めた飛行機の窓から外を眺めながら、ここ二カ月のことを瑞樹は思い出していた。

瑞樹が通っていた高校は自転車で二十分程の所にある。大抵の生徒は徒歩か自転車で通う。失踪前、瑞樹は病気がちだったので、いつもは父親に車で送ってもらっていた。しかし、失踪後、健康になって帰って来たので、その後一年間は瑞樹もみんなと同様に自転車で通っていた。

もちろん遮光は必要だったので、冬でもサングラス、夏でも長そでといういでたちで浮いてはいたけれど、それでもみんなと同じにするということは日本の学生には重要なことだった。帰りにおしゃべりをしたり、いけないと言われていても、ちょっとした寄り道を友達としたりするのは楽しい事だ。一つ年下だけど、気立てのよい友もできたし、将来の夢や志望大学の話をしたり、好きな男の子のタイプを告白しあったりするのはとても平和で陽だまりの中にいるという実感があった。

それを……トウキがやってきてすべてぶち壊したのだ。

危険だからと彼が運転する車で送迎されるようになり、何かあった時の為にと小学生がよく持たされる防犯ブザーのようなものを持たされた。もちろんこれはハル製で、普通の防犯ブザーが音で威嚇するだけのもののなのに対し、これはトウキに直結していて、それはつまり、押したら大変な事態になるということを示していた。

「おい、日向、お前小学生みたいだな？」

制服の胸ポケットに押し込まれた防犯ブザーを男子がふざけて取り上げたことがあった。

「あ！ だめだよ、それ。玩具じゃないから」

慌てて取り返そうとした瑞樹に、その男子は面白がって瑞樹が取

れないように高く上げた。

「ホントに、それ駄目だから！」

たぶん瑞樹は面白い程切羽詰まった顔をしていたのだろう。その男子は面白そうににやつと笑って防犯ブザーのボタンを押してしまった。本来ならば、押せばキュルキュルキュルという電子音になるのが防犯ブザーだ。しかし、その器械はうんともすんとも音を発しなかった。

「日向あ、これ壊れてるぞ？　ならないじゃん」

その男子は拍子抜けした顔で言った。

「押したの？」

瑞樹は蒼白になる。

その時だった。休み時間の和やかなクラスの喧騒がぴたりと止まった。バン！　と擬声語どおりに教室の引き戸が開き、そこに仁王立ちになったトウキの視線が瑞樹と男子に照準を合わせたからだ。

トウキはハル製のアンドロイドだ。だからハル人に似せて作っている。キャメル色の髪が目立つこと、紫色の瞳の浮くこと、白い肌のこの存在感はどうだと言わんばかりで……当然の結果として教室は静まり返ったのだった。

トウキは迷うことなく防犯ブザーを取り上げた男子生徒に歩み寄り、値踏みするように上から下まで不躰なまで見つめてから、静かに防犯ブザーを取り上げた。そして、あろうことか……。

「瑞樹に何かしたら、僕が許さないよ」と言い放ったのだ。

教室はざわめきたった。そんな言い方をしたら、まるで……。瑞樹は絶望的な顔になる。

「トウキ、なんでもないから、大丈夫だから……」

瑞樹はがっくりと肩を落として言う。

「もう、授業始まるし……出て」

トウキは瑞樹の言葉に頷くと出て行ったが、出て行く寸前、教室の中にいた生徒の一人一人を確認するように睨んでから出て行った。たぶんスキャンしたのだろう、瑞樹に対して悪意を持って近づくも

のはいないかどうかと。

トウキはセキュリティを担当するアンドロイドで人の心の中を読み取ることができる。しかし、そんなことを知らない他の生徒たちは色めきたった。

「ねえ、瑞樹、あの人瑞樹のなんなの？ 彼氏？」

「ち、ちがうよ」

「凄い目で睨んで行ったよね。まるで俺の女に手を出すって言わんばかり？」

「だからあ、違うんだって！」

瑞樹叫びたいのをぐっと堪える。

——あれは、アンドロイドなんだってば！

それだけでなくも周囲は、一年間の失踪後、見た目を変えて帰還した瑞樹を好奇の目で見つめたが、それ以後、さらに好奇心を上乗せした目で見たのは言うまでもない。居心地の悪い状態は冬休みに入るまで続いた。

第二話 常夏の島ハル共和国の光と闇（2）

ハル共和国まで飛行機で十時間程かかる。

正樹ちゃんはさっきから小型大腦コンタクトをつけて目を閉じたまま、うんともすんとも言わない。飛行機が離陸して、すぐにこの小型大腦コンタクトをトウキが正樹に渡した。カナメから預かったと言っていた。

大腦コンタクトは直接相手の大腦にアクセスできる器械で、大抵は対^ついで使う。ヘッドホンのような器具を頭に装着すると、言葉を交わすことなしに相手が考えていることがダイレクトに伝わってくるのだ。だから言語が違っていても伝わるし、相手が見たものの記憶をまるでその中にいるように見ることができる。たぶんカナメは正樹に伝えたい情報をインプットしておいたのだろう。

退屈な瑞樹はガラ空きの飛行機の中をぶらぶらしていた。

「瑞樹、どうかしましたか？」

声を掛けてきたのは紫の瞳のトウキだった。

「ううん、ちょっと手持無沙汰なだけ」

瑞樹は苦笑する。

「そうですか」

トウキは僅かに微笑んだ。

「ねえ、なんであなただけ目の色が違うの？」

さっきから気になっていたことだった。

「少し、ハルの現状をあなたに話しておいた方がいいでしょうね」
トウキは思案顔で呟いた。

前述したとおり、惑星ハルは恒星ジタンの終焉^{しゅうえん}により消滅した。

ハルの地下で細々と命脈をつないでいたハル文明は、強大な科学技術力と森の民の植物を操る力を駆使してエクソダスを果たした。エクソダスを果たす、その為だけに大勢の人々がその人生を費やしてきた。言いかえれば、ハルの人々は何世代にも渡る長い間多くの犠牲を強いられてきたのだ。

長期間に渡る地下都市生活はハル人から色素を奪い、三つの種族の力を最大限利用する為に敷いた人種隔離政策は、人々の心の中にまでその溝を深く刻みつけた。三種族のうち、一般人は地下都市の暗がりの中で科学技術を発展させることのみにその能力を費やし、緑色の肌で自ら光合成を行うファームの民は、地下都市や脱出船のバイオラングを、その寿命の長さ、持前の忍耐強さで、維持管理することを要求された。そして植物を操る力を持つ森の民は、ハルの最後の地上アール・ダー村の森を守りながら、寂光下で育ち、光合成をたくさん行う等の有用な植物を作り出すという使命を負わされていた。

三種族の中で唯一、森の民だけが、惑星ハルの現状もエクソダスという国家をあげての大プロジェクトも知られることなく暮らしていた。森の民の力は特殊なもので、その力の源がなんであるのか解明されないままになっている。

唯一、絶望した森の民はその力を使うことができないと言う事だけが、経験的に理解されていた。ハル政府は森の民が絶望することをおそれていた。瑞樹が内包している記憶の持ち主のデイモルフオセカは、森の民だった。

「あなたは、ハルの民が長い間、色々な事をエクソダスの為に犠牲にしてきたことを知っていますね？」

トウキは瑞樹の瞳を覗きこんだ。

トウキは私の中のデイモルフオセカの記憶のことを知ってるの

だろうか……。瑞樹は自問する。知っていることを私が認めてしま
って、何か不都合なことがあるんじゃないだろうか……。散々考え
た挙句、ここまで考え込んでおいて知らないふりをするのに意味が
ないことに、瑞樹はふと思い当った。

「……ええ、まあ……」

瑞樹の言葉にトウキは心得顔に頷いた。

「この一年で色々なことが変わりました。エクソダスのためのプロ
グラムが終了して、三種族間に引かれた線引きが解除され、国を議
会が動かすようになりました」

「議会？」

「そうです、必要に応じて議会が招集されます」

「ニシキギが、今厳密な意味での国家元首はいないって言ってたけ
ど……」

「ええ、いません。議会を運営する議長がその主導権を握ってはい
るのですが、議長は議会が招集される度に選出されます。国の方針
を議会が決定し、その決定に従ってメインコンピューターが国を運
営していくわけです。選出はメインコンピューターが国民一人一人
の脳にアクセスして、その意思を集積して決めます。しかし議長
が権限を持つのはその議会の会期中のみです。だから議会の会期中
でない今、実質国家元首はいないということになるわけです」

「ふうん、なんかよくわかんないけど、そんなんでうまくいくのか
な？」

「さあ、どうなるか、これからが山場かもしれませんね」

トウキは薄く笑った。

「その議会で、今まで人々の管理において強権を発動してきた我々
アンドロイドがやり玉に上がりました。当然予想していたことでは
ありませんが……」

「え？ ムラサキさんにも何か？」

ムラサキは教育担当のアンドロイドだ。瑞樹がナンディーに拉致
されていた時何かと力になってくれた。

「我々アンドロイドの一部には人の心の中を覗く能力がありました。人々はその能力を不快に思っているようでした」

「それはそうだろうね。心を覗かれてるって知ってたら何にも考えられないようになってしまうもの」

トウキは瑞樹の言葉に苦笑した。

「それで議会は我々からその力を取り上げることが全会一致で承認したのです。ただ、例外は認められました。事件が関わっている場合、事件が関わっていると疑われる場合、治療として必要な場合にはその力を暫定的に与えられることになったのです」

「そうかあ、あると便利だもんね」

「この紫の瞳はその力を与えられている証なのです」

「え？　じゃあ、あなた以外のトウキ達は心を覗くことはできないの？」

「ええ、できません」

さらにと言ったトウキに瑞樹は顔を顰める。つまり今は事件が私に関わっている、少なくともその疑いがあるとハル政府に認められている訳だ。

「あなたが事件に関与していると疑っているわけではないのですよ。ただ巻き込まれるかもしれないと疑っています。だから、あなたが心配する、もしくは用心するということはとても大事なことです。イベリスは未だに失語症の状態ですし、犯人も特定されていません。ハル政府に対する不満分子か、他国からの妨害か、それすらもはっきりしていないのですから」

「イベリスが失語症？」

瑞樹は呆然と呟いた。

「かなりショックなことがあったか、故意に心理操作をされているか、詳しい事を訊き出せないのです。しかも大脳コンタクトもお手上げで、何か特殊な精神バリアーが張られているようだとかドクターは言っていました」

「そんな……」

「微かにあなたの名前に反応したとのこと、あなたが鍵になっているのではないかとドクターは言っています」

「ドクターって、ブラキカム？」

瑞樹がナンディーで世話になったドクターだ。

「いえ、ドクター・ブラキカムは急用でナンディー戻りました。今地球にいるのはドクター・ヌンです」

瑞樹には聞き覚えのない名前だった。

「イベリスは手はきちんと動くの？　なんで両手首切断なんてことになったの？」

イベリスに関しての一番の心配事項だった。

「リハビリが必要なのですが、まだ開始できていないと聞いています。私がハル共和国を出る時には、まだリハビリもできない状態でした。拘束されていた時に血流が滞っていたらしくて、助け出した時には、もう切り落とすしか手立てがなかったのです」

「なんてこと……」

いくら最高の医療技術で手を付けても、それを動かすのは本人の意志だ。心が回復しなければ体も回復しない。瑞樹は悲しい気持ちで俯いた。

第二話 常夏の島ハル共和国の光と闇（3）

「あなたは森の民の力を持っているのでしたね」

トウキが突然話題を変えた。

「森の民の力を持つてゐるって言うていいのかどうか……」

瑞樹は戸惑う。森の民の力は植物を操る力だ。ナンディーでは使えていた力が地球に帰ってからにはさっぱり働かなかった。

ナンディーで起こった事を周囲の人たちに話す度に森の民の話もした。そうすると、じゃあ、やってみると植物とか種とか持つてこられるのだけれど、どんなに一生懸命集中して力を使おうとしても何も起こらなかった。最終的には実はやっぱりあれは夢か何かで、私にはそんな力はないんじゃないだろうかと思ひ始めていたところだ。

「今、森の民の立場は微妙です。行けばわかりますが……」

「微妙？」

「森の民自身がその存在理由を見失いつつあるのです」

「存在理由……ですか？」

トウキは真面目な顔で頷いた。

惑星ハルでの森の民の存在理由は、植物を操って光合成能力の高い有用な植物を生み出すことだった。それは地下都市や脱出船の中の酸素濃度を保つ為であったはずで……いくら環境悪化が叫ばれているとはいえ今現在の地球上では、それほど酸素濃度を気にする必要はないのだ。

もし、本当に瑞樹が森の民の力を持っているのなら、地球の植物にはその力が及ばないという現実があるのかもしれない。そもそも地球の植物は力など必要としない。植物たちは太陽と地球に養われている、森の民の力など必要がないのだ。

存在理由……それが見つからなかったら、人はどんな行動にでる

のだろうか。人は物じゃない。道具ならば、使わなくなったら納屋の隅に置いておくだけでいい。でも人は違う。もういらなくなったと言われて置き去りに、もしくは放り出されたら、人は、人の心はどんな風に変化するのだろうか。私だったらどうするだろうか……きつと自分を救うために藁わらをも縋すがる気持ちになって……この先は考えると憂鬱になりそうだった。

ここまで考えたとき、トウキの少し困ったような声が聞こえた。

「瑞樹……ここで黙っておくのはどうかと思うので言っておきますが、考えていることはすっかり見えているのですよ……」

「へ？あ、忘れてた」

その先を考えなくて良かったと胸を撫で下ろす。

「心を覗のぞかれていると分かっているのに、よくそれだけ色々と考えられますね」

トウキが呆れたように瑞樹を見つめた。

「呆れてる？アンドロイドでも呆れたり驚いたりするの？」

呆れた表情のトウキを興味深げに瑞樹は見つめた。

「それらしい似た電気信号を感じることができるのです。全く同じとは言えないでしょうが。そして、それに合った表情を作る事がプログラムされています」

「ふうん」

瑞樹は感心する。

「表情を消すこともできますよ。そうしましょうか？」

トウキがにこやかに提案する。

「いや、いいです」

無表情で同じセリフを言われたらちよつと傷つきそうだ。

「そう言えば、正樹さんには私がアンドロイドだと言いましたか？」

「うん、正樹ちゃんだけには言ってるけど……いけなかった？」

ハル共和国に行くことを正樹が決めた後、思いとどまらせる為にハルのことを色々と話したのだ。両親に話そうとすると心理的な負担がかかって話せなかったのに、正樹には話す事ができた。正樹が

ハルに行くとは決めた時点でラークスパーが正樹に対する心理負荷を解除したに違いなかった。

「いえ、私の前では何も考えないようにしているのがよく分かったので……訓練も受けずに独自にシールドを張れるようになるなんてすごいですね。あの人は唯者じゃ無さそうだ」

トウキは薄く笑った。

どうせ私の考えは、ただ漏れですよ、すいませんねえと考えたところで、トウキの笑みが深くなった。

「ある意味あなたも唯者じゃありませんね」

厭味だ。これは絶対、厭味だ。いやみ

「厭味じゃありませんよ。心を覗かれても動じないで普通にしているのはすごいことなんですよ」

トウキはにっこり笑って言った。

瑞樹はもう何も考えまいと心に決めて、溜息をつくと自分の席に戻った。

第二話 常夏の島ハル共和国の光と闇（4）（前書き）

この回は瑞樹の回想のみになっています。回想というか、ハル共和国に向かう飛行機の中で寝ぼけて見た夢というか……

第二話 常夏の島ハル共和国の光と闇（4）

今にも雨が降り出しそうな昼下り、瑞樹は自分の家の玄関の前で途方に暮れていた。さっき母親に勧められて自分の位牌いはいが上がっている仏壇に線香をあげてきた。

しゅんかずいほうしんによ
春花瑞宝信女

かいみょう
それが瑞樹の戒名だった。

母親は瑞樹の事を瑞樹の友達だと思ったらしい。

「ありがとうね、瑞樹も喜んでると思うわ」

呆然と戒名を棒読みする瑞樹に母親は続けた。

かいみょう「戒名なんてまだ早いって言ってただけど、あの子の病氣のことを考えたら何やら業を背負ってたに違いなんて檀家だんかの和尚おしょうさんがおっしゃってね、早く弔ってやらなきゃ成仏できないぞって、それは煩く説得されてねえ。最初はなんて失礼なってパパも怒ってたんだけど、もし三途の河で迷っているのなら、それは可哀想なことだって話し合って、やっと先月供養してもらったのよ。本当はまだあの子が生きてるって私たちは思ってるんだけどねえ」

母親は目頭を押さえた。

「生きてるよ」

ぽつりと瑞樹が呟くと母親はうんうんと頷いた。

「みんなそう言うってくれるのよ。ありがたいことだと思ってるよ。あなたは学校のお友達？ 瑞樹にこんな外国の友達がいるなんて聞いてなかったけど……」

そう言っ母親は瑞樹の顔を見つめた。

「私、外国人じゃないよ……瑞樹なんだけど……」
瑞樹は母親を見つめて言った。

「あなたも瑞樹って言うの？ ハーフ？」

母親の顔から笑みが引いて、少し用心するような顔になった。

「違う……私は日向瑞樹なの」

瑞樹がそう言った途端、母親は眉間に皺を寄せた。

「あなた、何を言ってるの？」

母親の尖った声が仏間の静けさに亀裂を生じさせて、瑞樹はびくりと身を引いた。

「わ……私は死んでない、私が日向瑞樹なんだってば」

上ずった声でそう言ったところで突然母親は立ち上がり、瑞樹の手首をつかむと玄関へ引っ張って行った。

「言っている冗談と悪い冗談の区別もつかないような子は、瑞樹の友達にはいません。あなたどこの子なの？」

母親はそう言い放つと瑞樹を玄関の土間に押し出した。バランスを崩した瑞樹の足が、揃えて置いてある瑞樹の靴や母親のサンダルをメチャメチャに散乱させる。

「出てって！ 出てって頂戴、二度とこないでね！」

母親は目を吊り上げて怒鳴りつけた。

「ママ……」

瑞樹は縋るような瞳で母親を見上げたが、彼女は瑞樹と目を合わせることさえしてくれない。

「何が目的か知らないけど、自分のうちに早く帰りなさい！ 本当のお母さんが心配してるよ」

靴をはいた瑞樹の背中を容赦なく押して外へ出すと、母親はぴしやりと玄関のドアを閉め、鍵を掛けた。

こうして瑞樹はしばらくの間、自宅の玄関の前で途方に暮れることになったのだった。予想していたことだとはいえ、これは相当シヨックだと瑞樹は滲んでくる涙を何度も拭う。

姿がすっかり変わってしまったのだ。母親の態度を責められないのはわかっている。でもあんまりだと瑞樹はしゃくりあげる。事情

も訊かないで追い出すなんて……。

「カナメ、私……どうしょ……」

泣きながら家の近くの公園の辺りをふらふらと歩き回る。

雨が降りそうな天気だと言うのに、曇り空を透かして降り注ぐ太陽の薄日が眩しくて仕方がなかった。晴れてたら私はもう終わってるなと弱弱しく考える。

警察に保護を求めたって、肝心の親がうちの子ではないと言ってしまったら私はどうなるのだろうか。嘘つきのレッテルを張られて更生施設とかに入れられてしまうんじゃないだろうか。正樹ちゃんに助けを求めてみようか、否、親に分からないものを正樹ちゃんに求めるのは間違ってる気がする。それに正樹ちゃんに変な子がいるってとっとと通報されてしまうかもしれないし……。

空腹が、悪い方へ悪い方へ考えてしまう気持ちに拍車をかける。後、思いつくのは解決策ではなく、ナンディーで助けてくれたハルの人たちのことばかり。ミント……イベリス……ムラサキさん……私、ドウシタライイ？ こんな状況を知ったら冷笑しそうなアーマルターシュや厭味の一つも言いそうなニシギギでさえ懐かしい。

ぽつりぽつりと雨が降り出して、瑞樹は傘も無いまま当てもなく歩き回った。涙なのか雨なのかわからなくなるくらいびしょ濡れになった頃、観念して再び自宅へと足を向けた。

＊ ＊ ＊

鍵を開けて入ってくる音に瑞樹の母親はびくりとして玄関に飛び出した。

「どうした？ 血相変えて……」

父親は少しびっくりしたように母親を見つめる。

「なんだ、あなただったの。今日昼間に変な女の子が来たもんで、ちょっと気になってて……」

「変な女の子？ この子のことか？」

父親は玄関の外に向かって「ほら、入りなさい」と言った。瑞樹は文字通り濡れ鼠で栗色の髪が青白い顔に張り付いている。

「あなた！ まだいたの？ 帰りなさいって言ったでしょう！」

母親は瑞樹を睨みつけた。

「おいおい、事情は訊いたのか？ こんなびしょ濡れになってるのに、ちよつと拭いてやれよ」

母親の厳しい言葉には耐えられたのに、父親の優しい言葉に涙が溢れて止まらなくなった。玄関口で震えながら泣きだした瑞樹に、両親は困ったように目を合わせた。

「ママ、とにかくタオル持ってきて来てくれよ。俺もびしょ濡れだからな、傘も役に立たないほど降ってるんだよ」

母親は、ぱたぱたと奥から二人分のタオルを持って来てくれた。

「……」

瑞樹の説明に両親は黙り込む。

しし座流星群が流れたあの夜、瑞樹は惑星ハルからやってきていた宇宙船ナンディーに拉致されたのだ。そこで腫瘍の治療を受けた。ハルの医療は進んでいて、腫瘍はなくなったが、原因不明の医療トラブルで瑞樹は見かけが別人のようになってしまったのだ。色素の薄いハル人にそっくりになってしまった。

「君が日向瑞樹って言う証拠はあるのかい？」

父が静かに問う。

「証拠？」

瑞樹は考える。指紋とか歯型とかでよく遺体確認をしたりするけど、私はそれさえも変わってしまっているかもしれない……。だとすると、証明する為の証拠は記憶しかないんだろうか。しかし、その肝心の記憶も日向瑞樹とハル人のディモルフォセカ・オーランテ

イアカの記憶が混在している状態だ。自分が日向瑞樹だと言い張る事が極めて困難であるということに思い当たる。

「証拠なんて分らないよ……」

瑞樹は力なく俯いた。

「両親の名前は？」

父親は言った。

「パパは日向夏樹、ママは日向瑞穂」

「そんなの表札に書いてあったでしょ」

母親が突き放すように言う。

そこで瑞樹は、自分の生年月日や両親の生年月日や昔飼っていた犬の名前や隣の正樹ちゃんちの家族の名前や、親が知っているだろうと思われる瑞樹の学校の友達の名前を次々とあげていった。自分が罹った病気などの昔の記憶を話していくうちに、両親の瑞樹を見る目が変わっていった。

「パパ……この子……」

母親は動揺して父親の上着を引っ張った。

とりあえずはと瑞樹の部屋で眠る事を許可されて次の日、雨に打たれたせいか熱を出してしまった瑞樹を母親が看病してくれた。

「何か食べたい物ある？ 病気になった時、家では何を食べてたの？」

「ミルク粥がゆが食べたい」

具合が悪くて何も喉を通らなくなったとき、母親がよく作ってくれたものだ。あまりにも食が進まない瑞樹を心配してあちこちに訊き回って作ってくれた病人食で、瑞樹は唯一これを少しだけ口にすることができたのだった。コンソメで煮込んでからミルクで仕上げる。しょうがを少々いれて白髪ねぎをトッピングすると風邪の時には体が温まる。小さい頃はアツアツのを目の前でふうふう冷ましながら食べさせてくれた。

母親は無言のまま台所に消えるといつものようにミルク粥を作っ

てくれた。

指紋と歯型が一致した。

父親が警察に相談して調べてもらったらしい。父親はそう言うところは何かつてがあるらしかった。指紋はほぼ完璧に一致した。小学校でとった手形が卒業アルバムにあったので、それは簡単に調べることができた。歯型は行きつけだった歯医者で調べてもらった。歯型もほぼ一致したが、治療痕が全く無くなっていることをすぐ指摘された。瑞樹は治療痕が無くなった理由を知ってはいたが、正直に話しても信じてもらえないことがそろそろ身にしみてきていたので、よく分からないと答えておいた。

瑞樹はハルの技術で再生したのだ。一度死んで、分解されて、再生した。こんな事を言っても誰も信じてくれないことだけがはつきりしていた。

第二話 常夏の島ハル共和国の光と闇（5）

「瑞樹、瑞樹、そろそろ着陸するらしいぞ。起きとけよ」

飛行機の座席でばっちり熟睡していたらしい、正樹に起こされた。

サンゴ礁に囲まれたエメラルドグリーンの海が続く中に細長い三日月形の島が見えた。三日月が途切れた場所から、幾つかの小島が点在しているその先、ちょうど三日月が玉を抱くような位置に、比較的急峻な山を頂いた丸い大きめの島があった。もしかしたら、この島は昔一つの大きな丸い島だったのかもしれないと思わせる形だ。三日月島と丸島の間の海の色は一段と淡く、浅いということがわかる。

緩やかに弧を描いた三日月形の島の中央部に向かって飛行機は高度を下げた。三日月島の内側の弧の側には、山がある丸島へ向かって砂浜が張り出していて、鳥が羽を広げているような模様が見えた。三日月島はそのほとんどが木に覆われていて、三日月の中央に背骨のように道路が敷かれている。鳥の模様は高度が下がるにつれて、何かの建造物が集まってその模様を描いていることがわかった。

「なんだか、すごいヘンテコな島だね」

瑞樹が窓際で目を見張る。

「ドバイのパームアイランドみたいだな」

正樹が隣から覗き込んだ。

「あの砂浜の鳥みたいなのどこかで見たことあるな……」

瑞樹が呟いた時、トウキがにっこり笑って前の座席から顔を出した。

「アグニシテイで見たのでしょうか？ あれはハンサという鳥をイメージしているんですよ」

「ああ、そうか！」

瑞樹は納得してうんうんと頷いている。正樹は瑞樹のその言葉を少し落ち着かない思いで聞いた。

＊ ＊ ＊

正樹はカナメからだと渡された大脳コンタクトの器械を、飛行機に乗っている間中付けていた。その器械を取り付けてスイッチを入れるや否や、頭の中にさほど低くない良く通る若い男の声が聞こえた。

『初めまして、僕はカナメ・フォティニア・グラブラ。目を閉じてくれると僕の顔をお見せすることができただけど……』

その声は少し間をおいた。目を閉じろと言うことだろうと正樹が目を閉じると、目の前に自分と同じくらい長身の男が立っていた。

銀色の髪に深紅の瞳、石像かと思うくらい白い肌の色、正樹はごくりと唾を飲んだ。

『我々ハル政府の申し出を受けてくれてありがとう。感謝している。飛行機に乗っている間、できれば、この大脳コンタクトからの情報をすべて聞いておいてもらえるとありがたい。これから説明することはハルが置かれている現状を理解して貰う為に役に立つと思うからね。ニシキギから君がとても勘の鋭い人だと聞いている。君が現状を理解してくれているということは、瑞樹にとって非常に心強い味方を得ることになると僕は考えている。今回、無理をして瑞樹をハル共和国に連れてくることにしたのは、彼女が現在進行している事件に巻き込まれている可能性が極めて高いと判断したからだ。その事件は、ハル共和国の前身である、惑星ハルでのハル連邦時代の政府のやり方に対する不満から引き起こされていると我々は考えている。君は、我々が惑星ハルから来た事を瑞樹から既に聞いただろ

うか。きつと信じなかっただろうね』

カナメは小さく笑んだ。

『……もつとも瑞樹が話して周囲が信用するようなら、瑞樹はまだ日本には帰れていなかったはずだ。僕はどうしても瑞樹を地球に帰してやりたかった。瑞樹と約束をしたからね。瑞樹がハルの国民になることは彼女が日本に帰るための必要絶対条件だった。やむを得なかったことだとはいえ、瑞樹をハルに巻き込んだまま、完全な形では開放してやれなかった自分を不甲斐ないと思っている。更に君まで巻き込むことになってしまった。申し訳ないと感じている。そこで……ハル国籍を入手する二人目の地球人となる君に、惑星ハルのことを少し説明させてほしい』

カナメの姿が消えて、青い地球に良く似た惑星のイメージが広がる。地球と違うと分かるのは大陸の形が全く異なっているからだ。地球に比べると圧倒的に陸地の面積が少ない。

透きとおった女性の声が静かに説明を始めた。

『惑星ハルは、八つの大陸を浮かべた青く美しい水の惑星です。ジタンの周りを398日かけて回り、三つの月、赤い月ルシフェル、黄色い月ウエスperl、そして、いびつな形の月フォボスを従えています。ジタンの光は、地上に降り注いで光と熱を惑星ハルにもたらしました。海の水は豊饒ほうじょうで、あらゆる生物を育みました。人類は文明を築き、海と森を守りながら暮らしていたのです』

『これは子供用の教育映像なんだ。美しかったハルのイメージを植え付ける為のね……』

ナレーションの声の後にカナメの声が再び聞こえた。

『この地球に良く似た青く美しい惑星ハルのイメージを、ハルの人間は人工的に植え付けられている。次に見せる映像がハルの現実だった。末期のハル。これを地球人に見せるのはハルが気の毒で心が

痛む……』

代わって、低い男の声が説明を始めた。

『最初に極冠の氷が解けた。解けた氷は、さして大きくはない惑星ハルの大陸をじわじわと飲み込んだ。

六千メートル級の高山の頂を残し、一旦ハルは青い水球となった。逃げ惑った人々は、わずかに残った山頂の陸地を拠点として地下都市を形成し、細々と暮らしていた。次いで大地は干上がり、惑星ハルは完全に生物を拒絶する不毛の大地となった。ジタン末期の大災害である』

正樹の目の前に火星に似た赤褐色の茫漠とした惑星と、ギラギラと燃え上がりハルを照り焦がす紅いジタンのイメージが広がる。説明は続いた。

『人類を含め生物が生きていけたのは、地下都市と、僅かに残った山頂にシールドを施すことのできた三つの地上。それがハルに残された最後のオアシスだった。

三つの地上のうち一つは人を寄せ付けぬジャングルになってしまったヴェスヴィウス、一つはエクソダス以前、流星群に直撃されて壊滅したダイモス、そして最後の一つが僅かばかり残されたハルの森、アール・ダーだった。そのアール・ダー村に住んでいたのが森の民だ。森の民は植物を操る不思議な能力を持っていて、ハルの最後の地上を守りながら暮らしていた。大半の者は体が弱く、寿命も短かった。日増しに苛烈さを増すジタンに、その力を使いながら植物とともに生きている種族だった。その特殊な能力の故に政府からは手厚く保護されていた。地下都市ハデスのバイオラングである、エリアEの植物は地下の寂光の下でも光合成ができるように改良されていたが、それは森の民によって改良された植物群だった。不思議なことに森の民の力の源は未だに解明されておらず、森の民を分解再生するとその力が失われてしまうことが確認されている。地上

と地下都市は隔絶されていた。一般人とファームの民が地上で暮らすことはなかったし、森の民が地下都市で暮らすことは、一部の例外を除いて、なかった。それがハル連邦政府の方針だった』

赤い末期の惑星ハルのイメージは消え、再びカナメが現れた。

『惑星ハル最後の文明に存在した人類は三種類。一般人、ファームの民そして森の民だ。一般人は地球人とほぼ同種の人種だと思ってくれていい。一方、ファームの民はその体に葉緑体をもっていて自らの体で光合成を行う。そして森の民は、先ほどのイメージにあつたとおり、見かけは一般人とほとんど変わらないが、植物を操る力を持っている。一般人は、地下都市で科学技術を発展させ、六隻の脱出船を造った。

森の民は、植物を操って寂光下で機能するバイオラングを造った。ファームの民は、持前の忍耐強さで、地下都市と脱出船にあるバイオラングの維持・管理を行った。この三つの力が合わさって初めて、我々はエクソダスという不可能に見えた大事業を可能にすることができたんだ。

エクソダス計画は、無事にハルを脱出し、新しい惑星を見つけ出し、そこに定住することによって完了する。我々は地球を見つけ出し、太陽系に新たな足がかりを築いてきた。火星のアグニシティ、月のセレーネシティ、まだ完成には程遠い状態だが、金星軌道にもフロートイングシティを建設中だ。アグニシティもセレーネシティも地下都市だから、現在の状態ではまだ地球のどの国も気づいていないだろうね』

カナメは薄く笑う。

正樹はあつけにとられる。そんなこと信じられるかよ。しかも、森の民を分解再生って……分解再生装置が生き物を再生できるなんて聞いたことがない。

第二話 常夏の島ハル共和国の光と闇（6）

大脳コンタクトによるカナメの説明は続いた。

『地球には我々ハルの本部を置く事を計画して、ハル共和国を建国した。そこまでは問題がなかったはずなのだが、今までエクソダスの為に抑えつけられていた人々の心に変化が起こってきたらしいんだ。一番動揺しているのは森の民だろう。先ほど説明したとおり、森の民は惑星ハルで政府に手厚く保護されていた。保護というよりも管理されていたという方が当てはまっているかもしれない。ハルに起こった大災害のこともジタンが末期であることも知らされずに暮らしていたからね。エクソダスは彼らにとって、まさに寝耳に水であつたわけだ。』

森の民には力を使えるタイプが三通りあつて、それぞれオリジンタイプ、マルチタイプ、リセプタータイプと呼ばれている。オリジンタイプは植物を操る力を持っているものの自分の意志では力を出せないタイプで、植物からの要求で力は勝手に消費される、よつてこのタイプはしばしば傀儡かいらいと揶揄やゆされることがある。マルチタイプは力の源であり、なおかつ自在に自分の意志で力を使えるタイプで、リセプタータイプはオリジンタイプもしくはマルチタイプの力を被ひ曝ばくすることによって力が使えるようになるタイプだ』

突然、宇宙の只中に六隻の大型船が浮かんでいるイメージが広がった。

『ハルを脱出する際、ハル人は一旦すべてが遺伝子情報と記憶情報のみを残して、分子レベルまで分解された。その後、必要な人間が必要なだけ再生される。君も分解再生装置のことは聞いたことがあるだろう？ あれは生物に対しても使用可能なんだ。もつとも一般

に使われている物とは多少設定が異なるから、ハルから貸し出されて現在地球上で使われている装置では生物再生は不可能だけどね』

正樹は信じられないと首を振る。そんなことができたら、生命のあり方が根底から覆ってしまう。命は一度きりだ、だからこそ、それに応じた社会秩序があると言うのに。カナメの声は続いた。

『しかし、どんなに設定を変えても、その再生される中に、森の民のオリジンタイプとマルチタイプは含まれていないんだ。そして今のところ、この二つのタイプが再生される予定はない。何故なら、この二つのタイプは再生できないからだ。原因はまだ説明されていないが、再生しても力を数時間で使い果たす『崩壊』という症状を発症してすぐに死んでしまう。従って力の源を失ったリセプタータイプは一般人と何ら変わりなく、結果、彼らはその存在理由を見失いつつあるわけだ。リセプタータイプに力を被曝させる方法が皆無なわけではない。でもここでは話さないよ、ハル共和国にすれば、いずれ分かることだからね。』

ここまでのハル共和国の現状は呑み込んでもらえただろうか』
紅い瞳が心配そうに正樹の瞳を覗き込んだ。

一瞬、正樹は自分の体がぐらりと傾いた気がして、閉じていた目を開く。

瑞樹は、機内で渡された濃いブルーの薄い毛布にくるまって、すやすやと眠っていた。雪ん子みただと正樹はクスリと笑って、再び目を閉じた。目を閉じると、再びカナメは説明を開始した。一人で語っているはずなのにまるで本当に隣にいて話しているみたいだと正樹は啞然とする。

『分解再生装置の生物再生に関する情報は、ハルの最高機密だ。こ

れを地球人に公表する意思はハル政府には全くない。君はこの情報を知ることとなったが、それを一切他言できないように、今、心理操作をかけさせてもらった。ハル国民なら誰でもそのような処置を受けている。逆にいえば、だからこそ君にハル国民になってもらう必要があったんだ。その操作を解除する方法は更に高いレベルのトップシークレットになっている。悪く思わないでくれると良いのだが……』

火星らしい惑星が大写しにされ、その軌道上にある小さな点にズームしていくと、一隻の宇宙船が現れた。

『これがナンディーだ。現在は火星軌道上を周回している』

カナメのイメージが重たそうなドアを開けて、光が溢れている部屋の中へと入っていくのが見えた。部屋の中だと思ったら、そこにはジャングルのような森が広がっていて、部屋の中に入ったのではなく、暗い部屋から出たのだと正樹は考えた。

『ここで、どうして瑞樹がトラブルに巻き込まれる可能性があるのかという問題を話しておこうか。瑞樹は二年前我々の宇宙船ナンディーに拉致された。我々ハルのエクソダスプログラムに必要な人間だとメインコンピューターナンディーが判断した為だったのだけど、その理由の一つは彼女が森の民の力を内包していたということだった』

カナメは明るい森の中をゆっくりと歩きながら言葉を続ける。

森の民の力……。帰ってきた瑞樹からその話は聞いたことがあった。しかし瑞樹がその力を植物に使ったところは見えていない。種は発芽しなかったし、植物は一ミリだってその姿を変えることはなかった。ただそれに類することと言えば、瑞樹が彼女の祖父と一緒に植物を育てるのを趣味にしていたことくらいだ。

植物がして欲しいことがわかるのだと幼い瑞樹が言っていたこと

もある。もちろん正樹は馬鹿にして本気にしていなかったが……。

『ハルの森の民とは厳密には同一ではないかもしれないけど、彼女が宇宙船ナンディーでとった行動の内容から考えると、彼女は森の民マルチタイプに属していると考えられる。ここまで話せば、彼女の立場がわかってもらえるだろうか？ この先、新たな命がその力を授かることはあるかもしれない。しかし今現在、彼女は唯一の力の保持者だということになる』

しかし、そう言われても……と正樹は思う、そんな力が瑞樹にあるとはとても信じられない。正樹の心を見透かすようにカナメの説明が続く。

『森の民の力がハルの植物にしか働かないと分かったのはつい最近のことだ。我々ハル人は地下都市での生活が長かったため色素を作り出す機能が損なわれているものが多く、太陽光に対する耐性が無い。それは人のみならず植物も同様の状態だ。そこで地球にも地下都市を造る事を決め、バイオラングを地下に作った。最初は地球の植物をそこで栽培するつもりだった、しかし森の民の力は地球の植物には使えなかった。しかも、地球の植物は地下都市ではバイオラングの機能を果たすことはおろか、繁殖さえまならぬ状態だったんだ。そこで我々は地球の地下にもハルの植物を植え、足りない分は地上の空気を取り込むことで地下都市の空気を維持することにした。

地球上で酸素を作り出すことはそれほど重要なことではないからね。しかし、重要なことではないという事が彼ら森の民にとっては深刻な事だった。存在意義の喪失という訳だ。しかもリセプタータイプしか再生されない状況で、その力を自分達で確保する事ができないことも、さらに彼らを追い詰めてしまったのかもしれない。何

故なら、力を被曝するもう一つの方法には限りがあるからだ。その方法が尽きれば森の民は消滅するかもしれない、彼らはそれをとても恐れている』

カナメは森が一望できる場所で立ち止まった。

『既に気づいただろうか？　ここは宇宙船ナンディーのバイオラングなんだ。我々はエリアEと呼んでいる』

カナメは振り返って正樹を見つめた。正樹は息を飲む。屋外に出たのだと思っていたこの場所が、宇宙船の中だと言うのか？　しかし、どこも明確に指摘することはできないが、地球の植物とは違う、太陽の光とも違う、その微かな違いが、正樹にも分かる気がして、やがて正樹は静かに納得した。

『エリアEは、その酸素供給能力が落ちるたびに森の民の力で修復されてきた。ところが、瑞樹がナンディーに来てから今に至るまで、僕たちは森の民の力を使っていない、なのに酸素供給能力は落ちるところか上がっている。それほどまでに彼女の施した力が強大だったと言えるのだろう。ところが瑞樹の存在を知らなかった森の民が、その理由をイベリス・センパービレンスという少年のせいではないかと考えた。

彼は特殊なケースで、森の民であるにもかかわらず、随分早くから目覚めさせられてナンディーで働いていたんだ。しかし彼もまたリセプタータイプの森の民だ。彼のせいではなかったと気づいた彼らはその理由を知るためにイベリスを拉致監禁した。彼が何か知っているはずだと考えたからだ。イベリスは最終的には解放されたけれど、体と心に重大な傷を負って、事件の全容を未だ語ることなく治療を受けている。

彼らが睨んだとおり、確かにイベリスは瑞樹の存在を知っていた。

ただ、彼らがイベリスから瑞樹の情報をどの程度訊き出せたのかどうかは、確認できていない。この事件に関わったのが森の民だけの問題ならば、瑞樹にとってもさして危険はないと思われたんだけど、イベリスが施された心理的操作が明らかになるにつれ、森の民の背後に何か別の意図を持った何者かが存在するらしいという思わしくない事実が判明した。日本にいても危険は回避できないかもしれないという判断で、瑞樹を、そしてできれば君をハル共和国に連れてきたいと僕は考えた』

そこから先は、言葉がある程度話せるようになっておいた方がいいというカナメの勧めでハル語会話の情報が延々と入っていた。

第二話 常夏の島ハル共和国の光と闇（7）（前書き）

ハル共和国に到着したので、「」はハル語、□は日本語、『』はダイレクト意思疎通語に設定変更いたします

第二話 常夏の島ハル共和国の光と闇（7）

カナメの説明がすべて真実ならば、アグニシティを見たことがあるという瑞樹は火星に行った事があるということになる。正樹は複雑な思いで着陸態勢に入った飛行機のシートベルトを締めなおした。

二年前、自分の前から突然消えたこの幼馴染が火星に行っていたと信じるには、相当な想像力を必要とした。瑞樹はいつも自分の後ろから付いてきて、自分が守っている、そう思っていたので、自分の想像を遥かに超えた場所に行っていたのだと思うと、瑞樹がやっぱり見かけと同じに別人になってしまったんじゃないだろうかと落ち着かない気分になるのだった。

暖かな日差しの中、飛行機は軽いショックと共に軟らかく着陸した。すでに到着している飛行機が何機か空港ターミナルに接岸しているのが見えたが、瑞樹たちを乗せた専用機はターミナルとは別の方向へゆっくりと進んだ。接岸されたタラップは日よけ付きの階段になっていて、それを降りたところで車が待っていた。

「あっちの空港ターミナルへは行かないの？」

後部座席に正樹と紫目のトウキに挟まれた瑞樹は窮屈そうにトウキに話しかけた。

「あちらには入国管理事務所があるのです。外国から来た人はあのターミナルを通らなければなりません」

トウキは運転手に出発の指示を出した。車は微かなモーター音をたてて走り始める。

「でも、私たち外国人でしょ？」

「事情が事情なので入国手続きは済ませてあります」

「ふうん」

瑞樹は腑に落ちない顔をする。

運転手は飛行場のゲートに立っている監視員としばらくやりとりをした後ゲートを潜り抜け、T字路になっている道路を左に曲がった。

「右折と左折で様子が少し違うようですね」

きよろきよろと左右を見ていた正樹ちゃんが呟くように言った。

「ふふ、やっぱりあなたは気付きましたか？ 右に曲がるとあの飛行機から見えていたハンサビーチに行く事ができるのですよ。右の道をどこまでも進めば島の最西端に着きます。ハンサビーチは別荘地になっていて、いくつかの公共施設と娯楽施設が完備されています。最西端にはサンセットビーチがあって、ここは短期滞在者用の宿泊施設と娯楽施設が完備されています。我々が向かっている左の道は、主にハル共和国の公共施設が集まっているエリアへ続いています。右と左で雰囲気が違うのはそのせいでしょう」

「ふうん」

右に行きたかったかもと、瑞樹は未練そうに右の道を見つめた。

「いずれ時間がとればサンセットビーチに行けることもあるでしょう」

トウキは苦笑しながら瑞樹に話しかけた。

しまった、心読まれてるし……と考えたところでトウキが更に苦笑したのを感じる。

「ハンサビーチに行けるのは、やっぱり別荘を持ってるお金持ちの人だけ？」

心で考えても言っても同じなら、黙ってることには何も意味がないと瑞樹は開き直った。

「別荘所有者が同伴しているなら、身分証明書を提示すれば入れますよ。基本的には入れるのは所有者だけです……」

「そんなお金持ちに知り合いはいないな、正樹ちゃんが将来お金持ちになったら買って入らせてよ」

瑞樹はひたすらシールドを張って心を読ませないようにしているらしい正樹にちよっかいを出す。

「仮に俺がそんな金を手にしたとして、別荘なんか買おうと思うか？」

正樹は呆れたように瑞樹を見つめた。

「はあ、確かにね、正樹ちゃんがお金持ちになったところ想像しても、あんまりリッチな生活してるって思えないなあ」

町工場とか買い取って、ごちゃごちゃと色々な物に囲まれて、嬉々としてヘンテコな物を作ってる、そんなイメージが浮かぶ。

「なかなか面白い想像ですね」

トウキが隠す事も無く感心してみせる。

「お前、どんな想像したんだよ」

正樹が瑞樹を問い詰めたところで、車は巨大なゲートの前に到着した。

やはり運転手が、しばらく中のセキュリティとやりとりをした後、重そうな金属製のゲートが開いた。かなり奥まで進んだところのコンクリート打ちっぱなしといった雰囲気のごつい建物の前で、車は止まった。車から降りて建物の中に入ると南国特有のゆったりした雰囲気は消えて、しんとした人気のない広間に靴音だけが固く響く。少し薄暗い感じが宇宙船ナンディーの中の雰囲気似ていた。エレベーターに乗る前のゲートで、正樹ちゃんがチェックの為にしばらく足止めされた。

ゲートの人は、心得たようにトウキから小型大脳コンタクトの器械を受け取ると、奥の事務所へと消えた。カナメから預かったというあの器械だ。正樹ちゃんもその手続きの意味を知っているのか動じる様子も無く待っている。

「ねえ、私は大丈夫なのかな、あの器械が正樹ちゃんの何かを証明なんかするの？」

「まあ、そんなところだな」

やっぱり正樹ちゃんは理由を知ってるみたいだった。

「私は何であーゆーの無いんだろう？」

「気にするな、そのうちわかるよ」

正樹ちゃんがそう言った時、ゲートの人が戻って来た。トウキも一緒にゲート内に入る。

エレベーターは深く深く沈んでいく。奈落の底まで降下しているように瑞樹には感じられた。

「安定した地盤に到達するまで、かなり掘り下げなければならなかったのです。もう間もなく着きますよ」

瑞樹の不安を読み取ったトウキが説明する。エレベーターが着いたところに緑目のトウキが待っていた。

「お待ちしていました。マサキ・カイヅカ様ですね。どうぞこちらへ」

緑目トウキは正樹を左の通路へと案内した。

「瑞樹は？」

正樹は紫目トウキを見つめる。

「彼女は私と一緒に別なところに行ってもらいます。でも、宿泊する部屋を隣にしてありますから、それぞれの用事がすんでからそちらで会えるでしょう。どうぞ心配なく」

正樹は少し心配そうな顔で瑞樹を見つめて、

「じゃあ……後でな」と言い残すと緑目トウキと行ってしまった。

「ねえ、正樹ちゃんはどこへ行くの？」

「正樹さんはハル共和国が初めてですから、入国の手続きと、ここシステムの説明を受けるための部屋へ行きます」

なるほどと納得する。瑞樹はハル共和国こそ初めてだが、ナンディーに行った事があるのだ。ハルのシステムのほとんどをミントが教えてくれた。ミントはファームの民の女の子で、ハルでできた初めての瑞樹の友達だ。

「じゃあ、私はどこへ行くの？」

正面の通路を歩きだしたトウキに瑞樹は声をかけた。

「着いて早々、申し訳ないとは思うのですが、医療センターに行ってもらいます」

トウキは紫色の瞳でまっすぐ瑞樹を見つめた。

「……それってイベリスの所ってこと？」

「ええ」

トウキの緊張した目に瑞樹は心を引き締める。

大けがをして言葉を失ってしまったイベリス。人懐っこい笑顔で、いつも瑞樹の面倒をニコニコしながら見てくれていた彼からはとても想像ができない。

医療センターはナンディーでもそうだったが、ザワザワしていて活気がある。病院に活気があるのはある意味困りものだが、看護師たちがてきぱきとしているせいか雰囲気は活気づいてしまいうみたいだ。

ナンディーと違い広々していて清潔感がある医療センターの最奥の個室で、イベリスはぽつんと取り残されたようにベッドの上で眠っていた。

瑞樹は痛々しい気持ちでイベリスの傍に歩み寄った。すっかり痩せて、青白い顔色になってしまったイベリスを見下ろす。

「少し待っていてもらって構いませんか？　ドクター・ヌンに状況を聞いてきますから」

トウキはそう言って部屋から出て行った。

瑞樹はベッドの傍らにある椅子に腰かけると掛け布団の上に出て、いるイベリスの右手に触れた。明らかに付け足したとわかるほど、手首の先と腕側で皮膚の色が違っていた。手先は少し紫がかって、見るからに血のめぐりが悪そうだ。

瑞樹は悲しい思いで手先を柔らかく擦った。擦り続けて少し手先

の色が良くなってきたかなと思った頃、突然ベッドから言葉が降って来た。

「……瑞樹……どうしてここにいるの？」

瑞樹は驚いてイベリスを見つめた。

「どうして……イベリスが大げがしたって聞いて、心配だったから……。イベリス？ あなたしゃべれるようになったの？」

瑞樹の言葉にイベリス自身がびっくりしたように目を見開いた。

「……本当だ……僕しゃべれる……」

少し呆然とした様子のイベリスに瑞樹も驚く。

「よかったあ、よかったね」

心底ほっとして、にっこり微笑んだ瑞樹を難しい顔で見つめていたイベリスが、静かに言った。

「……瑞樹、ここから離れて」

突然イベリスの茶色い瞳に強い意志が宿る。

「へ？」

豹変した雰囲気のイベリスに瑞樹目を瞬かせた。

「……どうして来ちゃったの？ 君はここに来てはいけなかったんだ」

イベリスは突然苦しそうに喘ぎ始めた。青白い頬に濃い茶の髪が被さる。

「イベリス？ 具合が悪いんじゃない？ ドクター呼ぶ？」

「駄目だ！ 帰れ！ 君の国に帰れ！ 早く！」

イベリスはすごい剣幕で、でも苦しそうに脂汗を浮かべながら瑞樹に怒鳴った。

「イベリス？」

瑞樹が驚いて椅子から立ち上がったところにトウキとドクター・ヌンが入って来た。

「今の怒鳴り声はイベリスか？」

ドクター・ヌンらしい人が驚いたようにイベリスの瞳を覗き込ん

でしわ枯れた声で問いかける。ヌンが声をかけ、イベリスの瞳を覗き込んだ瞬間、何か呪文のような言葉を呟いたのに瑞樹は気がついた。ほんの幽かな声だ、微弱な電波のような……。それでも瑞樹にはそれを聞き取ることができた。ヌンはこう言ったのだ「母なるハルの大地のもとに」と……。

瑞樹はトウキを振り返る。トウキはイベリスに注目していた。ヌンには気付かなかったかもしれない。それくらいの僅かな動作だ。トウキの瞳はイベリスを睨み据えている。スキャンしているらしい。

ドクター・ヌンは瑞樹が今まで会ったどのハル人よりも年をとっているように見えた。おじいちゃんといった風情だ。

「……」

イベリスは二人に怯えたように黙り込んだ。

「イベリス、しゃべれるようになったんだな。なぜ黙っている？」

ドクター・ヌンが静かにイベリスに話しかける。

「……僕は……」

イベリスはぼんやりとしているように見えた。ドクター・ヌンは振り返ってトウキを見たが、トウキは何も言わずに首を横に振った。

「イベリス、何があったのか、事件の事をしゃべれるか？」

ドクター・ヌンは用心深く話しかけた。

「……」

イベリスは無言のまま首を横に振った。

「よく……思い出せないんです……」

イベリスは力なくそう言った。

「そうか、とりあえずしゃべれるようにはなったようだ。今のところはこれでよしとしようじゃないか」

ヌンは穏やかに微笑んだ。

「無理に思い出すことはない、まずは体を元に戻すこと、それを優

先させよう」

ヌンの提案にイベリスはうつろな瞳で頷いた。

「君……瑞樹とか言ったかな？　日本という国から来たのだそうだね」

ヌンは瑞樹をしげしげと見つめた。

「そうですけど……」

瑞樹はドクター・ヌンの瞳を見つめた。とても薄い褐色の瞳で、光の加減で金色に見える。猛禽類の瞳に似ていると瑞樹は少し怖くなる。

「少し日本の話でも聞かせてもらえるかね」

ヌンは瑞樹を探るように見下ろした。

「ドクター・ヌン、残念ですが瑞樹はこの後予定があるので。日本の話はまた今度にお願ひできますか」

瑞樹ではなく、トウキが答えた。

「そうかね」

ドクター・ヌンは不愉快そうにトウキを一瞥すると、今度は逆にとつとと帰れとでも言いたげにドアを開けて帰り道を作った。

なんだろう、何かが引つかかる。イベリスは何故私にあんなことを言ったのだろうか、ドクター・ヌンも気にかかる。彼のあの言葉は……何だったのだろうか。イベリスはどうして黙りこんだのだろうか？　トウキが来たから？　それとも、ドクター・ヌンが来たから？　何かが腑に落ちない気がした。

そう考えているとトウキと目が合った。トウキは深刻そうな顔をして瑞樹を見つめている。

「瑞樹、今日のところはこれで失礼しましょう」

トウキが深刻な顔のままそう言った。

「……瑞樹」

イベリスが何か言いたげに瑞樹を引き留めた。

「ん？ 何？」

イベリスは何かを言いかけては止めてという仕草を二回繰り返してから、諦めたように首を振って「……ごめん、なんでもない」と言った。

「また、来るね」

瑞樹が言うといベリスは少しだけ力なく笑った。

こんな不可解な態度をとる人ではなかっただけに、イベリスとの再会は想像していた以上に瑞樹を混乱させた。

＊ ＊ ＊

『瑞樹、イベリスに何を言われましたか？』

医療センターを出て居住エリアに行く途中の通路でトウキが訊いた。居住エリアに入ると通路の色がブルーになる、その色をきれいだなと見ていた時だったので、瑞樹はえっ？ と慌ててトウキに視線を合わせた。ここまでトウキが何も訊いてこなかったのも、う何も訊かれないのだろうと思っていたところだ。

『……イベリスは私に日本へ帰れて言いました。けど……』

瑞樹は言葉を濁す。

『けど、なんですか？』

トウキに鋭く突っ込まれて口ごもる。

『なんだかよく説明できないんだけど、何かが違う気がして……』

『何が違いましたか？』

トウキの声が頭の中で響く。

『イベリスが……イベリスらしくないって……それにドクターもなんか、変……』

瑞樹は眩暈を覚えた。

ドクター・ヌンは、イベリスが事件を思い出せないと言った時、ほっとしたように見えなかったか？ 瑞樹はぼんやりと思いだす、と同時に、ぐらりと体が傾いた。今、私は言葉に出してしゃべっただろうか。頭がくらくらする。トウキの瞳を見つめたまま目が離せない。

「瑞樹？ 大丈夫ですか？」

トウキが心配そうな顔をして瑞樹の腕を掴んでいた。

「あれ？ 私、今トウキと話してたよねえ」

さっきのトウキと今のトウキが別人に見える。

「瑞樹、気分は悪くありませんか？ 大丈夫ですか？」

トウキが鋭い瞳で瑞樹を見つめる。

「……」

瑞樹はごくりと唾を飲み込んだ。

「瑞樹？」

トウキは険しい表情で訊いた。

「ごめん、なんでもない。大丈夫」

私は歩きながら夢でも見たんだろうか。

「ここがあなたの部屋になります。そこに手を翳してください。あなたの指紋と静脈を認証するように設定してあります」

瑞樹が手を翳すとドアは静かにスライドした。

「荷物は既に届いていると思います。部屋から出る時は必ず0コールをして私を呼び出してください。決して一人では出歩かないでくださいね。正樹さんの部屋は右隣の211号です。彼はまだ戻っていませんから後であなたの部屋へ寄るように伝えておきましょうか？」

「うん、お願いします」

トウキは一礼すると部屋を出て行って、瑞樹は一人、部屋に取り残された。

トウキは瑞樹の部屋を出たその足で、斜め向かいの部屋のセキユリティに手を翳すと中へ入った。

「どうだった？」

カナメは端末に向かって何かしら情報を引き出しているらしく、ヘッドホンのような機材を頭に付けて目を閉じていたが、トウキの入って来る気配に物憂げに目を開けた。深い緋色の瞳が紫色の瞳を見つめる。

「あなたの言ったとおりイベリスが起動しました。瑞樹への精神波干渉も認められました」

トウキが心配そうな顔で深紅の瞳を見つめる。

「そっか、やはりな」

カナメは少し眉を顰めた。

「この後はどうしますか？」

「トウキ、記憶しておいてくれ。今から瑞樹に認証番号を書き込む、君は常に追跡しておいてくれ。一人で医療センターと第二エリアEへは近寄らないようにガードして欲しい。それから、外で僕を見かけても近寄らないように、僕から言うておくけど、君の方でも気を付けてやってくれ。以上だ」

トウキは表情のない瞳で聞き取った後、言葉を終わらせたカナメに焦点を合わせた。

「了解しました」

トウキは一礼すると部屋を去って行った。

第三話 それぞれの心に刻まれた風紋（1）（前書き）

「はハル語、 □ は日本語という設定になっています

第三話 それぞれの心に刻まれた風紋(1)

瑞樹は部屋に運ばれていた荷物をほどくと、中からクマ太を取り出してベッドに寝かせた。二十センチメートル程の背丈の濃茶色の熊のぬいぐるみで、小学生の時に父親が買ってくれたものだ。クマ太の胸には最初からつぎはぎのような布が当てられていた。

初めて腫瘍の手術を受けることが決まって、入院することになった日の前日買って来てくれた。

「ほら、この熊は小さいけど一人前なんだぞ、この子も手術を受けたんだ」

父親は、つぎはぎ布を指して言った。

「ほんと？」

小学校低学年だった瑞樹は、真に受けて目を丸くした。

「ほんとだよ、この胸のつぎはぎが証拠なんだ。でも見てみ、クマさん笑ってるだろ？」

クマ太はニコニコマークのような口で、にーと笑っていた。

「辛いことや痛いことはな、ずーとは続かない。日にち薬だからな」

「日にち薬？」

「そうだぞ。他の苦い薬も飲まなきゃならないこともあるだろうがな、実は一番効く薬は時間なんだ。なんでも治してしまう万能薬なんだからな」

「ふうん」

「だから、瑞樹はなんにも心配なくていいんだ、このクマさんみたいに、にーって笑える日まで頑張ろな」

瑞樹は大きく頷いて、クマ太を抱きしめた。

ベッドの上に寝転がってクマ太をしげしげと見つめていた瑞樹は、いつの間にか眠ってしまったらしい。なんだか懐かしい夢を見てい

たみたいだ。目覚めて部屋の中を見回す。

あれ？ 私、どこにいるんだっけ？ とぼんやり思ってから、あ、と意識が戻って来た。移動するだけでもやはり疲れは溜まるみたいだと瑞樹は苦笑いして、ふと見やったドアの隙間に白い紙片が差し込まれていることに気づいた。

「あらら」

正樹ちゃんが寄ってくれたのに気がつかなかったみたいだと目を擦りながら紙片を取りに行った。紙片には少し慣れない感じの日本語でメッセージが書かれていた。正樹の筆跡とは違うようだ。でも日本語書ける人って……トウキだろうか、瑞樹は首を捻る。

「273号室にきてください。ノックはせずにスキヤナに手をかざしてそのまま入って来るように」

と紙片には書いてあった。瑞樹は紙片をひっくり返してみたが、誰からのメッセージなのか書いていなかった。

「正樹ちゃんのかな？」

瑞樹はまだ少しぼんやりした頭を軽く振ると斜め向かいの273号室へと向かった。

273号室のスキヤナに手をかざし、瑞樹が中に入るとカナメが立っていた。瑞樹が入って来る事を知っていたかのように優しい笑顔で立っていた。

「カナメ？……」

瑞樹はその紅い瞳に吸い寄せられるように真直ぐにカナメに向かって歩いて行った。

「久しぶりだね、瑞樹。元気だった？」

カナメが手を差し出した。

ハルの挨拶はどちらかと言うと欧米系で、握手か、もっと親しい間柄であれば抱擁をする。しかし頬をくっつけあったり、キスを交わしたり、とかはあまりしない。瑞樹はそれらの知識をデイモルフ

オセカ・オーランティアカの記憶で知っていた。

瑞樹はカナメの前まで行くと、差し出された手を無視して、ふわりとカナメを抱きしめた。

「……瑞樹……」

カナメの声は困惑しているようでもあり、愛おしいと思っているようでもあり、複雑な声色に瑞樹がはっと我に返る。当惑したように見上げた瑞樹の顔をカナメは覗き込んで、そっと額にキスをした。瑞樹は自分の立場を思い知らされたようで泣きそうな気分になる。

ディモルフオセカならば、カナメは口づけをしたはずだった。

「ごめんなさい……」

当惑して体を離そうとした瑞樹をカナメが抱きしめた。

「あのー、お取り込み中申し訳ないんだけど」

咳払いと共に正樹の声がした。

「おたくら、そう言う挨拶を交わす間柄なんか？」

正樹は少し無然としているようだった。

「！」

瑞樹は心底驚いた。正樹ちゃん？

「そんなに怒らないでくれよ。たぶん瑞樹はディモルフオセカの記憶に引きずられてしまったただけだろうからね」

カナメは瑞樹を腕に抱きしめたまま、正樹に流暢な日本語で話しかけた。

「別に怒ってないよ、ディモルフオセカって？」

正樹は顔をしかめた。

「彼には話してないの？ 君の中のディモルフオセカのこと」

カナメは瑞樹に問いかける。

「……話してない。だってハルの話はどんなのでも、誰も本気で聞いてくれなかったもん」

すっかりしよげかえって、瑞樹は叱られた子供のようにしよんぼ

りとしていた。

「ずいぶん辛い思いをさせてしまったようだね」
カナメは、いたわるように瑞樹の頭を撫でた。

正樹ちゃんがいるとは思わなかった。正樹ちゃんに見られたから、どうこういうことでもないけど、心の中の柔らかい部分をやすりで触れられたみたいに妙にヒリヒリ感じる。

「……瑞樹？」

瑞樹は、カナメが自分を何度も呼んでいることにやっと気づいて、のろのろと顔を上げる。

「着いた早々イベリスの所に行ってもらってありがとう。彼はどうだった？」

「……しゃべれるようになってた」

瑞樹はカナメから目を逸らして話した。

「なってたんじゃないかって、なったんだよね」

カナメは瑞樹を見つめる。

「……」

瑞樹はカナメを見つめ返した。

「君はイベリスに何をした？」

「何もしてないよ、ただ……怪我をした手先が、血行悪そうだったから、擦ってたら突然しゃべりかけて来たから、私、てっきりしゃべれるようになってたんだって、思ってた……」

瑞樹の言葉を聞きながらカナメは何度か小さく頷いた。

「どっちの手で彼に触れたの？」

「どっちって……」 瑞樹はしばらく思い出してから「両手だよ、左手で支えて右手で擦ったと思うけど、それがどうかした？」

「いや、いいんだ。それだけ聞ければ十分だ」

「ねえ、イベリスをこんな目に合わせた人はまだ捕まってないの？
なんで？」

「今、ハルの人口は一千万人弱だ。こことアグニとセレーネそれか

ら金星のフローティングシティに作業中の人が少々。範囲が広すぎるのが問題その一だ。問題その二はメインコンピューターがプランEを強制終了したことだ。それによって目覚めさせられる人の選別がなされないうちに、ほとんどの人が勝手に目覚めさせられてしまった。もちろん、目覚めさせられる条件をクリアしている人だけのはずだったんだけど……どうやら、違法にその条件をクリアしている人がいたらしくてね」

「違法に……」

違法と言えば、デイモルフオセカだって違法に地下都市に潜伏していたのだ。森の民は地下都市に住めない、当然、カナメの配偶者になれるはずもなく、デイモルフオセカはそのことを漠然としか知らなかったけど、今ならわかる。やり方や、目的は違うかもしれないが、カナメと同じことをしようと考えた人は当時、結構いたんじゃないだろうか。

「それで、遅ればせながらそのチェックを一人ずつしているんだ。そこで君にチェック済みの印を押させてほしいんだけど……。前にナンディーで確認済だからね。それにこれには君に関する色々な情報も書き込まれているから、ハル共和国内では身分証の代わりにもなる」

カナメは銀色のトレーにBCG接種の時に使うようなスタンプ式の医療器具を持ってきた。

「ま、まさか、それ私にするんじゃないよねえ」

瑞樹が怯えたように見つめた。

銀色のトレーに乗っている医療器具というものは、大抵の場合痛みを与えることが多い。瑞樹はそれを経験的に知っていて、大の苦手なのだった。

「俺もされたぞ」

正樹ちゃんが突然ハル語をしゃべった。

「正樹ちゃん……もうハル語をしゃべれるの？」

「誰かさんに特訓されたからな、飛行機に乗った時から」

正樹はカナメを軽く睨みつけた。

「向こうのベッドに横になってもらおうかな、その方がやりやすい。足の脛側にするから」

そう言い残すとカナメはさっさと奥のベッドルームに向かう。瑞樹は呆然と正樹を見上げた。

「拒否権はないの？」

「なさそうだったぜ」

正樹が肩を竦めた。

「痛いんだよね？」

絶望的な顔で訊く。

「……それほどじゃないよ」

瑞樹の目から視線を逸らして正樹が言ったので、それは嘘だとすぐにわかった。

「正樹、瑞樹を連れて来てくれる？」

つぎの隣の部屋からカナメの声がした。正樹はしょうがないなという顔で瑞樹の手首を引っ張った。

「いやだ、こんなの聞いてないし……」

予防接種に連れて行かれる犬のように、瑞樹はずるずると正樹に引きずられた。

「いやだってば！ 私、日本に帰るよ！」

正樹は足を突っ張って抵抗する瑞樹を呆れた顔で見つめた。

「お前なあ、子供じゃあるまいし、そこまで抵抗するか、ふつー。しかも子供のころから散々手術とかで痛い目にあってきたはずなのに、まだ慣れないのか？」

「正樹ちゃんには知らないかもしれないけどね、毎回、私がどんだけ時間かけて心の準備してか

ら病院に行ってたと思ってるの？ 最低三日だよ！ こんな不意打ち卑怯だああ！」

「威張るなよそんなこと……」

正樹は心底あきれた様子で溜息をつく、瑞樹をふわりと抱え上げた。瑞樹は逆さまになって正樹の背中を見ることになる。

「ち、ちよお、降ろしてよ、いやだって言ってるじゃん、正樹ちゃん、馬鹿！ タコ！ おたんこなす！」

瑞樹が足をじたばたさせると正樹は舌打ちして、それを押さえつけた。

「往生際が悪いやつだな」

カナメのところまで連れて行くと、カナメは苦笑していた。

「ここまで嫌がられるとは思ってなかったな」

「さっさと終わらせよう」

正樹は瑞樹をベッドに下ろすと、瑞樹の上半身を抑えつけた。

「正樹ちゃん、最低……」

涙が滲んでくる。

「最低で結構だ」

勝手知ったる幼馴染は容赦ない。

「正樹ちゃん、お願い、離して……」

急に弱弱しい声で見上げる瑞樹の潤んだ瞳に、正樹がはっとして手を離しそうになったところで、カナメの声がした。

「離すなよ！」

釘を刺すような言い方に正樹は我に返って、瑞樹をもう一度抑えなおした。

「カナメ、最低！」

再び悪態をつき始めた次の瞬間、足の脛に衝撃が走った。

「痛っっっ！」

瑞樹は口もきけないくらいの痛みに顔を歪めた。強い痛みと共に意識が薄れて行く。なんで？ と思った瞬間、瑞樹は意識を失った。

「おい？ 瑞樹？」

すっかり抵抗しなくなった瑞樹に正樹は慌てた。

「痛いのが苦手みたいだったから、少し眠らせることにしたよ」

カナメが静かに言った。

「俺の時はばっちり小一時間痛みを我慢させたくせに？」

正樹はカナメを恨めしそうに見つめた。

「君はすることがあったから、痛みを感じている暇なかっただろ？」
楽しげに言うカナメをねめつけてから、正樹は眠ってしまった瑞樹の顔にかかる栗色の髪の毛をそつとよけた。そしてその頭をくしゃくしゃと撫でる。

「君がいてくれて良かった。ここまで抵抗されたら、僕だけでどうしたらいいか途方に暮れるところだったよ」

カナメは微笑んだ。

「あんた医者じゃなさそうだけど、こんな医療行為をして大丈夫なのか？」

「医者はやってないけど、医師免許は持ってるよ。他にも色々免許を持つてる。長いこと生きてるとすることがなくなって、つまらなくなるもんでね、色々手を出しちゃうんだ」

「長いこと生きてるってあんた一体いくつだよ」

正樹から見たカナメは二十代後半〜三十代前半ぐらいに見える。

「厳密にはいくつかもう覚えてないよ。三百から四百の間くらいじゃないかな……たぶん」

「俺、歳を聞いたんだけど？　なんだ？　その数字……血圧にしても高すぎないか？」

「僕も歳を言っただもりだよ」

カナメは小さく笑って肩をすくめる。正樹は怪訝そうな顔をして首を傾げた。

「で？　ディモルフオセカって誰？　あんたとああいいう風に抱き合う仲だったんか？」

正樹はカナメを睨みつける。

「そりゃ、まあ、そういう仲だろうね、僕の配偶者だったから」

「え？」

配偶者？　しかも過去形だ。正樹は絶句する。

「死んだんだ……ハル脱出の時に、ガルダでね」

第三話 それぞれの心に刻まれた風紋(2)

正樹は瑞樹と別れて入国手続きを済ませた後、緑目トウキに273号室へ案内された。中には機内で見た大脳コンタクトに出てきた紅い瞳の人物が待っていた。

「初めまして、僕がカナメ・P・グラブラだ」

その人は右を差し出す。

「初めまして、マサキ・カイヅカです」

ほぼ完璧なハル語で答えると、正樹はカナメの右手を軽く掴んだ。「その様子だと、僕が渡してもらった大脳コンタクトの情報をすべて聞いてくれたようだね」

カナメは嬉しそうに言った。

その部屋で、正樹はハル共和国でのシステムの説明を受けた。正確に言えば、それぞれのエリア説明、法律、マナー、そして、さまざまな設備の使い方に至るまで、事細かに大脳コンタクトでインプットされたのだ。まるで自分がパソコンになって頭がそれを記録するハードウェアになったみたいだった。次々とソフトウェアがインストールされていく感じ。情報の氾濫、その中でアップアップする自分……。そんなイメージがびったりだった。

実際、瑞樹が部屋へやって来た時はホッとしたのだ、機械になってしまった脳みそが人間に戻ったような気がしたから。嬉しいと感じたのは最初だけ、そう、二人が抱き合うまでの短い間だった。

正樹は複雑な気持ちでカナメを見つめる。こいつの配偶者の記憶を瑞樹が持ってるって、それって……。こいつにとって瑞樹はどんな位置にいるんだろうか。

正樹はさっきまでのカナメとのやりとりを思い出す。

大脳コンタクトには、記憶映像を見せるだけではなく、映像を記憶させる定着モードがあるのだとカナメは説明した。ただ、ある程度の予備知識がないと、必要以上に定着に時間がかかるし、大脳の疲れ方も倍以上になるらしかった。

正樹は機内で聞いた情報で、ある程度頭が慣れていたらしく、ハル語の単語や熟語や文法などは定着モードで難なく定着させることができた。それでも脳の疲労は凄まじく、一時間も定着させたところで眩暈がしたので休憩を申し出た。カナメは快く承知したが、その顔はなんだか楽しそうだ。

「なんか、俺楽しいこと言いましたか？」

怪訝そうな顔をして正樹はカナメに問いかける。

「いや、僕、楽しそうに見えた？」

「見えますよ」

正樹は無然と答える。

「そっか、君にはいずればれることだろうから、言っておこうかな」
カナメは悪戯っぽく笑むと続けた。

「君にそっくりなイブキってハル人の事を聞いたことがあるかな」
正樹は頷く。

初めてアーマルターシュとニシキギにあった時にも言われたし、この部屋に来るまでも、すれ違った何人かが呆然と自分を見ながら『イブキさん？』と口走ったこともあった。

「彼は僕の友達だった、幼馴染と言ってもいいかな、君たちみたいなね」

カナメは優しい瞳で瑞樹を見下ろした。

「イブキは僕と正反対の性格で、面倒見がよくて兄貴肌で……実際兄貴だったんだ。妹がいた。何もかも君とそっくりだ」

カナメは小さく笑んだ。

「最初イブキと出会った時、嫌なやつだと思ったよ。あいつは僕が

欲しくても手に入らなかったものをたくさん持っていたから。そんな風に僕が思っていることも知らずに、あいつは持前の人の良さで僕の世話を焼いた。僕が楽しんで分解しているものを壊してしまっただと思いきりで、こっそり組み立てなおしていたり、学校の先生をわざと怒らせようと仕組んでいた悪戯をいつの間にか解除していたりね。あいつにとっては親切のつもりだったみたいだけど、僕にとっては迷惑なお節介だった。当然の結果として、イブキは優等生で、僕は問題児だった」

カナメは楽しそうに正樹を見つめた。

「そんな僕たちが友達になったのはハルの最後の地上、アール・ダー村に行った時のことだ。懐かしいな。今でもアール・ダーに行った時のことは鮮明に覚えている。苦手な相手が親友になったり、好きだと思っていた相手を憎むようになったり、人ってよく分からないよね」

カナメは少し哀しそうに笑った。

「イブキは脱出した六隻の船のうちガルダという船に乗っていたんだが、ガルダは脱出直後に行方不明になった。それ以来イブキとは連絡がとれていない。実は、君があんまりイブキに似ているもんだから、一部のハル人はガルダが地球に着いていたんじゃないかって考え始めているんだ」

正樹はなんと返事をしたらいいか戸惑った。

「そこまではわかったけど、あんたが楽しそうにしてるのは俺が弱音を吐いたり、間違ったりしている時のような気がするんだけど、それは気のせい？」

「さすがだね。そのとおりだよ」

「……」

正樹は府に落ちない顔をする。

「考えてもみろよ、あのイブキが困ってたり、弱ってたり、ミスってたりしたら、ざまーみろって思うだろ？」

「性格悪っ！」

正樹は眉間に皺を寄せる。

「冗談だよ。でも、それくらいパーフェクトなやつだったんだ。憎らしいくらいにね。イブキに似ている君が弱音を吐いてくれると人間らしくてほっとするんだ」

そう言っただけカナメは破顔した。

それがカナメの中にある俺の立場らしかった。じゃあ、瑞樹は？

「ガルダで死んだって……なんで？ ナンディーと一緒に乗ってたんじゃないのか？ 配偶者だったんだろ？」

瑞樹を一人ベッドルームに残してリビングに引き上げてから、正樹はカナメに問いかけた。

「ああ、乗ってたよ。でも彼女はガルダへ救援に向かった。彼女の守りたかったものを守りにね」

哀しそうな顔でカナメは言う。

「それで、なんで瑞樹に彼女の記憶があるんだ？」

正樹の質問にカナメは大きく溜息をついた。

「君は……恐らく信じないと思う。信じない人には話したくない」

「信じるかどうかあんたに決められたくはないな。まあ、もつとも、あんたが話さないんなら、瑞樹に聞くまでけどね」

正樹はカナメを睨みつける。

「……」

カナメは何かを計測するように、しばらく正樹を見つめていたが、諦めたように言葉を投げだした。

「瑞樹の中にディモルフォセカの人格がいたんだ。瑞樹はナンディーで病状が悪化して死んだ。その時に分解再生して治療をした。そうしたらディモルフォセカの人格が出てきた」

「まさか……まさか、見た目も、そのディモルフォセカそっくりって訳じゃないよな」

「そのとおりだよ」

「そんな……それって、あんたの陰謀じゃないのか？ そうなったんじゃないかって、そうしたかったからそうしたんじゃないのか？」

正樹はカナメに詰め寄る。

「それは断じて違うよ。腫瘍ができやすい体質を改善する為に、確かに少々遺伝子はいじった。だけど、腫瘍を抑制できるタンパク質を造りだせるようにする、それくらいの変更だ。あんなに面変わりするはずじゃなかった。記憶だってそうだ。確かにこのメインコンピュータにはデイムの記憶が記録されているけど、彼女は再生する為の条件をあらゆる点でクリアしていない。なぜなら彼女は森の民タイプオリジンだったんだ。再生は不可能だ。再生される条件はさっき大脳コンタクトで君にもインプットされているだろう？ 彼女の記憶が瑞樹に入り込むはずがないんだ。しかも、瑞樹が持っている記憶はデイムがガルダで死ぬ直前までである。それはこのメインコンピュータにも記録されていない」

正樹は信じられないと首を振る。

「だから、君は信じないと言ったんだ」

カナメは傷ついたように呟いた。

「……ごめん、逆の立場で俺だったらどうしてたかって考えてた。俺なら、恐らく瑞樹を再生するだろうと思ってしまったんだ。だから……悪かったよ疑って」

しばらくの沈黙の後、正樹は一つ一つ言葉を選ぶようにそう言った。

カナメはふと視線を正樹に合わせる。

そうだった。彼はあの黒目がちだった元の瑞樹の面影を失ってしまったんだと思い当たる。幼馴染……その言葉だけで二人の関係を推し量ることは不可能だろうが、特別な思い入れがあることは想像に難くない。その上、そう言う状況下で瑞樹を再生したいと彼が考えるならば、彼の気持ちもまた明確だ。カナメは自分でも説明がでない感情が込み上げてくるのをぐっと抑えて言った。

「否、謝るべきなのは僕の方だったようだ。瑞樹の姿をあんなに変えてしまった。申し訳なかった」

この感情は嫉妬だろうか……。カナメは心の中で自問する。

「……仕方がなかったと言えば、そうなんだろう。俺が言っていることじゃないかもしれないけどな。あいつは、そう言う運命だったんだろうと思う。本当は助からないって言われていたらしいからな」

無理やり自分を納得させるように正樹は言葉を紡いだ。

第三話 それぞれの心に刻まれた風紋(3)

瑞樹が目覚めた時、隣の部屋から人の話し声が聞こえてきた。

足の脛に、まだ少し鈍い痛みが残っている。ベッドから降りて隣の部屋へ、少し足を引きずりながら向かう。隣の部屋には人が集まっているらしい。話し声が聞こえた。

「所詮、トウキはアンドロイドだ。万が一瑞樹と一緒に事件に巻き込まれてしまえば、彼は自分が持っている情報を守ることしかできなくなる可能性が高い。だから君にも頼んでいる」

カナメの声だ。

「じゃあ、訊くがな、俺達が瑞樹と一緒に事件に巻き込まれた場合、情報は搾取されないのか？」

ニシキギの声がした。

「されるだろうね」

カナメの投遣りな言葉が響く。

「だけど、生身の人間に危害を加えたら重罪だ、そこがアンドロイドとは違う」

「人間の盾になれと言うことか？」

「俺が瑞樹の面倒は見るよ。彼を巻き込む必要はない」

正樹の声がした。

「俺はその役目が嫌だと言ってる訳じゃないぜ。ただ最悪の事態になった時に、自分がどう動けばいいのか確認をしているだけだ」

ニシキギの無然とした声が響く。

「森の民は彼女の力を欲しがっているだけだ。もし瑞樹が連れ去られるとしたら、エリアEの近くにいるはずなんだ。探し出すことはそれほど難しいことではないと思う。問題は森の民のバックに誰がいるかだ。そして事件解決の難易度は、森の民がどれほどのイニシアティブを握っているかに依ってくる。現在存在するエリアEは三

か所、こことアグニシティとセレーネシティだ。金星のエリアEはまだ始動していない。万が一の時に必要になるのは場所の特定だ。盾になる必要はない、やつらは彼女には危害を加えないはずだから。そんなことをしたら連れていく意味がないからね。やるべきことは自身の安全の確保と場所を特定して連絡を取る事だ」

「了解した」

ニシキギが明快に返事をした。

「あの……森の民が関わってるって、どういうこと？」

瑞樹の声に、三人が一斉に瑞樹を注目する。

「……瑞樹、起こしちゃったかな」

カナメが微笑んだ。

「トウキは情報を守るために何をするの？」

瑞樹の瞳が不安を湛えてカナメを見つめる。

「瑞樹……詳しいことは後で君にも説明するよ。だから心配しないで。もう少しそっちの部屋で待っていてもらえるかな？」

言い方は丁寧だが、カナメの言葉には有無を言わせぬ強さがあって、瑞樹はうろたえる。少し傷ついたように目を潤ませてから部屋へ引っ込んだ。

ベッドの上に腰かけて瑞樹は考えを巡らす。森の民が私を連れ去るって、誘拐しようとしてるってことなんだろうか。何の為に？

森の民のことはディモルフオセカの記憶で知っている。例えば小規模な学校のクラスの中でさえ、気の合う人も合わない人も、善良な人もそうでない人もいるように、当然森の民の中にも、誘拐しようとする人が全くないと言えないことは分かっている。でも、そうする理由と、その対象が自分だと皆が考えている理由が、瑞樹にはさっぱりわからない。

でも皆が考えていることが当たっているのなら、もしかしたらイベリスは自分のせいであんな目に遭ったのではないだろうか。そんなことを考えているとドアをノックする音がした。

「入るぞ」

入って来たのはニシキギだった。

「話し合いは終わったの？」

「ああ」

「ねえ、なんで森の民が私を誘拐しようって思うの？」

ストレートな瑞樹の質問にニシキギは苦笑した。

「そう言う事をごちゃごちゃと考えてましたって顔してるな。下手の考え休むに似たりって言葉を知ってるか？」

ニシキギは至極真面目な顔でそう言った。

そんな言葉を吐くときは、トウキだって、もうちょつと柔らかい表情を作るくらいのが配りをするだろう。訊く人を間違えたと瑞樹は心の中で舌打ちする。

「この前アーマルターシュに、弱い犬ほど良く吠えるって言葉知ってるかと言ったら、今のあんたと同じような顔をして、そんなことを言う時はトウキでさえもって人間味のある顔で言うて咬みつかれたな」

ニシキギの言葉に瑞樹は、つい吹き出してしまう。

「アーマルターシュと同じこと考えてたよ」

瑞樹は笑いながら言った。

「やつと笑ったな」

ニシキギは瑞樹の頭をくしゃつと撫でて、「よく来たな」と言った。そして温かみのある顔で一瞬笑った。そんなニシキギを見上げながら、瑞樹はニシキギの弟のシーカスを思い出していた。

ニシキギの家族は森の民だった。ニシキギは森の民の力が無かったため地下都市で暮らしていたようだが、彼には三つ違いの弟がいて、彼はアール・ダー村で暮らしていた。森の民だったディモルフ

オセカは、弟のシーカスのことをよく知っていた。ニシキギの性格はシーカスとは全然似ていないが顔は良く似ている。デイモルフオセカはアール・ダー村でシーカスの事をお兄さんのように慕っていた。ハンサムで、面倒見が良くて、優しい、とくれば大抵の女の子はそんな彼を放っておかない。彼には素敵な恋人もいたが、彼に憧れる人はたくさんいた。デイモルフオセカもその中の一人だったのだ、シーカスとの結婚が政府と親に決められてしまうまでは……。

デイモルフオセカはシーカスのことが嫌いでアール・ダー村を飛び出したわけではなかった。むしろ逆だった。彼女が法を犯してまで地下都市に逃げ出した理由の一つは、シーカスとその恋人の為だったのだ。あの兄のようだったシーカスに一瞬、ニシキギが重なる。「俺の顔に何か付いてるか？」

ニシキギが怪訝そうに訊く。瑞樹ははっと我に返った。

デイモルフオセカの記憶を辿っていると、自分が誰なのかよく分からなくなる。まるで今のデイモルフオセカの記憶の中で、かつてシーカスとにこやかに話していたのが自分だったような気がするからだ。瑞樹は首を軽く横に振った。

「ごめん、何でもないよ」

「本当か？　なんか誤魔化そうと考えているだろう？」

ニシキギは疑り深そうな顔で瑞樹の瞳を覗き込む。この人は結構勘が鋭い、瑞樹は溜息をつくと観念したように言った。

「今、ニシキギの顔を見てたら、シーカスの事を思い出したんだよ」

「シーカスの？」

ニシキギは怪訝そうに問い返す。

「うん、思ってたよりも、似てるかなあと思って……」

「シーカスは俺に似てハンサムだからな」

はいはいと瑞樹は受け流す。

真顔でゆーか？　そーゆーこと。瑞樹は苦笑した。

「で？　シーカスの事って？」

「顔は似てるのに性格は全然似てないなーって」

瑞樹はニヤリと笑う。

「あいつは猫かぶりで八方美人だったからな。似てなくてとーぜんだ」

ニシキギは涼しげな顔でそう言った。

ニシキギも少しは猫かぶりなよと心の中で呟いて、瑞樹は力なく笑う。

「……あんたディモルフオセカの記憶と、どんな風に折り合いを付けてるんだ？」

ニシキギが興味津々と言った風情で訊いてきた。

「折り合いなんて付けてないよ。そんな付け方があるんなら教えて欲しいくらいだし。ディモルフオセカの記憶に振り回されてるってところが実情かな」

「それは大変そうだな」

「そ、メチャメチャ大変なの」

実際、私は日向瑞樹で良かったと思う。ディモルフオセカの記憶は辛い選択の連続だ。どちらを選んでも辛い。だから彼女は最終的には自分のやりたいように生きられる潔い性格になったのかもしれない。『作用反作用』そんな言葉が唐突に頭に浮かぶ。他から力を加えられた時点で、自分も他に力を加える力を得ているのだ。圧力を加えられて彼女は強くなった、運命の輪を自分で回す力を獲得する程に。

「そんなだから、あんなイベリスを見てなんとかしなきゃと思った、そういったところか？」

ニシキギが納得したように頷いた。

そうなのかもしれないと瑞樹も思う。瑞樹にはシーカスと同様にイベリスのアール・ダー村での記憶もあるのだ。彼は近所の年下の男の子で、ディモルフオセカは彼とも、そして彼の父親を誤って殺めてしまった彼の母親とも接点があった。母親とはフォボス行きの軌道エレベーターの中で会った。彼女は幼い息子を一人ぼっちにし

てしまったことを後悔していた。後悔して、泣いていた。

「私はイベリスの力になりたいって思ってるよ」

瑞樹はニシキギを見上げた。

「詳しいことは、後でカナメが話すと言っていただろう？ あんたは色々ごちゃごちゃ考えずに言われたことをやっていればいい。基本的には、あんたはここに来て安全に過ごすことが役目なんだからな」

「それだけ？ それだけしか私にはすることないの？」

気が抜けたように瑞樹は訊き返した。

「何をするつもりで来たんだ？」

ニシキギは眉間に皺を寄せて問い返す。

「やっぱ……私の名推理で事件解決ってどこ？」

息巻く瑞樹を馬鹿にしたように見下ろして、ニシキギは溜息をついた。

「あんまり馬鹿なこと考えてないで大人しくしてろ。わかったか？ ああ、そうだカナメが向こうの部屋へ来てくれって言ってたぞ」
そう言い残すとニシキギは部屋を出て行った。

「……それを早く言えって。最初からカナメに訊けば良かったって事じゃん」

仕方なく瑞樹はドアに文句を言った。

第三話 それぞれの心に刻まれた風紋(4)

カナメに言われたことは以下の通りだった。

- (1) 一人でハル共和国を歩き回らない。コール0で誰かに付いてきてもらうようにすること
- (2) 医療センターと第二エリアEに行く時は二人以上の護衛をつけること
- (3) 当然、ハル共和国内から勝手に出国しない
- (4) 自分の部屋または273号室以外から自宅に連絡をしない
- (5) 何か異常を感じたら273号室に逃げ込んで救援を待つこと
- (6) 部屋以外、特に人前で、仕事中のカナメに話しかけない

「なんでカナメに話しかけたらいけないの？」

瑞樹はちらりと正樹の背中を見つめてから質問した。

部屋には正樹もいたが、彼はさっきから部屋の隅の端末の前に座っていて、大脳コンタクトの器械を頭にはめて瑞樹を見ようともしない。

「僕と接点があると思われない方がいい。僕は次の議会の議長をすることになっていて、何かと目立つことが多い。議会が始まるのは一月後だ。今、君に注目を向けたくない」

「……」

瑞樹は絶句する。

議会の議長、それって……。絶句する瑞樹には気もとめず、カナメは続けた。

「正樹と違って、君はハル共和国では目立たないはずだから、それを最大限利用しよう。安全第一だ」

実際、黒髪のハル人はいない。一度でも分解再生の洗礼を受けると、色素が抜けて黒髪ではいられないのだ。黒髪の正樹はどうして

も人目を引いてしまう。

「安全第一って……」

工事現場じゃあるまいし……。瑞樹は心の中で溜息をつく。ビジネスライクのカナメは、ニシキギに輪をかけたように雰囲気は冷徹で表情が薄い。

「第二エリアEって何ですか？」

なんとなく言葉が改まってしまう。議長って……。カナメと自分の間の距離を感じてしまう。

「現在、地球の地下都市でだけエリアEが分裂している。第一エリアEはファームの民が管理していて、第二エリアEは森の民が管理している」

カナメは小さく溜息をついた。

「彼らは今微妙に反目しあっていて、どちらがエリアEの守人に相応しいかを競っている。さっきは、第二エリアEに行く時は二人以上の護衛で言ったけど、第一に行く時もそうした方がいいかもしれない。君が力を持っていると知れば、彼らはあまりいい顔をしないと思うからね」

「コブやミントは、来てないんですか？」

「来ていない。今ミントは妊娠していて、コブは片時も離れないくらい心配している。あいつは祖父馬鹿だからな」

コブの名前が出てカナメの顔が少し和らぐ。

「えええー？ ミント、ママになるの？」

改まった言葉使いはあつという間に吹っ飛んだ。

「そうだけど？」

カナメは怪訝そうに首を傾げた。

「ミントって、私と同じくらいの年だね。早っ！ ……くないですか？」

「だって、もう十九だろ？ 普通だと思うけど」

それを聞いて瑞樹は眩暈を覚えた。

そうか、そうだった。デイモルフォセカが結婚させられそうにな

ったのだって、それよりは何歳か下くらいの時だったのだ。恐るべし、ハル政府。てゆーか、世界的に見たら、日本が晩婚化が進んでいて変なのかなと思ひ当たる。

あれ？ 突然湧き上がる喪失感。私、何か大事なことを忘れてないだろうか。ふと目線をあげてカナメの視線とぶつかる。

「どうかした？」

「ううん、なんでもない……」

カナメには否定したけど、とても強い不安を感じる。きっと忘れろと悪い事が起こるからだと思感する。ソーマ……心の中にキーワードのように浮かび上がる。でもそれがどうしたというのか、瑞樹には説明できない、だから口を噤んだ。

「私は、普段は何をしていたらいいんですか？ あれはするなこれはするなってのは分かったけど、これじゃ、何をしてればいいのかさっぱり分からないよ？」

「君は高校生なんだよね。だったらすることは一つだろ？」

「高校生がすること……」

高校に行くこと、これは無理だ。友達としゃべること、これも無理っぽい。ミントがいてくれてたら良かったんだけど。学校帰りに寄り道すること、不可能だ。ショッピング……ハル共和国には店自体がなさそうだ。必要なものは何でも再生装置で手に入れられる。食べ物でも服でも本でも……。考えたら、楽しみの無い国だよなあ。楽しみと言えば……。

「昼寝？」

瑞樹の間抜けた答えに、カナメはがっくりと項垂れた。

「瑞樹……勉強を忘れてるよ」

「ああ、そう言うのがあったよね」

努めて考えないようにしていた項目だ。

「ここのも使えるけど、君の部屋の端末も勉強に使えるようにしている。数学、化学、物理、生物、歴史、地理……君が高校で習う程

度のものは、すべて学べるように設定している。アーマルターシュが調整してくれたからね」

「アーマルターシュが……」

瑞樹は呻いた。一年前、ナンディーから帰して貰うときアーマルターシュが地球まで送ってくれた。その間、地球上にある国の地理や政治をみっちり叩き込まれた。お陰で地理と政治のテストは楽勝だったけど……。

「それって大脳コンタクトで、勉強するってことなんだよねえ」

あれは疲れるのだ。脳味噌が筋肉痛……脳に筋肉はないらしいけど、らしきものになるのだ。

「君のペースでやればいいから」

カナメは心得たように微笑んだ。

第四話 冴えた緑陰の下での胎動（1）（前書き）

「はハル語、□は日本語の設定になっています

第四話 冴えた緑陰の下での胎動（1）

二週間が何事も無く無事に過ぎた。

イベリスの所には二日おきくらいにお見舞いに行っているけど、最初に行った時のような劇的な変化は見られなかった。二人以上を伴う必要があると言われているので、イベリスのお見舞いにも付き合わせた後で、エリアEにも行って欲しいと、瑞樹はなかなか言い出せないでいた。ニシキギは忙しそうだし、正樹ちゃんもなんだかいつも大脳コンタクトで端末に張り付いているし……。頼みにくいのだ。カナメやアーマルターシュに至っては、その姿さえほとんど見かけない。

忙しいんだろうな。議長……だもんね。

トウキがいつもは一緒にいてくれるので、娯楽施設が入っているエリアへは何度か連れて行ってもらった。娯楽施設といっても、体を鍛えるためのフィットネス施設みたいところで、黙々と一人で体を鍛えることが好きな人には向いているのかもしれないが、瑞樹には向いていなかった。

唯一、大脳コンタクトを使ってできるハイキングは気に入って、いくつかコースを歩いたり、雪山スキーをしたりしたが、トウキは人間用の大脳コンタクトに侵入できないらしく、一人でするハイキングは、より孤独を感じる結果になってしまうのだった。

「はぁ、私、ここで何をしてるんだろ」

自然と溜息が出てしまう。今頃、パパやママは何をしているだろうか。今年は誰がクリスマスツリーを出したんだろうか。クリスマスはすつとばされて、お正月準備をしているかもしれないなと思う。赤道に近いここでは新年を迎えるという気分にはならないが、そう言う時節なのだと思ふと気づく。

「瑞樹、部屋へ戻りますか？」

トウキが訊いてきた。

「外の空気が吸いたいな。外へ出たら駄目なのかな。カナメには何も言われてないと思うんだけど」

瑞樹の言葉に、トウキはしばらく思案顔で確認していたが、

「確かに、それは禁止されていませんね」と答えた。

「行ってもいいの？」

少し気分が上向きになって来る。

開放的な空間が恋しいのだと瑞樹はふと気付いた。そして、瑞樹たち地球人が、開放的な空間……水平線や山の稜線や限りなく広がる空に浮かぶ雲を見た時に感じるような開放感を、ハルの人たちは同じように感じられるのだろうかと疑問に思う。そんな中にいると逆に心細くなったり、不安で滅入ったりしてしまうのだろうか。そんな時には地下都市の、まるで母の胎内にいるような安らぎを求めて、あの閉鎖された空間を恋しく思うのだろうか。

アール・ダーで暮らしていた森の民はどうだろうか。デイモルフオセカの記憶を探る。アール・ダー村にさえ、地球の風景ほどの開放された景色はなかったのだと思い当たる。

ハル人と地球人の違い。他にも、たくさんあるに違いない。たくさん人の溝を埋められる日は来るのかと考えて、また少し気分が盛り下がった。

地上に出るのは入る時よりもずっと簡単だ。遊園地の出口によくあるような不可逆性のゲートのバーを押して出て行くだけだ。二週間ぶりの外はやけに眩しくて、扉を開けて出たとたん目が眩んでよろけてしまった。

「瑞樹、サングラスを」

トウキにサングラスをかけるように注意される。

「日差しが凄く強いねえ」
あらかじ

予め遮光服は着ていたので問題はなかったが、サングラスを頭に上げたまま忘れていた。

この国の日差しは強くて、日本の真夏の光に似ている。目的が定まった時の子供の視線みたいだ。押しが強くて、有無を言わせない……。痛いほどのその強さ。その強い日差しを、和らげているのが海から吹く爽やかな風だ。爽やかな風と強い光。

この国を取り巻いている空気は、性質たちの悪い詐欺師みたいだ。その爽やかさに騙されて、うかつに光の中に出ようものなら痛い目にあう。

「日本よりも、ずっと赤道に近いですからね。ハル人だと直接太陽を見て視力を失う危険があります」

トウキが恐ろしい事をさらりと言った。サングラスを掛けると眩しい日差しは和らぐが、残念なことに青い空が青くなくなってしまう。

青い空を見上げたのは、いつのことだっただろうか。色素を失ってしまったと同時に、青空まで失ってしまった気がする。

* * *

「この男よ、見覚えある？」

アーマルターシュが指し示した写真の男は、褐色の瞳と青い瞳を持っていた。身長は180cm程、長身で痩せぎすだ。褐色の短い髪。色素定着は中程度か。それ程再生を繰り返しているようには見えない。分解再生をすると原因ははっきりしていないのだが、色素が抜けてしまう。カナメは、今でこそ銀色の髪に緋色の瞳になってしまったが、元々は黒髪に褐色の瞳を持っていた。

「いや知らないな。元々オッドアイ？」

「そうよ、元々はオッドアイなんだけど、時によってはブラウンアイにして変装するらしいわ」

「この男が黒幕って訳？」

「そうじゃないかって公安は考えてる。大腦コンタクトを利用することに長けているらしいの。最初は、別荘を買いにきた金持ちの外人だと思っていたらしいわ。ハンサビーチに別荘を購入しているの。どうやって手に入れたのかは知らないけれど、外貨で即金だったそうよ。公安の情報によると、そこに出入りする森の民が、たびたび見かけられているらしいわ」

「ハンサビーチか……ちょっと厄介だな。あそこは外貨獲得のお得意様ばかりだから、公安も大っぴらに動けないんだろう」

カナメは苦笑する。

「今からサンセットビーチに行ってみない？ 彼はハンサビーチに森の民が頻繁に出入りしていることを気づかれるのを恐れて、そっちでも活動しているらしいから」

「そうだね」

そう言うってから、カナメはふと、瑞樹にビーチに行くことを禁止していなかったことに気づいた。地下都市生活が長かったせいかなかなか地上にまで気が回らない。カナメは心の中で舌打ちする。

「正樹、瑞樹はどこにいるか知らないか？ さっきからトウキに連絡をとっているんだけど、応答がないんだ。自分の部屋にもいないようだし……」

273号室で大腦コンタクトをしている正樹にカナメが声をかける。

「トウキとエリアFに行くって言ってたけど……」

正樹が器具を取り外しながら、心配そうな顔をする。

「エリアFか」

イメージハイクの大腦コンタクトブースに入ってしまったえば、連絡がとれないかもしれない。

「俺、エリアFに行ってみようか？」

「そうだね、瑞樹にあつたら、しばらくビーチにも近寄らないように伝えてくれるかい？」

「ビーチで何かあつたんか？」

「G Aの拠点が、ハンサビーチにあるらしいという情報があつたんだ。ハンサだけでなくサンセットビーチも利用しているらしいから、どちらにも近寄らないようにと伝えてくれ」

「G A？」

正樹は怪訝そうに問い返した。

「今回イベリスの事件を起こした者たちのバックにいると思われている組織の呼名だ。G Aという記号を好んで使っているので、そう呼んでいる」

「へえ」

「じゃあ、頼んだ」

カナメは慌ただしく部屋を出て行った。

第四話 冴えた緑陰の下での胎動（2）

地上では、それぞれのビーチまでのタウンバスが運行されている。瑞樹はタウンバスに乗ることを希望したがトウキに却下された。誰が乗っているかわからないし、突然のハプニングに対応できないという理由だ。トウキが運転する電気自動車に乗り込む。

車は森の中を軽快に駆け抜けてゆく。時々右手に木々の切れ間からハンサビーチの砂浜が広がっているのが見えた。ゆるい風が少しだけ開けた窓から吹き込んでくるが、潮の匂いはあまりしない。この辺りの海は塩分濃度が高いため、逆に潮の匂いがしないのだとトウキが説明してくれた。

「風が気持ちいい」

ひとりでに声が出てしまう。トウキが隣で微笑む気配がする。

「地下都市は退屈ですか？」

「ん、そう言う訳じゃないんだけど……」

最初は大人しく大脳コンタクトで勉強していたが、三日でぐたぐたになった。だからと言って、他にすることもない。学校みんなは受験勉強してるのだろうか、そう思うと気ばかり焦ってしまう。しかし勉強したって受験できるかどうか知らないのだ。先の見えないトンネルの中にいるような気がしてしまう、先が見えないから早く出たいのだ、早く出たいから時間がなかなか進まない。たった二週間しかたっていないのにもう二か月もたったような気がしていた。

サンセットビーチは昼下がりを過ぎず人でかなり混んでいた。

「おねーさん、ビーチに行くならパラソル必要ね」

突然声をかけられた。かけて来たのは濃い茶色の肌にクリクリの

人懐こい柴犬みたいな黒い瞳。ちょっと太り気味で派手なアロハシヤツを着たおじさんだった。

「おねーさん、ハルの人ね。パラソルいるね。ここで買えるね」
たどたどしいハル語で話しかけてくる。にんまり笑った顔は育ち過ぎたちびくろサンボみたいだ。

「お金持っていないんだけど……」

瑞樹は困った様に微笑み返す。

「ハルの人クレジットでオーケーね。今確認するね」

サンボはレジの値段読み取り機のようなものを瑞樹の脚に向けた。
「まいどありね！」

サンボは青緑の地に白い花の絵が描かれたパラソルを瑞樹に渡した。

「へ？」

何それ？ 渡されたパラソルをさしたまま瑞樹はぼんやりと立ちつくす。

「瑞樹、行きましょう」

トウキが言った。

「お兄さんもパラソルいるね？」

そう言うサンボに

「僕は必要ないんだ、ありがとう」

トウキは、そう言うのと瑞樹の手を引っ張った。

「ここで働いている人は元々この島の原住民が多いんです。とても親切で世話を焼くのが大好きな人たちなんです。人柄をかって、地上では彼らを雇ってるんですよ」

トウキは微笑みながら説明してくれた。サンボが少し心配そうな顔をしているのを振り返って見ながら瑞樹は頷いた。

「ねえ、なんで脚でクレジットが払えたことになるの？」

「カナメがあなたに情報を書き込んだでしょう？」

「うん、あの、すっごく痛かったやつね」

「その時に身分証明書にもなると説明があったはずですが」

「そんなこと言ってたかな」

ほとんど無理やり書き込まれたから、カナメの説明はほとんど聞いてなかった。

「それを使えば自分のクレジットが使えるんです」

「なんで私がハルのクレジットを持ってるの？」

「何も聞いていないんですか？」

少し呆れたようにトウキが訊く。

「何もって何を？」

「今回、あなたは捜査協力の為にハルに雇われたことになっています。だからそれに応じたクレジットが支払われているのです。つまり給料が支払われている訳です」

「へええええ、知らなかった」

瑞樹は心底驚いた。給料もらって、一日何するわけなくぶらぶらしていいんだろうかと急に不安になる。

「いいんですよ。あなたはここに居て、安全に過ごすこと、それがあなたの仕事なんですから」

トウキは瑞樹の不安を読み取って穏やかに微笑んだ。

「ねえ、ちょっと待ってて」

瑞樹はトウキに言うのと、踵を返してサンボの方に走って行った。

「あの……もう一本パラソルもらえる？」

瑞樹がそう言うのとサンボは満面の笑みを湛えた。

「あのお兄さんのか？」

「うん。プレゼントするの」

瑞樹も満面の笑みを湛える。

サンボは青い生地白いイルカが描かれたパラソルを選んでくれた。

「はい！ これトウキの」

瑞樹はパラソルをトウキに渡す。

「私はいらないですよ？」

呆れた顔でトウキが言った。

「プレゼント。トウキはハル人そっくりなんだし、パラソル使っていないと不自然でしょ？ サンボも心配させなくて済むし。それに私、ずっとトウキにお礼したかったんだ。随分お世話になったからね。これからよろしくお願いします」

瑞樹は頭を下げる。やはりこういう場合は日本式の仕草が一番心情にあっている。

「ありがとうございます。承知しました」

トウキは少し驚いた顔をした後、笑顔で答えた。

「ところで、サンボとは？」

トウキは怪訝そうな顔をする。

「さっきのパラソル売りの人。勝手に名前つけちゃった。子供のころに読んだ童話に出て来る主人公に似てたから」

パラソルをさして浜辺を歩く。幾重にもズボンの裾を折り返して靴を脱ぎ捨てた。素足に白い砂が纏わり付く。

「裸足になっていると火傷をしますよ」

トウキが注意する。

「砂浜で靴はないでしょ？ すぐに戻るから」

そう言うのと波打ち際まで小走りで歩く。足の裏が熱くてゆっくり歩けないのだ。水に浸れば火傷もしないだろうと考えたのが甘かった。波打ち際に辿り着くまでに砂の熱で火傷しそうだ。水はひんやりしていて気持ちがいい。波が引くときに足裏の砂がさわさわと挟まれていく感触がくすぐったい。パラソルを持ち直して日差しを遮る。水平線は遥か遠く、青い空に真白な雲がによきによきと盛り上がっていた。

地球という水球の上にいる。

海に来て水平線を初めて見たときに思ったことだ。何度見ても思う。

ちっぽけな自分を痛いほど感じて、何故だかわからないけど、穏やかな気持ちになる。自分がした過ちなんで、実は大した事ないかもしれない。私が怒ってようが泣いてようが……例え……そう、死んだとしても、海はこうやって広がっているのだ、打ち寄せては引いているのだ。大丈夫。何事も大したことない……。

「瑞樹、そろそろ木陰に入ってください。足の甲が赤くなってきていますよ」

トウキに言われて足元を見てがっくりと項垂れる。

「あーあ、もうこんなに赤くなってるう」

何事も大したことないと今思ったばかりだけど、撤回だ！ 一大事だ！ ヒリヒリするう。

「だから裸足はやめてくださいと言ったのに……」

トウキは顔を顰めると瑞樹を抱きあげて木陰まで運んだ。

「ごめんね。こんなすぐに赤くなるとは思ってなかったよ」

「ここは日本よりも日差しが強いと先ほど注意したはずですが……」

「そだったね」

瑞樹は弱弱しく頷く。

「今、薬を持ってきましたから、ここで待っていてください」

「ありがとう」

木陰のカフェテリアに一人残されて、瑞樹は溜息をついてサンダラスを胸ポケットにしまった。

第四話 冴えた緑陰の下での胎動(3)

サンセットビーチに来るのは初めてだ。ここのとろろずっと地球上を飛び回っていて、ハル共和国にいる時間がなかった。

アーマルターシユはタウンバスに初めて乗って南国の雰囲気を満たしていた。

隣に座っている人が、もうちょっと柔らかい表情で恋人らしく振舞ってくれていたらいいんだけど……。ちらりとカナメを見る。カナメはサングラスで表情が見えにくいにも関わらず仏頂面をしているのが分かった。

「ねえ、カナメ、もう少し楽しげな表情をすることはできないの？」

「……なんで？」

カナメは仏頂面のままアーマルターシユを見つめた。

「恋人同士っていう設定なのよ。何の為に揃いのシャツにしたと思っているの？」

「そうだったっけ？」

カナメは溜息をついた。

ビーチに偵察に行くことに同意したのは確かだが、恋人同士に変装して行くななんて聞いていなかった。

「その方が怪しまれないでしょ？　なんたってビーチなのよ。カッブルだらけよ。木は森に隠せて言うでしょ？」

「ビーチで働くウェイトレスとウェイターって設定に変えない？」

カナメが身を乗り出して提案する。

「却下、それじゃあ、店でしか偵察できないじゃないの」

アーマルターシユはカナメを睨みつけた。

サンセットビーチは島の最西端に位置している為、なんと言ってもその見せ場はその名が示すとおり日没だ。日没までにはまだ間がある。昼下がりの気だるい雰囲気はビーチにもカフェエリアにも満

ち溢れている。恋人たちは木陰で横になり、甘い時間を過ごしているのかもしれない。ビーチではしゃいでいるのはもっぱら、良く日に焼けた日差しに耐性のある外国の子供たちばかりだ。

このビーチは遠浅な海がかなり遠くまで広がっていて、波は穏やかで澄んでいる。海岸線にそってアーマルターシュと寄り添って歩く。さっき売りつけられたパラソルをカナメが支える。腰に手を廻せと命令されたので、両手が塞がった状態で、カナメは深いため息をついた。

ビーチにも、さっき覗いた棟内のレストランにも目的の人物はいなかった。残るは外にあるカフェテリアだ。そこを覗いたら引き上げようとそちらに足を向けた。カフェテリアには何組かのカップルと家族と、まばらに独り本を読んでいる人がいた。その中に、しょんぼりと座って、溜息とともにサングラスを外した女性に目がとまる。カナメがその女性に気づいたと同時にその女性もカナメに気づいた様子だった。カナメは固まってしまふ。どうしてここに？ 咄嗟に浮かんだ言葉はそれだけで、思考が止まってしまふ。

「どうしたのカナメ？」

まだ気づいていないアーマルターシュがカナメの腕に腕を絡める。

「ここは駄目だ。引き上げよう」

「なに？ どうしたの？」

アーマルターシュがカナメの視線を辿る。そこには少し戸惑った様子の瑞樹がいた。

「なんで瑞樹がこんな所にいるの？ トウキは？」

アーマルターシュは素早く辺りに目を走らせる。

「瑞樹と接触したくない。帰ろう」

カナメが引き上げようとするのをアーマルターシュが引きとめる。

「瑞樹にはあなたに近寄らないようにと言ってあるんでしょ？」

「君に近寄るなどとは言っていない」

「じゃあ、近寄れないようにしましょ？」

アーマルターシュは艶やかに微笑むとカナメの首に手を廻し、口づけをした。

その瞬間、カナメはアーマルターシュの肩越しに、瑞樹の表情がスローモーションのように変化するのを見ていた。

驚愕、放心……次に見せた表情は何だったのか……カナメには判断ができなかった。

カナメは呆然と、瑞樹が走り去っていく後姿を目で追った。

間もなくして瑞樹がいなくなっていることに気づいたトウキと目が合う。

『トウキ！ 瑞樹を追いかけてくれ。今彼女はタウンバスに乗り込んだ』

トウキに心を読ませる為に心のシールドを解除する。トウキは頷くと素早くビーチの出口へ向かった。

後年、カナメはこのシーンを何度も繰り返し思い出すことになる。あの時、アーマルターシュの思いつきに乘って、はつきりと瑞樹を拒絶していれば、もしかしたら瑞樹をあんな辛い目に遭わせずに済んだのではなかったかと……。僅か二年弱しか一緒にいられなかった最愛の妻の顔を持つ瑞樹。そんな彼女と会話することが楽しくない訳はなかった。別人なんだと何度も自分に言い聞かせ、距離を置くことに細心の注意をはらった。

そして、それは瑞樹にとっても、そうだったのだと認識した瞬間だった。

第四話 冴えた緑陰の下での胎動（4）

瑞樹は走り続けてサンセットビーチの出入り口に辿り着いた。折しもタウンバスが出発の合図を出しているところで、瑞樹はまるで逃げ込むようにそのバスに飛び乗った。

胸がドキドキしていて、それが走ったためなのか、カナメとアーマルターシュのあんな場面を見てしまったからなのか自分でも判断できなかった。

知らなかった……。カナメとアーマルターシュがあんな仲だったなんて、ちっとも知らなかった。バスの座席に深く身を沈めながら何度も何度も繰り返し考える。ひどく動揺しているのに自分でもびっくりする。

バスは暖かい日差しの中ゆっくりと進み、やがてハンサビーチの入口を右折した。

「ハンサビーチ終点です」

「あれ？」

瑞樹は呆然とする。たまたま居たタウンバスに何も考えずに乗り込んでしまったのだ。行き先を確認していなかった。しかもトウキを置き去りにしてきたのをやっと思いついて心の中で呻く。

「あの、行き先を間違えて乗ってしまったんですけど、このバスはこの後どこへ行きますか？」

「どこに行きたいんですか？」

割と優しいような運転手さんが気の毒そうに訊いてくれる。

「ハル共和国の施設がある方へ行きたいんですけど」

「それだと、二十分後に空港ターミナル行きが来るからそれに乗って、もう一度乗り換えないと行けないな。このバスはサンセットビーチとここを往復するだけだから」

サンセットビーチには戻りたくなかった。こんな風に逃げ出して、

どんな顔をして二人と顔を合わせたらいいいのか分からなかったからだ。

「そうですか、じゃあ、しばらく待ってます」

瑞樹は弱く笑むとバスから降りた。バスは瑞樹が降りると間もなくサンセットビーチへと戻って言った。

ハンサビーチのバス乗り場は閑散としていて、暑い日差しを避ける屋根付きの歩道が豪華なゲートまで続いている。ゲートには門番が常駐しているみたいだった。瑞樹は仕方なく屋根付きの歩道の脇に生えている大きな木の木陰に避難した。

「君、どうしたんだい？」

木陰でしばらくぼんやりしていた時、突然声をかけられた。カナメや正樹と同じくらいの長身で痩せぎすの男の人だった。彼はゲートの中からやって来たようで、一旦開いたゲートが閉まりかけているのが見えた。

「バスの行き先を間違えてしまって……」

瑞樹は力なく笑う。男は瑞樹のいる木陰までやって来るとサンダラスを外した。明るめの茶色の色が温かい印象だ。

「僕車で送ってあげようか？ どこまで行くの？」

「いっ、いえ、いいんです。すぐにターミナル行きのバスが来るって言うてましたから」

「空港に？ もう帰っちゃうの？」

「いえ、本当はハル共和国の施設に行きたいんですけど、乗り換えがないといけないって、さっきバスの運転手さんが教えてくれたから」
「だったら、なおさら僕が車で送ってあげるよ。今車を回してもらってるから」

「いえ、本当に結構です。大丈夫ですから」

その男の人は面白そうに瑞樹の顔を覗き込んだ。

「僕が怖い？」

瑞樹は大らかに微笑んでいるその男の顔を見上げて、少し怖いと

思った。押しが強くて、相手が断わる道を断つことを知っている目だ。瑞樹は心の中で焦る。

「いえ、そう言う訳じゃないんですけど、ご迷惑をかける訳にはいきませんから」

「迷惑だなんて思っていないよ。僕も用事があって空港ターミナルまで行くつもりだったんだから。ああ、そうだ！ うっかりしていた」男はそう言うと言分の額を軽く叩いた。

「名前も名乗ってなかったね。これじゃ警戒されるはずだ。はじめまして、僕はターウ・エル。ハンサビーチの別荘を最近、友人が買ったんだ。そうしたら、その友人が今日、到着するから迎えに来て。まったく人使いの荒いやつで……」

ターウは苦笑した。

「私は、ミズキ・ヒュウガです」

とりあえず名前を名乗る。

「君はハル人なんだよね？」

「いいえ、私は日本人です。ターウさんはどの国の方ですか？」

「僕はハル人だよ。てっきり君もそうだと思ってた。でもおかしいなあ、ハルの人じゃなければハル共和国の施設には入れないはずだけど……。やっぱり僕が送って行くよ、友人が着くのはもう少し先だから、ハルの施設に入る手続きとかは知ってるの？」

瑞樹はふと自分が何も知らないことに思い当った。愕然として顔を上げると、心得顔でターウは頷いた。

「ほらね、やっぱり君一人じゃ心配だよ」

＊ ＊ ＊

トウキは乗って来た車を置き去りにしたまま走っていた。何か

起こったらしいという事は分ったが、その何かをカナメに訊く余裕はなかった。車よりも走った方が早いとトウキは判断してそのまま走り続けた。トウキは急げば時速八十キロで走ることができる。

カナメは瑞樹がタウンバスに乗ったと言っていた。サンセットビーチからタウンバスで戻れるのはターミナルまでだ。そこからは別ルート of タウンバスに乗り替える必要がある。瑞樹はそんなことさえ知らないはずだ。トウキは走りながら瑞樹の登録コードで位置確認を始めた。僅かにハンサビーチを通り過ぎようとした時に瑞樹のコードを確認できた。トウキは突然方向転換をしてハンサビーチへと右折する。

「瑞樹！」

声を掛けると瑞樹はトウキを驚いたように見つめた。瑞樹は誰か知らない男と一緒にいた。トウキは瑞樹を見つけた安堵と見知らぬ男への警戒とで複雑な表情を作り出す。

「瑞樹、探しましたよ」

トウキは瑞樹の手首を捕まえた。

「トウキ……」

瑞樹は一瞬動揺した表情をしてから、突然表情を消した。

「どうして黙っていなくなっただんですか？ 何があったんですか？」
矢継ぎ早に質問されて瑞樹は混乱しているように見えた。

「君、やめなよ。そんな怖い顔で睨んでいたら彼女は何も言えないよ」

ターウが瑞樹を庇うように間に割り込んだ。

「あなたは？」

トウキはターウも睨みつける。

「僕はターウ・エル、ハンサビーチに来る友人を空港に迎えに行くところだ。良かったらあなたも一緒に送ろうか？」

ターウの車がちょうど回されて来たところだった。

「いえ、結構です」

トウキはそう言うと、瑞樹の手を引っ張って歩き出した。

「歩いて行くつもりかい？」

ターウの呆れた声が後ろで響く。トウキはそれを無視して歩き続けた。瑞樹も何も言わずに引っ張られるまま歩き続けた。

暑い日差しが容赦なく降り注ぐ。サングラスを掛けて、遮光服を着ていたので問題はなかったが、今さらになって、さっき火傷をした足の甲がヒリヒリ痛くなってきた。今までそんなことも気づかないくらい動揺していたのかと項垂れる。

「瑞樹、ちょっと失礼します」

トウキはハンサビーチから出ると突然瑞樹を背中に背負った。

「な？ 何するの？」

「急ぎます。足の火傷の薬も早く塗らないといけませんから」

「トウキ、ごめん……ごめんなさい」

瑞樹はトウキの肩につかまりながら、何も訊いてこなくなったトウキに詫びた。

トウキは、自身の回路の中で、ざわざわと警告する信号をキャッチして、いつになく焦っていた。ずっとずっと昔の記憶からの警告。かつて今の瑞樹のように突然思考を読めないように遮断した人間がいた。それまでは何度指摘しても思考を読まれることに無頓着だったその人が、何の訓練もしていないのに、ある日いきなり思考を遮断したのだ。その人は三日後に死体で見つかった。湖の上に浮かんでいた。アイリス……。トウキは思考回路の信号がザラザラと不快なノイズをたてて流れるのを感じていた。

ゲートで手続きをする為に下ろされた瑞樹は溜息をついた。アンドロイドにまで気を使わせている。しっかりしなくちゃ、私は私なの……デイモルフオセカじゃないのに……。

「トウキ、もう大丈夫。自分で歩けるし、ありがとう」

再び瑞樹を背負おうとしているトウキに言った。トウキは無言で

瑞樹の手を握ると歩き始めた。

ハル共和国の施設の建物の入口でニシキギが待っていた。

第四話 冴えた緑陰の下での胎動(5)

「トウキ、ご苦勞だったな。後は俺が引き受けよう」

ニシキギは訳知り顔な様子で言った。

「私も部屋まで送ります」

トウキは瑞樹の手を離そうとしない。ニシキギは怪訝そうな顔でトウキを見つめた。

「トウキ、しばらく瑞樹から離れていて欲しいんだ。君がいると……瑞樹は考えることができない」

ニシキギは思考を止めているような無表情の瑞樹を見ながらそう言った。トウキは一瞬はっとした顔をして瑞樹を見てから、哀しそうな表情になって、そっと手を離れた。

「わかりました。後をお願いします。それからこれ……」

トウキはニシキギに火傷の薬を手渡す。

「ビーチで日焼けさせてしまったので」

そう言うと、トウキは瑞樹の方を見ずに立ち去った。

「私……トウキに酷いことしてしまったみたいだね」

瑞樹は小さく呻いて項垂れた。

「前にも言ったことだがな、あれはアンドロイドだ。人間と同じように感じてる訳じゃないぜ？」

ニシキギは少し呆れたように瑞樹に返す。

「そうかな……あんな表情されたら人間と同じだよ。絶対私、トウキに酷いことしたんだって思うよ」

「おい、ぶつぶつ言っていないで行くぞ」

ニシキギはさっさと地下都市へ向かうエレベーターに向かった。

瑞樹がとぼとぼとそれについて行く。

「あれ？ 部屋へ行くんじゃないの？」

てっきり273号室に連れて行かれて、事情を訊かれるんだと思

っていた。どう説明したらいいのか分からなくて途方に暮れていた
気持ちだが、少し肩すかしを食らった気分になる。

「あんた退屈していたんだろ？ あんな部屋に戻ったら気が滅入る
だけだぜ？」

「でも、じゃあ、どこに行くの？」

ニシキギはそれには答えずにカフェテリアにずんずんと進んで行
った。ニシキギは迷うことなくカウンター席に座って、飲み物をオ
ーダーする。

「トム、ナイトビーチをアルコール少なめにして作ってくれ。俺に
はメモシンをロックで」

「はい」

トムと呼ばれたバーテンダーらしき人は正確な動きで注文の品を
作り始めた。

「私、未成年だよ、アルコールは飲めない」

「十八歳だろ？」

「日本ではアルコールは二十歳からだもん」

「ハルでは十八歳からOKだぜ？」

「だって私、日本人だし……」

「お前はハル人でもある」

ニシキギの返事に瑞樹は目を見開いた。

「私がハル人？」

「まだ聞いていなかったか？」

「聞いてないよ」

瑞樹は呆然と答える。

「ハル共和国の施設に入れるのはハル国民だけだ。それ以外は入れ
ないように規制している」

瑞樹はハンサビーチにいたターウの言葉を思い出す。彼の言う事
が正しかったのだ。

「じゃあ、正樹ちゃんは何？ 正樹ちゃんもハル国民なの？ 正樹ちゃ
んも何も知らない間にハル国民にされてしまったの？」

もしそうなら、私のせいだ。

「彼は自分でそうなることを決めた。あんたとは事情が違う」

初めてこの施設に入った時の訳知り顔の正樹の顔を思い出した。

そっか、正樹ちゃんはやんと知っていてここに来たんだ。

私だけか。何も知らないで、何も知らされないで、ここで何をしたらいいのかもわからないまま過ごしてるのは、私だけなんだろうな。ずぶずぶと気持ちちが沈みこんで行く。

「おい、どこを火傷したんだ？」

ニシキギの言葉に瑞樹はノロノロと顔を上げる。

「自分で塗る」

瑞樹はニシキギから葉を受け取ると、足の甲に塗りこんだ。甲は真っ赤になって熱を持っている。

「まさかビーチを裸足で歩いたのか？」

顔を顰めるニシキギを不思議な気持ちで見上げる。

「ビーチはサンダルか裸足で歩くに決まってるでしょ？」

「ふうん」

ニシキギは府に落ちない顔で首を傾げた。

「これから裸足でビーチを歩くときは夕方か夜にするんだな。砂浜は照り返しがきつい。俺は近づきたくもない」

「ふうん、そんなもんかな。だけど夜の砂浜はあんまり裸足で歩きたくないな。何か嫌なものを踏んづけてしまいたいそうだし……」

「何か嫌なもの？」

ニシキギは怪訝そうだ。

「クラゲの死骸とか魚の死骸とか人の死骸とか……」

「うう、なんて気持ち悪いものばかり想像してるんだ？ 死骸ばかりじゃないか……」

ニシキギは思いつき顔を顰める。

「そんなのなら昼間だって落ちてるかもしれないだろう？」

「そうだね、でも、なんでだろう。昼間なら、太陽が出ている間な

ら大丈夫って気がするんだよね。そういうものって昼間は悪さをしないって気がするからかな。昼間ならただ気持ち悪いで済む物が、夜だと夜そのものの、闇そのものを踏んづけてしまった気がするからなのかもしれないな」

「なんだそれ？」

ニシキギは不気味なものを見るように瑞樹を見つめてから溜息をついた。

トムが夜空の色をしたカクテルを瑞樹の前に、夕焼けの色をした飲み物をニシキギの前に置いた。

「飲めよ」

「ナイトビーチか、夜空の色をしてるね。ニシキギのは夕焼けの色だ」

瑞樹はしげしげとグラスを見つめた。

「俺のはジタンの水という意味の酒だ。地球では太陽の水だな。これはかなり強い」

「ふうん」

瑞樹は夜空色のカクテルをそっと啜った。甘い味と芳醇な香りが口いっぱいに広がる。瑞樹は一口飲んだ瞬間に呆然としてしまう。

この味を……知っていた。

初めて飲んだこの味を瑞樹は知っていた。さっきまで封印をしていた記憶が膨れ上がって、心の蓋をこじ開ける。涙が溢れて止められなくなった。嗚咽を堪えるので精一杯だ。

そんな瑞樹の様子をニシキギは横目でちらりと見て、でも何も言わずに座っていた。バーテンダーのトムも何も言わない。

「……あいつが恋しくて泣いているのか？ それとも嫉妬の涙か？」
瑞樹が落ち着いてきたところでニシキギが静かに問う。瑞樹は驚いてニシキギを見上げる。

「デイモルフオセカの記憶で泣いているんじゃないのか？」

瑞樹は悟る。

この人は事情を聞いてあそこにいたんだ。教えたのはカナメだろうか、アーマルターシュだろうか。たぶんカナメだ。あの時目があつたのはカナメだったから。カナメはデイモルフオセカを心配しているんだと瑞樹は確信した。

「私は……このカクテルの味を知ってる。初めて飲んだのに知ってる。星ぶどうを使ってるんでしょう？ 星ぶどうなんて見たことも食べたこともないのに、その形も色も味も知ってる。それをカナメが好きだったことも……知ってる」

また涙が溢れて来る。

「……そうか」

「私は知らなくていいことはごちゃごちゃと色々知ってるのに、必要なことは何一つ知ってない。私は……何をやってるんだろ。相変わらず何も見えてない」

言葉は続かず、できることと言えば、泣く事だけ……。相変わらず役にたたないと考えて、また悲しくなった。

「カナメとデイモルフオセカはどんなだった？ どんな風に愛し合って、どんな風に暮らしてた？」

スパンと何の躊躇いもなしに踏み込んだ質問をするニシキギに、驚いて、瑞樹は顔を上げた。どんな風に……。記憶は、まるでストローの先から出てくるシャボン玉のように次から次へと湧き出してくる。瑞樹のものではない、幸せで、切なくて、甘やかな記憶……。「……そんなこと……私が言える訳ないじゃん……。私のことじゃないんだし……」

瑞樹の言葉に、しかしニシキギは安心したように頷いた。

「お前にしては上出来な答えだ。お前は日向瑞樹だ。デイモルフオセカではない。ペラペラしゃべるようなら釘をさしておこうと思っていた」

ニシキギは小さく笑んだ。

「何それ……」

ばっちり釘さしてるじゃんか……。

瑞樹は憮然として、ナイトビーチをぐいっとあおった。

＊ ＊ ＊

「ニシキギ、頼みがあるんだ」

さっきのカナメの声をニシキギは思い出していた。

「今から瑞樹が外から帰って来るはずだ。ちよつとしたハプニングがあつたんだが、恐らくトウキがちゃんとキャッチしてくれているだろうから大丈夫だと思う。でも逆にトウキがいることで、瑞樹は心を開放できないかもしれない。君が引き取って、そうだな、できれば話を聞いてやって欲しいんだけど……。それが無理ならとにかく君が部屋まで送ってやってくれないか？」

カナメの声はいつになく焦っているようだった。受信機からカナメの躊躇^{ためら}いや迷いまでが伝わって来る。

「何があつたんだ？」

「瑞樹がビーチに来ていたんだ。僕とアーマルターシュも例の件の下調べでビーチに行った……。僕らはそんな場所で瑞樹に接触しなくなつたんだ。だから……」

カナメは黙り込んだ。

「瑞樹を追い払うためにアーマルターシュがあんたにキスでもしたか？」

ニシキギが冗談めかして言うのと重い沈黙が返って来た。凶星らしい。

「アーマルターシュはあんたに惚れてるからな。そんなチャンスは

逃さなかったんだろうよ」

「こんな時に冗談はよしてくれ」

ニシギギの言葉にカナメは真面目な声で反論する。

アーマルターシユも報われないなとニシギギは気の毒に思う。

「とにかく瑞樹を頼む」

「なんで俺に頼むんだ？ あの前染の彼に頼まなくてもいいのか？」

「……彼は、ディモルフオセカを知らない」

そう言うときカナメは黙り込んだ。

「あんたさあ、自分で追いかけてなかったことを後悔するかもしれないぜ？ いいのか？」

「……じゃあ、頼んだから」

そう言って通信は途絶えた。

第五話 穿たれた薄闇で拮抗する力（1）

その男は明らかに不機嫌な様子でカウンター席についた。

「トム、ラメデムをロックで」

ラメデムは物凄く強い酒だ。『突き棒の水』という意味で、棒で突かれた痛みほど強いのだと言われる。瑞樹の隣、椅子を二つ空けた場所に、その男は座った。

あの後ナイトビーチを一気に飲んでしまっていた瑞樹はやたら陽気になっていて、当たり障りのない……つまり、どうでもいいことをベラベラとニシキギに喋りまくっていた。

その瑞樹が興味津々な顔で、その不機嫌な男の顔を覗きこむ。緑色のその肌を見ればファームの民であることは明らかで、それなのに瑞樹はその不機嫌な顔には気づかない様子で不躰なまでにその男を見つめた。

「……瑞樹、そろそろ行こう」

危険を察知したニシキギが瑞樹を促す。

「ねえ、あなたファームの民なんでしょ？」

瑞樹は屈託のない顔で話しかける。その男は瑞樹をじろりと睨みつけた。

「あんた誰だ？」

「私はミズキ・ヒュウガに決まってるでしょお？ あんたは？」

瑞樹も負けずに睨みつけた。両者とも完全に酔っぱらいだ。

「あんたみたいなのにな乗る必要はない」

「なんらって？ 人の名前聞いというて、名乗れないとは何事だあ！」

「あんたが勝手に名乗ったんだろうが、俺には関係ないね」

無視を決め込んでラメデムを煽る。

「感じ悪っ！ サイテー。あんたみたいなのがミントと同じファームの民だなんて信じられない」

そう言った瑞樹をその男は噛みつくような目で見つめた。

「ミントだって？」

「そうよ、ミント・ペニーロイヤル。感じのいい、かわいい女の子なのっ。私の友達。あんたとは真逆だあ！」

「あんたファームの民のミントを知ってるのか？」

「知らない人を友達だって言うほど私はおめでたくないよ」

そう言った途端、その男は態度を変えた。

「俺の名前はセージ・オフィキナリスだ」

すっかり意気投合して、たわいのない話題で盛り上がる酔っぱらい二人を傍で見ながらニシキギは溜息をついた。

「トム、ナイトビーチはアルコール弱めで作ってくれて言っただろ？」

ニシキギがぼやく。

「弱めで作りましたよ。ほんのスプーン一杯入れただけなんですけどねえ」とトムも溜息をついた。

＊ ＊ ＊

第一エリアEのゲートの前で二人の酔っぱらい達は騒いでいた。

「なんらって？ 私の備考欄にEMって書かれているから入れられにやいだとお？」

「この備考欄には森の民だって印が書き込まれているはずなんです。ですから、あなたは森の民なんでしょう？ 森の民の立ち入りは断っているんです」

「私は地球人だよ、森の民じゃないしい。大体そのEMって何の意味なのよお？ EMぼかしかな？ 私は肥料じゃないぞー」

「そうだそうだ、こいつは肥料じゃないぞ！ ってEMぼかしって何だ？」

セージもろれつの回らない舌でがなりたてる。

「EMってなんの略なんだ？」

ニシキギが口を挟む。ゲートの見張り番らしいファームの民は、その質問に肩を竦めた。

「EMていうのはねえ、Effective Microorganisms つまり有機微生物群の英語名だあ」

瑞樹が答える。

「そっちの略を訊いてるんじゃない」

ニシキギが顔を顰める。

「お前の備考欄に書いてある方のEMだ」

「私は微生物なんかじゃないぞー」

ニシキギは瑞樹を無視して見張り番を見つめた。

「ほとんどの森の民の欄にはHRと書いているんですがね、その略の意味も私は知りません。とにかく、その欄に記号が書いてあるのは森の民だから入れるなど私は言われているだけですから」

「なんで森の民は入ったらいけないのよお？」

瑞樹は不思議に思っ て訊いてみた。

「我々ファームの民は根気よく植物の世話をすることによってエリアEを管理して来ました。それが正しいやり方なのだと信じています。ここで、我々は森の民の力なしにそれが可能なのだということ を証明しようと考えているのです。数年後、森の民が管理している第二エリアEとここを比べた時にその答えが出るはずです。だから今森の民を中に入れて力を使われるのは迷惑なのです」

「……森の民とファームの民が協力して、互いに手を取り合っ てやっ ていくっ て言う考えはないの？」

見張り番の説明に酔いが醒めていく。

「最初はそのように努力してきましたよ。我々だって理由も無く森の民を排除したりなどしない。しかし、森の民は自身の力を過信しています。いくら力を使っても手入れをしなければ植物はうまく育ち はしないのです。それを彼らは理解しようとし ない。彼らとは文

化が違うんです」

「……」

瑞樹は溜息をつく。

そこへ一人の年老いたファームの民がやってきた。

「今、話が聞こえてしまったのじゃが。あなたは地球人であるとか。それは本当のことですか？」

濃い緑色の肌にいくつもの皺が刻まれている。白い髪に幾本かの深緑の髪が混ざっていた。

ドクター・ヌンもかなりな老人だと思ったが、比喩ものにならない。たくさんの年輪を刻んだ大木だけが放つことのできる威厳と静謐が彼の周りを取り巻いているのを瑞樹は感じとっていた。

「私は地球の日本という国から来ました」

この人、年をとる前は緑色の髪だったのだろうか、瑞樹はその髪を見つめながら答える。

「そうですか……。地球の植物は手強い、人の手を拒む。地球と太陽に任せておけば生き生きとしておるのにな」

老人はくつくつと笑ってから続けた。

「しかし我々は地球の植物も管理できるようにと今勉強中なのです。その辺の所をお詳しいようならぜひ色々教えて頂きたいものですな。私はカシ・ケルクスと言います。お見知り置きを」

そう言ってカシは瑞樹にごつごつの緑色の手を差し出した。

「私はミズキ・ヒュウガです。よろしく」

カシの手を軽く握って微笑んだ。

「確かコブもケルクスという苗字だったと思うんだけど、ご存知ですか？」

瑞樹が問いかけると、カシは驚いたように瑞樹を見つめた。

「コブは私の甥にあたる男です。コブを知っているとは……。いや、いや、驚きました。コブの知り合いならば無礼なことはいけません、特になあ、特にセージはそうじゃろ？」

カシは意味ありげにセージを見て笑った。セージも驚いている様子だ。

「兎に角中にお入りなさい。中で話しましょう。見学なされるとよい」

急展開で和やかな雰囲気になり、咄然とする見張り番とニシキギはそっちのけで、ぞろぞろと中に入って行った。

ニシキギは慌ててそれを追って、エリアE備え付けのサングラスを瑞樹に渡した。

「ああ、忘れてた、ありがと」

太陽に比べればエリアEの人工ジタンの光は弱い、遮光服までは必要なさそうだったが、さすがにサングラスを掛けないで入るのは危険なようだ。

「気をつけないと視力を失うぞ」

ニシキギはしかめっ面で言った。

「ええー？ あなた、ミントの配偶者なの？」

カシから説明されて瑞樹は驚く。セージは一年前にミントと結婚したのだそうだ。

「なんでミントをナンディーにおいてこんな所にいるのよ？」

少し言い方が非難めく。ミントは妊娠中だと聞いていたから。

「セージも仕方なくなんじゃよ。彼はファームの民の優秀な医師でな。やはり未知の惑星にファームの民が行くとなれば優秀な医師が必要になってくる。ミントには可哀相なとは思ったのじゃが、あちらにはコブもいるからな。ま、ちと無理を言うて来てもらっておるわけじゃ。堪^{こた}えておるのはむしろミントよりもセージの方かもしれないがな？」

カシは苦笑気味に笑った。さすがに酔いが醒めてきていたセージがお茶を淹れてくれた。

「ま、ゆっくりここを見て行ってください。第二エリアEはもう見られたのかな？」

「いえ、まだです」

「そうですか、どちらもじっくり見学なさるといい。地球人の目から見て、我々ファームの民は、森の民はどのように映ったか、是非今度教えてくだされ」

そう言い残すとカシは他のファームの民に呼ばれて行ってしまった。

「参ったな、ミントの知り合いってだけじゃなく、コブのことも知っているとはな」

セージが苦笑しながら言った。

「ここの見学をしていくか？ 案内するけど……」

「うん、お願いします」

少し居心地の悪い思いをしながら瑞樹は頷いた。力は……使わなければいいのだ、そう自分に言い聞かせる。

第一エリアEはパーフェクトに管理されていた。無駄な雑草は一本も生えておらず、土は適度な湿度を保っており、均一に人工ジタンの光が当たるように、葉は刈り込まれている。花がらは摘み取られ、虫食いの葉など全く無い、当然病気にもかかっているものはない。パーフェクトという言葉以外見つけられない。

「手入れが行き届いているね」

瑞樹は目を見張る。

「そうだろ？ みんな勤勉で真面目だからな」

セージの言葉には少し棘が含まれているような気がして、瑞樹は首を傾げる。本当にパーフェクトなんだけど、何か違うと具体的に感じ始めたのは、セージの言葉の棘を感じた時だった。そのセージの不満に呼応するかのように、突然植物たちが不満の溜息をつき始めたのだ。

「セージはお医者さんだったんだね。ファームの民のお医者さんもやっぱり忙しいの？」

ナンディーで一般人の医者だったブラキカムが、いつも忙しそう

にしていたのを瑞樹は
思い出した。

「ファームの民ってのは丈夫にできていてな、滅多なことでは医者はいらない。だから俺はあまり必要とされないんだ。いればいいって感じでな。正直に言うとな俺は医者になりたくてなった訳じゃない。ファームの民に生まれたからには、やはり植物を育てることを専門にしたかった。だけど、植物を育てるのが苦手なファームの民だっているんだ。俺にその才能がないと判断した親は俺に医者になれと言った。正直ショックだったよ」

セージの告白に瑞樹は言葉に含まれていた棘の正体を見たような気がした。

「そうだったんだ、それで昼間からお酒を？」
クスリと小さく笑ってセージを見上げる。

「ま、そう言う訳だ。馬鹿にしてくれていいぜ」

「馬鹿になんかしらないよ。医者とは立派な職業だもん」
「……ミントもそう言うってくれる」

少し照れたような、でもとびきり優しい瞳でセージはそう言った。
「そっか……」

瑞樹も嬉しくなる。

「そうだ！俺の星ぶどう棚を見せてやるよ。少しだけ場所を借りて作ってるんだ。端っこの方だから日当たりがいまいちで、ちょっと元気がないんだけどな」

セージは少し恥ずかしそうに言ってから、瑞樹とニシキギを案内してくれた。

「ここだ」

セージの星ぶどう棚は確かに元気がなかった。

ひよろひよろの蔓が建てつけの悪い棚にヨロヨロと掴まっている。星ぶどうは力を欲しがっていた。光を水をミネラルをもっと安定した棚を全身で要求していた。

第一エリアEの植物が放っている不満、この星ぶどう程ではないけれど、それが不足に対する不満であることを瑞樹は感じ取っていた。水でも肥料でも光でもない、何か生命力のようなもの。その決定的な不足。ひたひたと引き寄せるような触手の感触を全身で感じる。

「セージ、水をやったのはいつ？」

瑞樹は溜息をついて問う。

「えっと昨日だったか？ いやいや、その前かな……もっと前だったかも……」

瑞樹は、せめてユラユラ揺れる棚を固定しなおそうと手を伸ばした。その時、それは唐突に起こった。棚に這っていた蔓が瑞樹に触れた瞬間、星ぶどうを眩い光が包み込んだ。

共に光に包まれながら、瑞樹はセージとニシキギが目を見張ったのを呆然と見ていた。

次の瞬間、星ぶどうは縮こまっていた葉を大きく広げ、蔓は不安定な棚をもとめず絡みつき、自身の力で棚を固定するように巻きつき、あまつさえ、蕾をぶら下げることまでしたのだった。

「お、お前……森の民じゃないか！」

セージが蒼白な顔で呟いた。

「ご、ごめん、私……」

瑞樹は動揺してよろめく。

「やめてくれ！ 俺の星ぶどうが……」

セージの声は震えていた。

「ごめん、ねえ、この星ぶどう、どうなる？ 切ったりしないよね、ねっ！」

「森の民の力を受けた植物が、ここで生きて行ける訳がないだろ？」
吐き捨てるように言うセージに瑞樹は真っ青になる。

「やめて！ お願いだよ、私、もうここには絶対来ないから、この

星ぶどうを切ってしまう事だけは堪忍してよ！」

瑞樹はセージに取りすがった。

「無理だ」

セージはオロオロして言った。

「ねえ、お願い、今の見たのはあなたとニシキギだけだよ、黙ってたら分からないよ、もしばれても私は森の民じゃないよ。地球人だもん、森の民の力を使った訳じゃない、そう言ってよ。お願いだから……」

瑞樹の懇願にセージは困り果てた顔をした。

「俺は何も見なかったぜ」

ニシキギが口を開いた。セージは困惑した瞳でニシキギと瑞樹を交互に見つめた。

「……とにかく、もうここから出て行ってくれ。そして二度とここには来ないでくれ」

セージはしばらく考えた後、静かにそう言った。

とぼとぼと273号室に向かう廊下を歩きながら瑞樹は何度も溜息をついた。

「……ついてない日もあるさ」

いつになく優しい言葉を掛けてくれるニシキギが、逆に怖いと思いながら瑞樹は再度溜息をついた。

273号室では、正樹に勝手な行動を叱られ、カナメとアーマルターシュには困っているような、怒っているような複雑な表情で見られ、トウキには哀しげに微笑まれた。

最悪な一日だった。

第五話 穿たれた薄闇で拮抗する力（2）

その日は、前の日から正樹とトウキに第二エリアEに連れて行って欲しいと頼んでいたにも関わらず、トウキが別件の用事で一緒に行けないことになって瑞樹はがっくりしていた。仕方なく、正樹とエリアFに行くことにして273号室で正樹の脳コンタクトが終わるのを待っていると、ニシキギがやってきた。

「第二エリアEに行きたがってるんだって？」

「うん、そうだけど……なんで知ってるの？」

「トウキから一緒に行ってやってくれと頼まれた」

「ふうん」

トウキはあれから微妙に瑞樹の言動や行動を細かく監視するようになってしまっていた。

あの後、割とすぐ立ち直って普通にしていたと思ったんだけどなーと瑞樹は考え込む。

「トウキがダメだったんなら、俺に直接言えばいいだろう？」

「だって、ニシキギ忙しそうだから……」

「時間を調整すればいいことだ。遠慮せずに言えばいい」

「ふうん」

怪訝そうな顔でニシキギを見上げる。

「なんだ？」

ニシキギは不審そうに瑞樹を見つめた。

「親切なニシキギには何か裏があるような気がして……」
後が怖いと続けるつもりだったのが、頭をはたかれて、言いそびれた。

「人の親切は素直に受け取るものだ」

ニシキギがそう言ったところで、正樹が振り返った。

「ごめん、待たせたな。行こうか」

第二エリアEは、第一エリアEとは真反対のエリアAのさらに向こう側に広がっていた。恐らく後から付け足したのだろう、第二エリアEに続く通路は幾分狭くなっている。狭い通路を抜けた所に重々しいドアがあって（ちなみに、どのエリアEも重々しいドアが付いている）、その脇に小部屋が設置されている。そこには遮光服やサングラスが備え付けられていて、色素の薄い者が自由に使えるようにしている。

「ハデスのエリアEに行った時は、こんなの付けなくたって良かったんだけどなー」

サングラスをつけながら、何気なく呟いた言葉に正樹が反応する。
「ハデスのエリアE？ それって、まさか……惑星ハルのハデスのことか？ 行ったこともないのに？」

何か不気味なものでも見るように言う。

「あれ？ 私、今そんなこと言った？」

「……」

ニシキギも不審そうな顔で頷く。

「はぁ、駄目だな、ハルに来てからデイモルフォセカの記憶が浮上しまくって、時々自分でも何だかよく分からないようになってるみたいだよ」

「前から気になってたんだけど、お前の中にあるデイモルフォセカの記憶って、お前の中ではどのような扱いになってるんだ？」

正樹が難しい顔をして訊いた。

「どんな扱いって……どう説明したらいいんだろ、うーん、過去の自分って感じ？」

瑞樹は首を捻りながら言葉を探す。

「ふーん」

それって、過去にあいつの配偶者だったってことになるじゃないか……。

正樹は難しい顔で黙りこんだ。横を見るとニシキギも同様に難しい顔をしている。

重々しいドアを開けると、そこは光の中だった。

「俺もサングラス掛けた方が良かったかもしれないな」

正樹が眩しそうに眼を細めた。

「……」

瑞樹はその横で呆然としていた。

荒んでいる……。その言葉しか浮かばない。

第二エリアEの植物は荒んでいた。一言で表すならば、その言葉がぴったりだった。

「第一エリアEと雰囲気が違うな、なんか……なんて言っているのか分からないけど……荒れてる？」

正樹が遠慮がちに言う。

「正樹ちゃん、第一には行ったの？」

「ああ、この前お前を探し回った時に行った」

瑞樹がサンセットビーチに行った日、正樹は瑞樹のことを探し回っていたくれたのだ。

「その節は……ごめんなさい」

瑞樹は項垂れる。

「別にもう怒ってないよ。お前が無事だったからな」

瑞樹は更に項垂れた。

第二エリアEは雑草だらけで、虫食いだらけで、花がらは残り放題で、熟れ過ぎた果実がぼたぼたと落ちている木さえある。人影はなく、時折、遠くで子供たちが泣いたり喧嘩したりしている声が聞こえる。

「このまま奥へ行ってもかまわないのかなあ」

ちよつと不安になって瑞樹がニシキギに話しかける。

「構わないだろう」

ニシキギはすたすたと進んで行った。

その時、木陰から突然小さな男の子が飛び出してきた。濃茶の髪

に翠色の瞳が、瑞樹たちに気づいて大きく見開かれる。

「おねえちゃん達、誰？ 見学に来た人？」

子供特有の良く通る高い声が響いた。

「うん、見学に来た人だよ。私は瑞樹、君は？」

瑞樹は膝を折って、その子の目線に合わせて話しかけた。

「僕、レン、本当の名前はレンゲって言うんだけど、みんなレンと呼ぶよ」

翠色の目がキラキラと光りを弾く。

「レン、ここは大人の人はいないの？ 勝手に見学してもいいのかな？」

「大人は奥にいるよ、でも話しかけても無駄だと思うな。見学は勝手にしていいんじゃない？ あんまり見学者なんて来ないから案内する人もいないしね」

小さい割に言う事はしっかりしている。

「話しかけても無駄って、どういうこと？」

「あそこにもいるよ、来てみなよ」

レンは手招きするとヒソヒソ声で言った。

瑞樹は正樹とニシキギと目を合わせて首を傾げるとレンについて行った。

少し奥まった大きめな木の根元に男の人が一人座り込んでいた。

その人は焦点の定まらない瞳で木の梢を見上げて、何かぶつぶつと呟いていた。

「あの、見学をしたいんですが……あの？」

その人は瑞樹の声に反応しない。困り果てた瑞樹はレンを見つめる。

「ね？ 話しかけても無駄でしょ？」

レンは得意そうにそう言った。

「大人はみんなこんななの？」

「昼間はね。夕方になると元どおりになるんだけど、昼間はほとん

どの大人がああだよ」

「子供たちの面倒は誰が見てるの？ ご飯はちゃんと食べてるの？」
瑞樹は急に子供達の事が心配になった。

「ご飯は年長のお兄ちゃんかお姉ちゃんが出してくれる。何かあれば長老さんがどうすればいいのか教えてくれる」

食事はモルオープンから取り出すだけだ。食事は問題ないかもしれない。でも、これでいいんだろうか？

「大人はどうして昼間あんな風になってるんだ？」

ニシキギが訊いた。

「おじさん、名前は？ 名乗らない人には僕、何も教えないよ」

レンが凄んで見せる。

「おじさんだとー！ この小生意気なガキめ。俺はニシキギだ。よく覚えとけ」

いつになくムキになっているニシキギを面白そうに見ながら、瑞樹が同じ質問を繰り返す。

「霊葉ソーマのせいだよ。大人はそれをすごく薄めて飲むんだ。そうすると何時間か力が使えるようになる。夕方になる頃には効力が切れるから元に戻るんだ。そうしないと、今の僕たちは力を使う事ができないからね」

レンは悲しそうな顔をしてそう言った。

「森の民はリセプタータイプしか再生できないんだったな」

正樹が考え込んで言った。

「お兄ちゃん是一般人？ 名前は？」

一人だけおじさんと認定されたニシキギが顔を顰めたのが見えた。

「ああ、ごめん、俺は正樹って名前だ。一般人って言っていいんだと思うけど、俺も瑞樹も地球人だ」

「地球人？」

レンは珍しい果物の名前でも呼ぶようにその言葉を口にした。

「ねえ、レン、ここは少し手入れが必要だって思うよ。雑草抜いたり、落ちた実を拾ったり、そう言う事を小まめにすることが森を元

気に保つことになるんだよ？」

瑞樹がレンの目を覗き込んで真剣に言う。

「でも、大人はああだし……」

少し拗ねた顔で目を逸らす。

「ねえ、子供たちでやらない？ みんなで力を合わせれば子供だけだってできるよ。他の子に声を掛けてみたら、手伝ってくれないかな？」

瑞樹は嬉しくなって、はしゃいでしまう。私にできること、あるじゃん。

植物の手入れは瑞樹の大得意だ。夢はガーデナーだった。そう、ハルにかかわる前までは。今は太陽光の下に長時間いられないので、諦めた夢だった。

「う……ん、ま、一応声を掛けてみるけど……」

「うん、頼むね。私は鋏とかカゴとか探してみるよ」

それから小一時間ほど、集まった子供たちで力を合わせて、草取りや枯葉取りや花がら摘みに汗を流した。最初はニシキギも正樹もぶつぶつ文句を言っていたが、次第に子供たちも懐いてきて、和やかな雰囲気の中、第二エリアEは少し秩序を回復してきたように見えた。

子供たちの騒がしい声に何事かと出てきた長老が目を見張る。

「これは、これは……お前たちがやったのかい？」

白髪交じりの茶髪に覆われた頭と、髭をたくわえた荒削りな顔、がっしりした体型の男が子供たちに話しかけた。長老と呼ばれるには少々年若に見える。

「瑞樹がみんなでやろうって言ったんだ。瑞樹と正樹はね地球人なんだって！」

まるで自分の手柄でもあるかのようにレンやその周りの子供たちが口々に説明する。

「地球人だって？」

長老は目を細めた。

「初めまして、いきなりやってきて、勝手なことをして申し訳ありませんでした。正樹と言います。地球の日本と言う国から来ました」
正樹が長老に握手を求める。

「あなたがそうですか。地球人が来ているとは噂で聞いていたが……」

長老も手を差し出して握手をした。その時、後ろでどよめきが起こった。皆が一斉にそちらを注目する。

そこでは瑞樹が森の民の女の子を後ろから抱きかかえるようにして立っていて、瑞樹はその子の手首を下から握って支えていた。女の子の指先には少ししなびた雰囲気のポモナの小木があったが、女の子が触れた途端に葉を瑞々しく膨らませて小さな蕾をつけた。

「彼女は？」

長老が慌てたように正樹を見つめる。

「あれが瑞樹です。あんな力を持っていたなんて……今まで信じてなかった」

正樹も呆然としている。

「あなたは、今、何をしたのかな？」

長老は慌てて駆け寄って瑞樹に問いかけた。瑞樹は突然の長老の出現に少し驚いたようだった。

「何って……この子、力を使った事がないって言うから、使い方を説明して、少し補助を……」

しどろもどろに説明する瑞樹の手首を長老がぐいっと掴んだ。

「な、何をするんですか？ 痛い！」

驚いて手を引っ込めようとする瑞樹の手首をさらに強い力で掴み、長老は目を閉じた。

「本当だ……力が流れ込んでくる。タイプオリジンだ！」

「おい！ やめろ！」

ニシキギが瑞樹の手首を長老から引きはがす。離れたと同時に瑞

樹はニシキギの後ろに隠れた。びっくりして心臓がドキドキしている。手首の痛みだけでなく、何か頭の中に小さな空洞ができたような気がして、体がぐらりと傾く。

「おいっ！ 瑞樹しっかりしろよ」

正樹が瑞樹を支えた。

長老は意に介する様子も無く、先ほど蕾をつけたポモナの木に手を触れた。蕾はあっという間に花をほころばせ、見る間にビー玉程の小さな実を結んだ。

「力が使える……。ソーマなどに頼らずとも力が使える」

長老は恍惚とした表情で天を仰いだ。

ニシキギの後ろに隠れている瑞樹の元に子供達が群がって来た。瑞樹に触れようとする小さな手が四方八方から伸びて来る。瑞樹は驚いてピクンと小さく飛び上がった。

「おい、お前ら一度に瑞樹に触れるなよ、並べ！」

正樹が号令を掛ける。

「おい、もう連れて帰った方がいいんじゃないのか？」

ニシキギが正樹を制止する。

「連れて帰れる雰囲気じゃないぞ？」

正樹は眉を顰める。

「しかし……」

ニシキギは不安になる。森の民の力は命を削るのだ。

「レン、お前は並ぶな」

正樹が顔を顰める。

「なんでさ」

レンが思いきり不満そうな顔を向ける。

「お前、今までさんざん瑞樹にべたべたひっついていただろ？ 力使ってみろ。使えなかったら並べ」

「そっか」

レンは力を試しに行く。そして歓声が上がった。

「使える！　使えるよ。僕生まれて初めて力を使った」

レンの嬉しそうな声が響く。

「お前らも使えるかどうか試してみて、使えなかったやつだけ並べ」
ニシキギが怒鳴ると蜘蛛の子を散らしたように子供たちは散っていった。半数くらいの子供たちが並んだ。その一人一人と握手をしていく。

何人もと握手しているうちに、握手する時の力の出方が人によって多少異なることに瑞樹は気づいた。

何も感じない者、ぐらりとする程何かが抜け出すを感じる者、その中間の者。何も感じない者は力が出せないのじゃないかと思つて観察していると、別に問題なく力を使っているようで瑞樹はほつと安心する。みんなが力を使えるようになった時に、一人だけ使えないというのは可哀想な気がしたのだ。

そう考えて、ふとニシキギが気になった。

彼は一人だけ使えなかったのだ。そしてアール・ダーを追われた。それは途轍もなく切なく辛いことと思えた。

第五話 穿たれた薄闇で拮抗する力（3）

「そろそろ終わりだな」

ニシキギがほっとした顔で呟いた。

さっきから瑞樹の顔色がどんどん悪くなっているのに気づいていなかったからだ。

「もう少し、待ってくださらんか？ そろそろ大人たちが戻って来る頃だ」

長老は瑞樹の顔色など全く気にならない様子だった。

「おい、いい加減にしろよ。瑞樹は力を使いすぎて弱ってきている。森の民のあんたなら力を使い過ぎればどうなるか、わかっているはずだろうが！」

ニシキギが長老に抗議する。

「お前、その顔はエウオニムスの家の人間だろう？」

長老は嘲笑するような表情で言った。

「……だったらどうなんだ？」

一段と低い声でニシキギは言って長老を睨みつけた。

「ニシキギ、私は大丈夫だから」

瑞樹が弱く制止する。アール・ダーでのニシキギの辛さを自分のせいで掘り起こしたくはなかった。

「シーカスは立派な森の民だったが、その兄はさっぱりだった。確かにニシキギという名前ではなかったかな」

「やめて！」

瑞樹は長老を睨みつける。

「力を使えないどころか、そいつがいると他の者も力を使えなくなるという噂があったらしいな？ それでアール・ダーを追放されたとか」

「やめてって言うてるでしょう？ それ以上ひどいことを言うなら、

私は一切力を貸しませんよ?」

瑞樹は今までこれほど怒りを感じたことはなかった。なんて卑劣な! 体中が震えて来る。

「瑞樹、いいんだ、俺はなんとも思っていない。事実だからな」ニシキギは暗い瞳で嗤った。

「……じいちゃん、でも彼の言う通りだ。彼女は顔色が悪いぜ?」年長の子供なんだろう、瑞樹と同じくらいの年頃の少年がそう言った。

「また明日でも明後日でも、体調が戻ってから来てもらえばいいじゃないか」

虚を突かれたように長老は少年を見た。

「……それもそうじゃな。わしとしたことが、ついムキになってしまった。ソーマに頼らずに力を使えたのが相当嬉しかったらしい。すまなかったな」

長老は頭を下げた。ここは折れた方が得策だと考えたのかもしれない。

「じゃあ、俺で最後だ。俺の名前はエニシダだ。よろしくな」年長の少年は手を出した。

瑞樹はほっとした様子で手を出したが、手が彼に触れる瞬間、瑞樹は手を止めた。何か彼の手の先から、恐ろしい程の陰の力の渦を感じた気がしたからだ。エニシダが不思議そうに首を傾げる。

「あ、ごめん。よろしく、瑞樹です」

瑞樹が気を取り直して手を握った瞬間、体中に電気が走ったのを感じた。

弾かれたように瑞樹は後方に退いて、勢いで尻もちを付いてしまった。

「瑞樹?」

正樹が駆け寄ると、瑞樹は左手を押さえるようにして震えていた。「正樹ちゃん、私……私……」

呆然とした瞳で正樹を見上げる。右手で握手をしていたにもかか

わらず、瑞樹は左手を庇うように座り込んでいた。

「どうした？ 見せてみる」

正樹が掴んだ左手は金色の光で覆われていた。

「これは？」

正樹は目を見張る。

金色の細かい光の粒子が、まるで切り傷から流れ出す血のように左手の指先から滲みだしていた。金色の光は、その量を徐々に増やしながら瑞樹の左手を覆っていく。

周囲がどよめいた。

「崩壊？」

誰からともなく声上がる。

「このやろう！ おまえ瑞樹に何をしたんだ」

ニシキギがエニシダに掴みかかる。

「な、何もしてねーよ」

エニシダは胸倉を掴まれながら呆然と呟く。ニシキギはその様子に舌打ちを一つすると瑞樹に駆け寄った。瑞樹は手だけでなく体中金色の光で包まれ始めていて、意識は既に朦朧としているようだった。

「ニシキギ！ どうしたらいいんだ？」

正樹が慌てふためいてニシキギに助けを求める。ニシキギはこんな風に力を開放して死んでいく森の民を何度も見たことがあった。

「……どうしようもない」

ニシキギは呆然として瑞樹を見つめる。脚ががくがくするのを感じる。

「医療センターへ連れて行こう」

正樹は瑞樹を抱きかかえる。

「瑞樹……瑞樹……」

ニシキギは名前を呼びながら左手を握り締めた。

瑞樹を抱えて早足で歩いたため、正樹とニシキギの後ろに金色の

光の帯が流れて行く。

事態の深刻さを知らない子供たちは、その美しさに歓声をあげ、事情を知らずに引き上げてきていた大人たちは、何事かと振り向いた。

＊ ＊ ＊

「なあ、気のせいかもしれないんだけど、光の出方が少なくなっていないか？」

薄暗い通路を早足に歩きながら、正樹がニシキギに問いかけた。

「……俺もそう思ってた」

「実は俺、もっと前から気づいてたんだ。あんたが瑞樹の手を握った瞬間に光の出方が少なくなったって思う。試しだけど、ちょっとだけ離してみてくれるか？」

正樹の言葉にニシキギは不思議そうな顔をして頷いた。ニシキギが手を離して十秒程経った時、光が大量に出始めた。

「おい！ 早く握れよ！」

正樹が慌てる。

「あんたが離せと言ったんだが……」

ニシキギは再び瑞樹の手を握り締めた。

「さっき森の民の長老が言うてたことは本当なのか？ アール・ダーを追放されたとか……」

静かに正樹が問いかける。

「ああ、本当だ。俺が近くにいると力が出せないと苦情が来てな、普通は力がいくらで追放されなどしない。俺ぐらいじゃないか？ 追放なんて……」

「そうだったのか……そんなら、それがあんたの力だったって訳だな」

ポツリという正樹をニシキギは驚いたように見つめた。

「俺の力？」

「そう、それがあんたの森の民の力だったと言うことだ」

正樹はニシキギを真っ直ぐ見つめて言った。

ニシキギが触れていれば力の放出が止まることが判明したので、とりあえず医療センターには行かずに273号室に瑞樹を連れて帰ることにした。

「何があっただ？」

連絡をしたら、すぐにカナメとトウキがやって来た。正樹が事の顛末を話す。

273号室の部屋は二つのベッドルームとリビングからなっていて、それぞれのベッドルームにはバスルームが付いている。リビングにはキッチンとダイニング、そして、備え付けの画像モニターの前にはソファベッドが置いてあって、そこでも休憩が取れるようになっていた。瑞樹はリビングのソファベッドに横たえられていた。その横に椅子を寄せてニシキギが瑞樹の手を握っている。

「触れられただけで崩壊するとは……。しかも、崩壊が止まるなんて……。どれも聞いたことがない……」

カナメは複雑な表情で呟いた。

「彼の力を借りれば、オリジンタイプやマルチタイプの再生ができるということになりますね」

トウキが思案顔で言った。

「だが、こいつの崩壊はいつ完全に止まるんだ？ 離すとすぐに光が始めてしまうんだが……」

ニシキギが顔を顰める。その場にいる皆が沈黙する。

「……第一と第二エリアEの両方の長老に会ったんだね。どうだった？」

カナメが問いかけた。

「俺は森の民の長老は曲者だと思ったね。あの人は力を使えるようになることばかりを考えていて、他が見えていない。その為だったら何でもするって感じだったな」

正樹が言う。

「ファームの民の長老だって怪しいものさ。瑞樹の備考欄にEMと書かれているのを知っていながら、知らんぷりして、さっさと中に入れたんだからな」

ニシキギが口を挟む。

「なあ、備考欄のEMって何の略だ？」

「Earth Multi の略だよ。ちなみに今いる森の民の備考欄に付いているHRはHaru Receptor の略だ」

カナメが説明する。

出自の惑星名と森の民のタイプが書かれていたのだ。

「やっぱりそうだったのか。あの場でそれを言うと瑞樹は完璧に入ってもらえそうになかったから黙っていたが、おそらく、長老ならわかっていたはずだよな」

「ニシキギの備考欄にも書いておくべきだな。さしずめHSと言ったところか？」

正樹がからかうように言う。

「HS？」

ニシキギが嫌そうな顔で問い返す。

「Haru Stopper」

「やめてくれ。あんな連中の仲間になるのはごめんだ」

「しかし……EMにHSか。天然記念物並みの貴重種なんじゃないか？」

呟く正樹をニシキギが睨みつけた。

バスルームが近いからと奥の部屋で瑞樹とニシキギは休むことにした。離れていて問題がないのは一分程、それを過ぎると突然光が溢れだす。五分も離れていると光の塊になってしまふ。トイレに行く間の時間でさえ節約する必要があった。

「まだ意識が戻らないな」

正樹が心配そうに瑞樹の青白い頬を撫でた。

「こんなことが起こるなんて考えてもみなかったよ。調べてみたんだけど、触れられただけで崩壊が始まった例は今まで全く無かった」
当の瑞樹と同様に青白い顔をしたカナメが言った。

「あんたそんなの調べてたんか？」

正樹がカナメを見つめる。

「うん。エニシダは長老アドニス・アムレンシスの孫にあたるらしい。彼以外にも瑞樹を崩壊させてしまふ森の民がいるのか……気になるところだな」

カナメは難しい顔で呟いた。

「瑞樹は第二エリアEに立ち入り禁止だ。第一にも行かない約束をセージとしていたから、地球のエリアEにはもう行けないな」

ニシキギが肩を竦める。

「セージ？ 誰だっけそれ、どこかで聞いた気がするけど……」

カナメが首を捻る。

「ミントの配偶者だそうだぜ？」

「ああ、そうだった。忘れてた。セージと瑞樹は何かあったのか？」

「セージの前で瑞樹が力を使っちゃったんだ。恐らく瑞樹も意識しないまま放出しちまったんだろうけどな。あんまり貧弱な星ぶどうだったから、思わず力を出しちまったんだろう。それでセージが二度とここに来るなと。瑞樹はその星ぶどうを処分しないと約束する代わりにその要求を呑んだんだ」

「そうか……」

ファームの民とも森の民とも、あまり良い状態で会えなかったという事かとカナメは重い気持ちで呟いた。

彼女は森の民でなく、ファームの民でなく、力を持ち、そして孤立している。ニシギギの話は彼女の立場がハル共和国でさらに微妙になってしまったことを表しているようにカナメには思えた。

第五話 穿たれた薄闇で拮抗する力（4）

「カナメ、瑞樹が崩壊したって本当なの？」

アーマルターシュが青ざめた顔で273号室の部屋に入って来たのは、夜もだいぶ更けた頃だった。瑞樹の意識は相変わらず回復せず、ニシキギがつきつきりで奥の部屋にいた。

「誰から聞いた？」

カナメが訊き返す。

「森の民から何度も問い合わせが来ているのよ。なのに真相を知る者が誰もいなくて。医療センターに問い合わせても、そんな患者は来てないって言われたらしくて、私に問い合わせが来たのよ。当然私も知らないから答えようがなかったんだけど……。私にも連絡をして欲しかったわ。このことを話すわけにもいかないし、あなたもトウキもないし……」

アーマルターシュは早口に事情を説明した。

「そうか、悪かった。瑞樹の意識が戻らないから下手に動けなかったんだ。まだ崩壊も完全に止まった訳じゃないしね」

カナメが疲れたように説明する。

「崩壊が止まったの？」

アーマルターシュは驚きと安堵の混ざった表情をした。

「ニシキギが触れていると崩壊が止まるんだ。離すと始まる」

「なんてこと……」

「僕が説明に行こう。医療センターにも話が伝わってしまったんなら、黙っていると良いことはなさそうだ」

カナメは腰を上げた。

「俺も話を聞いていて構わないかな」

正樹も立ち上がる。

「もちろん構わないよ。じゃあ、トウキ、後を頼むよ。アーマルタ

「シュ、君はどうする？」

「私ももちろん行くわよ」

無然とした表情でアーマルターシュが続いた。

＊ ＊ ＊

「あれ？　ここどこ？」

瑞樹は、普通に目覚めるように意識を回復した。ニシキギが隣で手を握って座ったまま眠り込んでいる。瑞樹の声にニシキギが目覚めた。

「目が覚めたのか？　ここは273号室の部屋だ。どこか具合の悪いところはないか？」

ニシキギが心配そうに顔を覗き込んでいた。

そうだった、第二エリアEに行ってエニシダと握手したところまでは覚えていて。突然左手に衝撃が走って金色の光がほとばしり出たことも、誰かが崩壊だと叫んだことも、でも、その先を瑞樹は何も覚えていなかった。

「私、どうしたんだろ。急に金色の光が溢れだして……」

「お前は崩壊しかけたんだ」

ニシキギが顔を顰めて言った。

「ほーかい……」

耳慣れない言葉に問い返す。崩れ壊れる……。ゆっくりと漢字が頭に浮かぶ。

「森の民オリジンタイプとマルチタイプが再生されないのは知っているな？」

瑞樹は頷く。ディモルフオセカはオリジンタイプだった。

「それは、彼らが再生したときに崩壊という症状を起こして死んで

しまうからなんだ。力を一気に放出して死んでしまう。お前はその症状と同じような状態になった」

ニシキギの言葉に瑞樹は呆然とする。

「なら……私、死んでるはずじゃない？」

『崩壊』は始まると止まらない、そうカナメから聞いたことがある。ディモルフオセカの記憶。

「理由はわからないが、俺が触れていると崩壊が止まるようだ」

「それで……なんだ」

ニシキギの手は、瑞樹の手を離さないように指を交差させて握り締めていた。

「ありがとう……。ごめんね、私のせいで、ニシキギ付きっきりだったんだね？」

「手を握っておくくらいなんでも無いことだ。あんなことになる前にあんたを連れて帰るべきだった。護衛するために行ったのにあんたを死なせては面目がたたない。あのまま崩壊していなくて良かった」

ニシキギはいつになく神妙で親身だった。

「ごめん、この前からずっとニシキギに迷惑かけっぱなしだね」

なんだかやることなすこと上手く行かない。裏目裏目に出ってしまった、泥沼に踏み込んでしまったみたいな気がする。

「気にするな」

握っていない方の手でニシキギは瑞樹の頭を軽く撫でた。

「あの……」

手を握ったままではないかならないということは……瑞樹はふと思いつく。

「なんだ？」

「あの……ね……」

やりにくいことや、行きにくいところがあるのだと、ふと思いつく。

「だからなんだ？」

「あの……この手、離したらどうなるのかな？」

「一分程何事もないようだが、五分を過ぎた辺りから金色の光がどつと溢れだすな」

「そうなの……あの……その……」

「なんなんだ？」

ニシキギはイライラしてきたようだ。

「お手洗いかはどうしたらいいのかなーって……」

瑞樹は赤くなって答える。

「なんだ、そんなことか」

ニシキギは脱力する。

そんなこと……そんなことかって……。

瑞樹は恥ずかしくて顔が熱くなる。

「ドアの前まで付いて行く。なるべく素早く事を終わらせて出てくることだな」

「事を終わらせる……」

瑞樹は絶句した。

体力ががっくりと衰えているのに気づいて瑞樹は愕然とする。足を一步前に出す作業に、これ程まで苦心したことはかつてなかったと思う。膝が震える。

「大丈夫か？」

「うん、大丈夫」

フルフルしながら歩く。年寄りになってしまったみたいだ。

言われたとおり、事をさっさと済ませて手を洗う。ところが、水に手を触れた途端、光が洗面所のシンク一面に溢れた。まだ五分は経っていないと思っていたのに、突然溢れだす光の粒子。瑞樹はあつけにとられた。

「なに？　なんでこんなに早くこんなことになるの？」

瑞樹は震える声で呟くと、呆然としたまま溢れだす金色の光を見つめた。綺麗だとは思うが、自分の体から出ていると思うと、なん

だかそれは血のように禍々しくもあり、目の前がクラクラし始める。

「おい、瑞樹？　大丈夫なのか？　瑞樹？」

ドアをドンドンと叩く音がするが、瑞樹は金縛りにあった様に身動きが取れないでいた。

「瑞樹がどうかしたんですか？」

トウキが隣のリビングから入って来た。

「トイレに行って、もうそろそろ五分経つんだが、まだ出てこないんだ。返事も無い」

そう説明している間に、ドアの僅かな隙間から金色の光が微かに漏れ始める。

「瑞樹？　開けますよ？」

トウキが声を掛けてから、ありったけの力でドアを開ける。カギが壊れてぶら下がったままドアが開いた。

「瑞樹！」

瑞樹は手を水に浸したまま硬直していた。

「水に触った途端、急に光が……私、どうしたらいいのか……」

硬直したまま目を見開いて、瑞樹はニシキギを見つめる。

「大丈夫だ、俺が止めてやる。心配するな」

ニシキギは冷静に水を止めると、濡れたままの瑞樹の手を握り締めた。光の放出量がぐっと少なくなる。トウキが瑞樹を抱え上げてベッドに連れて行った。

「あなたも瑞樹の隣で休むといい。顔色が良くないですよ」

トウキがニシキギに言った。

「しかし……」

「ニシキギも横になってよ。気になるし……」

一緒に横になった方が気になる気がするが、とニシキギは思いつつ、確かに自分も力を使っているのか、疲労が溜まってきていたので横になることにする。

「……ごめんね」

瑞樹が弱弱しく呟く

トウキはリビングが空になるのは良くないので、と部屋を出て行った。

「不思議だね、ニシキギが手を握ると光が止まった」

「だから止めてやるから心配すると言っただろ？」

瑞樹は考え込む。

もし、今日トウキに用事ができなければ、もし、トウキがニシキギでない人に同行を頼んでいたら、私はきっと、生きていない。その事実には呆然とする。

生きているのではなく、生かされている。そんな思いが頭をよぎって、瑞樹は深い溜息とともにニシキギを見つめた。

「……やっぱりニシキギは森の民だったんだね」

「正樹にも言われたんだが、やっぱりこれも森の民の力なんだろうか」

「だってそれ以外に説明できないじゃん」

「それもそうだな」

しばし沈黙が部屋を支配する。

「……私ね、アール・ダー村でシーカスに助けてもらったことあるんだ、あ、それは私じゃなくて、ディモルフオセカだけだね……」

「シーカスに？」

「うん、学校行くのにね、近道があるの、森の中の道で、でもそこは危ないから子供だけで通ることは禁止されて……」

瑞樹は遠い昔のディモルフオセカの記憶を手繰り寄せる。

その小道は何かしら不思議な力が働いている場所で、時折突然変異を起こした未知の植物が現われることがあった。有用な植物のこともあったが、異常に力を吸い取る能力を持った植物も出現するので、危ない小道だった。特に力を操ることに未熟な子供は危ないからと立ち入ることを禁止されているのだが、なにせ学校までの近道

に当たるため、遅刻しそうな時などは、親や先生に内緒で通り抜ける道になっていた。

ディモルフオセカはその朝、調子の悪くなった姉のアリッサムの様子が気になって家を出るのが遅れてしまった。それで、その小道を通ることにしたのだが……その日は運悪く性質の悪い植物が芽を出していたのだった。

「っ！」

力を吸い取られたディモルフオセカは、叢くさむらに倒れ込んだまま、あつという間に身動きがとれない状態になってしまった。大幅に遅刻していたため、既に通る人はなく、この分だと、先生たちが彼女の不在に気づいて探しに来るまでに、かなり時間がかかりそうだとディモルフオセカは絶望的になった。

その植物は、今までにない程、力の吸収に貪欲で、動けなくなるまで力を吸い取っても、まだジワジワと力を吸い取る触手を絡めて来る。もしかしたら、このままここで死んでしまうかもしれない。悲壮な気分になった時、軽快な靴音がした。

「ディモルフオセカ？ どうしたの？」

シーカスだった。シーカスの学年はその日、一時間目が休校になっていた。

「遅刻しそうになって……」

ディモルフオセカは涙ぐんだ。

「じつとして」

シーカスは拾って来た木の棒で、絡みつく植物を退治すると、ディモルフオセカを背負った。

「シーカス！ 私、大丈夫だよ。歩けるから……」

焦るディモルフオセカにシーカスは余裕の声で言った。

「無理することないよ。あれは物凄く力を吸い取るやつなんだ。前に見たことがある。今日はこのまま家に帰った方がいい。連れて帰ってあげる」

「でも、そんなの悪いよ……」

「僕も小さい時にね、よく動けなくなつて兄に背負われて帰つたんだ」

焦りまくるディモルフオセカにシーカスは笑つて言った。

「シーカスにお兄さんいたっけ？」

シーカスに兄弟がいたという話は聞いたことがない。

「いたんだ。もう会えない所に行つてしまつたけどね。大きな背中
で、僕を軽々と運んでくれた。不思議と兄に背負われると安心して
ね。もう大丈夫なんだっていつも大船に乗った氣になるんだ。僕は
他に兄弟がいないから、兄みたいな事をしてあげる人はいないんだ
けど、僕は兄貴みたいになりたくてね」

シーカスは照れたように笑つた。

「今日は少しそれらしいことをできて、ちょっと気分いいんだ。だから君は全然氣にすることないんだよ？」

シーカスはその言つてにつこり笑つた。その後、ディモルフオセカをきっちり家まで送つてくれて、母親に説明までしてくれた。小道を通つたことは内緒にしたままで。

後で姉のアリッサムに目一杯羨ましがられた。

「シーカスのお兄さんって……つまりニシキギのことよね？」

「そうだろうな、他にはいないはずだ」

「今の今まで、そのお兄さんとニシキギがリンクしてなかったよ」

「悪かったな、シーカスの兄のイメージを壊して」

ニシキギが苦笑する。

「シーカスはニシキギの力に気づいてたんじゃないかな、だから安心してもう大丈夫だつて思つたんだつて思うよ？」

「さあ、どうだかな」

苦笑して見せたが、ニシキギは自分の知らなかった弟の話を聞いて胸のうちに温かくなるのを感じていた。

『僕は兄貴みたいになりたくてね』

その言葉が何度もニシキギの頭の中でリフレインした。

第五話 穿たれた薄闇で拮抗する力(5)

「具合の悪い患者を医療センターに連れてこないで何をしているんだね、君たちは？」

ドクター・ヌンはしかめっ面で言った。

「崩壊が止まったので連れてこなかったんですよ。崩壊が止まれば問題ありませんからね」

カナメは努めて静かに説明した。

「それならばそれで、どうして崩壊が止まったのか検証が必要だろう？ 今後の医療の根幹に関わってくる一大事ではないか」

「崩壊が止まっているのは一時的で、まだ事態は流動的なので様子を見ていたんですよ」

「それを判断するのは医療センターの仕事だと思うが、いつ君は医師になったのかね」

「……」

カナメは黙り込む。

「君は議長だろう？ 議会の意見を吸い上げて、誰にも納得が行くように国を導いて行くのがその責務だと思うが、いつ議長が医療センターの仕事に口を出す権限を持ったのか教えて欲しいものだね」

会期はもう少し先で、まだ議長ではないと訂正しようかとも思ったが、それならそれで、更に、何の権限もないではないかと言われることが目に見えていたので、カナメは口を噤んだ。

「医療センターに関しては、議会でも問題になっているわよ。イベリスの件が全く進展していないこととか、再生条件を満たしていない者が再生されているのを、医療センターが見逃しているのではないかという疑惑が浮上しているわ。医療センターこそ責務を果たしているのかしら？」

アーマルターシュが反論する。

「アーマルターシュ報道官、それは証拠があることなのかね。医療

センターが違法に再生していると、治せる患者を治さないで放置しているという、そう言う君の論拠を訊きたいのだが」

ドクター・ヌンが鋭い目つきでアーマルターシュを睨んだ。

「それは……」

「そんなことでは、ハルの報道官は根拠もなしに適当な情報や噂を他国に報道していると言われても仕方がないと思うが、どうかな？」
穏やかなそれでいて酷く威圧的な言い方だった。

「……」

アーマルターシュは黙り込んだ。

「森の民の長老アドニス・アムレンシスの孫、エニシダについては調べたんですか？」

沈黙を正樹の落ち着いた声が破る。

「君は？」

ドクター・ヌンが訝しげな顔で問いかける。

「俺は瑞樹と日本から来ました。マサキ・I・カイヅカと言います。お見知り置きを。それで、エニシダのことはもう調べたんですよね。あなたの言い分だと、崩壊の原因となった森の民を調べるのも医療センターの仕事と言えるのではないですか？」

「ふん、どういう被害が起こったのか詳しくわからないうちに調べられるものか。これだから異国人には困ってしまう」

ドクター・ヌンは吐き捨てるように言った。

「つまり、被害者を見るまでは事件が起こったことを認めない、よって加害者は調べられないと言っているわけですね」

正樹は淡々と言った。

「……」

ドクター・ヌンが黙り込む。

「ならば、なにも起こってないじゃないですか。何を根拠に瑞樹を医療センターに連れてこいとあなたは言っているんですか？」

「それは……森の民から連絡があったからだ」

「その情報は確かですか？ 瑞樹の症状が崩壊だという証拠は？」

「……」

「私の国では被害者が届け出ることで事件が起こったとみなされ、警察による捜査が開始されます。ここでは逆ですか？」

正樹は薄く笑ってみせる。

「……それは被害者を見ればわかることだ」

ドクター・ヌンは苦々しげに言った。

「それは……そのとおりでしょうね。僕から見ても確かに被害者は瑞樹だ。しかし、もう遅い時間だ。瑞樹はもう休んでいます。元々あまり丈夫じゃないのでね。今日は勘弁してもらいたい。もし事件の真相や瑞樹の具合や、崩壊ですか？ その症状を止めた原因をあなたが本当に調べたいと思うのなら、明日、森の民と我々と双方が顔を突き合わせたその場で確認するべきだと思いますよ。どうしても瑞樹がこんな状況に巻き込まれたのか、俺も是非知りたいですからね。あなたのおっしゃり様だと、日本のやり方とハルのやり方には違いがあるようだし……」

正樹はあくまでも瑞樹が被害者の立場であることと、日本人であることを強調した。日本が国として、外国で事件に巻き込まれた個人に何をしてくれるかなど分かりはしなかったが、たとえば張りぼてのトラであろうと隠れられるなら何でも利用しようと思ったからだ。自分たちの後ろには国家がいる、相手にそう思わせられるだけがいいと思った。

「君はミズキ・ヒュウガの何に当たるのかね、配偶者ではあるまい？」

「俺は瑞樹の両親から瑞樹を預かっている、言わば後見人です」

「なるほど……な。君の言うとおりにするしかなさそうだ」

ドクター・ヌンは鋭い瞳で正樹を睨んでからそう言った。

＊ ＊ ＊

「明日になっても瑞樹の崩壊が止まっていなかったらどうするの？」
医療センターから引き揚げる途中で、アーマルターシュが心配そうに訊いた。

「明日になっても止まらないなら、もうそのままでは止まらないかもしれない、そういう事なんだろう？」

正樹が冷静に答える。

「もしそうなら、医学的にきちんと調べるべきだ」

「ドクター・ヌンは信用できないわ」

「そうなら、誰か信用のおける医者を手配するべきだろう？」

「ブラキカムに連絡をとろう。ナンディーに戻っているんだ」

カナメが静かに言った。

瑞樹とニシキギは手をつないだまま眠っていた。穏やかな寝顔を確認して正樹はリビングに戻った。ついさっき、アーマルターシュは自室に引き上げた。

「何か飲む？」

カナメが飲み物を用意していた。

「何かアルコール系のものを飲みたいな」

正樹が背伸びをしながら言う。カナメは軽く笑ってモルオーブンにコードを入力する。

「君、名前にアルファベットのIが入っていたけど、あれは何？」

さっきドクター・ヌンに名乗った時に入っていた。

「ハル国民として登録する時に訊いたんだ。ミドルネームはどういう時につけられるんだってね」

正樹はカナメから飲み物を受け取った。

「そしたら、特にルールはないって言われた。母方のファミリーネームだったり、親がつけただけだったり、て言われたんだ。あんたもミドルネームあるだろ？あれはどういう理由？」

「フォティニアは母方のファミリーネームだ」

「ふうん。親が付けたくて付けられるんなら、自分が付けたくても付けられるだろうって思ってたね。これから有効に使える気がしたから……」

正樹は飲み物を煽った。

「で？」

「イブキのIだ」

正樹はぼつりと呟いた。

「有効に使えるか？」

カナメは面白そうに正樹を見つめる。

「さあな、どうなるかわからない。でも使えるものは何でも使う。

俺の主義だ」

「君……本当はイブキなんじゃないのか？」

カナメは苦笑する。

「さつきもドクター・ヌンに切り返して黙らせた君を見ていてそう思ったよ。僕はああいう理屈の上に理屈を積み重ねて、相手を黙らせるやり方は嫌いだ。僕は議論の為に議論をするなんて馬鹿らしいと思っっている人間だ。しかし、そう言うのが好きな人間は五万と居る。そんな人間たちをまとめるなんて、そもそも僕には向いていない。本当なら僕は議長なんかなになるべき人間ではないんだ。僕を選んだ人はどうかしてると、自分では思ってる。イブキだったら、この『国』というモンスターをうまく導いて行けるんだろうって、君を見ていて思ったよ」

「俺だって本来そんなことは好きじゃないよ。自分の好きな機械いじりして、何か物を作り出している方が楽しい。けど、今回のことは別だ。瑞樹が関わってる。俺は物心つく前から、あいつを守るようにと自分の親からも瑞樹の両親からも言われて育ってきたからな。もう習慣みたいなもんだ」

正樹は軽く笑って溜息をついた。

「……実際に色々面倒を見てきたんだぜ？ あいつはトラブルを拾ってくる天才だからな」

正樹はぽつりと続けた。

「だから、ご褒美としてあいつのことを……自分のものにしても構わないんじゃないかって思ったことが、正直何度かある」

正樹はカナメをちらりと見てから続けた。

「だけど俺……そう言う意味では、あいつに指一本触れたことがないんだ。そう言う邪な心を持った途端に赤い夢を見るからな」

「赤い夢？」

カナメは怪訝そうな顔で正樹を見つめた。

「そ、赤い夕焼け空だったり、真っ赤に熟れたリンゴだったり、てんこ盛りに盛ったイクラ井だったりな」

「イクラ井？」

カナメが怪訝そうな顔をしたので、正樹はイクラ井の説明をする。
「で、それらの何かしら赤いものが俺の事を責めるんだ。なんでだつて、言つてな」

「イクラ井が責めるのか？ 君の事を？」

カナメは眉間に皺を寄せて問い返す。

「……あれ、あんただろ」

正樹がカナメを睨みつける。

「イクラ井が？ 僕？ 失礼な……」

カナメは体を折り曲げて笑っている。

「あんたを初めて大腦コンタクトで見た時からずっとそうじゃないかって思ってた。瑞樹があんたに抱きついたのを見て確信した。俺はこいつに瑞樹を攫われるんだってな」

「……それは無理だろう」

カナメは笑い過ぎて目に溜まった涙を拭きながら言った。

「なんで無理なんだ？」

「恐らく、僕は純粹な形で瑞樹を愛せない。だって、瑞樹の中にデイモルフオセカを見てしまうから。瑞樹だって混乱するはずだよ。彼女が仮に僕を愛したとして、それは瑞樹自身が愛しているのか、デイモルフオセカの記憶で愛しているのか分からなくなるんじゃない

いかな？」

「確かにややこしい関係ではあるよな」

正樹は考え込む。

「君が瑞樹を好きなら手に入ればいい。僕は止めない。同様にニシキギが瑞樹を欲しがるのなら、それも僕は止めない。彼は信頼できるやつだ。でももしドクター・ヌンが瑞樹を何かに利用する為に欲しがるなら、その時には僕は何を犠牲にしても全力で阻止するだろう。僕にとって瑞樹はそういう存在だよ」

カナメは弱く笑んだ。

第六話 蛇を踏む（1）

瑞樹は、暗い夜の浜辺を裸足で歩いていた。

あたり一面、墨すみを流したような暗闇で、足元さえよく見えない。たくさんの貝や海藻や死んだ珊瑚さんごの欠片が散らばっていた。それと分かるのは、時々足の裏に違和感を覚えるからだ。いちいち、その度に飛び上がって確認する。海藻なら、ちよつと顔を顰しかめて取り除き、珊瑚さんごの欠片なら海際に投げ飛ばす。そうして、また歩きだす。次に足を踏み出した瞬間、瑞樹は凍りついた。足裏に感じた感触は、海藻に似ているが異なるものだ、すぐにわかったからだ。なぜならば、それは動いていた。冷たく、湿うるっていて、蠢うごめいている。

瑞樹は、震えあがって足元を見る。そして息を呑んだ。

視線の先、足元の周り一面に夥おびただしい数の蛇へびがのたうちまわっているのだ。

瑞樹は声も出せないまま固まる。蛇へびは瑞樹の足元で蠢うごめき、とぐろを巻き、脚に絡みついてくる。

声も出せないまま凍りついて、浅い呼吸を繰り返す。

「……瑞樹、瑞樹、おい、起きろ」

誰かの声で目を覚ますと、そこは273号室のベッドの上だった。

「夢でも見たか？」

ニシキギの声だと気づいて、その声の主にしがみつく。

「蛇へび！ 蛇へびが……。ニシキギ、蛇へびがたくさん……」

「おい、落ちつけ、蛇へびなんてどこにもいない。夢だ」

「え？ 夢？」

瑞樹は我に返って辺りを見回した。寝る前と変わらないベッドの上だ。

「夢……」

呼吸が収まって行く。気づくとニシキギにしがみついたままだ。

「い、ごめん」

慌てて体を引く瑞樹を、ニシキギの腕が止めた。

「ニシキギ？」

片方の手は瑞樹の手を握り締めたまま、もう一方の手で瑞樹を抱きよせ、優しく背中を撫でる。

「怖かったのか？」

「……ニシキギが裸足で歩くなら夜の浜辺にしろなんて言うから、夜歩いてる夢を見ちゃったよ。貝殻は落ちてるし、海藻は落ちてるし、蛇の大群は落ちてるし……」

瑞樹が少し拗ねたように文句を言うと、ニシキギは軽く吹き出した。

「夢で歩けなんて言ってないぞ」

ニシキギは瑞樹の額にキスをした。そして両頬にも軽くキスをする。

「ニシキギ？」

瑞樹は体を離そうと、力を入れてみるがびくともしない。

「瑞樹……俺が以前ディモルフオセカに言った事を覚えてるか？」

アール・ダー村を飛び出して地下都市に逃げ込んだあいつを……待っていたことがあると言ったことだ。お前はあの時の記憶があるのか？」

「……覚えてるよ。ディモルフオセカは、無責任だってニシキギに責められて、随分落ち込んでいたんだよ。知ってた？」

ニシキギの弟シーカスとの結婚前夜にディモルフオセカは逃亡した。政府と親に仕組まれた結婚。ディモルフオセカはシーカスとその恋人、そして自分の為にそうしたつもりだった。実際には色々な人を巻き込んで、色々な人の人生を狂わせてしまったのかもしれない。あったが、兎に角、彼女は那么大それた行動を完遂した。惑星ハルで……もう存在しないあの惑星で……。

「……俺はあの時、ディモルフオセカにハデス駅で会えていたら、自分でもどうしていいか分からなかった、途方に暮れていただろうと言った」

「そだったね……」

でも、ニシキギとデイモルフオセカは会えなかったのだ、惑星ハルでは。

「今なら、俺はどうしていたか分かる。もしお前がハデス駅に着いたら、俺はお前を……迷うことなく連れ帰って、そして、この腕の中に閉じ込めて離さなかった。俺ならお前の崩壊を止めることができる。この俺の力がわかった今なら、お前をずっと離さなかった」
そう言うと、ニシキギは瑞樹の唇に何度もついばむように軽く唇を重ねた。

瑞樹は混乱して顔を逸らす。

「ニシキギ？ 待って、それ私じゃないよ。ハデス駅に着いたのはデイモルフオセカだよ。私じゃない。時間も場所も人もめっちゃくちゃじゃない？」

瑞樹は動揺して掠れた声で反論する。

「そうだ。だからお前に言ってる。お前だったら、そうしたと……俺は言ってる」

「な、何言って……」

瑞樹に続きを言わせず、ニシキギは瑞樹の唇に深く自分の唇を重ねた。

瑞樹は混乱した頭で懸命に考える。この人はあのハルの薄暗い地下都市でデイモルフオセカを、過去の自分を待っていたのだ。光を求める植物のように、雨を待ちわびる早苗のように……。

頭の中がじんわりと痺れて、瑞樹の体から抵抗する力が抜けて行く。瑞樹の唇を割ってニシキギの舌が侵入してきた。その瞬間、瑞樹の脳裏に赤い夕陽が射したような気がして我に返る。

「ニシキギっ、やめて、嫌だ。こんなの反則だよ？」

瑞樹の掠れた、しかし静かな声にニシキギが力を抜いた。

「嫌か？」

「……よく分からない。ニシキギの事は嫌いじゃない。でも、私は私が一番よくわからない。だからどうしたらいいのか分からない。」

「ごめんなさい」

「……悪かった。寝起きで理性がどこかに行っちゃってたらしい。俺には残念なことなんだが、崩壊が止まったみたいだから焦ってしまった。悪かったな……。でも言ったことはすべて本当だから」

そう言ってニシキギは体を起こした。

「え？　崩壊が止まった？」

「ああ、実はあんたがうなされる前から目が覚めてたんだ。試しに離してみたら十分経っても光は放出しなかった。その後はあんたがうなされてしがみついていたから分からないけどな。恐らくもう大丈夫だろう」

動揺して耳たぶまで赤くなって縮こまっている瑞樹を一瞥すると、ニシキギはドアを開けてリビングに行ってしまった。

瑞樹はベッドの上に起き上がって呆然とする。恐々と左手を見るが一筋の光も放出し始める気配がなかった。

リビングにはトウキとカナメがいた。トウキはドアの外を見るモニターの前に座っていて、カナメはリビングのソファうたたねの上で転寝うたたねをしていた。正樹は、もう一つの小部屋で眠っているとのことだ。瑞樹がリビングに顔を出すとカナメが迎えてくれた。

「良かった、崩壊が止まったんだってね」

「……うん」

なぜだろう、カナメの目を見るのが怖い。

「崩壊が止まった森の民なんて初めてじゃないか？」

ニシキギが水を飲み干して言った。

「私、森の民なのかな。森の民で誰かに触れられただけで崩壊してしまった人はいるの？」

「いや、記録ではなかったよ」

カナメは少し青白い顔で答えた。

「その件で医療センターが事情を聞きたがっているから、朝になっ

たら一度医療センターに行かなければならない」

「ドクター・ヌンのところ？ 私、あの人苦手だ」

瑞樹の言葉にカナメは苦笑する。

「たぶんここに出入りしているメンバーはみんな苦手だろうね」

「医療センターと何かあったのか？」

ニシキギが眉間にしわを寄せて問いかける。

「ああ、ちょっとね。後で説明するよ。それより瑞樹は何か飲まなくていいの？」

「……ポモナジュースが飲みたいかな」

瑞樹は、ソファアにぐったりと座りこんで言った。

「了解」

カナメが立ち上がろうとするのをトウキが止める。

「ポモナジュースなら、私が持っていきますよ」

「いや、いいんだ。君は見張っててくれ」

カナメはそう言い残すとキッチンに入って行った。カナメは大ぶりのピッチャーにポモナジュースを入れて運んできた。

「どんだけ入れてきたんだ？」

ニシキギが呆れて眉を顰める。そのポモナジュースはただのポモナジュースではないらしく、微かに鼻腔をくすぐる甘くてスパイシーな香りを漂わせていた。

「この分量でないとうまく作れないんだそうだ。よく分からないけど……ディムがそう言っていた。たくさんあるから、君も飲めば？」

カナメはピッチャーをテーブルにごとりと置いた。

「これって！」

瑞樹は注いでもらったジュースを一気飲みした。

「ああ、そんなに慌てて飲んだら……」

カナメが言い終わらないうちに、瑞樹がむせて咳きこむ。

「ほら、慌てて飲むから……」

カナメは瑞樹の背中をさすりながら溜息をついた。ディモルフォセカと瑞樹、共有しているのは記憶だけのはずなのに、この二人、

どこまで似通っているんだろうか。

「俺ももうぞ」

ニシキギはジュースを口に含んで、呆然とカナメを見つめた。

「これは……森の民の病人用ポモナジュースだ」

ポモナジュースはそのままで飲むと強いので、病気の時には少し薄めて、薄めた代わりにその他の香辛料や甘味料で味を調節するのだが、それぞれの家庭で微妙に味が異なるのだった。

「やっぱり君も飲んだ？」

カナメが面白そうにニシキギに問いかけた。

「これはオーランティアカ家の味なんだな。飲みやすい。俺んちのエウオニムス家のはもっとスパイシーで、俺大嫌いだった」

「ふーん、私、これ大好きだったけどなー」

当然のことのように一人称で語る瑞樹に、ニシキギは溜息をつき、カナメは哀しそうに笑った。

* * *

目覚めた時、273号室の部屋にはトウキ以外誰もいなかった。

「トウキ、みんなは？」

「なんだか、皆さんそれぞれに急用ができたようで、たった今バタバタと出て行ったところなんですよ」

トウキが微笑みながら言った。昨夜はこの部屋で眠って、夜通しトウキが見張っていてくれたらしかった。

「体の調子はどうですか？」

「う……ん、本調子ではないみたいだけど、大丈夫みたい。トウキ、ありがとう、昨夜はずっと見ててくれたの？」

立ち上がると頭がフラフラする。

「ソファアーに座っていてください。そんな風にフラフラしながら歩

き回られたら心配でいけません」

トウキに肩を押されてソファに倒れ込んだ。

「今、食事を用意します」

キッチンに消えたトウキを目で追うと、273号室の入口に外を見るためのモニターがあるのに気がついた。これで外から誰が来たか見てたんだ。初めてこの部屋に入った時に、カナメが待っていたように立っていたのを思い出した。

そのモニターに、突然イベリスが映ったのを見て瑞樹は悲鳴を上げた。何故なら、イベリスはズタボロの状態で廊下に倒れ込んだからだ。瑞樹の悲鳴にトウキが出てきて、同様にモニターを見つめる。「瑞樹、あなたは何かあっても、絶対この部屋から出てはいけませんよ、わかりましたか？」

トウキが厳しい瞳で瑞樹を見つめた。瑞樹は頷いたが、頭の中が痺れているように、実感が乏しい。トウキはしばらく瑞樹を心配そうに見つめていたが、ドアを開けて、イベリスの様子を見に行った。

モニターを見つめている瑞樹の目の前で、トウキが不自然な様子で、イベリスと同様に倒れ込むのが見えた。イベリス以外に誰かがいるのだ。

瑞樹の中で警鐘が鳴り響く。

「誰か……誰か、助けを呼ばなきゃ」

273号室のすべての部屋を探して回る。0コールも押してみたが、回線が繋がっていないのか、呼び出し音すらならない状態で、瑞樹は徐々にパニックに陥った。出てはいけないと言われているものの、モニターに映った状況は良くないものだった。イベリスの頭の下には血が広がっているのが見えるし、トウキは倒れた足の先だけしか見ることができない。

考えあぐねた瑞樹は、終に思い余って273号室のドアを開けて

しまった。

「イベリス！ 大丈夫なの？」

イベリスだけをドアの中に引き込めばなんとかなるかもしれない。そんな考えが甘い事だったのだと気づいたのはドアを開けた瞬間だった。

一旦開いたドアは瑞樹の力で閉められる状態ではなかった。モニターに映らないように潜んでいた人数は、瑞樹の想像を遥かに超えたもので、瑞樹にできることはイベリスに駆け寄ることだけ。

あつという間に何か薬の匂いを嗅がされて、瑞樹は気を失ってしまった。

第六話 蛇を踏む(2)

目覚めたのは薄暗い倉庫の中だった。荷物に囲まれた中に、瑞樹とトウキは転がされていた。ドアを確認すると案の定、鍵が掛っている。

「トウキ、トウキ？ 大丈夫？」

トウキを揺するが反応はなく、目は閉じられたままで、機能停止したムラサキさんにそっくりだった。

かつて、ナンディーで瑞樹を導いてくれたムラサキさんは、ニシキギが故障させ、カナメが機能停止させた。その時のムラサキさんに、トウキが重なる。

機能停止したんだろうか、トウキも別のトウキになってしまうの？ 瑞樹は、なんの反応もせずに荷物のように転がっているトウキの背中を、掌で何度も撫でた。

「トウキ……私、どうしたらいい？ 部屋を出てはいけないって言われてたのに……。私、失敗しちゃった。どうしたらいい？」

涙が溢れて来る。少し重力が違うのだろうか、それとも体調が元に戻っていないだけなのか、不快な浮遊感があった。ここはどこなのだろう。

その時、幽かな声が頭の中で響いた。

『瑞樹、聞こえますか？』

それはトウキの声に似ていた。

「トウキなの？」

瑞樹は耳を澄ます。

『そうです。あなたは植物の微弱な意識をキャッチすることができると聞いています。私が機能停止に陥った時でも、あなたとコンタクトできるようにとカナメが機能を追加しておいてくれたのです。電池が尽きるまでですが、どうやら役に立ったようですね』

「私、どうしたらいい？」

瑞樹はトウキに縋りついて耳を澄ます。

『瑞樹、残念ですが、私は、ここからあなたとは別行動をとらざるを得ないようです』

「いや！　なんで？　なんでなの？　そんなの嫌だ、私を一人にしないでよ」

トウキに縋りつく。

『機能停止させられてしまったら、私はもうあなたを守ることができません。せいぜい記憶装置を取り出されて情報源として利用されるだけです。そうなる前に記憶装置を破壊する必要があります』

トウキの言葉に、瑞樹は息をのんだ。

「それって、トウキ、死んじゃうじゃない。そんなの嫌だよ、そんなの……そんなの駄目に決まってるよ。何かほかに方法が……」
妄言のように繰り返す。

『瑞樹、私はアンドロイドです。私の記憶は他のトウキにすべてコピーされています。機能停止された直後に自動的にセーブされていますから、そこまでの記憶はすべてのトウキに伝えることが可能です。だからあなたが次に別のトウキに会った時には、初めましてではなく、お帰りなさいから始まるはずです。その言葉から始められるようにあなたは無事に地球に帰らなければならないのですよ』

トウキの言葉に凍りつく。

地球に帰らなければならない？

『我々は、かなり大型な宇宙船に乗せられています。おそらく荷物を運ぶタイプの貨物船でしょう。記憶装置を破壊した時点で、私は自分の位置とセーブデータを他のトウキに知らせることができます。だから、あなたは何も心配しないで、今から私の言う通りにしてください』

「嫌だ、トウキはトウキしかないよ、他のトウキはあなたと違う」
『瑞樹……私を困らせないでください。私はあなたにお帰りなさいを言いたいですよ』

「でも……」

『瑞樹、あなたを苦しめることで誰が一番苦しむのかを考えてみてください。恐らくそれが犯人の狙いの一つです。ほんの一瞬ですが、あなたを拉致した人の思考をつかむ事に成功しました。その人物と森の民がどのようなつながり方をしているのかはわかりません。この事件に森の民が関与している以上、あなたに危害を加えるようなことはないと考えていましたが、連中の中に、あなたを傷つけたいと考えている人間がいるのは確かです。だから私は一刻も早くあなたの居場所を知らせたいのです』

トウキの言葉が焦りを帯びる。

「そんなこと言われても……」

ぐずぐずと反論を考えているのは、自分に危害が加えられる恐怖よりも、トウキがいなくなる恐怖の方が勝っていたからだ。

『私の左胸のフラスナーを下ろしてください。そこにキーボードが出てきます。早く!』

トウキの有無を言わさない声に、瑞樹はしぶしぶフラスナーを下ろした。

『私が言う順番に番号を入力してってください、いいですか?』

瑞樹は震える指でトウキがささやくナンバーを入力して行く。やがて赤いランプが点滅を始めた。

『では、赤いランプの下ボタンを強く押してください』

「トウキ……嫌だ。できないよ、これ押したら……」

瑞樹は途方に暮れる。

『……瑞樹、それを押したら三分程時間があります。その間に私の秘密を教えてあげましょう。最後にあなたに聞いてもらいたい秘密です』

トウキがさらに幽かな声で言った。

『さあ、押して……』

トウキの静かで強制力を持った声に、瑞樹は泣きながらスイッチを強く押した。赤いランプの点滅が止まり、赤い光の丸になる。

『あなたはディモルフオセカ・オーランティアカの記憶を持っていますね。彼女の記憶の中にアイリスという女の子がいると思うのですが……』

瑞樹は頷いた。ディモルフオセカは、アイリスの記憶をカナメから見せてもらったことがあるのだ。カナメの子供のころの記憶。

『私は……トウキというアンドロイドは、元々このアイリスという女の子の為に造られたものだったんです。彼女は初めて森の民の力を獲得した人間で、その人間を守るために私は開発されました。力を使いすぎないように、有用な植物を効率よく作り出せるように、彼女の命が少しでも長らえるように、当時開発されたばかりの大腦コンタクトを組み込んで、私は造られました。激しやすい彼女の心を静め、時には高揚させ、あらゆる心理コントロールを駆使して彼女を守っていました。否、彼女を守るといふよりも操っていたという方が当たっていたかもしれません。どのトウキにもその時の記憶があるのです。ただ、私は……私だけは、実際に彼女に触れ、彼女と共に暮らした初号機のトウキでした』

瑞樹は目を見開く。

『……アンドロイドとして、してはならないことがいくつかあります。その中に、作動中に得られた情報のすべては共有であり、それを独占してはならないという項目があるのです。ですから、私たちがトウキは、すべての情報をメインコンピューターと共に共有しているのですが、アイリスと暮らしたアール・ダー村での記憶の内、どうしても共有に出来ない、したくない記憶を私は隠し持っていました。それを今、あなたに託します』

「トウキ……そんな大事なことを、人間の私に託しても……」

人間は忘れてしまう生き物だ。どんなに強烈な悲しみも喜びも時を経れば色褪せてしまう。

『人間の記憶が曖昧なのは百も承知の上です。それでいいのです。綺麗な思い出の中にも不釣り合いなものが映りこんでいたり、優しい記憶の中に残酷なものが紛れていたりするものなのです。私たちが

アンドロイドは、それさえもすべて記憶してしまう。人間なら、綺麗な思い出だけ、優しい記憶だけ、それだけを切り抜いたように記憶できるでしょう？ 私も本当はそうしたかったのかもしれませんが。だからこの記憶は共有にしたくなかった、ただの記録にしたくなかったのです。私の額に触れてもらえますか？』

トウキの額に触れた途端、瑞樹の頭の中にトウキの記憶が送られてきた。

微笑んで振り返るアイリス

大きな青い瞳から涙を零して見つめるアイリス

喜びに瞳を輝かせるアイリス

手を振りながら笑顔でトウキを呼ぶアイリス

記憶の中のアイリスは美しい亜麻色の髪で、とても大きくて愛らしい瑠璃色の瞳をしていて、どのアイリスの瞳にも、優しく微笑むトウキが映り込んでいた。

次の瞬間、小さな衝撃と共にトウキから送られてくる映像が途絶えた。瑞樹はトウキにしがみついたまま号泣した。アイリスの瞳に映るすべてのトウキが語っていた。

『アイリス、愛してる』と……。

「トウキの嘘つき！ 他のトウキとあなたは同じものなんかじゃないじゃない。アイリスを愛してたのは、あなただけじゃない。他のトウキは別のトウキだよ……。トウキ、ごめん。ごめんなさい。私のせいだ、私のせいだあ」

瑞樹はトウキに縋りついたまま、いつまでもいつまでも泣き続けた。

第六話 蛇を踏む(3)

273号室に人が集まっていた。ドアの前の廊下の上には、赤い染みが広がっている。それが血液ではないということはすぐにわかった。

「誰かが瑞樹をおびき出したんだ。その為のまがい物の血だろう」
カナメが呻く。

「誰がこんなことを……」
アーマルターシュが絶句する。そこへ、緑目のトウキが駆けつけてきた。

「今、トウキ001から信号が送られてきました。宇宙空間からです。位置と方角から推測して、火星かナンディーに向かっていると思われます」

皆が驚愕の表情で緑目トウキを見つめた。

「トウキ001はどういう状態で信号を送って来たんだ？」

ニシキギが噛みつくように問いかける。

「機能停止した状態で、記憶装置の破壊を行ったようです。その信号でした」

冷静な声でトウキが答える。

「最悪の事態だな」

ニシキギが呻く。

「どういふことなんだ？」

正樹が問いかけた。

「瑞樹はもう地球にいない。しかも、守ってやれるものが何もない状態で拉致された。そういうことだ」

カナメが難しい顔をして言った。

「トウキ、アーマルターシュ、至急、今現在、地球のハル共和国から姿を消した者の確認をしてくれ。それからニシキギ、ナンディーとアグニシティに連絡を取って、入港するすべての船のチェックを

するように手配してくれ」

カナメの指示に、それぞれが頷くとすばやく行動に移った。

「正樹、申し訳ない。こんなことになってしまつて……調査が済み次第、我々はナンディーかアグニシテイに向かうことになると思う。君はどうする？」

「もちろん、行くさ。その前に幾つか俺自身がしておきたい事があるから、出発が決まったら連絡をもらえるかな……ああ、そうだ、もし、俺の準備が出発までに間に合わなかったときは、後で追いかけるってことは可能か？」

「君が望むとおりにできるように手配しておくよ」

正樹の言葉に首を傾げながらもカナメはそう言った。

「助かる」

正樹は頷くとどこかへ消えて行つた。

＊ ＊ ＊

ニシキギが出発の準備のために自室に戻つた時、一人の女性がニシキギの部屋で待っていた。

「あんた誰だ？」

胡散臭いものを見るようにニシキギは顔を顰めた。

「私はアイリス、あなたの配偶者よ」

そう言つて微笑んだその女性は、キャメル色の髪に空色の瞳、傍げに見えるのはその女性が瞳と同じ淡い青色の服を着ているからだろうか。ニシキギはしばらく考え込むようにアイリスと名のる女の顔を見つめてから、何も言わずに奥の部屋へ入つて行つた。

「何をしているの？」

女はニシキギの後に続いた。

「あんたには関係がない」

「関係がないわけがないでしょう？聞こえたの？私はあなたの妻なのよ」

大脳コンタクトを装着し始めたニシキギの前に回り込んで、女はニシキギの前に立った。艶然と微笑んでニシキギの青い瞳を覗き込む。

「……一つ言っておこう。あんたが配偶者だろうがなんだろうが俺は全く構わないが、ここにいるつもりならば、俺の邪魔をするな、勝手に俺の物に触るな、俺が話しかける以外はしゃべるな、以上だ。このルールに従えないのならば、今すぐ出て行ってくれ。関係は解消だ」

ニシキギは木で鼻をくくった様に言った。

「気にならないの？私の事が……何歳なのかとか、何の職業に就いているのかとか、ハル脱出の時にはどこにいたのかとか……」

女は多少うろたえ気味に言葉を並べる。

「今、忙しい、事情聴取ならば後でゆっくりしてやる。兎に角、この部屋から出て行ってくれ」

ニシキギは煩そうにドアを開けて、仕草で出て行けと示した。女は少し呆然としたようにニシキギを見上げたが、すぐに口を引き結んで部屋を後にした。

隣のリビングで、女は両手で顔を軽く叩いてみる。ぐずぐずと崩れそうになる気持ちを立て直したかった。ここはどこなんだろう、私は一体何をしているんだろう。頼みのニシキギは、思ったよりも感じが悪く、思ったよりもそっくりだった……あの人に。私をここに送りこんだ人、ドクター・ヌンは、ここが地球という惑星なのだと言った。惑星ハルは、もう宇宙のどこにも存在しないのだと彼はそう言った。

女は溜息をつく。信じられるわけがない。

再生されてすぐ連れて行かれた地上は、アール・ダー村のように光に溢れていた。ただ、そこがアール・ダー村ではないとすぐにわ

かったのは、四方を海という水に囲まれていたからだ。水は青く澄んでいて塩の味がした。アール・ダー村にあったのは湖だけだった。海……子供のころに教えられた海。海にかかった虹を見ると幸せになれるという言い伝え。でもハルで海など見たことが無い、どこにあるかも分からなかった海。海自体が伝説ではなかったか？自分が、どこか知らないおとぎ話の世界に拉致されたように感じる。

ニシキギは大腦コンタクトで森の民の情報を引き出した。ネモフイラ・メンジーシー、頭の中に一人の女性のイメージが現われる。森の民、リセプタータイプ、二十歳、彼女はハル脱出の二年程前に行方不明になっていて、翌年、つまり脱出の一年前に死亡していた。次に自分の配偶者の欄を確認する。アイリス・エウオニムスのイメージが出てくる。

アイリス・エウオニムス、一般人、二十歳、職業は植物学者、旧姓の欄が空欄になっていた。身元引受人の欄にG Aという記号が書き込まれている。ニシキギは額にかかる前髪を掻きあげながら、深い溜息をついた。

第六話 蛇を踏む（4）（前書き）

この回は後半に少々痛い表現があります。苦手な方はご注意ください。
い。

第六話 蛇を踏む（4）

瑞樹はドアの向こうに複数の足音が近づいてきているのに気づいていた。全く反応のなくなったトウキにしがみついたまま、ドアが軋きみながら開くのを見つめる。

入って来たのは二人。一人はドクター・ヌンで、もう一人は、どこか見覚えのある顔だったが、右と左の瞳の色が違うオッドアイの男で、瑞樹はオッドアイを見たのは初めてだった。

ドクター・ヌンは面倒臭そうに瑞樹をトウキから引きはがすとトウキの後頭部を開いた。

「おい、トウキの記憶装置が焦げちゃってるぞ、お前がやったのか？」

ヌンは舌打ちをすると瑞樹を鋭い視線で睨みつけた。瑞樹は竦みあがる。一瞬目の前の景色がぐらりと揺れたような気がした。

「おやおや、ヌン。君ともあろう人が……この地球人を見くびっていたようだね？」

オッドアイの人は逆に楽しげに口を挟んだ。

「ドクター・ヌン？ なんであなたがここにいますか？ ここはどこです？ 私をどうするつもりなんですか？」

瑞樹は矢継ぎ早に疑問を口にした。自分を誘拐するのは森の民のはずではなかったか。瑞樹は混乱する。苦手なドクター・ヌンがいることが、何かもつと悪いことに巻き込まれたのだということを知らせている気がした。

「そんなことに簡単に答えがもらえるようならば、お前の末路は知れたようなものだぞ」

ドクター・ヌンは意地悪そうに鼻で笑った。

「……簡単に答えないってことは、無事に帰れる望みがあるって言うてるんですか？」

瑞樹は震え声で確認する。

「君次第かなー」

オッドアイの男が間延びした声で答えた。

「ところで、僕、君に会ったことがあるんだけどー、覚えてる？」

「どこで会いましたか？」

瑞樹は怯えてオッドアイの男を見上げた。穏やかなしゃべり方とは裏腹に、その瞳には何か荒^{すさ}んだものが潜んでいた。捨てられて野性を取り戻したシェパードのような、あるいは獲物を追い詰めた時のハイエナのような、他者を傷つけたい、傷つけることが楽しいと考えている目。

「ヒントお、ハル共和国のどこかー」

男は悪戯っぽく微笑んだ。

「……」

オッドアイの人を見たのは始めてだ。目の色を隠していたんだろうか、サングラスを掛けていたんだろうか、それとも変装をしていたんだろうか、瑞樹は考えを巡らせる。

「はい、時間切れー」

男は腰のポケットから鋭利なナイフを取り出した。瑞樹は目を見開く。

「あの炎天下に、親切に車に乗せてあげるって言ったのに、覚えてないんだ。罰を与えなきゃね？」

その男は微笑んだまま瑞樹の髪を掴むと、一房、躊躇無く切り取った。切り取られた栗色の髪が床に散乱する。瑞樹は声も出せないまま震え上がった。

「僕はターウ・エル、思い出したかな？」

瑞樹ははっとしてターウのオッドアイを見つめる。

「あの時は、サングラス仕様のブラウンコンタクトレンズをつけていたからね。それでわからなかった？」

ターウは面白そうに瑞樹を見つめる。

「どうして……」

「どうして僕がここにいいのか訊きたいの？」

ターウのナイフが瑞樹の首にかけられている銀色の鎖を掬い上げる。鎖の先にはハル玉が付いている。カナメが以前ナンディーでくれたものだ。これは地球玉と対になっていて、もしかだ捨てられていないならば、カナメがそれを持っているはずだ。もしかしたら今はアーマルターシュが持っているのかもしれないけど。瑞樹は唇を噛む。

ターウはハル玉を、ナイフを持っているのとは反対の手で握り締めると、鎖を断ち切った。

「君をね、こんな風にしがらみから断ち切ってあげようと思ってね」
瑞樹は小さく息を呑んだ。

「おい、俺はもう行くぞ。トウキが使い物にならないならここにいてもしょうがない。虐めるのはほどほどにしておけよ。絶望させるとそいつも使い物にならなくなって森の民からギャラをもらえなくなるぞ」

どこからかヌンの声が響いた。

「分かってるさ」

ターウは微笑んで、どこかにいるヌンに向かって返事をした。

「次の質問はなんだったかな、ここはどこか……だったかな？」

ターウが楽しげに続けた。

「ここはね宇宙空間。次の質問は……」

すべての質問に答えるつもりらしいターウを瑞樹は震えながら遮った。

「も、もういいよ。もう訊きたいとは思わない。私、聞きたくない」

瑞樹は両手で耳を塞いだ。

「聞いておいた方がいいよ。さもないと後で後悔するかもしれないだろう？だって、君はもう無事で、地球になんて帰れないんだからさ」

ターウはにっこりと笑った。

「どうして……」

瑞樹は呆然とターウを見上げる。涙が勝手に流れ出して止められなかった。ただ、ただ、怖かったからだ。

「いいことを教えてあげようか、僕の本当の名前はターウ・エルなんかじゃないんだ。本当の名前はね……」

「いやだ、聞きたくない!」

瑞樹は耳を強く塞いだ。聞いたら、もう元の場所に戻れない気がした。

その手を引きはがすようにして、ターウが耳元で囁く。

「僕の本当の名前はね、セルシス・G・フォティニアって言うんだ」「フォティニア?」

その名前に聞き覚えがあった。

「そう、聞き覚えがあるかい? ちなみにGはグラブラ、これは僕の名前から消去してしまいたかったんだけど、元々名前にあるものから削るのは手続きが煩雑らしいんで止めた。この名前にそこまで労力を割くのも癪に障るからね」

耳元で囁くように言われた言葉に、瑞樹は凍りついた。トウキの言葉が頭の中で響く。『瑞樹、あなたを苦しめることで誰が一番苦しむのかを考えてみてください。恐らくそれが犯人の狙いの一つです』

カナメの姓はグラブラ、ミドルネームのPはフォティニアではなかったか。瑞樹は混乱したまま、瞬き一つできずに震えていた。

つながりが何もない人を対象にした犯罪は、通り魔的犯行と言われて恐れられるが、そもそも犯罪というものは、つながりがある人に向けられたものの方が圧倒的に多い。特に血縁で揉めることはよくある事だ。

「君をどうするつもりなのか……だったよね?」

セルシスは瑞樹に言い聞かせるようにゆっくりと言った。

「君がね、何一つ考えられないようにしてあげる。君はただ存在するだけで、何一つ自分の意志でできないようにすることが僕の仕事

なんだ。なかなか腕がいいんだよ？」

セルシスは狂気じみた微笑みを浮かべた。瑞樹は、見てはいけない物を見るように恐る恐るセルシスを見つめる。

「そうだ、トウキを壊した罰をまだ与えていなかったな……」

セルシスは突然思い出したように瑞樹を意地悪そうに見つめた。

「あの用心深いヌンでさえ、地球人である君がトウキを破壊できるなんて思わなかったようだね。誰に入れ知恵をされたの？ カナメかい？」

「……」

やっぱりこの人はカナメの事を知っているのだ、ならば私を傷つけたかと思っっているのはこの人に違いなかった。トウキの言葉を信用するならば、この人は最終的にはカナメを傷つけたいと考えていることになる。どうすればいい？ どうすればカナメにまで被害を及ぼさずに済む？ 捕まったのがアーマルターシュではなくて良かったと思う。何かの勘違いで自分を拉致したのだということが分かれれば、その段階で交渉の余地ができるかもしれない。

そんなことを、ごちゃごちゃと考えていると腹部に衝撃が走った。酷い痛み息が止まる。手を腹部に当てて、頭の中が真っ白になった。腹部は生暖かい液体で濡れていて、それは手に付着して鉄錆の匂いを辺りにまき散らした。刺された？

「色々考えたって無駄なんだよ。下手の考え休むに似たりというだろう？」

セルシスは手に持った血濡れたナイフをぺろりと舐めた。

「どうして……」

瑞樹は、がっくりと床に膝をついた。床一面に赤い色が広がる。

「罰だよ、そう言ったはずだけど。これから先、僕たちの妨害をしたり、命令を聞かなかったり無視したり、反抗したりすれば、僕は容赦なく罰を与えるよ。覚えておくといい」

「嫌だ、触らないで、やめてえ！」

左手を掴まれて、瑞樹は慄いた。まだ何かする気だ。瑞樹の本能

が警告を発する。

セルシスはニヤリと嗤うと、瑞樹の左手にナイフの刃を当て一気に引きぬいた。左手に衝撃が走って、左手の掌からぽたぽたと血が流れ落ちる。瑞樹は声にならない悲鳴をあげる。痛みは、雷鳴のようにならやってくる。

「痛い！痛いよ、やめてえ……」

手を引こうとしても、セルシスが掴んでいてびくともしない。ついこの間、金色の光をまき散らした左手は、今度は赤い血をまき散らしている。瑞樹は苦痛に震えながら涙を零した。

次の瞬間、瑞樹は背中にも衝撃を感じて意識を手放した。

『助けて！カナメ！』最後に頭に浮かんだのはその言葉だった。

第七話 虚空を駆けるネメシス(1)

(ネメシスⅡ復讐、義憤の神)

カナメとトウキとニシキギとアーマルターシュが273号室に集まっていた。トウキの瞳の色は紫、破壊されたトウキの代わりに読心の力を与えられたトウキだ。

カナメは憔悴した様子でリビングのテーブルの前に立っていた。テーブルの上には地球玉が乗せられている。

「さっき、メッセージが送られてきたんだ」

地球玉とハル玉は対になっていて、近距離にいればお互いに反応し合って蛍光を発するが、それ以外に通信機として使う事が出来た。しかし、それも近距離に限られているはずなのだが、何か細工をされたらしく、瑞樹と一緒に宇宙空間にあるはずのハル玉からメッセージが送られて来たのだった。地球玉はメッセージを披露した。

「はじめまして、と言うべきだろうね、カナメ」

低すぎない男の声だった。

「君の大切なエメラルドを預かっているよ。預かっているとって返す予定はないんだけどね。どうするつもりか、君は知りたいだろうね。そうだな、教えてあげてもいいかな」

男は少し狂気じみた様子でクスクスと笑った。

「君は壊すのが得意だったよね。今もそうなのかな。実は僕も得意なんだ。でも君と違う所は、僕が形の無い物を壊せるという事だ。楽しみだな。君のエメラルドを粉々に壊す瞬間がね。きれいに粉々にしてあげるよ。こんな風にね」

何か固いものが碎かれる音がして、メッセージは途絶えた。ハル玉が碎かれた音のようだった。

「こいつは誰なんだ？」

沈黙を破ったのはニシキギだった。

「分からない。分かったのは、瑞樹が拉致されたのは、僕のせいだということだ」

カナメは拳を握りしめた。

「恐らく、それは瑞樹を拉致した理由の一つにすぎないと思います。トウキ001から送られて来た信号の中にも、瑞樹を傷つけることで、誰かを傷つけたいと考えている人間がいるようだとありますが、それは理由の一つにすぎないと結論を出していたようです」

トウキが補足した。

「ハル共和国から消えた人の調査なんだけど……」

アーマルターシュが少し逡巡してから言葉をつないだ。

「ドクター・ヌンと幾人かの看護師、それから森の民の長アドニス・アムレンシス、エニシダ・アムレンシスと……イベリスも消えているの」

アーマルターシュの声が震えていた。

「エニシダが……」

カナメは眉間に皺を寄せる。

「あの野郎が瑞樹に触れたら……」

ニシキギが呻く。

「……もしかしたら手がかりになる情報を得られるかもしれない。もう手段は選べない」

ニシキギが呟いて、周囲が何事かとニシキギを見つめる。ニシキギは、無言のままドアの外に出ると、一人の女性を連れて戻って来た。

「この人は誰なの？」

アーマルターシュが怪訝そうに問う。

「アイリス・エウオニムスだ」

名前を聞いてカナメは目を見開いた。

「さっき俺の部屋にやって来た。俺の配偶者らしいんだ」
皆が目を見張る。

「君、配偶者がいたのか？」

カナメが驚いて訊いた。

「以前ナンディーで、俺が、配偶者がいるのかどうか把握していないし、確認もしていないと言ったら、あんたは今のようにな。俺、あの後確認したんだ。ハル脱出時、俺に配偶者がいたかどうか。その時には俺の配偶者の欄は空欄だった。ところが、こいつが現われた。さっき確認したら、配偶者の欄にこいつがいた。さあ、こいつは誰だと思う？」

そう言ってニシギは女に向かい合った。

「お前はアイリスなんて名前じゃない、そうだろう？」

ニシギは女を睨みつけた。

「君……ニシギの籍に入ってエウオニムスになったんだよね。旧性は？」

カナメが問いかける。

「……」

女は無言のまま、追い詰められた草食獣のように目を潤ませた。

「小細工をして、お前を俺の配偶者に仕立てたのは誰だ？」

ニシギは噛みつかんばかりに詰め寄った。

「ちよっと、やめなさいよ」

アーマルターシュが女を庇った。

「ねえ、あなた、本当の名前はアイリスなの？それくらいは教えてくれないんじゃない？」

アーマルターシュの穏やかな質問に、女は首を横に振った。

「アイリスという名前の方がいいって、ドクター・ヌンが。アイリス・エウオニムスの方が安全だって……」

女は泣きだした。

「やはり、ドクター・ヌンか」

ニシギは吐きだすように言った。アーマルターシュが、優しく本当の名前を言うように促していたが、女は泣くばかりだった。それを見たニシギはしかめっ面でアーマルターシュを止めた。

「そんな女の名前なんて聞いたって仕方がない。あいつらが向かった先とか、目的とか、この声の主は誰かとか、お前、何か知っていることはないのか？」

ニシキギはイライラと問いかけた。

「知らないわ。エメラルドって何のことなの？さっぱりわからない」地球玉のメッセージを聞かされた女は言った。

「粉々に壊す形の無いものって何なの？私は何も知らなかったわ。ドクター・ヌンが何をしようとしているかなんて、何も知らない……」

女は更に泣き始めた。

「こいつは、俺たちの脚を引っぱる為だけに送り込まれた捨駒だな。こいつのことは調べるだけ無駄のようだ。こいつの本名はネモフィラ・メンジーシー、リセプタータイプの森の民だ。ハル脱出の二年程前行方不明になっている。俺の弟、シーカスの恋人だった女だ。弟の恋人など、地下都市にいた俺が知るはずがないと考えたんだろう。アイリスの名前を名乗った理由は分からないがね」

ニシキギの言葉に女はびくりと肩を震わせ、女以外の人間は、一斉に目を見開いてニシキギを見つめた。

「……アイリス・エウオニムスという名前は、僕を躊躇わせるつもりだったんだと思うよ」

カナメが口を挟んだ。

「アイリス・エウオニムスは、初代森の民でとても強い力を持った人だった。僕の……大切な友人だった。もしかしたら、ニシキギ、君の親戚筋に当たるのかもしれないね……」

カナメの言葉にトウキが哀しそうに項垂れた。

「お前は利用されていたんだ。もう気づいているんだろう？」

ニシキギはネモフィラをねめつけた。ネモフィラはさめざめと泣き続けた。

「もしかやと思って、メッセージの声の声紋を今検索してみたんです

が、最近、トウキ001がこの声の人物に会っていますね」

トウキの声に皆が振り向いた。

「誰だ、それは」

カナメがもどかしげに先を促した。

「ハンサビーチの入口で瑞樹に話しかけてきたターウ・エルという人物です」

トウキは部屋の白い壁面に映像を映し出して、ターウ・エルと瑞樹が話している場面を見せた。トウキの瞳がプロジェクターの青白い光を放つ。

「こいつよ!」

アーマルターシュが叫んだ。

「イベリスの事件の黒幕と言われているの」

「ターウ・エル? 神Xってか? ふざけた名前だ。本名じゃないんだろう?」

ニシギギが吐き出すように言った。

「調べておきましょう。検索には少し時間がかかりそうですから」
トウキが静かに言った。

* * *

カナメは自室の部屋に無言で立ち尽くしていた。あらゆるものが散乱していた。一つ一つ拾い集めてダストシュートに放り込む。

地球玉にメッセージが届いていることに気づいたのは、この部屋でだった。初めてメッセージを耳にした時の衝撃と戦慄を思い出す。拾いあげた小型大腦コンタクトの破片を握りしめ、その手から血が滴り落ちる。ハル玉からのメッセージを一人で十回聞いた。頭の中の痺れが治って事態を把握するまでに、それくらい聞く必要があったからだ。誰かに聞かせる時に冷静でいられるようにさらに十回

聞いた。一言一句違わずに言えるくらい聞いた。その作業を終えた頃には、部屋がこのような状態になっていたのだ。心の奥底から立ち上ってくる怒りが体中に充満する。

あのメッセージを聞いて、誰も口にはしなかったが、勘のいい者ならば気づいていたのではないかと思う。カナメはあの声に聞き覚えがあった。それは……他ならぬ自分の声だ。

ほとんどの散乱物を捨て終えるとカナメは静かな怒りを纏ったまま大脳コンタクトに向かった。敵の正体を見極めるために。

第七話 虚空を駆けるネメシス（1）（後書き）

読んでくださってありがとうございました。

実は、人名のターウ・エル、ヌンと酒名のラメデム、メムシンは最古の文字と言われるカナン文字を適当に組み合わせて作ったものなのです。だからニシキギはターウ・エルのことを「神X」だと言ったわけですが、文法上正しい使い方ではないと思います。あくまでもテキトーです。わー、にげろー 招夏

第七話 虚空を駆けるネメシス(2)

(ネメシスⅡ復讐、義憤の神)

瑞樹は、堅いベッドの上で目を覚ました。

「あれ？私、死んだんじゃないかったっけ……」

呆然と起き上がって腹部を確認する。刺さった痕も血で汚れた様子も無い。確か髪を切られたはず。髪を手で撫でてみるが、髪も切られていなかった。手の傷も確認する。左手も何事も無く、少し冷えた頬に当てると温かくてほっとした。

「ここ、どこだろ」

気を失う前にいた倉庫のような場所とは違って、きちんとした部屋になっていた。ドアを確認するがやはり鍵がかかっている。しばらくすると靴音がして、誰かがドアの向こう側に立っている気配がした。しかしドアを開けて入って来る様子がない。

瑞樹は不審に思って、ドアの前まで静かに近寄ると気配をうかがった。

「誰か居るの？」

小さな声で訊いてみる。ドアの外で誰かが動いた気配がした。

「瑞樹……」

それは弱弱しい声だったけれど、イベリスの声だった。

「イベリス？」

瑞樹は安堵の声を上げる。

「イベリス、無事だったんだね、良かったー。怪我は大丈夫なの？」

「……ごめん、怪我なんてしてないんだ。あれは君を部屋からおびき出すための……演技だった」

「え？」

瑞樹から表情が消える。

「僕は警告したよ。日本に帰れて。どうして帰らなかったの？」

イベリスの声に少し怒気が混ざる。

「イベリス？」

イベリスはこうなることを知っていたんだろうか、あんな前から……。

「帰らなかった君が悪いんだ。君が悪いんだからね！」

イベリスは怒気を含んだ、でも震える声で瑞樹をなじると、走り去って行った。

「イベリス……」

瑞樹は悲しい気持ちで名前を呼んだ。イベリスがいるということ、やはり森の民が瑞樹を拉致したということなのだろうか。だったらドクター・ヌンとターウは一体何なのだろう。二人も森の民なんだろうか……。

ターウの本当の名前は：セルシス・G・フォティニア。順序は違うが、カナメと同じファミリーネームを持っている。親戚なんだろうか。瑞樹は深い溜息をついた。

* * *

ネモフィラはニシギギに付いてきて、部屋に戻ってもまだ泣き続けていた。

「鬱陶しい、泣くなら出て行け！」

ニシギギは煩そうに云い捨てる。

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

ネモフィラは泣きやみもなかったし、出て行く様子も無い。ニシギギは溜息をついて別の部屋へ入ってドアを閉めた。

* * *

「ネモフィラ、ごめん、しばらく会えそうにないよ。ディモルフオセカはまだ見つからない。もしかしたら……」

シーカスは辛そうに眉間に皺を寄せた。

「もしかしたら、彼女はもうアール・ダー村にいないかもしれない、公安が来てそう言ってた。まさか彼女がこんなことをするなんて……少しも考えていなかった……」

シーカスは、それ以上何も言わなかったけれど、ディモルフオセカが失踪したその原因が自分たちであることを言外に示していた。

「ねえ、私たちはどうなるの？もう会えないの？ディモルフオセカが見つかったも見つからなくても、もう会えないの？」

ネモフィラは泣きながらシーカスに問いかける。

「わからないよ。どうしたらいいか、分からないんだ……」

シーカスはぽつりと言った。

当時、ネモフィラとシーカスは誰もが知っている恋人同士だった。

ディモルフオセカは明るくて、どちらかと言えばお転婆^{てんぱ}。ネモフィラが木陰で儂く咲く花ならば、ディモルフオセカはカンカン照りの日向で生き生きと輝く花だった。シーカスから見れば、ディモルフオセカは妹のような存在だったかもしれない。

政府と親の意向でディモルフオセカとの結婚が決まった時、シーカスが真っ先に心配したのはネモフィラの方だった。

ネモフィラは小さい頃にいた病気のせいで、子供を望めない体になっていた。だから森の民の人口を確保したい政府と、孫を望んでいた親は、ネモフィラとの結婚を認めなかったのだ。

ネモフィラが可哀想で仕方がなかったシーカスは、ディモルフオセカとは結婚前夜まで、ろくに口もきかず、彼女を放っておいてしまった。周囲から冷たい目で見られているとか、意地悪をされるとか小耳に挟んだことはあったものの、彼女なら大丈夫だろうと

シーカスは高をくくっていたのかもしれない。

それはネモフィラも同様だった。体が丈夫で、将来を約束されているディモルフォセカ。兄弟も、親も、丈夫な体も、なんでも持っているくせに、どうして私からシーカスまで取り上げようとするのだろう。

ネモフィラには兄弟がなく、母親は三年前に亡くなっていた。元々病弱な家系だったのだ。だから結婚するまではと、ネモフィラはシーカスがディモルフォセカと話をすることを嫌がった。シーカスの心は自分にあるのだと、わざとディモルフォセカに見せつけるような行動も取った。そして、その結果、ディモルフォセカは失踪したという訳だ。

これは自業自得なんだろうか？ネモフィラは、あの日からずっと自分に問い続けていた。

ディモルフォセカがとった行動が、自分に対する当てつけなのではないかという気持ちを、どうしても払拭^{ふっしょく}することができないでいたのだった。

何故なら、あの日からシーカスが思いつめているのは、自分の事ではなく、ディモルフォセカの事だということが明白だったから。

声を掛けられたのはそんな時だった。

「おまえ、名はなんという？」

アール・ダー村では見かけたことがない人だった。薄い褐色の瞳、光の加減で金色に見えるその人は、地下都市ハデスから来たのだと言った。

初めはただの好奇心だった。地下都市の人と話すのは初めてだったから。その人は調査の為にアール・ダー村に来ていて、すぐに地下都市に帰るのだと言った。その人の名前はヌン、医者をしていた。

「私も地下都市に行きたいな」

すっかり打ち解けて親しくなったヌンにネモフィラは言った。

「地下都市に行って何をする？許可なしに地下都市に行けば、森の民は罰せられるだろう？」

ヌンはネモフィラだけには比較的優しげな態度をとった。

「ここにも何も無いわ。望むような結婚もできないし、仕事と言えば植物の世話だけ、何の楽しみもない。こんな村で私は一生を終えるのかしら」

呟くように言うネモフィラをヌンは猛禽類もうぎんるいの瞳で見つめる。

「地下都市とて同じだ。黙々と働き、黙々と一生を終える。惑星ハルに生まれた者の宿命だ」

ヌンは言い放った後、少し表情を和らげて続けた。

「しかし、今の政府のやり方を変えたいと考えている者はいる。お前のように、自分の人生に不満を持っている者たちは地下都市にもいるからな。俺はそんなやつらをたくさん知っている。お前も地下都市でその者たちと共に闘ってみるか？」

ヌンの言葉には、何か危険な匂いがあつて、でもワクワクするようなスリリングな響きがあつた。

「何をすればいいの？私にできることがあるかしら？」

ネモフィラはヌンの話に飛びついた。ヌンが地下都市に帰る時のガイアエクスプレスに忍び込んで地下都市に潜入したのだ。

そこでネモフィラを待っていたのは、不満分子である人たちとの出会いと、鬱憤うっぴん晴らし、そして馬鹿騒ぎの果ての悪夢……それだけだった。ネモフィラは利用されるだけされて、なんの説明もなしに分解されてしまったのだった。

そして、目覚めれば、このおとぎ話の中にいたという訳だ。利用されたのかもしれないと思っではいるが、頼るものはヌン以外になかった。

そのヌンに、シーカスの兄に会いたいかと問われて驚愕した。シーカスにお兄さんがいたなどとは知らなかったから。

期待に胸を膨らませて部屋で待っていたあの時間だけが、この世

界で味わった唯一の幸せな時間だった。

第七話 虚空を駆けるネメシス(3)

(ネメシスⅡ復讐、義憤の神)

ドアの横の壁を背にして、どっかりと座りこんだまま、エニシダはウトウトと眠りこんでいた。瑞樹は呆れてエニシダを見つめる。眠いのならば、きちんと自分の部屋のベッドで眠ればいいのと思う。

その日、エニシダは朝早くからやってきて、その場所に陣取った。寒いわけではないのに、手には革の手袋を嵌めている。

「いいか、ドアには近づくなよ。間違えて俺に触れようものなら、この前みたいになるからな」

エニシダはそう言って座り込むと、すぐに眠りこんだのだ。

「ドアには鍵が掛ってるのに、なんでエニシダがそこに座る必要があるわけ？」

居眠りしていたエニシダが目を覚ましたので、瑞樹は訊いてみた。「ここにいれば、瑞樹の力を被曝できる。触れさえしなければいいんだからな。俺だって馬鹿じゃない、金の卵を産む雌鶏を殺すなどしたくないからな」

そう言ってエニシダは、にやりと笑った。悪ぶっているが、元々の人柄の良さが出ているのだろう、セルシスやドクター・ヌンに比べると、ちっとも怖さがない。

「森の民は力にばかり拘こたわっていいないで、エリアEの植物の世話をした方がいいと思うんだけど……」

瑞樹はため息交じりに言う。

「おまえ、第一エリアEに行ったんだろ。だからそんな事を言うんだ」

エニシダは瑞樹を見つめた。

「行ったよ……」

「あいつらは植物の世話を几帳面なくらいにする。だから森は整って見える。だから見た目は整然として見えるかもしれない。だけどそれは、森の民にとってのいい仕事じゃない」

エニシダは言葉を慎重に選びながら言った。

「……」

アール・ダー村では、泥にまみれて植物の世話をすることは、力を持たない下級な森の民がすることだった。あるいは子供が罰として先生に言いつけられる類の仕事。森の民の中に、そう言った作業に対する侮蔑のような感情があることを、瑞樹はデイモルフォセカの記憶で知っていた。

「力を使わないで、使えないで、何の為の森の民だと思う？ 地球人のあんたには分からないことだろうけどね」

エニシダは小さく溜息をついた。

「……私は地球人で、日本人で、高校生で、女の子で……だから今は勉強をして、世界の色々な事を知る必要があるって思ってる。女の子なんだから、いつかは結婚して子供を産んだりするのかな、なんて思うこともあるけど、先の事は何にも分からない。自分が何者になって、どんな能力を身に付けて、社会に、あるいは世界にどんな役に立つのかなんて、この地球上では誰も教えてくれないし、誰も押しつけない。ま、親は期待を持って多少口出することはあるだろうけど、結局は本人の意志だから……。ここでは決まってる未来を自分で決めていかなきゃならない。それは個々に課せられた義務であり、同時に権利でもあるって私は思ってる。だからここは……ハルとは違う」

瑞樹はエニシダを見つめた。

酷い言葉だと思う。森の民はハルの現状を知らずに、その未来を守るために力を尽くしてきた人たちなのだ。義務だけを背負わされて、がむしゃらに走り続けた人たちなのだ。ハルは、もうないのだと……守るべきものは、もうないのだと告げる事が、どれほどこの人たちに痛みを与えるのか、デイモルフォセカの記憶がそれを教え

てくれる。それでも、瑞樹は続けた。

「地球は、確かに環境悪化が問題になっているけれど、今すぐ出て行かないかならないほど切羽詰まった惑星じゃないよ。植物も動物も太陽と地球が養ってて、人間の介入をそれほど必要としない。むしろ、人間が手を出さない方が美しいまま残ってる。ここはハルじやない。……だから、もう少し、ううん、もっとじっくり時間を掛けて存在意義を考えてみてもいいんじゃないかな。森の民は森の民としてしか生きられないのかな？」

「……」

エニシダは瑞樹を見つめて、しばらく言葉を探している様子だったが、目を逸^そらして小さく、分からないと言った。

「私、エリアEの植物が好きだよ。私の価値を認めてくれる、そんな気がするから。多少力を吸い取られたって、生き生きとして葉をつければ嬉しいし、花が咲けば、やったーって思う。それはきっと、森の民もファームの民も同じだって思うよ。第一エリアEに行った時、確かに整然としてはいたけれど、何か生命力のようなものが乏しいって感じた。逆に、第二エリアEでは生命力はあっても荒んでるって感じた。二つを見た後、この二つの力が合わさったら、この植物たちは、どれほど生き生きすることかと思った。それは森の民にも、ファームの民にも、エリアEの植物たちにも、喜びをもたらすはずなのによって……そう思った。それでは森の民にとっての存在意義にはならないの？」

「ファームの民が築いてきたものと、森の民が築いてきたものは異質なものだ」

エニシダはポツリと呟いた。

「俺達、森の民は力を使う。その度、俺らは自らの命を少しずつ代償にする。ではファームの民は？一般人はどうなんだ？俺はそれを考えた時、森の民の命が不当に軽く扱われていると思わざるを得ないんだ。だから安易な馴れ合いはしたくない」

エニシダは拳^{こぶし}を握り締めて俯^{うつむ}いた。

「そうだとも、力を手にした時点で、誰かがその力の行使の代償を求められるんだ。地球人が産業革命を起こして力を手に入れた時点で、地球の環境がその代償になったようにね？」

突然割って入って来た声に、瑞樹とエニシダが驚いて顔を上げた。ドアを開けて入って来た声の主はセルシスだった。

「それはファームの民だって例外じゃない。ファームの民がどうして生まれたか、君は知っているか？」

セルシスはエニシダを見つめた。

「ファームの民に生まれた理由なんてあるのか？」

不審げにエニシダはセルシスを見上げた。

「ファームの民は森の民のせいで、生まれさせられたんだ」

瑞樹もエニシダも目を見開いた。

第七話 虚空を駆けるネメシス（4）（前書き）

「」は日本語、◇はハル語という設定になっています。この回は、後半多少痛い場面があります。苦手な方はご注意ください。招夏

第七話 虚空を駆けるネメシス（4）

（ネメシスⅡ復讐、義憤の神）

セルシスは続けた。

「森の民の力が発見された時、ハル政府はうろたえた。ハル政府は体が弱くて役に立たない人間をアール・ダー村に捨てたつもりだったからね。その捨てたはずの人間が、ハル文明の浮沈を左右する力を持った。当然、ハル政府は、それに相当、もしくは類似した力を持つ人間を自らの手で作りだそうと考えた。そして出来たのがファームの民だ。結局、政府は自らの力では、森の民など作り出せはしなかったのさ。ファームの民は自ら光合成を行い、植物のように黙々と良く働く。食事もとらず、細かい作業を行い、ただひたすらに政府に尽くす。彼らが費やしてきた膨大な時間を思うとき、僕は途方に暮れる。彼らは何のために存在するんだ？君がファームの民なら、自分の存在自体が不当だと思ούνじゃないかな？」

セルシスはエニシダを見つめて肩を竦めた。

「では、僕たち一般人はどうだろうか。科学技術を駆使し、エクソダスを可能にした。これも力だよね。では、その代償はなんだったんだろうか。君たちに想像ができるかい？」

「……俺は、一般人が代償を払っていたなんて思った事がなかった」
エニシダは言った。

「そうだろうね、君たち森の民は現実をやっと知らされて、他人のことなんて考える余裕がないのかもしれない。じゃあ、瑞樹、君はどうだ？」

セルシスは瑞樹を見つめる。

「……良く分からないけど、選択の自由がなかったということかな？」

瑞樹はカナメのことを思いやる。デイモルフオセカに初めて会っ

た頃のカナメは、もっと、荒んだ目をしていた。したくないことを延々とさせられて、人生を投げだしたがつっていた。

「まあ、それもあるね。でもそれは、惑星ハルに生まれたものすべてが払わされた代償だ。地球人の君がどうしてそんなことを思いつけたのか、そっちに興味はあるけどね」

セルシスは瑞樹の瞳を覗き込む。瑞樹はうろたえて目を逸らした。「しかし一般人が払った代償はそれだけじゃない。論理的に考えることや技術的に開発することは、割と簡単にできることなんだ。難しいのは、それを実際に使うことだ。どんな技術でも、使えなければ意味がない。つまり実験台になること、それがもう一つの、一般人が払った代償だったと僕は考えている」

「実験台……」

その言葉がもつ痛々しい響きを瑞樹は噛みしめる。初めて宇宙に行った犬、ライカの話思い出した。ライカは地球に帰還するロケットの中で燃え尽きたのだ。

「そう、分解再生装置だって、大脳コンタクトだって、今ある便利なものすべてが、最初から今のように安全で手軽に使用されていた訳じゃない」

瑞樹はセルシスの瞳の奥に、凶器のように閃く光を見たような気がして身を竦める。

「おい、いつまでくどくどと下らぬ話をしているのだ」

ドクター・ヌンが顔を顰しかめて部屋に入ってきた。

「ああ、悪い。若者たちが自分たちの将来を真剣に論じているんだから、年長者としては助言しておくべきだろうと思ってるね」

セルシスはにやりと嗤わらった。

「助言？今のがかな？」

ドクター・ヌンは鼻で笑った。

一瞬、瑞樹の目の前が歪んだ。今の今まで小部屋にいたはずなの

に、瑞樹は制服を着て学校の教室にいた。休み時間だ。瑞樹は驚いて周囲をキョロキョロと見回す。

一人の少女が何人かのクラスメートに囲まれていた。

『ねえ、渡辺さん、消しゴムのカスを散らかすのやめてくれない？』
『え？』

言われた女の子はびっくりと顔を上げると、薄ピンクのフレームの眼鏡を人差し指で掛け直して、辺りを見回した。僅かばかりの消しゴムの滓が机の下に零れている。誰の机の下にだって落ちていくくらい量の量だ。

『あの……あ、ごめんね？今、拾うから……』

渡辺は言われたとおり、僅かばかり零れた消しゴムの滓を拾い始める。抗議をした女の子はニヤリと笑ってから、新たな消し滓を、拾っている女の子の頭の上にばらばらと振りかけた。

『ああ、ついでだから、これも拾っておいてよ』

『……』

泣きそうな顔で、頭についた消し滓を払い落とすと、回りを囲んでいたクラスメートが口々に声をあげた。

『いやだー、渡辺に付いてた消し滓が飛んできたよー。ばい菌がうつっちゃうー』

クラスメートたちは大騒ぎして、逃げ回った。

瑞樹が渡辺とクラスメートになったのは、高校の一学年遅れて編入したクラスでだった。家の経済状態が良くないのか、彼女は少し不衛生で、内向的な性格も災いして、たちまちクラスで苛めいじめの対象になってしまっていた。

『ねえ、日向さん？あなたも汚いって思うでしょ？』

苛いじめていた主犯の女の子が瑞樹に微笑みかけてきた。

『渡辺にびしっと言ってやってよ。汚いから寄らないでって』

瑞樹は目を見開いて、首を左右に振る。渡辺とはあまり話したことはなかったが、そんな酷い言葉をぶつけなければならぬような

関係ではない。

「言え、命令だ。汚いから寄らないでと渡辺に言うんだ」

その時、ふと、セルシスの声がした。

「いやだ。そんなこと言いたくないよ。そんなこと思ってもないし……」

瑞樹はセルシスの声がした方を振り返る。

「言え、命令だ」

セルシスは冷やかに言い放った。

「嫌だ、言わない。私はそんなこと絶対に言わない！」

そう言った瞬間、背後に熱い痛みを感じた。真っ赤に焼けた火箸が瑞樹の背中に当てられていた。制服は嫌な臭いをあげて燃え、むき出しの背中に直に火箸が当たる。

「あっっ！！熱い、熱い！」

瑞樹は悲鳴を上げる。助けを求めて伸ばした掌にも焼き鏝いりが当てられる。それはただの焼き鏝いりではなくて、焼印なのだった。ナンバーが振ってある。それはアンドロイドのムラサキの胸にあった番号に似ていた。

アンドロイドに振られる番号だ。私はアンドロイドじゃない！苦痛と屈辱に絶叫する。

次に気づいた時には、トウキが目の前に立っていた。

「トウキ！無事だったの？あ……」

瑞樹は突然絶望する。トウキは自分が破壊したのだ。無事なわけがない。無事なトウキならば、それは別のトウキに違いなかった。

『瑞樹、あなたは所詮、私たちの事をアンドロイドに過ぎないと思っ
っていたんですね』

トウキは悲しそうな顔で言った。

「そんなことないよ、トウキは、ううん、ムラサキさんも心を持っ
てるって思ってるよ」

瑞樹は一生懸命弁解する。しかし、心の中であれ？と思う。さっき、アンドロイドと同じナンバーを打たれた時、自分はそれを屈辱だと思わなかったか。それは自分がアンドロイドとは違う、そう言った優越感、優位感を彼らに対して持っていたということになるのではないか。

「さあ、今度は本当の事だろ？ちゃんと見えよ。アンドロイドなんて所詮機械だ。人間とは違う。アンドロイドが人間に好意を持つなんて身の程知らずだと言ってやれよ」

セルシスの毒が滴るような声が耳元で響く。

「そんなこと思ってない。トウキは……トウキはちゃんと心を持っていた。心を持っていたよ！」

「じゃあ、何故アンドロイドと同じナンバーを振られて屈辱だと思っただんだ？ん？」

「トウキは、トウキは本当にアイリスの事を……」

最後まで言う前に瑞樹は鞭で強かにぶたれていた。背中に痺れるような痛みが走る。何度も何度も鞭は振り下ろされて、瑞樹は気を失った。

幽かな、誰かの声が聞こえた。何を言っているのか分からなかったけれど、その幽かな心地よい声は、負傷した瑞樹の心を癒すように宥めるように響いた。自分の声のようでもあり、他人の声のようでもあり、もっと良く聞こうと耳を澄ます。

『……私はあなたにお帰りなさいを言いたいですよ』
トウキ？

『お前にしては上出来だ』

ニシキギ？

『辛いことはな、ずっとは続かない、日にち葉だからな』
パパ？クマ太？

『瑞樹、また戻ってきてよ？絶対だからね』

ミント…

『瑞樹、忘れないで、僕はいつも君と居るよ。どんなに離れていても君の傍にいるから……』

カナメ、カナメ……

再び泥のような眠りの中に引き込まれながら、涙が止まらなかった。

エニシダは目の前で涙を流したり、絶叫したりする瑞樹を呆然と見ていた。何が起こっているのかは分からなかったけれど、とにかく止めさせようとセルシスに飛びかかろうとして、ヌンに取り押さえられた。

「小僧、邪魔をするなよ。お前の祖父さんに頼まれたことなんだからな。俺たちは依頼主の要求に応えているだけだ」

「祖父ちゃんに？」

ねじり上げられた腕の痛みに呻きながら問い返す。

「そうだとも」

ヌンはにやりと嗤った。

「どんな依頼を受けたか知らねーけど、こんな酷いことはやめてくれ。瑞樹に酷いことをするのはやめてくれ」

エニシダは懇願する。

「ちつとも酷いことなんてしていないさ。暴力で言う事をきかせようとしている訳じゃないだろう？祖父さんは命令をきくように、自力で逃げ出したりしないようにして欲しいと言っただけだ。年長者の言う事をきくのは普通の事だし、一人で逃げ出して危ない目に遭わせてはいけないという親心からだと思うが……」

ヌンはしゃあしゃあと言った。

「だけど、瑞樹は泣いている。酷い目に遭っているから泣いているんだろう？」

「嬉し涙かもしれないよ。人間とは複雑な生き物だからな。君は嬉

しくて泣いたことがないかな」

悪意のこもった笑顔でヌンは嗤った。

「……」

ああ言えばこう言うヌンに、エニシダは言葉を失った。

第八話 砕け散る翠玉（1）

出発の日になっても正樹とは連絡がとれないまま、シャトルは火星の軌道上を回るナンディーを目指していた。

「カナメはまだ部屋に閉じこもっているの？」

アーマルターシュはメインデッキでニシキギに問いかけた。中型のシャトルには、いくつか部屋があって、カナメはその一室を占領して何かを作り続けていた。ニシキギが作戦を練るために声をかけても、アーマルターシュが話しかけても、「ああ」とか「うん」とか簡単な返事しか返ってこない。

「カナメは……カナメと瑞樹は、そう言う関係なの？」

アーマルターシュがぼつりと零す。

「そう言う関係とは？」

ニシキギが問い返す。

「誘拐されたと聞いたら、自失して人格が変わるくらい心配してしまっただけよ」

アーマルターシュは溜息をついた。

「あなたが誘拐されたとしても、やつはそうしてくれるかもしれないだろ？」

ニシキギは小さく笑った。

「そうかしら？ 私は、カナメがあんな風に取り乱しているのを見たのは初めてだわ。彼はただ心配しているんじゃない、自分のものが奪われたように怒っているみたいだわ」

ハルでカナメ・グラブラと言えば、良くいえば冷静沈着、悪くいえば冷酷。ごく僅かな知人以外には心を開いたことがない……そう聞いている。再生回数三回と比較的長い人生を送っているアーマルターシュではあるが、ハルでカナメとの接点はほとんどなかった。

「それなら俺だって心配して怒ってる。瑞樹が何をされてるのかと考えただけで、胸糞悪くなる」

アーマルターシユは、瑞樹という人をイメージする時、カクレクマノミという魚を思い浮かべてしてしまう。地球人の記憶の中にあつた海の生き物だ。オレンジ色と黒の縞柄の小魚で、毒をもつイソギンチャクという生物の中で暮らしている。

そのカクレクマノミと同様に、ニシキギの持つ毒も、カナメの持つ刺も、彼女には無効化のように見える。

「あら、あなたは瑞樹の事が好きなんでしょ？当然じゃない？」

邪気なく言うアーマルターシユに、ニシキギは溜息をついた。

「……あんたには言っておいた方がいいかな。俺は誰よりも瑞樹の事を分かつてる、分つてやれると思ってる。大事にしたいと思っているし、守つてやりたいと思う。でもどんなに、俺が力を駆使しても、瑞樹とカナメの間にある絆みたいなものを切り離すことはできないとも思っている。今回のカナメの態度を見て確信した。あいつらは、既に何かしらの力で結ばれているんだ、おそろくな。だから、もしこの先、俺が瑞樹と愛し合うようになったとしても、それはカナメに譲られたに過ぎないんだと思う。あんたがカナメと付き合う事になっても同じだ。それは瑞樹に譲られただけなんだ。やつを手に入れたいと思ってるのなら、そのことを肝に銘じておいた方がいい。それでも手に入れたと思うかどうかだ。俺は、瑞樹をあきらめるつもりはないけどな」

ニシキギはそう言つて苦笑した。

「やつぱりカナメと瑞樹の間には何かあるのね？」

アーマルターシユは寂しげに笑んだ。

「……まあな」

「そう言えば、あなたの義妹はどうなったの？」

「義妹のなりそこねだな、それを言うなら」

ニシキギは顔を顰めた。

「俺の籍からとつと放り出した。別の部屋も用意させたから、もう関係ないだろうと思つたら、付いてきてるんだ」

ニシキギは苦虫を噛み潰したような顔をした。

「えー、このシャトルに乗ってるの？」

アーマルターシュの言葉にニシキギは頷いた。

＊ ＊ ＊

ネモフィラはシャトルの小部屋でしょんぼりと座っていた。ニシキギがナンディーに行くらしいと聞いたのは本人からではなかった。教えてくれたのはレンだ。

籍から抜かれ、部屋も別に用意され、することもなく訪れた第二エリアEで、ネモフィラはその情報を耳にした。第二エリアEには力を使えるようになった森の民の子供たちと、力を使えない大人たちがいた。大人たちは自分たちに割り当てられていたソーマの種をほぼ使い果たしていて、嘆いて悲観的な目をしていた。一方、子供たちは、少しばかり力が使えるにもかかわらず、水撒き、草取り、花がら摘みと、まるでファームの民のように働いていて、その目は希望で輝いていた。

子供たちを指導していたのはファームの民で、植物の世話をする方法を学びたいと、子供たちだけで大挙して第一エリアEに押しかけたらしい。毎日、誰かしらファームの民がやってきて指導してくれる約束になっているのだと言う。子供たちにならって、ちらほら大人たちも手伝うようになって来たと、子供たちは嬉しそうに言った。ネモフィラも早速手伝った。そうしているうちに偶然耳にした情報だった。

「一昨日、ファームの民の長老に直談判してきたんだ」

レンは得意気に言った。

「瑞樹が帰って来るまでに、第二エリアEをばっちりしておきたいんだってね」

レンは悲しそうに言った。

瑞樹が失踪したのは三日前だ。事件はあつという間に共和国内に広がっていた。失踪するほんの少し前、瑞樹は森の民の子供たちに植物の世話をするこの楽しさを教え、いつの間にかファームの民の森の民への警戒心を解くことまでしていたらしい。レン達が、瑞樹の為にエリアEをなんとかしたいとファームの民に交渉しに行った時、ファームの民もまた瑞樹を心配してくれて、力を貸してくれると約束してくれたのだ。

「今日の午後には、ニシキギ達が瑞樹を助けにナンディーに行くらしいよ。瑞樹は恐らく、アグニシティにいるだろうって昨日言っていた。心配しないで待ってろってニシキギが言っていた」

ネモフィラは慌てた。もうすぐ午後だ。

＊ ＊ ＊

「あなたどうして付いて来たの？」

女性用に当てられた小部屋にネモフィラはひっそりと座っていた。アーマルターシュの問いかけに、ネモフィラは途方に暮れたように見上げる。

「……傍にいたかったから……」

消え入るような声でネモフィラは答える。

「それって、もしかして、ニシキギのこと？」

ネモフィラは頬を染めて頷いた。

「なんで？」

呆れたようにアーマルターシュはネモフィラを見つめる。

「……似ているんです」

「弟に？」

ネモフィラは頷いた。

「どこが？」

「……顔が……」

ああ、とアーマルターシュは納得する。

「ニシキギの弟が、どんな人だったかは知らないけど、似てるのは顔だけだと思うわよー、ニシキギときたら、常に仏頂面してるわ、皮肉屋だわ、一緒にいるだけで肩がこるわ、腹はたつわ、胃は痛くなるわ、寿命まで縮む気がするのよねー」

アーマルターシュはここぞとばかり言いたい放題を言ってみる。

「そうなんですか？」

ネモフィラは逆に嬉しそうな顔をした。

「あなた、なんで喜んでるの？」

アーマルターシュは胡散臭そうに見つめる。

「それが普通なら、私だけにあんな風に辛く当たるんじゃないって思えるから」

ネモフィラは、はんなりと微笑んだ。アーマルターシュは盛大に溜息をつく。この人は植物みたいだ。辛抱強く、あきらめることを知らない。そんな様子がアーマルターシュの目には痛々しく映ってしまう。森の民によくいるタイプ。

ファームの民と比べてしまえば、さほどではないのかもしれないが、忍耐強いと思う。自分や周りの一般人と比べれば、その違いは歴然だ。

ハルで森の民の監理官をしていた経験から、森の民が事件を起こすということは、かなりな事情を抱えている場合が多いことを知っていた。今回の事件も、耐えきれなくなった森の民が暴走してしまった結果なのかもしれないと、アーマルターシュは思っている。

どういう事情かは知らないけど、いくら顔が似ているからとはいえ、あの毒舌家のニシキギと一緒にいたいと思いつけるということが、厳しい環境に耐えて咲く一輪の花にも似て、健気というよりも、ほとんど神々しいとまで思ってしまう。

ニシキギは、この花のような女性をどんな風に見ているんだろうか。距離をとるのは本人の勝手だが、無闇に踏み荒らさずにやって

ほしいものだ、アーマルターシュは心の中で溜息をついた。

第八話 砕け散る翠玉（2）

瑞樹は、自分が誰かの肩に支えられて薄暗い長い廊下を歩いているのに気がついた。脚にちっとも力が入らない。

拉致されて、セルシス・G・フォティニアに会ってから、どれくらい時間が経ったのか自分ではさっぱり判断ができなくなっていた。今、私は確かに廊下を歩いているのだろうか、それさえも定かでない。これはセルシスの見せている幻？

何が現実なのか、何が幻なのか判別できなくなりつつあった。

最初はセルシスの見せている幻なのか現実なのかを判別することができていたのだ。しかし、幻を否定する幻、肯定する幻、幻の中の幻……まるでマトリョーシカのように、まるで合わせ鏡の中の世界のようには限りなく、実体が掴めない。幻のラビリンスの中で瑞樹は途方に暮れる。

私は壊れ始めている……確実に分かるのはそれだけ……。

バーチャル拷問。セルシスが瑞樹に行っていることは、一言で言えばそれだった。瑞樹が心の中で辛かったと考えているシチュエーションを再現し、瑞樹が最も選びたくなかった選択肢を選択するように強要するのだ。瑞樹が違う選択をすれば、痛い思いをさせる。言うことをきけば危害は加えられず、つかの間の休息を与えられるが、自己嫌悪に陥っている時の休息は、むしろ危害を加えられている時よりも精神的なダメージが大きかった。

しかも、その休息でさえ、幻だったと言う場合があるのだ。恐らく脳コンタクトを使用しているのだろう。器具をつけられたことはなかったが、どんな酷い痛い思いをさせられても、現実に戻れば、

体にその痕跡は何一つ付いていない。

自分の意志で選択することを放棄させようとしているのだ。瑞樹は自分の置かれた現状に吐き気を覚える。

「犬扱いだ……」

犬だってこんな酷いしつけはされないだろうと、苦笑する。

虐待を周囲に悟らせないために、体に傷をつけないように、見える所にはその痕跡を残さないように虐める人間がいるという。それに似ていた。セルシスやドクター・ヌンは瑞樹を傷つけたことをこれっぽっちも認めないだろう。瑞樹が受けた傷に対して、なんのリスクも責任も背負うつもりがないのだ。

絶望の淵に沈みながら、瑞樹は一人ぼっちで宇宙に放り出された子供のように震えていた。

幽かに聞こえる慰めの声は相変わらず続いていたが、その声は日を追うごとに幽かになってきていた。そんな時に、宇宙服に身を包んだ人が現われて、あの部屋から瑞樹を連れ出したのだった。

「あなた誰？」

瑞樹は少し低い震える声で問いかける。

「俺だよ」

その声の主はエニシダだった。

「俺の祖父ちゃんが、あんたを逃げ出さないように、森の民として長老に服従するようにして欲しいと、やつらに依頼したらいいんだ。恐らく、祖父ちゃんは、あんたがこんな目に遭わされるなんて知らなかったんだと思う。俺はあんたを助けたい。それはイベリスの願いでもあるんだ」

エニシダの声は細く、やはり震えていた。

「イベリスが？」

ドアの向こうで、罪悪感むき出しの泣きそうな声で怒っていたイ

ベリス。瑞樹は胸が詰まる。

これは現実なのかもしれない……瑞樹は足に力を入れなおして歩く。

「イベリスとはナンディーで親しくなったんだ。俺の友達だ。祖父ちゃんはイベリスにも酷いことをしてしまった。もう黙っていられない。俺は、もう祖父ちゃんに誰も傷つけて欲しくないし、誰も傷ついてももらいたくない」

エニシダは泣いているようだった。宇宙服のようなものを着ているので、くぐもっていてもよく分からなかったけれど。

森の民の長老……そうだったのか……私の力が必要だったの？瑞樹は泣きたくなくてくる。私が森の民に力を貸さないと、協力などしないと……そう思ったの？私が、そう思わせてしまったのだろうか……。

「……ここ、どこなの？」

「ここは火星だ。だけどハル共和国のどこのエリアにも属していない。森の民が反発して作り出した独立したエリアなんだ。こここのとはハル政府も知らないはずだ。ここの皆はガイアシティと呼んでいる」

「アグニシティからは随分離れているの？」

とにかく、ここを離れなければならない。誤解を解く方法を考えなければ。協力するのなら、自分の意志で協力したい。

「ああ、一旦地表に出て、小型シャトルに乗らなければここを脱出できない。俺がなんとかする。とにかくナンディーに救助を求めよう」

エニシダがシャトルの乗り場であるエリアのドアを開けた途端、突然エニシダは突き飛ばされて床に転んだ。瑞樹も支えを失って同じように床に転がる。

「何をしているのだ！おまえは！自分が何をしているのかわかっているのか？」

転がるエニシダを怒鳴りつけたのは、祖父であり、森の民の長老

であるアドニスだった。

アドニスは転がったエニシダの胸倉をつかむと激しく前後に揺さぶった。アドニスの乱暴を止めさせようと手を伸ばした瑞樹の手は、別の誰かに掴まれ羽交い締めになされた。

「やめて、私が……私が逃がしてって頼んだの！」

瑞樹はアドニスを睨みつけた。どうしてエニシダを庇ったのか瑞樹にも説明できなかったが、祖父と孫の間にできてしまった溝を少しでも埋めたかったのかもしれない。瑞樹の祖父は数年前に亡くなってしまっていたが、瑞樹は祖父が大好きだった。

「瑞樹？何言ってるんだよ」

エニシダの弱弱しい声がした。

「どうせ孫をたぶらかして、いいように使おうと思っていたのだろう？」

アドニスの低い声が響く。

「祖父ちゃん、それは違う。もうやめて欲しいんだ。頼むよ、もうこんなことはやめてくれ。瑞樹が可哀想だ。こんなこと森の民の為になどなるわけがないよ」

エニシダは祖父に縋りついた。

「すっかり騙されよって、お前は馬鹿な父親にそっくりだ」

アドニスは忌々しげにエニシダをふりほどいた。

「おい、その娘を元の部屋に放り込んでおけ。そしてこの馬鹿者が近寄らないように見張っておけ」

アドニスは、瑞樹を羽交い締めに行っている背の高い男に命令した。

「了解」

男は軽快に返答すると、足元が覚束ない瑞樹を抱え上げ颯爽と歩き去った。

第八話 砕け散る翠玉（2）（後書き）

読んでくださってありがとうございました（＊＾―＾＊）
招夏

第八話 砕け散る翠玉（3）

「瑞樹、逃げ出したんだって？」

セルシスは面白そうに虚ろな瞳の瑞樹を覗き込んだ。

「おかしいなあ、どこにそんな気力があつたんだろう。あれだけ痛い目に遭ったのに、まだ自分の意志で逃げ出そうとか、逃がして貰うように頼もうとか、逃がした人間を庇おうとかできたの？」

セルシスは少し声のトーンを落とした。

「お陰で、アドニスはカンカンだ。実はね、今回は僕もかなり怒ってる。もう手段は選んでやれそうにないよ」

セルシスは瑞樹の顎に指を当てて上向かせて視線を合わせると、威嚇するように暗い瞳で睨みつけた。

その時、ドアをたたき割るような勢いで入って来た人がいた。

『瑞樹！大丈夫か？』

入って来たのは正樹だった。

「正樹ちゃん？」

瑞樹はセルシスの手を振りほどいて正樹に駆け寄った。その途端にセルシスの暗い、嘲るような声が響きわたる。

『まだ逃げようと、助かろうと、考えているのかい？』

瑞樹は踏み出した足を恐怖で凍りつかせた。何故なら、目の前で正樹が血を吐いて倒れたからだ。

「きゃあー、正樹ちゃん！」

瑞樹は、硬直する自分の体をなんとか前に進めると、震える手で正樹の背中に触れた。そこには鋭い刃物が深々と背後から刺さっていて、鮮紅色の血がドクドクと流れ出している。

「正樹ちゃん？正樹ちゃん。嘘だ……こんなの嘘だよ……」

正樹は倒れたままぴくりともしない。ただ、赤い血が瑞樹の指を赤く、赤く染めあげて行く。

「誰か、誰か……正樹ちゃんを助けて。エニシダ！イベリス！ドク

ターを呼んで！」

血塗られた手でドアを叩くと、いつもならばびくともしないドアが勝手に開いた。瑞樹はさらに戦慄して息をのむ。ドアが開いたその先の通路に、無数の人々が倒れていた。

「いや……嫌、こんなの嘘だ……」

瑞樹は、子供のようにしゃくりあげながら一人一人確認して行く。「パパ？ ママーっ、イベリス？ エニシダ！ なんで？ なんでこんなことに？ 嫌だ、アーマルターシュ？ 目を開けてよ！」

倒れている人が流す血が通路中に広がって、辺り一面血の海だった。瑞樹は一人その中で放心する。自分の味方だと思っていた人々がすべてやられたのだ。自分のせいだ。瑞樹は、血に濡れた掌で顔を覆い号泣する。

視線の先に、薄い金色の髪が見えた。しゃくりあげながら、恐る恐る視線を合わせる。心の片隅でピシリと亀裂音がする。亀裂が広く深く刻まれる音に似ていた。

「……ニシキギ？ 嘘だ……嘘だよね？」

なぜだか分からないけれど、彼は大丈夫だと思っていたことにふと気づく。彼はいつでも自分を助けてくれる存在で、死ぬことなどないのだと思っていた自分に呆然とする。

瑞樹は、フラフラしながら、ニシキギのように見える血にまみれた体に近づき、仰向けにする。

苦しげに閉じられた瞼で、いつもの青い瞳は見られなかったが、それは間違いなくニシキギで……瑞樹は息をのむ。その胸には深々とナイフが刺さっていた。

「嫌だ……嫌だよ。ニシキギ……目を開けてよ。死んじゃ嫌だ、嫌だよ！」

『どうする？ 助けてやろうか？』

その時、背後でこの惨状には相応ふさわしくない、楽しげな、しかし悪意が滴るような声が響いた。

「セルシス……」

瑞樹は、血まみれになってしまった顔で振り返った。

「助ける？助かるの？」

瑞樹には、その悪意に満ちた声が、暗闇にさした一筋の光に思えた。

『ああ、助けてやれるさ。もちろん』

揺るぎない肯定の言葉に、瑞樹は縋りつく思いで救命の言葉を紡いだ。

「助けて！助けてください、お願いします」

『ただし、対価が必要だな』

「対価……」

瑞樹は呆然と呟く。一体何を払えば、こんなにたくさんの命を救えるのだろうか、瑞樹は途方に暮れる。

『じゃあ、服を脱いで。ここに来いよ……』

セルシスは楽しそうに呟くとニヤリと嗤った。

「な……にを……するの？」

『僕が座っているのが何かわかる？』

セルシスはポンポンとベッドの表面を叩く。

『君は女で僕は男だ。服を脱いでベッドの上ですることと言えば、一つでしょ？』

「……なんで……」

嫌だ！心の中で木霊する。でも……同時に湧き上がる相反する声。自分さえ我慢すれば……。

『なんでかって？理由なんているかな？人の命を救うのに理由があるのかい？』

それでは、まるで人の命を救うのに理由があると、瑞樹が文句を言っているようだ。麻痺したように全く働かない思考力。瑞樹はごくりと唾を飲み込んだ。

震える指で着衣のボタンを外していく。涙で周りが滲んでいく。

『のろまだな。もう、そのままでもいいからこっちに来いよ』

下着だけになった瑞樹に、セルシスが面倒くさそうに声をかけた。

ぼやけた視界に、セルシスの瞳の青が映る。同じ青でもニシキギの瞳とは全然違う。底冷えのする青。

近づいた瑞樹の腕を力任せに引き寄せると、セルシスは瑞樹の唇を塞いだ。

『抵抗したら取引は不成立だからな？』

セルシスの言葉に、瑞樹は抵抗もできぬまま、きつく抱きしめられ、さらに深く口づけられる。抵抗を封じられている瑞樹とセルシスの抱擁は、傍から見れば恋人同士の睦みあいに見えたことだろう。

『……瑞樹？』

聞き覚えのある声にびくりと体を震わせて、瑞樹が背後を見ると、そこには酷く驚いた様子のカナメが立っていた。

その瞳に浮かんでいるのは、驚愕、放心、それから後は何だったか……動揺している瑞樹には判断できなかった。

「カナメ……」

カナメが助けに来てくれた？でも……私は何をしてる？誰の姿で、誰の為に？瑞樹は途方に暮れた瞳でカナメを見上げる。

『……信じられない。君は君の意志でここにいいのか？』

カナメは呆然としている様に見えた。

「違う。これは……」

言い訳をしようとして、瑞樹は心臓がドクリと音をたてたのを感じた。ここで、言い訳をすることは、更なる犠牲を生み出すことになるのでは？湧きあがる疑問に瑞樹は口を噤んだ。『彼が傷つけたか』
『……』
『君を助けに来たことは、すべて無駄だったってことかな？』
悲しげな、しかし怒りを含んだ表情でカナメは言った。

「……」

瑞樹は何も言えずに凍りついたまま立ち尽くす。

『そうだったのか。君を助ける為に来た人はすべて命を落としたん

だぞ？これじゃあ無駄死にじゃないか！』

カナメの怒りが次第に増していくのが手に取るように解った。

セルシスは、まるでカナメを挑発するかのように、硬直している瑞樹の頬にやさしげな口づけを落とす。しかし、その瞳には残忍な嗤いが浮かんでいて、瑞樹はその意味を理解する。

救命の言葉は封じられている……ということ。

「……君には失望したよ」

カナメは怒りに満ちた瞳で吐き捨てるように言うと、そのまま部屋を出て行った。鋭いナイフを投げつけられたように、瑞樹は瞬き一つできないまま、その後姿を見送った。

すべての希望が断たれた。最後にカナメによって放たれた言葉は、正確に瑞樹の心を貫いた。

それは無数に細かくひびの入った陶器が、最後のひと突きで粉々になるさまに似ていた。しかし粉々に砕けてしまったのは陶器ではなく、瑞樹の心だった。

助けを求めることも、泣くことも、笑うことも、怒ることも……考えることさえ放棄してしまった砕け散った心だった。

第九話 復讐と破壊と…そして願い（1）（前書き）

「は日本語、◇はハル語という設定にしています。

第九話 復讐と破壊と…そして願い（1）

「この子どうしたんですか？急に表情がなくなっちゃって……」

怪訝そうに瑞樹を見つめていた見張りの男は、ゆっくりと目を開けたセルシスに問いかけた。

「やっと成功したらしいな」

セルシスは苦笑した。

「こんな小娘ごときに手こずってしまった」

「成功した……って？」

男はゴクリと唾を吞んだ。

「……ところで君、まだ名前を聞いていなかったね。あまり見ない顔だ」

セルシスは鋭い目線を、瑞樹の傍らにいる体格のいい金髪の男に向けて問いかけた。

「俺はカンナ・ピラミダリスだ。よろしく」

男は少しぎこちない様子で、セルシスと握手をした。

「カンナ？女の子みたいな名前だな」

「親が女の子を欲しかったらしくて。よく間違われるんですよ」

男は頭をポリポリと掻いた。

「ふうん、それはお気の毒に。では、カンナ、この子はもう見張る必要はないよ。もう逃げ出さないし、命令には完璧に服従する」

セルシスはニヤリと笑った。

「……へえ、すごいな。どうやったんです？」

男は一瞬ぎよっとした後、感心した様子で瑞樹の顔の前で手をひらひらさせた。瑞樹は反応しない。

「それは企業秘密だ。少し疲れたから僕はもう行くよ」

セルシスは軽く手を振ると部屋を出て行った。男はしばらくドアに耳を当ててセルシスの靴音が遠ざかるのを聞いていた。

「……おい、瑞樹、大丈夫なのか？」

カナメと名乗った男は、放心したようにベッドの脇に立っている瑞樹に声をかけた。瑞樹からは返答も反応もない。

「おい、瑞樹、しっかりしろよ。俺だ、正樹だ」

金髪とブルーアイに変装していることに気づかない瑞樹が、警戒しているのかと名乗るが、やはり瑞樹は反応しなかった。正樹は息を呑む。

「……なんてことだ。目の前で瑞樹が壊されているのに気づかなかつたなんて……」

正樹は呻いた。

* * *

「それ何だ？」

正樹はカナメに問いかけた。正樹はナンディーでカナメに追いつくことができた。

「分解破壊銃って名前はどう？破壊は付けない方が感じがいいかな？」

「そんなもん振り回すなよ。何を破壊するつもりだ？」

カナメは後ずさる正樹から銃口をそらした。

「これが分解するのは水分を含まないものだ。人に当たっても何の効果もない。試してみようか？」

「おいしい、俺に向けるのはやめろよ」

「あまり離れているものは駄目なんだけど、二、三メートルまで近づけば何だって分解できるよ」

カナメはそう言うのと部屋の壁に向かって発射した。壁は光線が当たった場所だけ、溶かされたように穴があいた。壁の厚さは三センチ程あったが、隣の部屋が丸見えだ。

「おい、俺の部屋が見えるようになってしまったじゃないか」

正樹が無然とする。

「後でちゃんと塞いでおくよ」

カナメはにっこり笑って言った。次に、カナメは、テーブルの上に置いてあったゼリーのグラスに照準を合わせた。連続した軽い発射音の後、グラスには切り取られたように丸い穴が開いたが、ゼリーには傷一つついていない。

「硬いグラスは分解するが、水分をたくさん含むゼリーは分解しない。完璧だろう？」

正樹はグラスを持ち上げてゼリーを確認したが、砕かれて流れ出てくる気配はない。ぷりぷりしたゼリーに溜息をつきながらグラスをテーブルに戻した。

「君にも一丁渡しておくよ。いざという時には使ってくれ」

「相手が普通の銃を向けてきたらどうするんだ？」

「逃げる、もしくは降参しろ。何度も言うが、これで人は撃てない。大接近して相手の銃を分解するか、降参して掴まってから使うかだろうな」

「水分の少ない人だったらどうなる？乾燥肌とか……」

「水分感知センサーには、ある程度幅を持たせている。いくらひどい乾燥肌だろうと、生物が生きて行くのに必要な水分量というものがあるから大丈夫だ。もっとも髪や爪は分解してしまうかもしれないけどね」

カナメの言葉に、自分を試し打ちしないでくれて本当に良かったと正樹は胸を撫で下ろした。

「水分をたくさん含んだ囲いだったら、これでは瑞樹を助け出せないってことだな？」

正樹がおどけたように言った。その問いにカナメは考え込む。

「水分をたくさん含んだ囲いか……それは考えていなかった」

「ゼリーとか寒天とかの檻おりだったらアウトだろ？」

正樹が冗談めかして言う。

「本当だ。そんなものでできていたら助け出せない」

真顔で言うカナメに、正樹が呆れた顔をする。

「水分感知センサーの調節が簡単にできるつまみのようなものをつけた方がいいだろうか……でもその場合は体温感知センサーもつけないと、檻の向こう側にいる瑞樹に気づかずに発射してしまう可能性もあるかもしれない……」

ぶつぶつ呟くカナメに、正樹は処置なしという顔で肩を竦めた。

本当にこの男は瑞樹を助けることだけしか考えていないのだと思いたる。しょうがねえなど正樹は一人苦笑する。

「なあ、本気でゼリーとか寒天とかでできた檻を壊す方法を考えてるか？」

正樹の呆れたような声にカナメは怪訝そうに振り返った。

「そんなものを壊す時は、手で十分だろ」

虚を突かれたようにカナメは一瞬呆けた後、

「君が助けられないと言ったんだろ」

ときまり悪そうに言い返した。

「そうだよ。それでは助けられないって言ったさ」

正樹はクスクス笑った。カナメもつられて笑う。

「これからガイアシティに向かうのか？」

「ああ。だが、まずアグニシティに向かわなければならぬ。今回はアグニシティの協力が必要だ。先に話をつけておかなければならない。そこで融通のきく君に、先にガイアシティに潜入してもらいたいんだ」

「了解だ。その為に変装してきたんだからな」

正樹は髪を金色に染め、ブルーアイのコンタクトレンズを入れていた。その他諸々の支度をしてから大急ぎでナンディーまでカナメを追いかけて来たのだ。

「その姿の君を初めて見た時、イブキが来てくれたのかと思ったよ」
カナメは苦笑する。

「イブキはこんな感じだった？」

正樹は破顔する。

「いや、最後に見たイブキはキャメル色の髪に薄い茶色の瞳だった。でも、もう一回分解再生すれば、そんな色になっていたかもしれないって思えるくらい薄くなっていた」

「で？俺はどうすればいい？」

「ガイアシティに潜入して、できるだけ瑞樹の傍にいてくれ。我々が乗り込んだ時に彼女を守ってもらいたいんだ」

「わかった」

「君に偽名を用意した。カンナ・ピラミダリス、森の民で、脱出前に死んでいて、再生される条件をクリアしていない人だ」

「カンナ？なんだか女の子みたいな名前だな」

「そのとおりだよ」

「おい……」

「彼女はイブキの妹だ。六歳で森の民の力を発症した。発症したのが五歳以下であれば、アール・ダーで生き延びられたはずだった。

結局、彼女はフォボスで死んだ。彼女ならば森の民として登録されている。森の民ならば、やつらもそれほど警戒しないだろう。全く架空の人物よりもばれにくい。彼女を利用させてもらおう」

「……」

正樹は痛々しい気持ちで眉間に皺を寄せた。六歳と言えば、小学校に上がる年だ。いつもは生意気な妹の皐月が、買ってもらったばかりの赤いランドセルを背負って無邪気に家の中をうろついていたのを思い出す。あんな幼い子がフォボスで……。フォボスで死ぬと言う事は、政府に利用されて、森の民の力を使い果たさせられて、死ぬ事なのだ……正樹はハルに来てから集めた情報で知っていた。正樹は拳を握り締めた。

第九話 復讐と破壊と…そして願い（2）

「カナメさん、これを持って行って下さい」

ナンディーを出発する前に、ミントがカナメに白い種が入っている小瓶を差し出した。

「これは君が持っておきなさい。もうすぐ出産だろう？」

お腹が大きくなったミントは、カナメの言葉に首を横に振った。

「瑞樹に無事に戻ってきて欲しいんです。何かあった時にはきつと役に立つはずだから」

ミントは涙を溜めた瞳でカナメを見つめた。カナメは思いつめた様子のミントを柔らかく見つめる。

「……ありがとう。でも、これはやはり君が持っておくべきだ。僕はソーマの白い種をすぐに手に入れられる。必ず瑞樹を無事に連れて帰るから。その時には元気な顔で迎えられるようにしておいてくれないか？ そうしないと瑞樹が悲しむ」

カナメはミントを抱きしめた。

コホン、とわざとらしく咳払いする声が後ろでする。セージはカナメ達と一緒にナンディーに帰還していた。

「俺からも、瑞樹のことをよろしくお願いします」

セージはカナメと握手をした。

「……僕は、君が瑞樹の事を嫌っているのだと思っていた」

カナメは苦笑する。ニシキギから第一エリアEで起きたことを聞いているからだ。

「俺は、瑞樹が目の前でしたことに驚きはしたが、嫌った訳じゃない。今では、むしろ感謝している。お陰で俺が育てていた星ぶどうは、誰のよりも豊作になりそうだからな」

セージは鼻の頭をカリカリと搔いた。

瑞樹が力を使った後、星ぶどうは順調に実を結んだ。ファームの

民の誰もが目を丸くし、彼の仕事を褒めた。黙っていることに耐えられなくなって、瑞樹がしたことを白状したのは、瑞樹が拉致された次の日だった。

正直に話したセージを、みんなは複雑な目で見つめた。がっかりするもの、褒めたことを取り消すとあからさまに言ってくるもの、森の民の力を受けた星ぶどうを切り倒せと怒鳴るもの……そして、森の民の力を認めるもの。

ファームの民の長老、カシは言った。

「セージの星ぶどうはエリアEの隅っこにある。問題の星ぶどうを見たものは、どのくらいおるかの？」

長老が見回すと、ちらほらと手を挙げる者がいた。

「この話の議論を再開する前に、一度セージの星ぶどうを見に行くことにしないか？ 実はわしも最近、全然見ておらんのでな」

カシの言葉に、みんなでぞろぞろと星ぶどうを見に行った。

セージの星ぶどうは、つややかな葉っぱを気持ちよさそうに伸ばして、彼が作ったヨレヨレの支柱をもともせず蔓を絡みつかせ、小さな米粒ほどの黄緑色の実の房を、それこそ数えきれなくらいたくさんぶら下げていた。

生命力が、その星ぶどうの周り一体を包み込んでいるようだった。

「これは……」

切り倒せと怒鳴っていた人でさえ息を吞んで見上げた。カシは無言のまま、目を細め、皺だらけの指で星ぶどうの房をそっと掬いあげた。

「わしは……この星ぶどうをずっと前に何度か見たことがあるのじやが、いつ見ても、しょぼくれておって、ここまで生命力に溢れているのを見るのは初めてじゃ。セージはファームの民としてはあまり上出来な方ではなかったからのう」

周りのみんなからどっと笑いが起こる。

「この星ぶどうは、ここでも、ナンディーのエリアEでも見たこと

がないほど、たくさんの実を実らせることになりそうじゃ。しかし、切り倒せと言うておるものもある。確かに切り倒す事は簡単なことじゃが、さて……それはファームの民にとって、この星ぶどうにとって、最善の策かの？」

カシの言葉に返答するものは誰もいなかった。

「我々ファームの民と森の民は、元々違う方法で植物と接してきた。誰か第二エリアEを見に行ったものはおるか？」

これにも返答はなかった。

「……実は今朝、森の民の子供たちが、この第一エリアEにやってきた。彼らの目的は、ファームの民に植物の手入れの方法を教えて欲しいというものじゃった」

ファームの民のみんなから、どよめきが起こる。

「わしは彼らへの返答を保留しておる。今日、セージの告白を聞いて、わしは正直嬉しかった。なぜなら、この一連の出来事は、森の民には我々が、我々には森の民が必要なのだということを示しておると感じたからじゃ。惑星ハルでは、我々はお互いに接することはなかった。しかし、もう何年も、否、何百年もの長きに渡って、目にこそ見えはせなんだが、この二つの種族は、互いにその力を縄のようにより合わせながら、ただ一つのものを守ってきたのではないか、ったか。それをこの星ぶどうが教えてくれておるのではないかと、わしは考えたのじゃ。もし、わしの考えに賛同してくれるならば、今から第二エリアEに使者をたて、森の民の子供たちに協力する旨を伝えに行かせたいのじゃが、どうかな？」

柔らかい口調だが、確固としたカシの主張に皆は納得した。

「瑞樹のお陰で、ファームの民と森の民はうまく行きそうなんだ。これで瑞樹が無事に帰ってきてくれたら一気に融和ムードが加速するだろうに……」

もし森の民が瑞樹に何か危害を加えていたとしたら、どうなるのだろうか、セージは不安を隠せない。

「融和なんてどうでもいいわ。瑞樹が無事でさえいてくれたら」

ミントはセージを睨んだ。

「じゃあ、そろそろ行くよ」

「気を付けてくださいね。お祖父ちゃんが心配していたわ。今日は見送れなくて悪いって」

「うん、コブによってよく伝えておいて」

コブはナンディーで司令塔になってくれている。見送れないのは当然だった。

* * *

「俺も行く」

ニシキギは譲らなかった。先にアグニシティに着いていたニシキギは、カナメの為の小型シャトルを用意してくれていた。

「君はここで待機していて欲しいんだ。何があるかわからないからね」

「しかし……」

ニシキギは納得のいかない様子で唇を噛みしめる。何かを言いたそうにしているニシキギの表情に、カナメは苦笑する。勘の良い彼の事だ、何かの情報を掴んだに違いない。そうであるならば、それに触れずに説得することは無理なんだろう、カナメは軽く目を閉じると息を吸い込んだ。

「君は……気づいているんだろうね？」

カナメはニシキギを見つめた。ニシキギもカナメを見つめる。

「……メッセージを送って来たやつのことか？」

ニシキギは躊躇いながらその言葉を口にした。

「やっぱり気づいてたか。相変わらず勘がいいな」

ニシキギの反応にカナメは苦笑した。

「しかし、情報は手に入らなかった。悪いが、あんたの親戚筋を探らせてもらった」

声というものは、本人が自覚している以上に血縁ではよく似ているものだ。メッセージを送ってきたやつのはカナメ・グラブラにそっくりだった。

「普通のやり方じゃ手に入らないんだ。僕の両親の記録にはセキュリティが掛けられていたし、さらに兄に関しては一旦情報が抹消されていた。戻すのにかなり時間がかかったんだ」

「あんた、お兄さんがいたのか？」

ニシキギが驚く。

「驚いた？僕も驚いた。僕には兄弟なんかいないと思っていたからね。両親は早くに亡くなって、親戚も、血のつながりがあるような人は一人もいなかったし、最近では自分よりも年が上の人間にさえ、あまりお目にかかったことがなかったから……正直言って二重に驚いた」

「そうだったのか……」

「名前はセルシス・G・フォティニア、反政府主義者でお尋ね者だった。脱出間際に一度、公安に捕まったが、脱獄。その後行方不明だ」

「フォティニア？」

「僕の母方のファミリーネームだ。僕はミドルネームとして使っている」

「……聞くまでもないとはもうが、あんた、自分の両親のことは、知っているんだろうな？」

「もちろんだ。抜かりないよ」

カナメは薄く笑う。

「あんたの父親が脳コンタクトの開発者だったなんて……知らないかった。お母さんはその実験台になって……亡くなったそうだな」
痛々しい表情でニシキギはカナメを見つめる。

「そんな状況なら、尚更、俺はあんたを一人でガイアシティになん

か行かせる訳にはいかないだろう？」

「かなり高度なセキュリティが掛っていたのに、よくクリアしたね。さすがだ」

「おい、聞いているのか？」

「……だからだよ。だから君には僕と同じ場所にいて欲しくないんだ！」

カナメはニシキギを睨みつける。

「セルシスは大腦コンタクトの使い手だそうだ。もっぱら悪用専門だ。どんな風を使うのかデータがない。そんな危険な場所に君と一緒にいて欲しくない。もし、僕になにかあった時は……君に瑞樹を守ってもらいたい」

「……」

「君を信頼している。後を頼む」

カナメは唇を噛みしめた。

ニシキギは眉間に皺を寄せて、しばらく沈黙していたが、やがて観念したように小さくため息をついた。

「……必ずここに無事で帰って来ると約束するなら、その頼みを聞いてやってもいいぞ」

「当たり前だろ、そんなこと。僕を誰だと思ってるんだ？」

カナメは不敵に笑う。

「自信がないのかあるのか、さっぱり分らない人だ」

気弱な事を頼んだかと思うと、この尊大な発言。ニシキギは眉間を指でつまみながら大げさなくらいの大きなため息をついた。そんなニシキギに微笑むと、カナメは小型シャトルに乗り込んだ。

第九話 復讐と破壊と…そして願い(3)

セルシスは自室のベッドの上でぼんやりと天井を見上げていた。耳の奥にこびり付いて離れない甲高い笑い声。

開発したばかりの脳コンタクトは、手入れの良いナイフのように母親の正気を容赦なく削り取って行った。人は忘れる生き物だ。それは即ち自己防衛でもあるのだ。脳深層に蓄えられた記憶の海、それを忘却という頑強に作られた蓋で封じ込めて人は生きて行く。強固にできているはずのその蓋をこじ開けるその機械は、母を記憶の海に放り出した。その中で器用に泳ぎまわれる人もいるのかもしれない、しかし母は溺れてしまった。

「ママ？ママ、すっかりしてよ。どうしちゃったの？」

子供のセルシスに、そんな事情は分からない。

「セルシス、向こうに行っていないさい」

父の険しい顔。セルシスは怯えたまま部屋を後にした。

何度も繰り返した見た悪夢だ。セルシスは両手でごしごしと顔を擦る。しばらく見なくなっていたので、忘れていたのに……苦い気分のまま、体を起こす。

すっかり壊れて、何の表情も浮かべなくなった瑞樹は、あの時の母に少し似ていた。そのせいでこんな夢をみたのかと苦笑する。今日、アドニスに瑞樹を引き渡して仕事は終了だ。次は何をするかなと軽く首を回す。地球に行けばもっと簡単に仕事はできそうだ。大脳コンタクトなんてものの存在を地球人は知らない。

父親が創った忌まわしい機械を最大限悪用することが、セルシスの復讐になっていた。自分から母親を奪い、息子である自分を顧みる事がなかった父親、そして父親に輪をかけて忌まわしい機械、分解再生装置などというものを造り出した弟を、セルシスは心底憎悪していた。

今回依頼された瑞樹に関して言えば、全くの無関係、最初はただ

ターゲット
の標的だったに過ぎなかった。

それが、最初のアプローチで、彼女が心の中で、弟により強く助けを求めた時は正直驚いた。カナメが瑞樹のことをどう思っているのかなどそっちのけで、復讐心のままに、いつもより余計に時間をかけて、いたぶってしまったのは事実だ。

しかし彼女は、なかなかしぶとかった。あんな小娘、一度か二度傷めつけられ、すぐに思い通りになると踏んでいたのだが……彼女はそうはならなかった。彼女の性質の中に回復させる何かがあるように思い始めたのは、五回目のアプローチの後だった。あれほど痛めつけられていながら、他人を庇^{かば}ったのだ。

普通の人間なら、まず自分を庇う。アドニスとはカンカンに怒るし、もう手段は選べなかった。予定よりも時間がかかっていたからだ。

セルシスと思う。もし、母親が瑞樹のような性質だったならば、正気を失わずにいられただろうか……と。しかし、そんなセルシスの思考をストップさせたのは、廊下から聞こえてきた怒号だった。

「おまえらは何者だ！」

アドニスの怒声と、複数の靴が踏み鳴らす硬い音が遠くで響く。統制された靴音の硬さに公安だとすぐに気付いた。逃げるか留まるか、セルシスが迷ったのは、ほんの一瞬だったが、その選択肢は選ぶ間もなく消えうせた。ドアには鍵が掛けてあったが、何の役にも立たなかったからだ。

何故なら、ドアは綿飴のようにチリチリとあっけなく溶け去り、人が通り抜けられるくらいの大穴があいた。

「へえ、随分簡単に分解できるようにしたんだな」

セルシスは後ろ手に縛られながら、感心したようにドアを眺めつつ、公安に連行された。

アドニスは声を張り上げていた。

「なんの権利があって、その娘を連れに来たと言うのかね！」

ここの部屋も同じくドアが溶かされていた。何とか威厳を保とうと必死に胸を張る男をカナメは見下ろしていた。これが森の民の長老、自分よりも遙かに若いはずなのに、その顔には深く刻まれた皺と、頑^{かたく}なになってしまった心が透けて見えるような暗い瞳の色があった。

「瑞樹を返してもらいにきたんだ」

カナメはその暗い瞳に話しかける。

「返す？何故君にこの娘を返さねばならないのだ？この娘は森の民だ。森の民のものだ。なんの権限があつて、君はこの娘を連れて行くと言っているのかね？」

「瑞樹は自分の意志でここに來たわけではない。あなたたちが拉致したんだ。連れ返すのは当然のことだろう？」

カナメは呆れた様子で答えた。

「この娘の意志ではないなどと、どうして分かる？この娘に確認したのか？」

アドニス^{アドニス}の自信ありげな言い方に、カナメは目を見開く。瑞樹の両脇をドクター・ヌンとカンナが固めている。瑞樹の瞳を見つめて、アドニスの意図している現実^{現実}にやっと気がついた。瑞樹の瞳はガラス玉のように、現実を何一つ見つめていなかった。

「まさか、おまえら……」

カナメの緋色の瞳が一段と鮮やかになる。

「瑞樹に何をした？」

カナメはアドニスに銃口を向けなおした。

「議長殿、銃を下ろしたまえ。君のような立場のものが、武器を持たぬものに銃口を向けるという事が何を意味するのか分からぬ君ではあるまい？」

ドクター・ヌンがしたり顔でカナメに抗議する。ヌンの言葉にカナメは微笑した。

「議長の職は返上した。犯罪の現行犯であるものを兄に持つ僕が、いつまでもその任務を背負ってられるはずがないだろう？お陰で

清々したよ。鬱陶しい仕事をこなさなければならぬこともなくな
ったし、君みたいな卑劣な人間に心おきなく銃口も向けられる」

カナメはドクター・ヌンを睨みつけた。ドクター・ヌンが少しぎ
よつとしたのを確認するとカナメはアドニスに再度交渉する。

「瑞樹を大人しく返すんだ。そうすれば事件の真相を確認した上で、
情状酌量を考えてやってもいい」

「だから先ほどから言っているだろうが。この娘に君と一緒に帰
りたいか訊いてみるがよい。この娘はここにいることを望むだろう」
自信たっぷりにアドニスは言った。

「……こいつに何か訊くのは無理だな」

事の成行きを見守っていたカンナが突然口を挟んだ。

「瑞樹は完璧に壊れてしまってる。昨日から反応なしだ」

カンナはそう言うのとドクター・ヌンの手を払いのけて瑞樹を庇^{かば}
うように後ろに立たせた。

「お前、何をやっているのだ」

ドクター・ヌンがだみ声を張り上げる。

「昨日、俺の目の前で壊された。俺、気づかなかったんだ。大脳コ
ンタクトの器械も何も付けられてなかったから、瑞樹がそんなこと
されてるって、気づかなかった。申し訳ないカナメ、俺、瑞樹を守
れなかった」

正樹は唇を噛む。

「お、お、お、お前何者だ」

ドクター・ヌンがカンナに掴みかかろうとしたところを、一気に
距離を縮めたカナメの銃口が光を発した。軽い発射音とともにドク
ター・ヌンが撃たれた。ドクター・ヌンは驚いてその場に横倒しに
転がったが、一瞬銃口からの光に包まれたヌンは、次の瞬間、髪も
眉毛もまつ毛も服も、水分をあまり含んでいなかった部分すべてが
分解されて消え去った。

周りを取り囲んでいた公安の人々から、その場に相応しくない忍
び笑いの声がさざ波のように起こった。

「な、な、なんだーこれは」

泡を食って逃げ出そうとするヌンを公安があっさり拘束する。

「なんの権限でこのような事をするのだ」

アドニス は怒り心頭の様子で怒鳴り散らした。

「この裏切り者め！森の民が森の民を裏切るのか！」

アドニス の怒りは、カンナに変装している正樹にも向かった。

「悪いな、俺は森の民じゃないんだ。俺は瑞樹と同じ地球人だ。マサキ・I・カイヅカって言う。前に第二エリアEで会いましたよね。あんた、なんの権限で瑞樹を連れて行くのかって言いましたか？俺は瑞樹の両親からハル共和国にいる間、瑞樹の後見人になることを依頼されてます。これがその証文、瑞樹を連れ帰る十分な権利でしょう？」

正樹は瑞樹の両親のサインが入った証文を取り出して見せた。ナンドイーに到着するのが遅れたのはこの証文を瑞樹の両親から取り付けるためだった。不安そうにしていた瑞樹の両親の顔が目に浮かぶ。

なんとしても瑞樹を元に戻さなければ……正樹は唇をかみしめる。

「……そんなもの、いくらでも偽造できる」

アドニスは、ぎりぎりと歯を噛みしめながら唸った。

「もちろん、いくらでも確認したらいい。これは本物だからな。でもあんたには渡せない。然るべき機関で調べて貰う分には全く構わないけどな」

アドニスは唇を噛みしめたまま項垂れた。

部屋の外で爆発音がしたのはその瞬間だった。

壁と言わずドアと言わず、辺り一面が瓦礫の山と化す。咄嗟に瑞樹を庇った正樹の上にも瓦礫の欠片が降り注いだ。

公安の一人が、突然気が触れたように持っていた手榴弾を投げたのだ。更に彼はショット銃を仲間の公安の人間に向けて乱発した。辺りをすっかり片づけてしまうと、彼は恭しく膝についてセルシス

を拘束していた手錠を解錠した。

「ご苦労だったね」

跪きシヨック銃を掲げ礼をとっている公安兵から銃を受け取ると、セルシスはにっこり微笑んで、その銃で躊躇うことなく彼を撃った。

第九話 復讐と破壊と…そして願い（4）

「正樹！大丈夫か？瑞樹は？」

カナメは瓦礫をガラガラとどけながら、正樹と瑞樹を掘り起こした。

「大丈夫だ。瑞樹も無事だ」

正樹は自分の下に庇った瑞樹を抱き起こす。瑞樹は人形のように反応がない。正樹は顔を顰めて瑞樹の汚れた顔を自分の袖でごしごしと擦った。カナメは二人の無事を確認すると、逃げ出したアドニスとドクター・ヌンを追って部屋を出た。部屋の外も中と同様瓦礫だらけで、舞い上がった粉塵が立ち込めていてむせ返るようだ。

カナメは粉塵の中で目を凝らす。小さくなっていくアドニスとドクター・ヌンの後姿の手前に、その場に相応しくなくのんびりとした様子で、とってつけたような笑顔を張りつけた男が立っていた。

「カナメか？」

その男は言った。

「……」

カナメは険しい顔をしてその男を見つめた。

「兄弟の感動の対面なのになんて面だ？」

セルシスは眉間に皺を寄せた。

「感動の対面が聞いてあきれる。よく僕の前に顔を出せたものだね」

カナメはセルシスを睨みつけた。

「おまえ……その目と髪の色はどうしたんだ？なんかの罰でも受けたのか？」

セルシスは面白そうにニヤついて、ゆっくりと歩み寄って来る。

「公安に何をした？それ以上僕に近づくな！」

カナメは銃を構える。

「俺が怖いのか？近づいたらどうする？」

「撃つ」

「おお、怖い怖い」

セルシスはあまり怖そうな様子ではなかったが、歩みを止めた。カナメは注意深くセルシスの身に付けている物を確認する。

「どうやってる？どうやって大腦コンタクトを使ってるんだ？」

「そんなことを訊いて、すぐに答えてもらえと思って訊いてるのか？」

セルシスは呆れたように問い返す。

「答えたくなるようにしてやるさ」

カナメは銃口をセルシスに向ける。さっき倒れていた公安から拝借した銃だ。殺傷能力の高い光線銃。カナメはセルシスに照準を合わせる。

「お前、誰に銃を向けているのか分かっているのか？」

セルシスは余裕の表情でカナメに微笑みかける。

「何？」

照準を合わせていたはずのセルシスの顔が、ゆらりと揺れたような気がした。カナメは霞む視界に思わず瞬きをした。視界が澄むと、セルシスがいたはずの場所に背の高い見知らぬ男が立っていた。

「誰？」

その男は灰汁色あぐいろの髪に薄い青い瞳をしている。厳しそうな瞳に深く眉間に刻まれた皺、不快感をあらわにした口元から、今にも怒声が飛びたしそうだ。その男の顔はカナメに良く似ていた。

「あっちへ行っていないさい」

その男は深い声で命令する。

「……お父さん？」

カナメは小さい頃に会ったきりの父を呼ぶ。いや、違う、これは父ではない。幻だ。カナメは自分に言い聞かせて、もう一度強く目を閉じると再び開けた。

そこに男の姿はなく、すぐ左隣から拳が飛んできた。ガツンと嫌な音がして、カナメは二三歩よろめいた。口の中が切れて血の味がある。

セルシスは、すばやく後方に退却してニヤついて立っていた。

「どうだ？父親に会えて嬉しかったか？お前はあいつにそっくりだ。見かけもやってることも傲慢なところも。見ているだけで気分が悪くなる」

セルシスは吐き捨てるように言った。

カナメは体勢を立て直し銃を握りなおす。こいつは大腦コンタクトを改良して器具なしに使えるようにしているのだ。自分の体のどこかに組み込んだのか……どこだ。目まぐるしく考えるカナメのこめかみに汗が一筋流れる。

「撃てよ、さっさと片をつけようぜ？」

セルシスの茶色の瞳が妖しく光る。カナメはセルシスの脚めがけて発砲した。セルシスが絶叫して崩れ落ちる。カナメが駆け寄ると、そこには脚を打ち抜かれてのたうちまわる公安兵がいた。

「おいっ、大丈夫か？」

どうして？カナメは混乱して辺りを見回す。ずっと後ろにセルシスがニヤニヤして立っているのが見えた。既に大腦コンタクトのイメージの中に引き込まれていたのか……。カナメは啞然とする。

セルシスは次々と瞬間移動のように立っている場所を変えた。変わっていないのは、その、人を馬鹿にしたようなニヤニヤ嗤いだけだ。カナメは舌打ちをする。どれだ？どれが本物だ！気を失ってしまった公安兵を後ろに庇うように立ち、カナメは銃を何度も構えなおした。光線銃は公安兵のふくらはぎを貫通してしまったようだった。早く手当をしなければ……カナメは焦りの色を濃くする。

こんなことならショック銃を借りれば良かった、カナメはほぞを噛む。ショック銃ならば間違えて撃っても被害は最小限で済む。

カナメは心を落ち着ける。大腦コンタクトを使用するには、ある程度距離を縮める必要があるのだ。だからセルシスはカナメを刺激しないようにゆっくりと歩み寄って来たのだらう。ならば本物は近くにいないはずだ。カナメは一番近くに近寄って来たセルシスに銃口

を定めた。

「おい！誰を狙ってるんだ？」

セルシスが目を丸くして驚いた仕草をする。カナメは、両手を挙げて降参の姿勢をとりつつ笑っているセルシスに照準を合わせなおす。しかし、確信が持てない。

「カナメ！やめろよ！俺を撃つ気なのか？」

カナメは舌打ちを一つすると、光線銃を投げ捨てた。

「間違ってたら許してくれ！」

カナメは拳でセルシスの鳩尾を殴りつけた。しかし、気絶して横たわる人物は公安兵で、カナメは唇を噛む。カナメは次々に公安兵を気絶させていった。カナメに対し、抵抗するもの、反撃するもの、逃げ出すもので、その場は混乱を極めた。もう一人、カナメと同様に周りの人間を殴り始めたセルシスがいた。カナメはそのセルシスに近づく。

「君は誰だ？」

本物のセルシスならば、人は一人でも多い方が現場を混乱させるのに有利だ、それを減らすならば、それはセルシスではないだろう、カナメはそう推測した。

「カスピダタです。タクサス・カスピダタ。以前ナンディーの牢でお会いしましたね」

カスピダタは胸倉をつかんでいたセルシスの鳩尾を殴って気絶させた。しかし倒れた人物はセルシスではなく、まだ若い公安兵で、少年のようにも見える。

「あの時の……」

カナメは掴みかかってきたセルシスの拳を避けると、後ろに回り込み腕を締め上げる。

「半分は俺が片付けます。早い所、あの幻覚野郎を捕まえてください」

「悪いね……」

「カナメさん、あなたは俺に約束してくれた。理不尽な思いをしな

いで暮らせる国になるように力を尽くしてくれると……」

「……議長は返上してしまったんだ。申し訳ないが……当分約束を果たせそうにないよ」

「いつまでも待ちますよ。そして、いつでも俺がその約束を思い出させて差し上げます。会期毎に選出はあるんだ。逃がしませんよ。覚悟してください」

言いながらカスピダタは、次のセルシスをノックアウトした。

「参ったな……そうだ！タクサス、この中に一人女の子がいるんだ。小さな子だから掴んだらすぐに分かんと思う。その子は殴らないでやってくれ」

「了解しました」

そのセルシスを掴んだとき、随分軽いと感じた。これは瑞樹だ、カナメは直感する。ためらった一瞬、セルシスの銃口がカナメの左のこめかみに当てられた。

「ゲームセットだ、弟君。君は随分強いんだな。驚いたよ。でも、これで終わりだ。誰も動くなよ！動けばハルの議長殿は木端微塵だ。再生もできないように粉々にしてやるよ？」

カナメは静かに目を閉じると、手の中にいた瑞樹を突き放した。

「最後のはなむけに、父親の姿を見せてやろう。父親に撃たれるんだ。忌まわしい機械を作りだした親子に相応しい最期の演出だろう？運が良ければ再生できるくらいにはしておいてやろうかな？」

青い瞳をしたカナメそっくりの男が、銃口の照準をカナメに合わせた。キリツと光線銃の安全装置を解除する音がして、カナメは目を閉じた。

その時、父親のイメージの隣にいた女性が突然、カナメを庇った。

「あなた！セルシスを連れていくのはやめて、お願いよ！」

茶色の悲しげな瞳がセルシスを見上げて続けた。

「セルシスは私の命なの、私の大事な宝物、私達の大事な息子なの。お願い、離れ離れになんてしないで……」

カナメは凍りつく。お母さん？

「……やめろ」

唸るように怒気を孕^{はら}んだセルシスの低い声が響いて、カナメの目の前から父親と母親のイメージが消えた。カナメはセルシスの一瞬の隙をつき、銃をセルシスの手から蹴り飛ばし、セルシスの顔面を強打した。茶色い眼球が宙を舞い、地面にコトリと音をたてて転がった。

カナメの傍には、涙を流している瑞樹が立ち尽くしていた。妄言^{うわごと}のようにセルシスを呼んでいる。片方の目を手で押さえたまま、セルシスが瑞樹を驚愕と憎悪の目で睨みつけていた。

「これで皆を操っていたわけだ」

カナメは転がり落ちた義眼を拾い上げた。はっと我に返ったようにセルシスがカナメを睨みつける。

「茶色の瞳は母親の瞳だ。母親の代わりに復讐でもしている気分だったのか？」

憎悪の瞳で睨みつけているセルシスをカナメは後ろ手に縛った。

「不審な動きをすれば即座に撃つ」

カナメはセルシスを睨みつけた。

「正樹、悪かったな。今、救援隊に連絡をとるよ」

カナメに殴られて呻いていた正樹に気づくと、カナメは声をかけた。

アグニシティからの救援隊はすぐに到着した。救援隊の搜索で、アドニス^{アドニス}が、シャトルの離発着エリアで、頭を撃ち抜かれて死んでいるのが発見された。自殺なのか他殺なのかは不明だ。凶器がないところを見ると、他殺の線が濃いらしい。ドクター・ヌンの行方が不明だった。

カナメはうつろな瞳の瑞樹と、捕らえたセルシスを連れてアグニシティへ戻った。セルシスの名を呼び続けている瑞樹を、セルシスが時々憎々しげに睨みつけていた。他の森の民は予想以上に抵抗な

く捕まり。エニシダとイベリスは倉庫のような場所に監禁されているところを救出された。

第十話 水の檻を壊す術（1）

『カナメ……セルを捜してくれないか？私は間違っていた。セルを見つけてだしてくれ。頼む……』

乱れていた心音は更に大きく乱れ、やがて微かになり、そして途絶えた。父親が最後に残した言葉を、6才になったばかりのカナメは心に刻みつけた。

セルとは何か、ずっと疑問に思っていて、そして……ずっと捜していた。人に訊き、本の中を捜し、コンピューターの中を捜した。何かのプログラムのセルかもしれないと人にアドバイスをされ、父親の作ったプログラムをしらみ潰しに探した。

お陰でコンピューターの扱いには慣れたが、それらしい……つまり間違いのあるセルを見つけたことはできなかった。

それが人だとは、微塵も考えたことがなかった。まして、兄だなど……

「あなた、セルは見つかった？」

カナメが医療センターの病室に入ってくると、瑞樹は嬉しそうにベッドの上で身を起こして、すぐにいつもの質問を口にした。カナメはイライラする。

この夫婦は……カナメは心の中で舌打ちする。そこで止めるから誤解が生じるのだ。きちんとセルシスと言えば、間違わずに済んだものを……

「瑞樹、僕は君の配偶者じゃないよ。何度も言っただろう？」

カナメのイライラした口ぶりに、瑞樹は腑に落ちない様子で小首を傾げると、声のトーンを柔らかく変える。

「セダム、疲れているんじゃない？無理をしては駄目よ？」

瑞樹は、ベッドの傍で途方にくれて佇むカナメの手を優しく握る。カナメはため息をついてベッドの傍にある椅子に腰を下ろした。

サイドテーブルには編みかけの作品が籠に入れられている。茶色のその物体は団子のようにも見える。何を作っているのかは教えてもらえなかった。今日見ると、上段の団子に耳らしいものがくっついていていた。何かの動物なのかもしれない。

＊ ＊ ＊

「恐らく、セルシスが脳コンタクトを使っていたときに、瑞樹は彼の記憶の中にある君のお母さんのイメージを拾ってしまったんだろう」

ブラキカムはそう言った。

「どうしたら元に戻るかって？ たぶんだぜ？ 正樹の言ったことを検証すると、瑞樹は一旦精神的に崩壊させられて、白紙のような状態になっていたんだと思う。そこに君のお母さんの記憶が飛び込んできた。ならば、記憶操作で時間を戻して白紙の状態になった瑞樹に戻すところまでは簡単だ」

ブラキカムはため息をついた。

「問題はその後だ。どんなふうに精神を崩壊させられたのか、おそらく脳コンタクトで探ることも簡単だろう。ただ、それを引き出すことは瑞樹にとってかなりな苦痛になるはずだ。精神崩壊させられた過程をもう一度辿ることになるからな。しかも、さらに厄介なことがあるんだ」

ブラキカムは沈痛な面持ちでカナメを見上げた。

「こういう心理操作をかけるやつは狡猾でね。必ずと言っていいほどトラップを仕掛けておくものらしい。俺もそんなに診たことがないから、はっきりとは言えないんだが……いざとなったら、ターゲットが自ら口封じをするような暗示をかけておくらしい」

カナメは息をのむ。

「それは、つまり……」

カナメは言いよどむ。考え付くのは最悪なことばかり。

「いちばん簡単なのは自殺だ。ターゲットが回復すると同時に自殺するように暗示をかけておく。あるいは発狂するようにしておく、あるいは……」

「もういい！」

カナメは頭を抱え込んだ。

「だからどんなトラップを掛けられているのか、確認もせずに状態回復させるのは、とても危険なんだ」

「セルシスに訊けばいいじゃないか。悪事の張本人だ」

カナメは吐き捨てるように言う。

「もちろん訊いたさ。しかし暗示を掛けているとしたらヌンがやっているだろうと言うし、それは事実のようだ。トウキに確認してもらった。トウキでさえ、はっきりとは分からないと言っていたぜ。彼に大脳コンタクトを使うのは危険だ。剣の達人に真剣勝負を挑むようなものだからな」

「ヌンか……」

あの時逃がしてしまったのが悔やまれる。

「公安がヌンを捜している。回り道のようなだが、ヌンが見つかるのを待ったほうがいい」

「それまでこの状態でいると言うのか？ 白紙の状態まで戻したほうがいいんじゃないのか？」

「いいじゃないか。母親と妻と両方できたみたいなものだろ？」

ブラキカムはニヤリと笑った。カナメはブラキカムをねめつける。

「それだけじゃないぜ？ 実際、このままの方がいいんだ」

ブラキカムは弱く笑んだ。

「白紙の状態に戻すと言うことは、命令に従順な状態になるということだ。元々その目的で精神崩壊させられたわけだからな。誰の命令にも従うようになるぞ。誰がどんな命令をするか、お前想像がつくか？ 医療センターにいるやつだって、いいやつばかりじゃないぜ。」

瑞樹は自分の身を守れなくなる。お前が四六時中傍にいて守ってやるのか？言い換えれば、おまえの母親の人格が瑞樹を守っているんだぜ？」

＊ ＊ ＊

「ねえ、セダム？毎日お見舞いに来てくれるのは嬉しいんだけど、仕事は大丈夫なの？私はもう元気なのよ。ドクターにもそう言うてるんだけど、まだ家には帰れないって……」

瑞樹は不満そうにカナメを見つめる。

「まだ家には帰らない方がいいよ。それにここの方がエリアGに近いから、僕も様子を見に来やすいしね。仕事のことは気にすることないよ。時間なんて作ればいいんだから」

ドアをノックする音がして、ニシキギが顔を見せた。

「カナメ、ちょっといいかな」

ニシキギは部屋には入ってこないで、カナメを廊下に呼び出した。「何？」

「フローティングシティのアオギリから連絡が入った。至急あんたに連絡して欲しいそうなんだが……」

「何かあったかな」

カナメは顔を顰^{しか}めた。

「恐らく、シティ基底部の劣化の件だと思う」

「そうか……」

カナメは眉間に皺を寄せる。

「ビーナスは手強いな」

苦笑して呟く。

「女神は手強いに決まっている」

ニシキギはしかめっ面で言った。

「そうだ、君を瑞樹に紹介しておくよ。何かあった時には瑞樹の力になってやってくれないか」

「紹介すれば俺を認識できるようになるのか？」

ニシキギは複雑な顔で問う。

「もちろんだ。ただ、自分が瑞樹だとは認識していない。僕のことだって僕の父のセダムだと思ってる。本物の僕は彼女の中にはいない。まだ生まれていないらしいからね」

カナメは肩をすくめた。

ニシキギは深くため息をつく。瑞樹という人間は透明なガラスの器のようだ。色々な人格を易々とその中に受け入れて、その人格を正確に、損なうことなく透かし出す。デイモルフオセカ・オーランティアカにハル、そして今度はカナメの母親シオン・フォティニア・グラブラ。

「瑞樹、僕の友人を紹介するよ」

カナメはあくまでもシオンとは呼ばない。訂正する瑞樹に、瑞樹と呼びたいからと言い張った。心情的にこれを譲るわけにはいかないと思ったからだ。

「ニシキギだ。同じくエリアGで働いている」

「はじめまして」

瑞樹は屈託なく微笑むと、ニシキギに手を差し出した。

「：はじめまして：」

ニシキギは戸惑い気味にその手を軽く握った。

「以前のセダムの瞳の色と同じね」

瑞樹はニシキギの瞳を覗き込んで言った。

「きれい」

瑞樹は嬉しそうに言うとはんなりと微笑んだ。

カナメは自分の瞳の色のことを、事故で変化したと偽ってシオン人格に説明していた。まあ、当たらずとも遠からずだ。

再生治療を繰り返して、限りなく薄くなってしまうた銀色の髪と深紅の瞳。

『なんかの罰を受けたのか？』

と言ったセルシスの言葉は案外当たっているのかもしれない。カナメは苦笑する。

「瑞樹……」

ニシキギが苦しげに顔を歪めて、瑞樹の頬を軽く指でなぞる。瑞樹はびくりと身を引くと首を傾げた。

「どうしてみんな、私のことを瑞樹って呼ぶのかしら？ 私はシオンなのに……」

少し困ったように複雑な微笑みを浮かべる。

「……瑞樹、僕は急な仕事が入ったから、もう行くよ。僕がいない時に、何か困ったことがあったら彼に相談するといい。きっと力になってくれるから……」

そう言い残すと、カナメはニシキギと瑞樹を残したまま部屋を後にした。取り残されて途方にくれたニシキギに瑞樹が椅子をすすめる。

「何かお飲みになります？」

瑞樹は、そつのない様子で接客用の微笑を浮かべる。

「最近は番号を入力するだけで、飲み物や食べ物が簡単に出てくるのね。私、知らなくて……」

「瑞樹……」

ニシキギは更に途方に暮れた。

第十話 水の檻を壊す術（2）

確かに瑞樹は、ニシキギを認識した。カナメの父親、セダム・グラブラの友人として。彼女の中で、ここは惑星ハルの地下都市ということになっている。ニシキギは特に訂正をしなかった。シオンの人格にそれを教えたところで何になるだろう、彼女はハルの地下都市ハデスで、既に死んでいるのだから。

彼女は心理学者であつたらしい。遙か遠く、時間も場所も隔たったハルのことを、シオンは喜色を浮かべて話した。彼女の話は、当然ハル脱出のかなり前の時代の話で、ニシキギが知らない生まれる前のことをシオンは語った。

しかし、その話は瑞樹の口から語られている訳で……ニシキギは戸惑いを覚える。

大脳コンタクトも分解再生装置もない、不便だったころの地下都市ハデス。

最終的に、彼女が実験台として身を捧げることによって大脳コンタクトが完成したことも、そのせいで精神異常を起こした彼女から生まれた自分の子供が、分解再生装置を開発したことも、瑞樹の中のシオンは知らない。

惑星ハルは既に末期の状態で、シオンはそのことをいつも心配した。ハルはどうなっているのかと……。

「ところで、ニシキギさん、前から気になっていたんですけど、その腕はどうなさったの？」

ニシキギの右腕には包帯が巻かれていて、動かないように固定されている。

「……事故でね、怪我をしたんですよ」

ニシキギは苦笑する。瑞樹は覚えていないのかもしれない。それならばそれでいい、ニシキギはため息をつく。

瑞樹がガイアシティから帰還した時、大勢の人がアグニシティの到着ロビーに集まっていた。事情を知っている者、知らない者、雑多な人々が出迎えた。

正樹に支えられるようにして降りてきた瑞樹と、後ろ手に縛られて公安に囲まれたセルシス、虚ろな表情のイベリスと、カナメに支えられて降りてきたズタボロのエニシダ。一行はブラキカム率いる医療センターのスタッフに迎えられた。

ニシキギは瑞樹に駆け寄った。

「瑞樹、大丈夫なのか？」

しかし、瑞樹からの返答はなく、ただ正樹が眉間にしわを寄せて項垂れた。

「瑞樹？」

ニシキギは瑞樹の肩を掴んで揺さぶる。

「ニシキギ、とにかく医療センターへ」

痛みを堪えているようなカナメの声に、ニシキギは顔をあげた。

頷いて瑞樹を抱きかかえるようにして歩きだした時だった。

「どうして？ どうしてディモルフオセカなの？」

出迎えた医療チームの中にいて、金切り声をあげた女がいた。ネモフィラだった。

帰還した一行を見物に来ていた人達の視線がネモフィラに集中する。

ネモフィラはその日、帰還した人たちを救援するために集まった医療センターのスタッフの中にいた。ニシキギの後についてアグニシティにやってきたものの、アグニシティでのネモフィラの居場所は、地球のハル共和国以上になかった。

このエリアEはファームの民が、ほぼすべてにおいて管理を担当しており、森の民の、しかも力を使えない状態のネモフィラがでることなど無いに等しかった。それでもクレジットを稼ぐために

は何かしなければならぬ、そう考えたネモフィラは医療センターで下働きのようなことをしていた。

アーマルターシュが途方にくれるネモフィラに、その仕事を紹介してくれたのだ。ニシキギはあれから一言も口を聞いてくれない。事件が解決すればニシキギは地球に帰るのだろうとネモフィラは思っている。そうすれば、第二エリアEのあるハル共和国に帰れる。

どうして彼から離れられないのか。まるでストーリーカーのようにニシキギに拘泥してしまう理由が、自分でも分からなかった。

シーカスとは別人だと、そう何度自分に言い聞かせても、どうしても傍を離れる気になれなかった。そして今に至っている。

医療センターの仕事はあまり好きにはなれなかった。植物相手の仕事しかしてこなかったからかもしれない。人間相手の仕事は雑多で、騒々しく、血の匂いに慣れなかった。自分の体にも流れているだろうと言われれば、そのとおりなのだが、切ったら流れ出る禍々（まがまが）しい赤い血や、痛みの苦痛を訴える患者や、おう吐物や排泄物の処理……。すべてがネモフィラには耐えがたく、それらと向かい合うために、ネモフィラは日々格闘するはめになった。

ネモフィラの母親はアール・ダー村の医療センターのスタッフだったが、こんなことをしていたのかと頭が下がる。母親は森の民としては力がなく、それでも少しはクレジットを稼ごうと医療センターで働いていたのだ。父親はそんな母を見下していた。森の民の力が大きい方がアール・ダー村では優遇されていたのだ。

人並の森の民の力を持っていたネモフィラを母は誇りに思ってくれた。強い森の民の力を持った人と結婚して、幸せになりなさいと言うのが母の口癖だった。力を持たない森の民は、飛べない鳥のようだ。たとえばその力が自らの命を削るものであったとしても、鳥には翼が必要なのだ。

力を手に入れるためにミズキ・ヒュウガという地球人を拉致した森の長老アドニス。今や彼は途轍もない悪者という扱いになってい

るが、ネモフィラにはアドニス of 気持ちがよく解る。

彼は欲しかったのだ。

自分を支える為の誇りが、前進するための力が、森の民を率いるエネルギーが……

一般人やファームの民には恐らくこの気持ちは分かってもらえないだろう。しかも森の民は圧倒的にマイノリティなのだ。やりきれない思いでミズキ・ヒュウガを出迎えた。

森の民に力を与えられるらしいその地球人に会ってみたいと言う興味は強すぎる程あった。

なんとか医療スタッフの最前列に立つことができ、タラップを降りてくる一行に目を向けた。その途端、ネモフィラは凍りつくようだった。言葉を失い、ただ目を見張る。

その一行に足早に近づいたのはニシキギだった。白っぽい金の髪の後ろ姿が見えた。ニシキギが歩み寄ったその先に、虚ろな瞳の栗色の髪の女が、誰かに抱えられるようにして降りてきた。それはネモフィラが見間違うはずもない、ディモルフオセカ・オーランティアカだった。

気遣わしげにディモルフオセカに歩み寄って、大事そうに守るように肩を抱いたのはシーカスではないか？

ネモフィラの中で何かが弾けたようだった。

ネモフィラは夢中で、隣の医療スタッフが用意していた外科用医療バッグから刃物を取り出した。

「どうして？ どうしてディモルフオセカなの？」

ネモフィラはそう叫んで瑞樹に走り寄った。

* * *

アール・ダー村で、デイモルフオセカが見つかったらどうするか……

失踪したデイモルフオセカを村人や公安が捜している間中、ネモフィラは考えていた。きつとひっぱたいている。

どうしてこんなことをしたのか、自分に対する当てつけなのか、こんなことをしてまでシーカスの気を引きたかったのか。責める言葉は泉のように湧き出した。

しかしネモフィラの怒りに反比例するように、周囲はネモフィラから乖離かいりしていった、否、それどころかデイモルフオセカに同情的になっていったのだ。

シーカスはデイモルフオセカの心配ばかりするように、友人でさえネモフィラの配慮のなさに陰口をたくようになり、ネモフィラの気持ちは、ぽつんと取り残された。

怒りは失望にそして絶望に変性した。

あの時、化石化して封印したはずの絶望が、息を吹き返したようだった。

別にデイモルフオセカを殺してしまおうと思ったわけではない、ただ、シーカスから離れてほしい、それだけの気持ちだった。デイモルフオセカを狙った刃先は、瑞樹を庇ったニシキギの右腕に深々と突き刺さった。

＊ ＊ ＊

被害者だったにもかかわらず、後になって、ニシキギはブラキカムからこつてり絞られた。そういう事情の義妹になっていたかもしれない人を、何の援助もなしに放り出すとは何事だとブラキカムは怒った。

「じゃあ、どうすれば良かったんだ？」

傷の治療を受けながらニシキギは仏頂面で言った。

「彼女にはカウンセリングが必要だ。俺達医者が何のためにいると思っ
ているんだ？人間は体だけじゃないだろう？心が伴って初めて人間だ。お前は瑞樹を何とかして治してくれと俺に言うが、ネモフィラだって同じじゃないか。なぜネモフィラを治してくれとは言わない？」

「……瑞樹は明らかに傷を負っている。俺にはそれが分かる。普段の瑞樹を俺は知っているからな。普段の瑞樹を知っていないものならば、今の瑞樹を、ただの無口で無表情な女だと思うかもしれない。それと同じだ。俺はいつものネモフィラを知らない。元々刃物を振り回す女だったかもしれないじゃないか」

「……」

ブラキカムは絶句した後、深いため息をついた。

「……んな訳ないだろう？」

「俺はシーカスじゃないし、あれは義妹でもない」

頑かたくなニシキギの様子にブラキカムは再度ため息をついた。

「もういい、わかった。あの子は医療スタッフだ、俺の仲間だ。俺が責任をもって治療する。君が傷害事件として告訴するつもりなら、俺が彼女の後見人になる」

ブラキカムは息巻いた。

「そんな面倒臭いことはしない。ただ瑞樹の近くには近寄らせるな。俺が望むことはそれだけだ」

治療を終えたニシキギは、ブラキカムにそう言い捨てて医療センターを後にした。あの後、ニシキギはネモフィラの姿を見なかった。腕の治療と瑞樹の見舞いとで医療センターにはちよくちよく来ていたが、姿を見ないところをみると、どこか別のところでカウンセリングとやらを受けているのかもしれない。どこか別のことか。

瑞樹の近くにいないのならば、それでいい、ニシキギはそう思っていた。

* * *

「痛むの？」

動かすとまだ鋭い痛みが走るのだが、ニシキギは首を横に振った。

「そう、なら良かった」

瑞樹はふわりと微笑んだ。

「……あなたには兄弟姉妹はいるんですか？」

突然湧いた疑問をシオンにぶつけてみたくなった。

「妹がいるのよ。フォボスで働いているからあまり会えないんだけれど」

「妹さんは結婚している？」

「ええ、もちろん。家でフォボス暮らしよ。女の子が一人いるの。アナベルって言ってね、かわいいの。私も女の子が一人欲しいわ。もちろんセルシスの次によ？」

シオンはニコニコと残酷なことを話した。

残念ですが次も男の子ですよという言葉を、ニシキギは苦勞して呑み込んだ。

「もしもの話ですよ、もしも、妹さんが亡くなった後、その妹さんの旦那さん、つまりあなたの義弟が、あなたと付き合いたいと言ってきたら、あなたはどうしますか？」

「……でも、私にはセダムがいるし……」

シオンは当惑して言葉を途切れさせた。

「セダムが、仮に死んでしまったとしてでは？」

「考えられないわ、セダムが死んでしまうなんて……」

シオンは動揺して絶句する。

「じゃあ、セダムに出会う前に妹が結婚して、で、先に死んでしまうということにしましょう。で……」

「待って、待って、あなたの話には大事な前提が、一つ抜けている

わ」

シオンは、ふわりと目で微笑んだ。

「誰が誰のパートナーだったのか、それは関係がないことでしょ？問題は、その人とあなたの問題なんだから。あなたがその人をどう思っているのか、それが第一の前提条件よ。それが一番大事なことの。特に恋愛に関してはね、誰かのためとか、義理とか、義務とか、同情とか、そう言ったものは無意味だと私は考えているの。きっかけとしてでも、できれば避けたい動機だとも思っているわ」

シオンの言葉は明快だった。

「なぜなら、その時はよくても、それが自己満足に過ぎなかったと後になって気づく時が来る可能性が高いからよ。そうなった時には……最悪ね。きっとお互いに傷つけ合うことになるでしょうね。乗り越えるにしても、かなりなダメージを覚悟しなければならないと思うわ。初めから打算で、傷つけることに何の躊躇いもないのなら問題は無いでしょうけれど。でも、それはもう恋愛ではないわね」

シオンは、ふっと夢げに笑った。

「……」

ニシキギは静かに納得した。

ネモフィラに対する自分の気持ちの整理も、デイモルフオセカに対する自分の気持ちの整理もついたような気がした。

この母親の子供だったからこそ、カナメはデイモルフオセカを守りぬけたのだとニシキギは同時に理解する。カナメは自分の気持ちだけに従ったのだ。そうでなければ、デイモルフオセカは逃亡先の地下都市で、あるいはフォボスの処罰場で、その元々短かったはずの生涯を更に縮めていたに違いないのだ。そして、この地で、僅かな時間だったとは言え、瑞樹の体を借りて、巡り合うことはなかったに違いない。

そこまで考えて、ニシキギはデイモルフオセカの辿り着いた先が、カナメで良かったと初めて思うことができた。

＊ ＊ ＊

「ブラキカム！」

廊下で呼び止められたブラキカムは、何かとニシキギを見上げた。

「……その後、あいつはどうなってる？」

微妙に視線を逸らしながらニシキギは問いかける。

「あいつって誰だ？」

ブラキカムは眉間に皺を寄せた。

「……ネモフィラだよ」

ニシキギは少しイラついたように言葉を放り出した。

「急にどうした？ 今頃になって何か気になってきたのか？」

「俺は、確かに彼女に対して配慮がなさ過ぎたと思う。もし、何か俺で力になれることがあれば言ってくれ。協力する……シーカスの兄として」

神妙に言葉を紡ぐニシキギに、ブラキカムは、あっけにとられてピシリと固まった。

「なんだよ」

ニシキギは眉間に皺を寄せる。

「気味が悪い……なにか悪いことの前兆じゃないかと思うんだが……」

ブラキカムの脳内に、ナンディーが小惑星と衝突するイメージが浮かぶ。

「……わかった……聞かなかったことにしてくれ」

ニシキギは顔を顰める。

「悪かった、悪かったよ。そのうち助力願うかもしれない。助かるよ」

「……」

ニシキギは疑わしそうな目でブラキカムを見下ろす。

「ただ、彼女は……俺や、恐らくお前が考えているよりも、ずっと深く心に傷を負っている。正直、俺もどうしたらいいのか分からないほどだ。今はまだ落ち着くのを待っている状態なんだが……そうだな、そのうちお前の力が必要になってくるかもしれない。その時には頼むよ」

ブラキカムは弱く笑んだ。

「俺からも、ネモフィラのこと頼むよ。よろしくお願いします。ドクター」

「やっぱ、気味悪い……」

ブラキカムは首を竦め、ニシキギは再び渋面になった。

第十話 水の檻を壊す術(3)

「だーから、ヌンを捜せって言ってるだろお？」

セルシスは、鉄格子の向こうでうんざりしたように繰り返した。

「トラップの性質とか、大体こういう感じのだからという話をヌンとしなかったのか？」

ニシキギは、しつこく食い下がっていた。

「なんか言ってたかなー」

セルシスは考えるふりをする。こういう交渉をしにくるのは医者か……カナメだと思っていた。面白い。セルシスは心の中でニヤニヤする。

「瑞樹はどんな具合だ？なんでも言うことを聞くだろ？」

セルシスは身を乗り出して訊いた。

「……瑞樹はシオンになってる。あんたのお母さんだ。会いたいかな？」

ニシキギは意地悪そうに嗤った。

「……」

一瞬セルシスは絶句した。

「あのままなのか？なんで……」

「シオンは聡明だ。なんでも言うことを聞く操り人形になっているよりましだ。医者がそう言った」

ニシキギはセルシスを睨みつけた。

「なるほどねえ」

セルシスは薄く笑った。

「そうだな、会いたいなあ。連れてきてくれるなら、ヌンが言っていたヒントの言葉を教えてやってもいいかなあ」

セルシスの言葉にニシキギは大きくため息をついた。やっぱりこいつは何か知っているのだ。しかし瑞樹をここに連れてくるのは危険ではないか。どうするか。

「……少し考えさせてくれ。俺の一存で瑞樹をここに連れてくることはできない」

ニシキギは用心深く返答した。

「もちろん、いつまでも、好きなだけ考えなよー」

含み笑いをしながらセルシスは、格子の奥の部屋へと姿を消した。あいつの顔には見覚えがある。セルシスは一人、記憶をまさぐる。瑞樹を痛めつけたとき、彼女が一番強く助けを求めたのはカナメだった。その次に名前を呼んだのは誰だったか。やつは知りたいだろうなあ。セルシスはくくつと一人笑んだ。

「だから、あんたからも訊き出してみてくれよ。あいつは絶対知ってるんだって」

エリアGで、金星フローティングシティ基底部の新材質の負荷試験を行っていたカナメを捕まえて、ニシキギは頼み込んでいた。新素材はじわじわと目の前で浸食されていく。

「これは駄目だ、使えないな」

正樹が、横でデータを取りながら呟いた。

「この分子構造では結束が弱すぎる。今使っている物の方がまだましだな」

カナメが苦笑する。

「いい線いくって思っただけだなあ」

正樹は残念そうに言った。

「なあ、聞いてるか？」

ニシキギはイライラした調子で言う。

「僕は絶対会いに行かない」

まるで子供の喧嘩けんか後みたいだと、ニシキギは呆れかえる。

「なあ、それを聞き出したとして、やつが本当のことを言ったのかどうか確認する方法はあるのか？」

正樹が口を挟む。

「それは……」

「あいつが本当のことを言う訳がないだろう？ 話すだけ無駄だって」
カナメは厳しい顔をして言葉を投げだした。

「ヌンの言葉ならば信じられると言ってるのか？」

「大腦コンタクトの使い手はセルシスだ。ヌンは大した使い手ではない」

つまり大腦コンタクトで情報を引き出すつもりな訳だ、ニシキギは考え込む。

「でもヌンの行方は皆目掴めていないんだらう？」

「瑞樹の安全が第一だ」

カナメはきっぱりと言い切った。

「あんた、最近、瑞樹に会いに行っていないだらう？」

睨みつけるニシキギをカナメは、ざわついた気持で見つめた。

「何かあった……のか？」

「シオンの人格が不安定になってきている。推測だが、彼女の中の時間が進んでいるんだと思う」

「ああ、それは俺も感じてたよ。最近ぼんやりしてる事が多くなつたなあって……」

正樹もニシキギに同調する。

「どうして時間が進んでいると思うんだ？」

カナメが呆然とした声で問う。

「彼女が話す内容が進展してるからだ。昨日は大腦コンタクトが実験段階に入ったらしいと言っていたぞ。と言うことは彼女が実験台になる時期が来たということだらう？」

ニシキギは不安を隠さない。

瑞樹の病室から、カナメの足が遠のいていたのは事実だった。瑞樹に会いに行っても、実際にいるのはシオンの人格だ。複雑な気持ちになるのが嫌だった。当然のように、シオンはカナメをセダムとして認識する、しかし、自分から見れば、シオンは母親なのだ。彼女がセダムに求めるものと、カナメがシオンに求めるものが異なる。むしろ他人の誰かに間違われている方が、ずっと良かったと思う。

夫婦間にあるものと、親子間にあるものは、同質のようでありながらベクトルがずれている。

金星のフローティングシティ基底部の不具合は、カナメをその煩わしさから逃避させるのに十分な大義名分だった。

「……今日、様子を見に行ってみるよ」
カナメは項垂れた。

＊ ＊ ＊

瑞樹は人形のようにベッドの上に上半身を起して座ったまま、微動だにしなかった。

「瑞樹？」

カナメの呼びかけに反応がない。

「……シオン？」

躊躇^{ためら}いがちに呼びかけた名前にも反応を示さなかった。

「お手」

正樹の言葉に反応して、瑞樹は手を差し出した。カナメは正樹をじとりと見つめる。

「お手はないだろう？」

カナメは正樹を睨みつけた。最初は、瑞樹を守れなかったことに責任を感じて落ち込んでいた正樹だったが、元の瑞樹に戻す方法があるとブラキカムに診断されてからは、少しずつ普段の正樹を取り戻していた。

「ほんとに言うこときくなー」

あつけにとられた様子で正樹は呟いた。

「瑞樹、こいつの言うことをきくなよ」

カナメは正樹を指さして言った。そうすると、もう瑞樹は正樹の

言うことを全く聞かなくなるのだった。

「命令どおりだ」

正樹は更に驚いた様子で言った。

「命令の内容で優先順位があるのかな。それとも時系列なのかな」
「知るか」

カナメは腹立たしそうに呟いた。

ドアをノックする音がしてブラキカムが入ってきた。

「おう、来てたのか」

ブラキカムの後ろには紫目のトウキが控えていた。

「トウキ？」

カナメは訝^{いふか}しげな顔でトウキを見つめた。

「ここ数日、瑞樹の中のシオンの人格が薄れ始めてきたんだ。シオンが機能していない時、瑞樹は全くの無防備だ。それでトウキを見張りとして付けることにしたんだ。善からぬやつが善からぬ命令をしないようにね」

ブラキカムの言葉に相槌を打つようにトウキが頷いた。

「シオンはどうなるのかな」

「はつきりは言えないが、恐らくこのまま自然消滅するんだろう。今は二、三日おきくらいしかシオンは出てこないが、ちょっと前は一日おきだったんだ。だんだん現れる期間が短くなっている」

「……そうか」

「おまえさえ了解してくれば、シオンをセルシスに合わせてみたいと思っているんだが……どうだ？」

「……」

「シオンはあいつに会いたがっているし、セルシスも会いたがっている。例えシオンが過去の記憶に過ぎないとしても、いずれ消えてしまうのならば、その前に会わせてやった方がいいんじゃないか、いや、会わせてやるべきだと俺は考えている。当然俺が立ち会う。いいか？」

「任せるよ」

カナメは思いのほか静かに言えたことに内心、自分でも驚いていた。

「ニシキギが会わせるようにと言ったのか？」

カナメはブラキカムを軽く睨んだ。

「あいつは少しでも早く瑞樹を元に戻したいんだ」

そう言うときブラキカムは小さく肩を竦めた。

「あんなに誰かのために必死になっているあいつは、正直言って気味が悪い。しかし、良い傾向だとも思ってる。俺は、あいつがアー・ダーを追放されて地下都市にやってきた十歳の時から知ってるが、人に懐かない野生動物みたいなやつだったんだ」

ブラキカムは小さく笑んだ。

「大腦コンタクトさえ使わせなければ、セルシスは危険じゃない……と思う。安全には十分配慮する」

「会わせる日が決まったら、僕にも知らせてくれ。立ち会うつもりはないけど、心配だから様子を見たいんだ……」

カナメはブラキカムを見つめた。

「もちろんだ」

ブラキカムは破顔した。

第十話 水の檻を壊す術（4）

シオンが現れるのは、急速に間遠になっていった。

「セダムも一緒なら良かったのに……」

シオンは残念そうにそう言って面会室に入った。トウキとブラキカムが一緒に入る。シオンは面会室の中をきよろきよろと見回して不安そうな顔になった。

「こんなところに本当にセルシスがいるのかしら……」

そうシオンが呟いた時、格子の奥のドアが開いてセルシスが出てきた。

「……セルシス？セルシスなの？」

シオンは格子に手をかけて中を覗き込んだ。

「シオン……なのか？」

セルシスは面白そうな顔をして答える。

「シオンじゃないでしょ。お母さんって呼びなさいっていつも言うてるのに……」

シオンはむっとした様子で言った。

セルシスは一瞬はっとした顔をしてから、くすくすと笑った。

「本当にシオンなんだ」

セルシスはなおもくすくす笑いを続けた。

「あなた、何をしたの？こんなところにいるなんて……あなたが、お父さまと喧嘩をして出て行ってから、私たちがどれほど心配したか……あなた分かってるの？」

「何もしてないさ。あいつが開発した機械を使って商売をしている。親孝行な話だろ？なのにこんなところに入れられちゃった。あいつが作ったものが、どれほど悪徳なものか証明されたって訳だ」

セルシスは皮肉っぽく嗤った。

「お父さまのことをあいつだなんて呼ぶのはよしなさい。どんな便利な道具だろうと使い方次第で、無用の長物にも凶器にもなります。

あなたの使い方、ひいてはあなたの心根が、その道具を通して判断されているのですよ」

シオンは感情を抑えて、丁寧言葉を選びながら話した。
「こんな年になって、シオンお得意の説教を聞くことになるとは思ってなかったな」

セルシスは苦笑する。

「セルシス……その目はどうしたの？」

セルシスの片方の目は黒い眼帯で覆われている。

「事故った」

「大丈夫なの？」

「ああ……」

シオンはセルシスの頬に指を伸ばした。

「セダムそっくりのきれいなブルー。大事にしてね？あなたが生まれた時のセダムの喜びようだったのよ？自分と同じ瞳の色だって……」

セルシスは顔を反らしてシオンの手を避けた。

「あいつが喜んだ訳がないだろう？」

「あら、どうして？」

「あいつは子供なんて欲しくなかったんだ。俺を見る目がいつもそう言ってた」

「お父さまはね、確かに子供好きな方ではなかったわ。でもあなたは特別なのよ。そう言っていたもの。自分の子供は誰だって特別なの。あなたも子供を持てばわかるわ」

「……気分が悪い」

セルシスは憎々しげにシオンを睨みつけた。

「セルシス、これを……」

シオンは持っていた紙袋をセルシスに手渡した。中を覗いてみると中には掌サイズの濃い茶色の星クマと薄い茶色の星クマが入っている。星クマはハルの森に暮らしていたと言われる小型の動物で、見たものに幸運をもたらすと言われている。

「……」

セルシスは絶句する。このシオン人格は、俺のことをいつくだと思っているのだろうか……。

「一つはあなたのよ。もう一つは……」

ここまで言うとしオンは絶句して黙り込んだ。

「？」

セルシスはシオンの言葉の続きを待つ。

「嫌だ……もう一つは誰のためだったかしら……」

シオンは深く深く考え込んだまま沈黙し、やがて、静かに涙を流し始めた。

「誰へだったか、思い出したのか？」

セルシスが意地悪そうに呟いた。

「セルシス……カナメを……カナメをお願いね。あの子はまだあんなに小さいのに、私にはもう時間がないのよ。私は、もう……私でいられなくなる。きつと不安で心細い思いをさせるわ。あなたが力になってあげて……セルシス、お願いよ」

シオンは泣き崩れて、そのまま人格が後退した。

セルシスはシオンが握り締めたままになっていた手をそつと外した。

「お前、ニシキギと約束をしたんだろう？シオン人格に会わせたらヌンが仕掛けた精神トラップのヒントを教えるって」

ブラキカムが言った。

「そうだったけな」

「お得意の嘘って訳か？」

ブラキカムはセルシスを睨みつけた。

ブラキカムの強烈な皮肉にセルシスは、軽く吹き出す。

「いいよ、教えても……」

セルシスは、睨みつけるブラキカムを面白そうに見つめた。

「ヌンはね、時間を戻すと言っていた。いつって言ったかな……数

日前、確か拉致する前の日だったかな？それでどうしてトラップになるんだって聞いたんだけど、ニヤついてて教えてくれなかったな
ー」

「嘘を言っている訳じゃないだろうな」

ブラキカムはセルシスを鋭い目で探るように見つめた。

「信じるか信じないかは君たちが決めることだ」

セルシスは薄く嗤ってから、急に感情を殺した表情で、

「瑞樹、もう二度とシオン人格を発動するな、命令だ」

と言い放った後、何かを小さく呟いた。

俯いていた瑞樹が、びくりと顔を上げ、感情のない翠色の瞳がセルシスの言葉に従うことを了解する。

「おいっ！」

ブラキカムは慌てて瑞樹を庇^{かば}うようにセルシスから離れた。

「いずれにしても、もうシオンは用済みだ」

セルシスはそう言い残すと、奥のドアに消えた。

「瑞樹、今セルシスが言ったことには従わなくていい」

ブラキカムは慌てて瑞樹に声をかけるが、瑞樹はブラキカムの言葉には頷かなかった。

「瑞樹……」

ブラキカムは途方にくれる。

「ブラキカム、いいんだ。もうシオンは瑞樹を守ることはできない」

カナメが突然入口の方から声を掛けた。

「カナメ……」

「僕を思い出した時点で、シオンはもう……瑞樹を守ることはできないさ。彼女はそういう状態だったんだからね」

カナメは寂しそうに笑った。

＊ ＊ ＊

「つまり崩壊させるトラップを仕掛けている訳だな」

ニシキギは眉間に皺を寄せた。ブラキカムは項垂れたまま頷く。

「そんなことが可能なのか？時間を戻したからと言って、別に崩壊させる原因ができる訳じゃない。それともトラップを仕掛けられているのはエニシダの方で、解除した途端、現れることになっているとか？」

「そんなこと分かんよ。そもそも崩壊するメカニズムが分かってないんだから。しかしエニシダは移動不可能だ、彼が絡んでくることはないだろう。ろっ骨折れてるわ、大腿骨にひびが入ってるわで身動きが取れない」

エニシダはアドニスともみ合った時に、かなりひどく負傷していた。

「崩壊なんてさせない。俺が触れていればいいことだ」

「前回のとおりならそれでいいんだろうがな」

ブラキカムはため息をついた。

「今回は違うと？」

不意を突かれたように、ニシキギは動揺した。

「分からない、ただ、トラップとして仕掛けられていることが気になるんだ。この前エニシダが触れたのは偶然だ。なんの悪意もなかった。もし万が一、ヌンが崩壊のメカニズムを解明していて、それを何らかの方法でコントロールしているとしたら、事態は深刻だと思う」

「……だからと言って、このままにはできないだろう？」

それまで黙りこんでいたカナメが口を開いた。

あれ以来、シオンの人格は一度も現れなかった。命令は、その命令の強さによって継続時間が異なっているらしかった。命令の強弱は、特定の言葉がそれを決めているようだ。

しかし、強くかかっているものでも、ほとんどの場合、一晚眠ればリセットされているようなのに、セルシスが放った命令は解除さ

れる気配がなかった。何か特別な言葉で命令されたのか、あるいはシオン自体がもう人格を保てていないのか、あるいはその両方なのか、分からなかった。

「……そろそろ限界なんだ」

正樹が困り切ったように言った。

「瑞樹の両親が心配してる。本人からの連絡がないからな。治療中で連絡が取れないと言ってはあるんだが……」

「ご両親に、説明しておいた方がいいだろうな」

カナメは眉間に皺を寄せた。

「俺が説明しよう。面識があるしな。正樹だけではもう納得できないんだろう？」

そう言いだしたニシキギを、ブラキカムが胡散臭うさんくさそうに見つめた。

「お前……別の人格が入り込んでないか？」

ブラキカムの言葉に、ニシキギは渋面で睨んだ。

第十一話 トラップの発動（1）

瑞樹の人格を戻すための準備が整って、いよいよ次の日となったその日、ニシキギはナンディーのエリアEに来ていた。

「これが今日の収穫だ」

セージは果物の入った器をニシキギに手渡した。

「ありがとう、助かる」

シオン人格が消えた瑞樹は、命令に忠実に従うようになったが、異常なくらい食が細くなった。食べると命令しても、少しずつ少量しか口にすることができない。無理に食べさせると吐いてしまう。

唯一、エリアEで実った果実だけが、多少無理をさせても大丈夫だと分かってから、ニシキギは毎日エリアEから果物を譲り受けて瑞樹に届けていた。

木に実ったものを食べる、命が生み出したものしか受け付けない、それは瑞樹の出自が地球であることの動かぬ証拠でもあるようだった。

「いよいよ明日なんだってな」

「ああ」

「うまく行くといいな」

セージは瞳を潤ませた。

「うまく行かせるさ。それよりもミントはどうなんだ？」

「そろそろなんだ」

セージは心配そうに言った。彼は反対したのだが、ミントは自然出産を望んでいる。母体のことを考えれば、早期に取り出して人工羊水で育てる方が安全なのだが、胎児にとっては自然出産の方が理想的だ。

「そっちこそ、うまく行くといいな」

「いくさ、行くに決まってるだろ！」

セージの声は言葉と裏腹に自信無げだった。心配な気持ちが透け

て見えるようだ。セージは少し間を置いてから、

「ソーマの種は、君がくれたんだってな。感謝している」と頭を下げた。

「俺も瑞樹からもらったんだ。ミントの役に立つのなら瑞樹は喜ぶだろう。ただ、ソーマは劇薬だ、取り扱いには注意した方がいい」

ニシキギの言葉にセージは神妙に頷いた。

＊ ＊ ＊

「瑞樹……またこんなに残したのか？」

瑞樹はベッドの上に座って、夕食のトレーを前に途方に暮れているように見えた。食事は冷めきっている。ニシキギはトレーを下ろすと果物を取り出した。

艶やかな深紅のマリズベリーの粒を一つちぎって持たせると、瑞樹は緩慢な動作で口に入れた。一つ食べ終えるごとに次の粒を渡す。

「瑞樹……いよいよ明日だな。お前、無事に戻ってこいよ」

ニシキギは瑞樹の髪を梳くように撫でた。

セージにもらった果物の半分ほどがなくなった頃、瑞樹の緩慢な動作がさらに緩慢になってきた。ニシキギはため息をついて、残りをサイドテーブルに置いた。

「食べられるようになったら、これから食べるんだ、分かったか？」

ニシキギの言葉に、瑞樹は神妙に頷いた。

「よう、ニシキギ、来てるんだってな」

ノックの音と共に正樹とカナメが入ってきた。ドアの外には常にトウキが見張っているので、関係者以外は入れないようにしている。正樹はすっかりハル人が板についていて、髪の色を染めてからというもの、半分以上の人が正樹のことをミドルネームのイブキで

呼ぶようになっていた。

「瑞樹、元気だったか？」

正樹は、瑞樹の頭を両手でぐしゃぐしゃと撫でた。瑞樹が右に左に大きく揺れる。ニシキギが顔を顰めた。

「瑞樹の具合はどう？」

カナメはニシキギに問いかける。

「相変わらずだ。食事が摂れない」

ニシキギの言葉にカナメは顔を曇らせる。

「こいつ、昔っから食が細いんだよ。日向の小母さん苦勞してたもんな」

正樹はそう言って、器に盛られたマリズベリーをつまんで自分の口に入れた。

「おいっ、勝手に食うなよ。それは瑞樹のだ」

ニシキギは果物が入った器を取り上げる。

「うーん、やっぱり、なんか違うよな。なんだろう？フレッシュさ？瑞々（みずみず）しさ？」

正樹は首を捻る。

「そんなに違うかな？」

カナメも手を伸ばして一粒口に入れる。

「おいっ！油断も隙もないやつらだ。食べたきゃエリアEでもらってこいよ」

「これ、わざわざエリアEからもらってきてるの？毎日？」

正樹が目を見張る。

「瑞樹が、少し無理をして食べられるのはエリアEの果物だけなんだよ」

カナメが説明する。

「悪い、俺、時々もらって食べてた。ここに置いてあったやつ」

「あんたが食べてたのか？なくなってるから瑞樹が食べたんだと思ってたのに……」

ニシキギが愕然とした表情で呟く。

「時々だよ、時々」

嘘だ。しょっちゅう食べていた。正樹は心の中で小さく舌を出す。疑わしそうに正樹の表情を見ていたニシキギは溜息をついた。

「マツタク……」

ユダンモスキモナイ。こいつ……本当にイブキさんに似てる。そう思ってニシキギは吹き出した。

「あんた、イブキさんにそっくりだ」

とニシキギが言ったのと同時に、

「君、本当はイブキなんだろう？」

とカナメが呆れて言った。

「……イブキってミドルネーム入れたの、間違いだっただけで最近思ってるんだ。有効に使えるどころか、俺の前では、みんな油断しないように用心するみたいで、やりにくいことこの上ない。イブキってどんな人物だったんだ？」

正樹は肩を竦める。

「だから僕は有効に使えるかなって、最初に言っただろ？」

カナメが吹き出した。

「いよいよ明日だな……」

正樹が瑞樹の頭をぐりぐり撫でる。

誰に対しても、なすがままにされている瑞樹なのだが、正樹が瑞樹をいじっている時は、心なしか瑞樹の目が微笑んでいるように見えるのは、自分のひがみなんだろうかとニシキギは思う。

「明日は頼むよ」

正樹はニシキギを見つめて行った。

「あんたに頼まれなくなったら、ちゃんとやるさ」

思わずニシキギは憎まれ口を叩いてしまう。

正樹はふふっと小さく笑って、親指を立てるガッツポーズをして見せた。

「じゃあ、瑞樹の食事の邪魔をしちゃいけないから、帰るよ。また明日」

カナメはニシキギに言うと、瑞樹の頬を柔らかく一撫でして、二人で出て行った。

その日は、その後、コブやアーマルターシュ、イベリスまでやってきて、瑞樹の病室は賑やかだった。

＊ ＊ ＊

「今日はいろんな人が来たな。疲れてないか？」

瑞樹の顔を暖かいタオルで拭いてやりながらニシキギが話しかける。

「みんな、お前に戻ってきてもらいたいんだ……覚えておけよ」

ニシキギの言葉に瑞樹は了解の意思表示をする。

消灯時間を過ぎたので、自動的に照明が落とされ、常夜灯じょうやとうが灯った。さつき、見回りの看護師が来たが、なかなか帰れずにいるニシキギに、看護師は何も言わずに立ち去った。

「瑞樹、明日は頑張りましょうね」

とだけ彼女は声をかけた。

「……瑞樹」

薄暗い明りの下でニシキギは密かに瑞樹に話しかける。

「瑞樹……」

震える手で瑞樹の頬をそっと撫でる。

「俺は、本当のことを言う……怖い。明日、俺はお前を失うことになるんじゃないかって思う……怖いよ」

数日前、ブラキカムに確認してニシキギは呆然となった。前回、瑞樹が病気で死んでしまって、再生治療を行った後、瑞樹のタイプ検査をした。瑞樹が、森の民オリジンタイプだったデイモルフォセ

カにそっくりになってしまったからだ。

その結果をブラキカムに問い合わせた。

瑞樹はマルチタイプ。つまり、今のハルの科学技術をもってしても、二度と再生することはできないタイプだったのだ。

森の民には、力を自分の意志で使えない、植物に操られるタイプの「オリジンタイプ」、自身の意志で力を操れる「マルチタイプ」、そして前者どちらかの力を被曝することによって力を使えるようになる「リセプタータイプ」の三タイプがある。そして、この三つのタイプのうち、崩壊しないで再生できるのはリセプタータイプだけだ。

瑞樹の検体は、再生した瞬間、光を放って消えたそうさ。

トラップを止められないのであれば、再生も不可能だ。やり直しが利^きかない、失敗は許されない。

「瑞樹……俺は、アール・ダー村を追放されたあの日、あのプラットホームでディモルフオセカとすれ違ったあの日から、ずっと……お前を探し続けていたような気がする。お前に出会う前から、俺はお前を捜してた。こんなこと言ったら、お前は馬鹿にして笑うんだろうな。めっちゃくちやだつて……」

ニシキギは瑞樹の髪を梳^すきあげる。

「俺を……愛してくれよ……」

ニシキギは言葉を途切れさせ苦笑する。

「悪い、今のは無しだ」

自嘲したニシキギの頬に瑞樹がそっと口づけた。弾かれたようにニシキギは瑞樹を見つめる。

「命令されたと思ったのか？」

当然、瑞樹からの返事はない。しかし、彼女は流れるような動作で、もう一方の頬にも口づけた。

「ここにも」

ニシキギは額を指さす。冷たい瑞樹の小さな手がニシキギの頬を

挟んで、額に口づけた。

「ここは？」

ニシキギが指した唇に、瑞樹は躊躇^{ためら}いなく口づけた。ニシキギはたまらず瑞樹を抱きしめて、口づけを返す。

「じっとしてろ」

初めてした深い口づけは、マリズベリーの味がした。

「……俺……最低だな」

瑞樹を離すと、ニシキギは腰かけていたベッドから立ち上がった。「本当なら、こんなこととした時点でお前に投げ飛ばされるところだ。でも、俺はそんなお前に戻したいらしい。明日……必ず元に戻すからな」

ニシキギはそう言うのと部屋を後にした。

第十一話 トラップの発動(2)

医療センターの診察室に関係者が集まっていた。

「今から瑞樹の治療を始める。まず、掛けられている暗示を一つ一つ解除していく、しばらくみんなは外で待っていて欲しい。呼ばれたら中に入ってくれ。ニシキギは席をなるべくはずさないで欲しい。やむを得ない事情の時は、居場所が分かるようにしておいてくれ。その場合でも五分以内に戻れる場所に限らせてもらう」

ブラキカムの説明に、ニシキギは神妙に頷いた。診察室を出たところにある長椅子にみんなして座る。

「なあ、瑞樹が掛けられてる暗示って何なんだろうな」

正樹が、ぽつりと呟く。

「……瑞樹を支えているものをすべて取り除き、命令以外の行動を厳しく罰する。僕だったらそうする」

カナメがポツリと返す。

「じゃあ解除するってのは……」

正樹が痛みを堪えるような顔で言った。

「一つ一つ否定していくんだ。間違った情報だってね。瑞樹を支えているものは何一つ損なわれているはずがないんだ。瑞樹以外に変わったものなど、何もないからね。そうすれば、解除されるはずだ」
カナメが、ここまで言ったところで、診察室から瑞樹の悲鳴があった。あまりにも悲痛な叫びに、待っている者全員が腰を浮かす。
「正樹さん、いらっしゃいますか」

中から看護師が呼びにきた。

「中へ入ってください」

看護師に、うろたえている様子は微塵もない。正樹は力強く頷いて中へ入って行った。

「アーマルターシュさん、いらっしゃいますか？」

次にアーマルターシュが呼び出され、正樹が待合室へ戻ってきた。

「瑞樹はどうなってるんだ？」

ニシキギが、つかみかかるように正樹に問いかける。

「瑞樹の中で俺は死んだことになっていたらしい。で、それが嘘の情報であることを証明する為に呼ばれたんだ」

正樹は大きくため息をついた。

「瑞樹はひどく取り乱していて、俺を認識するまでにかなり時間がかかった」

アーマルターシュが出てくるとイベリスが中へ入った。アーマルターシュも正樹と同じことを言った。次々に関係者が呼ばれて、入っては出てくる。

「一体、何人殺したら気が済むんだ、セルシスの野郎」

ニシキギが歯噛みする。

「それだけ瑞樹が耐えたということなんだろう。たぶん……。もっと早く救出に向かうべきだった」

頭を抱えたままカナメが呻く。

「ニシキギさん、中へ」

ニシキギが中に入ると、診察室には、熱がこもっているように息苦しい空気が立ち込めていた。その中に泣き腫らして、赤い眼をした瑞樹が、看護師に押さえつけられるようにして座っている。ニシキギは痛ましい思いで瑞樹を見つめる。

「ほら、瑞樹、ニシキギだ。彼は生きている。大丈夫だろう」

ブラキカムが穏やかな声で話しかける。

「ナイフが……ナイフが刺さってたの。血がたくさん……」

瑞樹は妄言（うつわご）のように言葉を発した。ニシキギは堪（たま）らずに瑞樹に駆け寄る。

「瑞樹、ナイフなんて刺さってない。ほら、どこにも怪我なんてしてないだろう？」

ニシキギは、瑞樹の手を取って体に触れさせる。瑞樹は泣き腫らした目でニシキギを見つめて、ナイフが刺さっていた辺りを震える手でまさぐった。

「俺にナイフなんて刺さってない。だから大丈夫なんだ」

ニシキギは瑞樹を抱きしめた。

「ニシキギ、大丈夫なんだよね、大丈夫……」

瑞樹は泣きじゃくった。

「ああ、大丈夫だ、何も問題ない」

しがみついてくる瑞樹が可哀そうで、しかし反面、愛おしい。

「……おい、ニシキギ、もういいぞ」

ブラキカムの声が聞こえるまで、ニシキギは瑞樹を抱きしめたまま離さなかった。

「じゃ、次いくぞ。たぶんこれで最後だと思うんだがな……」

ブラキカムが、さすがに疲労を湛^{たた}えた表情で言った。

「カナメさん、中へお願いします」

カナメが中に入るとブラキカムが、

「ちょっといいか」

と脇にカナメを引っ張った。奥で、瑞樹が放心したような顔で座っているのが見える。

「恐らく、お前で最後だと思う」

「どうしてそう思うんだ？」

「今までとパターンが違うんだ。今までの人はみんな殺されてた。お前は殺されてない」

「さすがのセルシスも弟は殺せなかったのかな」

カナメは肩を竦める。

「冗談言ってる場合じゃないぞ。一番最後にお前を持ってきたということは、お前で瑞樹は精神崩壊したってことになるんだ。わかってんのか？」

「で？ 僕はどうなったことになってるんだ？」

「お前が彼女を見捨てたことになってる」

「はあ？」

「瑞樹はみんなの命を救うために、代償を求められた。その行為を目撃した君に見捨てられるというシナリオだ」

「そりゃ、また手の込んだシナリオだな」

カナメは眉間にしわを寄せた。

「厄介なのは、どうやって解除するかだ。死んだという誤情報なら生きているところを見せればいい、しかし、お前のケースの場合、失ったのは信用とか信頼とかそう言った目に見えないものだ。どうするよ？」

「どうするって……話しかけてみるしかないだろう？ 話せるんなら……」

「任せてもいいか？」

「君が考えても、僕が考えても似たようなアイデアし浮かばないだろうよ」

カナメは苦笑して、瑞樹の方へ歩いて行った。

「瑞樹……」

カナメが声を掛けると、瑞樹はビクリと肩を震わせた。

「瑞樹？ 誰も死んでいなかっただろ？ 誰一人殺されてはいなかった。そうだよ」

カナメは瑞樹の傍らに腰をおろして視線を合わせる。瑞樹は一瞬視線を合わせたが、すぐにそらしてしまった。小刻みに震えているのが分かる。

「瑞樹、みんな間違った情報だったんだ。分かるだろ？」

瑞樹は視線を上げない。

沈黙がその場を支配する。

「……」

カナメは頭をフル回転させる。どうしたら解除できる？

「……ねえ、ハルでデイモルフォセカが、初めて僕の部屋に逃げ込んで来た時のことを、君は覚えているかな。君が持っているデイムの記憶にあるだろう？ 彼女は、今の君みたいに誰も信用しない、信頼できないって顔をしていた」

カナメの昔語りにも、瑞樹は顔を上げた。

デイム、力を貸してくれ。カナメは瑞樹の顔にデイモルフォセカ

を重ね合わせる。

「僕もそうだった。誰も信用しない、信頼できないって思ってた。イブキ以外はね。あの地下都市で、僕にとってディモルフオセカとイブキは暗闇を照らす灯みたいだった。僕はそれを失ってしまったけれど、でもやっぱり、相変わらず、彼らは僕にとっての光なんだ。それはもう、思い出の中にしか存在しないはずなのに、それでも、確実に正確に僕を前進させてくれる。彼らはいなくなってしまったけど、確実にそこに存在していたんだからね。ただそれは過去のことで、もう修正はできない。過去の良い所は変わらないこと、逆に悪い所は変えられないことだ」

カナメは、瑞樹の髪を梳きあげる。

「……そして君は、今、ここに、存在している。今ここに存在しているものならば変えられる。いくらでも信頼は回復できるはずだろ？もし仮に、本当に君が、僕の信頼を失ったとして、君は、もうそれで諦めてしまうのか？信頼を回復したいとは思わない？僕は……その程度の存在だった？」

瑞樹は涙をまき散らしながら首を振った。

「違う、そうじゃない！私だけの問題なら、いくらでも償う。信頼を回復するためならなんでもする。私が許せないのは……ディモルフオセカまでをも巻き込んで、あなたを裏切るような行動を彼女にとらせてしまったことなんだもの。この顔で、この声で、私は……自分の大事なものを守りたいために、彼女のイメージを汚しちやつたのっ」

瑞樹は号泣する。

「……君は君だよ。その顔もその声も、日向瑞樹なんだ。そんな風に考えるのは間違ってる。それに……ディムだって、君と同じことをしたと思うよ。彼女は大事なものを守るためなら、自分を投げ出してしまおう人だった。それは君が一番よく知ってることじゃないか？」

「……」

瑞樹はカナメに視線を合わせて涙を流した。カナメが無言で頷く。涙にぬれた瑞樹の瞳が、ふわりと小さく微笑んだのを合図にしたかのように、それは唐突に現れた。

「！」

瑞樹の全身から、金色の粒子がゆらりと立ち上ったような気がして、カナメは瞬いた。次の瞬間、金色の光の粒が、瑞樹の体中から、弾けた炭酸の泡のように湧きあがった。

「ブラキカム！ニシキギを……」

カナメが叫んだ時には、既にニシキギが前に立っていた。

ごくりと唾を飲み込んだニシキギは、瑞樹の両手を固く握りしめて、瞠目する。

「なんだよ、これ？」

ニシキギは宙を見つめて凍りついた。

「何か見えるのか？」

カナメは驚いてニシキギを見つめる。

「あんたにはあれが見えないのか？ あんな大きな……ダメだ、瑞樹、手を離すな。引き寄せられてるぞ！」

ニシキギが怒鳴る。

「引き寄せられてるって……どこに？」

ブラキカムも慌てて叫んだ。

＊ ＊ ＊

ニシキギは、大きな扉の中に引きずり込まれようとしている瑞樹の手を掴んで、踏みとどまっていた。いぶし銀でできたような重苦しく厳めしいその扉には、夥しい数の見知らぬ言葉が刻みこまれている。その扉の向こうを見ることはできなかったけれど、なにか途轍もなく恐ろしい気が満ちているようで、のぞき見ることさえ憚^{はば}ら

れた。

何の力で引き寄せられているのか、瑞樹の体は確実にドアの方へ近づいている。

「ニシキギ、放して、ニシキギまで引き込まれちゃうよ」

瑞樹が潤んだ瞳でニシキギを見つめる。

「馬鹿言うな。足に力を入れて踏みとどまるんだ」

ニシキギは、瑞樹の手首を力いっぱい引っ張る。

「ごめん、もう無理みたい。私……もう駄目だよ」

瑞樹の足は、既にドアの向こうに引っ張り込まれていて、ニシキギは心臓が凍りつく。瑞樹の膝から下は半透明に消えていて、ニシキギを掴む手の力も弱ってきているのが分かった。

「瑞樹、手を離すなよ。絶対離すな！」

「ニシキギ、ありがとう。いつも助けてくれて……」

瑞樹の手から力が徐々に抜けていく。半透明な部分は胸のあたりまで来ていた。ニシキギは、瑞樹の手が離れてしまった方の手で、扉を掴んで閉じようとしているのを押しとどめる。

「瑞樹！瑞樹！」

残っていた方の手が離れた瞬間、ニシキギの耳に微かに瑞樹の声が響いた。

『ニシキギ、ありがとう、大好き』

「瑞樹、瑞樹、ミズキーっ」

閉まりかけている扉に向かって、ニシキギは声を限りに叫んだ。扉の向こうは暗黒星雲のような暗い気が渦巻いていて、手を伸ばすことさえ恐ろしい。それでもニシキギは扉を閉じるままにはできない。

嘘だ、嘘だ、ウソニキマッテル！頭の中で同じ言葉が渦を巻いた。

第十二話 時空の狭間で（1）

「なんだ？この扉は……」

ニシキギの背後で、カナメの声がした。

「あんたにも見えるのか？」

ニシキギは縫^{すが}るような目でカナメを見つめた。

「君に大脳コンタクトを付けさせてもらったよ。僕らにはさっぱり見えないんだ。あれ？ドアにも触れられないな、僕には……」

カナメが掴もうとするが、するりと抜けて掴めない。カナメはドアの向こうを覗き込んだ。

「瑞樹はあっちに行っちゃったのか？」

ニシキギは項垂^{うなだ}れた。

「君、そのドアをもうしばらく開けておいてもらえるかな」

「どうする気だ？」

「行ってくる。もし、戻ってこれなかったら……その時は、勘弁してくれ」

「まさか、この中に入るのか？」

とても無事に帰ってこられるとは思えない。

「他に方法はなさそうだしね」

「おいっ！」

慌てるニシキギに微笑むと、カナメは、するりとドアを抜けて暗黒の渦の中に見えなくなった。ニシキギは、カナメがどんな風にディモルフオセカを守ってきたのか垣間見た気がした。あんな暗黒の渦の中に何の躊躇^{ためら}いも見せずに飛びこんでゆくなど、そうそう出来るものじゃない。彼はいつもそんな風に、全力で彼女を守ってきたに違いなかった。

ニシキギはドアを掴む手に力を入れなおした。

* * *

カナメはベージュ色の砂漠に、ぽつりと立っていた。見渡す限りの砂漠で、四方を見渡しても砂の地平線しか見えない。時折強い風が吹いて大気を震わせ、砂にその痕跡を刻みつける。空は淡い紫色で、雲ひとつない。太陽は今沈んだばかりのようで、星はまだ瞬いていない。聞こえるのは、時折風が砂に模様を刻む音だけで、そこには静けさが満ちていた。

「瑞樹？ ミズキー、どこだー」

カナメの声が、静けさに亀裂を生じさせる。歩き始めるとサクサクと砂を踏む音が足元でやけに大きく響いた。

何かが落ちているのを見つけて駆け寄ると、それは時計だった。とろけたバターのようにだらりと融けた時計。しかしその時計には、文字盤がなく、六つの針が狂ったようにバラバラの動きをしている。次に落ちていたのは大きな机だった。木製のどっしりとした机だ。マホガニー色をした重厚な引き出しの一番上を開けると、その中には宇宙が広がっていた。カナメは息をのんで、素早く引き出しをした。引出しの中に落ちこちてしまうような気がしたからだ。

二番目の引き出しには色とりどりのキャンディーの包みが山盛り詰まっていた。カナメが一つ摘まみ上げると、キャンディーは粉砂糖のような細かい粒子になって風に飛ばされて行った。

三番目の引き出しからは動物が飛び出した。カナメは驚いて、その場に尻もちをついてしまう。額に角を生やした毛並みの美しい獣。それは燃えるような青い瞳でカナメを見つめてから、宙を駆け飛び去って行った。

カナメは苦笑して立ち上がると、パンパンと服についた砂を払い落す。

「瑞樹、瑞樹、返事をしてくれよ！」

カナメは声を限りに叫んでみる。あたりを見渡して、カナメは、ふと恐ろしいことに気がついた。帰り道がわからない。たとえここで、瑞樹に出会えたとしても帰り道が分からないではないか。そもそも、いきなりこの砂漠にいたのだ、帰り道など分かる訳がない。帰れない……そういうことなのか？カナメは呆然とその場に佇んだ。たたず

＊ ＊ ＊

ドアが閉まる強さは、徐々に強まっている気がした。ニシキギは渾身こんしんの力で閉まりそうなドアを掴み、片足をドアに掛ける。閉めるなるものかと思う。

「なんだ？このドア」

後ろで正樹の声がする。

「大腦コンタクトをつけたのか？」

ニシキギは振り向いて苦笑する。

正樹は頷いてニシキギが掴んでいるドアを掴もうとするが、カナメと一緒に、やはり掴めなかった。

「なんであんたしかこのドアを掴めないんだ？」

正樹は舌打ちをするとドアの中を覗き込んだ。底抜けに深い闇が渦巻いている。

「瑞樹とカナメはこの中にいるのか？」

痛々しい表情で問う。ニシキギは頷いた。

「悪いな、俺が来ても何の力にもなれそうにないな」

「いや、そこにいてくれ。俺が諦めてしまわないように。俺が……投げ出してしまわないように、そこにいてくれないか」

ニシキギは唇を噛みしめる。

「俺はここにいます。諦めないでくれ」

正樹は暗い闇を睨みつけるように立った。

「……瑞樹の話をしようか……」

正樹はニシキギをちらりと見た。

「あいつのファーストキスの話をしようか？」

くすりと笑って続ける。

「あいつのファーストキスの相手が誰だか知ってるか？」

「そんなの知る訳がないだろう？ あんたなのか？」

ニシキギはムツとした顔で問い返す。

「俺がしとけば良かったよ。その程度の相手だった。瑞樹はね、あんなでも結構人気あったんだ。病気ばかりして、学校も休みがちで……でも、なんでかな。ほら、よく男同士で盛り上がるだろ、誰がいいとか、誰が好きだとか……そう言う時には、ほとんど瑞樹の名前は出てこないんだ。そう言う時に名前が出るのは、元気でスポーツ万能だったり、すごい美人だったり、とにかく元氣滲刺って感じの、ああなるほどってみんなが思う子の名前がでるだろ？」

「そんなもんなのか？」

ニシキギは呆れたように問い返す。

「そんなもんだよ。でも、無記名で人気投票すると、不思議と瑞樹は上位に食い込むんだ」

「そんなことやってるのか？」

ニシキギは肩を竦める。

「アンダーグラウンドでもてるやつと言うか、密かに思われるやつって言うか……ファーストキスの相手も、瑞樹のことをそんな風に密かに思っていたやつだったんだ。もう名前も忘れちゃったけどね。ある日、瑞樹が登校拒否を起して、部屋に閉じこもって出てこなくなった。三日も休んだ頃に、瑞樹の母親が俺に相談してきた。学校でなにかあったらしいから訊き出してくれないかって……中学校の頃だよ。瑞樹は頑固というか口が堅いというか……随分手こずってね、ようやく聞き出せたのは、同じクラスの男子に迫られてキスを

されたらしいってことだった。瑞樹は学校を休みがちだったから、休んでいる間のノートを貸してやるとか言われて、断り切れずに借りに行ったらそう言うことになったらしいんだ。そいつのことは好きでも嫌いでもない、どうしたらいいか分からない、だからもう学校に行けないって……泣いてるんだ。馬鹿だろ、あいつ。今どきじゃないんだ」

「今どきってどんなのだ？」

ニシキギは小さく笑った。瑞樹らしいと微笑ましく思う。

「……それでどうした？」

「仕方がないから、そいつの家に俺が出向いて、俺の彼女に手を出すなど釘をさした」

「……そうなのか？」

ニシキギは正樹を睨みつけた。

「嘘も方便って言うだろ？ そんな時、俺にはちゃんと別に彼女がいたんだが、それが原因で別れちまった。美人で、人気のある子だったんだけどな」

「瑞樹は……そのことを知ってるのか？」

「知る訳がないだろう？ 知っていたら、また余計なことをして、こじらすに決まってる。それでなくてもあいつはトラブルテイカーなんだ。関係のないトラブルまで拾ってくる。それに、その彼女よりも瑞樹の方が大事だった。つまりは、そう言うことだ。つきあいに飽きてきてたところもあったしな」

「あきれたやつだな……なぜ俺にそんな話をする？」

「……俺は子供の時から常にあいつの面倒を見てきた。実の妹よりもずっと手厚く保護してきた。そうしなければいけないんだと……なぜかそう思い込んでいるところが俺にはあって……正直、最近手に余ってた。特に二年前、あいつが失踪した時は堪えた。自分を責めて、前進できなくなった。そんなのは初めてだった。もし、あんたがあいつのことを想ってくれているのなら、それもこれも含めて、押し付けてやろうと考えている訳だ」

正樹はにやりと嗤った。

「瑞樹が、トラブルテイカーだってことなんて、とっくに知ってるさ」

ニシキギはナンディーでの瑞樹を語った。出逢ってすぐに激怒した瑞樹に投げ飛ばされたことを話すと、正樹は笑い転げた。

昔語りも尽きてきて、それでも、瑞樹もカナメも帰っては来なかった。

「おいっ、ニシキギ、あんた、指が……」

正樹が青い顔をしてニシキギを見つめる。

ニシキギが押さえているドアに掛けられた指が、半透明になってきていた。ニシキギは、さっきからそれに気づいていて、指先の感覚がなくなってきたのは分かっていたが、扉から手を離す気にはならなかった。

「いいんだ、手を失うくらいで瑞樹を失わずに済むのなら、その方がずっといい」

「ニシキギ……」

正樹は絶句した。

第十二話 時空の狭間で（2）（前書き）

今回は「宙の船 流転の岸」を読んでいらっしやらない方には馴染みのないキャラがぽんと出てきてしまっています。惑星ハルの化身とは何か、何故瑞樹はハルを探していたのか：は前作を読んでいただと分かると思います。こんな説明しかできなくてごめんなさい。

招夏

第十二話 時空の狭間で（2）

カナメは、砂の上に大の字に寝転んで途方に暮れていた。さつきまでめちやくちやに走り回って瑞樹を探していたが、見つかるのは怪しげな落としものばかり。生きた人間どころか、生き物の気配さえそこにはなかった。

ばたりと倒れて息を弾ませていると、遠くからリズムカルにザクザクと砂を踏みしめる音が聞こえてきた。はっとしてカナメは体を起こす。

その人は、旅人のような格好をしていた。キャメル色のたつぷりとしたマントを着て、フードを目深にかぶって、歩きやすそうな同系色のブーツを履いている。カナメに気づくと、その人は顔を上げた。吸い込まれるような青い瞳がカナメを見つめる。

「あのっ！」

カナメは弾かれたように話しかける。

「女の子を見ませんでしたか？茶色の髪で緑色の瞳をした、瑞樹っていう名前の女の子なんだけど」

「さあ、どうだったかな」

その人の声は深く、洞窟の中で話しているように響いて聞こえた。その声にカナメは聞き覚えがあった。どこかで……聞いたことがある。

「ここは、どこですか？」

もっと声が聞きたくて、カナメは更に話しかけた。

「ここは、時間のない場所、空間のない場所、すべての始まりの場所だ」

カナメははっとして、その人を見つめる。

「ハル？ハルだよ……ね」

懐かしい、惑星ハルの化身。

「久しぶりだね、カナメ。君はどうしてこんなところにいるんだい？」

ハルは顔を綻ほころばせた。

「瑞樹を捜してるんだ。瑞樹を見なかった？」

カナメの問いかけに、ハルは小さく笑って答えない。

「君は、約束通り、瑞樹を元に戻してくれたんだね。ディモルフオセカを諦めて……」

かつて瑞樹にディモルフオセカの人格が宿った時、カナメはディモルフオセカを諦めて瑞樹に戻すことをハルと約束した。カナメは、ディモルフオセカの意志を尊重した、結果、瑞樹は元に戻ることができた訳だが、カナメは最後まで決断できなかったのだ。カナメは項垂れる。

「……それでも君は瑞樹を元に戻してくれた。感謝しているよ」

カナメの心を見透かすように、ハルは続けた。

「ただ、少々戻すのが遅かったのは事実なんだ。だから瑞樹は、こちら側へ続くあの扉を出現させてしまった」

「……僕のせいで、こんなことになったのか？」

カナメは瞠目する。

「もちろん、普通に暮らしていれば、こんなことにはならなかっただろうよ。また何か厄介なことに巻き込まれたんだろ？ チビはいつもこうだからな」

ハルは肩を竦める。ハルは瑞樹のことをいつもチビと呼んでいた。「瑞樹を向こうに連れて帰りたいんだ。力を貸してはもらえないだろうか」

「……それは難しいな」

ハルは苦笑する。その時、ハルのマントの裾から小さな子供が現れた。

「ハル？」

稚こゝろない声でハルを呼び、不安そうに見上げた瞳は、海のような、エメラルドのような、暗黒のような不思議な色をしていた。ブラック

オパールの瞳。

「出てきちゃダメだって言っただろ？」

ハルはその小さな子を軽く睨みつけた。

「だって……ずっと、止まったままだから飽きちゃったよ？早く行こうよう」

そう言った後、その子はカナメに気づき、少し後ずさってハルにしがみついた。

「この子は？」

カナメはハルに尋ねた。

「ちっちゃくて、かわいいだろ？星の子だ。生まれたばかりなんだよ。ほら、ご挨拶は？」

ハルは星の子に囁いた。

「こんにちは」

星の子は、はにかみながらカナメを見上げた。

「こんにちは」

カナメはしゃがみこんで小さな子の視線に合わせる。

「お名前は？」

「名前？」

その子は驚いたようにハルを見上げた。

「私、名前は？」

「まだないな」

ハルは苦笑する。

「ないの？ハルはお名前あるのに？」

「僕は付けてもらったんだ。君はまだ付けてもらってないだろ？」

「私、まだ名前がないの。だから答えられないの、ごめんね？」

星の子は少し首を傾げてカナメを覗き込んで、申し訳なさそうに謝った。

それはただの直感だった、何の根拠もない。カナメは微笑んで話しかける。

「……君の名前を教えてあげようか？」

カナメは一呼吸おいて星の子を見つめた。星の子は不思議そうな顔でカナメを見つめ返す。

「君の名前は……日向瑞樹だ」

カナメは視線をハルに向ける。

「この子は瑞樹なんだ。そうなんだろう？」

カナメの言葉にハルの笑みが深くなる。

「君には、ばれちゃうだろうと思ってたよ」

ハルはクスクス笑い出した。

日向瑞樹と呼ばれた星の子は、次の瞬間、むくむくと身長が伸びて、栗色の髪が伸びて、手足が伸びて……やがて、深い森のような翠の瞳の……元の瑞樹に戻った。

「カナメ？」

瑞樹は呆然とカナメを見上げた。

「ここどこ？ハル？」

瑞樹は傍らのハルを見つけて驚く。

「瑞樹、久し振りだね。君がこんなところにいて、本当は僕の方がずっと驚いたんだよ？このまま連れて行こうかと思ったんだけど……君はまだあっちでやることが山積みみたいだね……相変わらず」

ハルは小さく笑んだ。

「ハル……会いたかったよ。ずっと捜したんだよ？」

瑞樹はハルにしがみつく。

「僕もチビに会いたかったよ」

ハルは瑞樹の頭を撫でた。

「でも、そんなにゆっくりしてられないよ。ニシキギがそろそろ限界だ。扉が閉まるのはもう間もなくだ。閉まってしまえば、君たちはここから出られなくなる」

「ニシキギが……」

瑞樹は目を見開く。

「チビは、どうやら対の力に巡り合えたようだね」

ハルは小さく笑んだ。

「対の力？」

カナメがハルの言葉に反応する。

「そう。僕がアイリスに力を与えた時に、同時に生まれた対の力だ。この現世では、肝心なものは常に対になっているって言うだろう？光と闇のように、プラスとマイナスのように、男と女のように……。でも、これが同時に同じ場所にそろったのを、僕は初めて見る事ができたよ。楽しいね。これだからやめられない」

ハルは屈託なくクスクスと笑った。カナメも瑞樹も、あっけにとられた表情でハルを見つめる。

「さて、ばれちゃしかたがないから、道を造ってやるか。しようがないな」

ハルは腰に携帯していた杖を取り出すと、地面を強く一突きした。軽い衝撃とともに、そこには真っ黒な穴が現れた。

「ここから帰るしかないんだ。ただ、ちょっと問題があって……」

ハルは言い淀む。

「問題？」

カナメはハルを見つめる。

「このトンネルは完全体しか通れないんだ。試しに、君一人でその穴に入ってごらん？」

カナメは真っ黒な穴の上に立つが、まるで黒い円の上に立っているようだ。

「入れないだろ？そのトンネルに入るには、僕のような完全体になる必要があるんだ」

「完全体って……」

「僕は僕一人で完結している。男でもなく女でもなく、男でもあり女でもある」

「それは、つまり……」

「君たちは幸い対になってる。その上に二人で入ればいいだけなんだけど……」

「けど？」

「どうなるかは僕も分からない。どこかが接合しちゃうかもしれないし、どうもならないかもしれない」

「……」

瑞樹の不安そうな顔がカナメの視線とぶつかる。

「ここから帰るしかないんだね？」

カナメの言葉にハルは重々しく頷いた。

「瑞樹、行こう。ニシキギが待ってる。みんな待ってる」

カナメの言葉に瑞樹はニシキギの言葉を思い出す。

『みんな、お前に戻ってきてもらいたいんだ……覚えておけよ』

無性にニシキギに会いたかった。ニシキギの憎まれ口でも、嫌みでも何でもいいから、声を聞きたかった。切ない思いに捕われながら、瑞樹は小さく頷いた。

「どこか一か所触れていれば大丈夫だから」

ハルは言った。

「瑞樹、手をつなごう。利き手じゃない方で」

カナメは左手を出す。手ぐらいなら接合してもブラキカムが何とかしてくれるだろうと踏んだのだ。

「私も右利きだから……」

左手を出す瑞樹に、ハルが口を出した。

「君は左利きだよ。左手は大事にしてほしいな」

瑞樹は驚いてハルを見つめる。そして納得する。

だからなのか……右手でエニシダに触れたにもかかわらず、崩壊を始めたのは左手だった。左手はハルに繋がっている。そんな気が、瑞樹にはした。

瑞樹は頷いて右手を差し出した。手を繋いでカナメと瑞樹は黒い穴の上に立つ。その瞬間、二人は穴の中に吸い込まれていった。

第十二話 時空の狭間で（3）（前書き）

「コアツェルヴァト」に関しては、後書で、少々ウンチクを語るつもりです。よろしかったらおつきあいください（＊＾―＾＊） 招
夏

第十二話 時空の狭間で（3）

カナメと瑞樹は、完全な闇の中を上昇していた。地面の上にあいた穴に入っただから、落下するものだとばかり思っていた瑞樹は、息を呑む。しかし、言葉を発することはかなわず、ただ、ぼんやりとした意識だけが、そこには存在した。

幽かな音をたてて落ちた小滴、コアツエルヴァト……生命の起源

まさに、二人は大海に滴り落ちた一粒のコアツエルヴァトだった。カナメと瑞樹は、自らが、周囲を取り巻く溶液から様々な物質を取り込んでいるのを感じていた。次いで、獲得した、頼りなくグニャグニャとした個体。

上に行きたい、その思いだけが体を上昇させる。隣のカナメが、全く同じことを考えていることが手に取るように分かった。

やがて闇は、薄墨のように徐々に薄くなり、逆に意識はそれについて濃く、はつきりとしていった。

上へ、もっと上へ……それは進化の系統樹を上っているような気分だった。

何も考えられなかった単細胞の生き物から多細胞生物へ、やがて脊椎を持つ生き物へ、海を離れ陸へ、巨大化し、体温を調節し、空を飛び、手を使い、複雑なことを考えられるようになる。

薄墨は更に薄く、やがて無色透明になり、いつしか二人は白く輝く光を目指して飛翔していた。

それは永遠のことのようであり、一瞬のことであるようだった。

まもなく我々は樹の先端に辿り着く。

＊ ＊ ＊

「くっ」

ニシキギが絶望的に呻いた瞬間、大きな光の塊が、僅かにあいた隙間からすべり出て、ニシキギをなぎ倒した。その途端に、扉は重々しい音をたてて閉じ、轟音と共に地面を揺らして崩れ去った。その衝撃からくる震動は、扉が見えていないものにも感じられるほどで、僅かな間ではあったが、ナンディーに乗っているすべての人々を震え上がらせた。

「なんだ？この揺れは？」

ブラキカムは、慌てて近くに置いてあった医療器具を積んだワゴンを手で押さえた。あちらこちらで医療スタッフが悲鳴をあげる。

「ブラキカム、カナメと瑞樹の自発呼吸が回復しました」

揺れが収まった直後、人工呼吸器を担当していた医師が告げた。

瑞樹は白い天井を見上げていた。ここが樹の先端なんだと心の中でぼんやりと思って、はっと気づき辺りを見回した。緑色の瞳のトウキと目が合う。

「瑞樹、お帰りなさい」

トウキはにっこりと微笑んだ。

「トウキ……」

じんわりと涙が溢れてくる。トウキ一号は私が破壊してしまったんだ。そしてはっと気づく。

「ニシキギは？正樹ちゃんは？アーマルターシュは？イベリスは？エニシダは？みんな無事なの？」

「みんな無事です。ニシキギは隣のベッドにいます」

瑞樹のベッドの隣はパーテーションで区切られていて、ニシキギ

はその向こうのベッドにいるらしかった。瑞樹は慌てて起き上がる
うとしたが、すぐに眩暈めまいを感じて再びベッドに倒れこんだ。

「無理をしないで、パーテーションをどけましょうか？ニシキギに
確認してからね」

トウキは向うに消えて、すぐにパーテーションが除けられた。

「瑞樹……」

ニシキギは右手を包帯でぐるぐる巻きにされていた。横たわった
ままでお互いの瞳を見つめあう。

「ニシキギ、ありがとう。ここに戻してくれて。大丈夫なの？」

ニシキギはゆっくりと起き上がると、瑞樹のベッドに近づいた。

「大丈夫だ、利き手じゃないし……ブラキカムが、いつでも元に戻
してくれると言ってた」

「元に戻すって……どうなったの？」

瑞樹は慌てて起き上がろうとするが、ニシキギは、やんわりとそ
れを押し戻した。

「指先の神経が麻痺しているだけだ。リハビリで戻るかもしれない
し、もし戻らなくても部分再生すればいいことだ。そんなことより
も、お前はなんともないのか？」

ニシキギは包帯を巻いていない方の手で、瑞樹の髪を愛おしそう
に梳すきあげた。瑞樹は絶句する。

なんともないと言え、なんともないのだが、問題がないかと言
え、それは、ないとは言え切れなくて……。

「どうした？」

「……扉の向こうで、ハルに会ったよ」

瑞樹の言葉にニシキギは目を見開く。

「私たちをこっちの世界に帰してくれたの。でも、その時に、少し
問題があつて……」

瑞樹は言いよどむ。

「どんな問題だ？俺にしてみれば、お前がここにこうしているだけ
で、問題なんて何もないんだがな」

髪を梳いていた手をゆっくりと下ろし、ニシキギは指先で頬を優しく撫でる。額にキスをして、両頬にもキスをする。

「ニシキギ、やめて、ダメなの。私、ニシキギにそんな風に言ってもらう資格がない」

瑞樹の言葉に、ニシキギが驚いて見つめる。

「俺が嫌いになったということか？あの時扉に吸い込まれていくお前が言った言葉は、嘘だったのか？最後のリップサービスだったって訳か？」

ニシキギが掠れた声で言った。

「そうじゃない、そうじゃないよ。だけど、ハルが作ってくれた脱出トンネルは完全体じゃないと通れないからって……私、カナメと一つにならなきゃならなかった。どうなるか分からない、どこがくつついちゃうかもしれないってハルは言ってたけど……こんなことになるなんて思ってたなかった。私、ニシキギに会いたくて帰ってきたのに、もうニシキギに抱きしめてもらう資格がない」

瑞樹はわあっと泣き出した。ニシキギはあっけにとられる。

「お前、言ってることがさっぱり分からないぞ。きちんと分かるように説明しろ」

「だって、だって……カナメだって困るに決まってる。私はもう誰にも愛してもらう資格がないよ……」

取り乱した瑞樹の説明は、益々謎めいていて、ニシキギは啞然とする。

「もういい、カナメに訊いてくる」

泣きじゃくる瑞樹に業を煮やして、ニシキギは荒々しくドアを閉めると病室を後にした。

カナメは、別の部屋で、白い天井を見つめていたが一つ大きくため息をつく。やれやれ、またトラブルだ、心の中で呟く。

廊下を歩く荒々しい音が聞こえて、ノックの音と同時にドアが開いた。

「カナメ、起きてくれ、瑞樹が変なんだ。あんた、あいつと何があったんだ？」

「もう起きてるさ」

カナメはベッドの上に起き上がっていた。

「ニシキギ、その前にお礼を言わせてくれ。君のお陰で戻ってくることができた」

カナメは手を差し出した。

その手を軽く握りしめながら、ニシキギは微笑んだ。

「礼を言わなければならないのは俺の方だ。瑞樹を連れ戻してくれて、感謝している」

ニシキギは言い終わると眉間に皺を寄せた。

「それはさておき、瑞樹がさっぱり訳が分からないことを話すんだ。あいつ、何があったんだ？ ハルに会ったとか完全体とか……」

「本当にハルがいたんだよ。扉の向こうは時間も空間も存在しない場所だった」

カナメは向こうでの出来事を話して聞かせた。

「帰る道はそこしかないと言われたんだ。完全体でないと通れないトンネルだ。そこで僕たちは、たとえ接合したとしても軽度で済むようにと、手をつないでトンネルに入ったんだけど……」

「手はくっついていないようだよな」

「瑞樹は僕の心配をしていたかい？」

カナメの問いかけにニシキギは記憶を辿る。安否を尋ねた人の中にカナメの名前はあったろうか……ニシキギは首を傾げる。

「いや、よく覚えていないが……」

「彼女は僕の心配なんてする訳がないんだ。なぜなら、無事であることが分かっているからね。何をしているかも分かっているはずだ。僕にも瑞樹が今何をしているかがはっきり分かる。泣いていて、今トウキが戻ってきて事情を聴き出している。瑞樹は言えないって、また泣いてる」

ニシキギは瞠目する。カナメは続けた。

「君、さっき瑞樹にキスしようとして拒否されただろう？」

ニシキギは眉間にしわを寄せる。

「君の左手が何をしているのか右手には分かるように、瑞樹が何をしているのか僕には分かるし、瑞樹も僕が何をしているのか分かるんだ。だから心配する必要がない。瑞樹が君とのキスを拒否しなければ、僕は君とキスした気分になっていただろう」

カナメは肩を竦める。

「なん……だって？」

ニシキギは、あつけにとられて言葉が出ない。

「簡単にいえば、僕と瑞樹は、脳……というか、意識が接合してしまっただけなんだ」

カナメはがっくりと項垂れた。

「……どうするんだ？」

呆然としたニシキギがカナメを見つめる。

「さっきから考えているんだけど、自分の中にシールドを張るしかないだろうと思ってる。大脳コンタクトで常につながっている状態を考えればいいんだからね。だけど、急にすべて遮断することはできないから、徐々にだな」

カナメはため息をつく。

「つまり……あんたたちは、今、二人で一人になっていると言う訳なんだな」

ニシキギも溜息をつく。

だから、トラブルテイカーだって言っただろ、そんな正樹の声が聞こえた気がした。

「……分かった。あんたのシールドが完成して、許可が出るまでは瑞樹に何もしない。抱きしめるくらいはいいのか？」

「……君の心の広さは宇宙並みだな」

カナメは感心したようにニシキギを見上げる。

「俺があいつのことを、どれだけ捜して、待ち続けたと思ってるんだ？おいそれと諦められるか」

「執念深さも宇宙並みだ」

カナメはため息をつく。

「ああ、ダメだ！」

カナメが突然鋭く制止した。

「何だ？」

ニシキギは眉間にしわを寄せる。

「今、瑞樹がトウキを巻いて、部屋から逃亡した」

カナメの言葉にニシキギは目を見張る。

「そんなことも分かるのか？」

「便利なんだか、不便なんだか分からないね」

カナメは苦笑する。

「行き先なら俺にだって分かるぞ」

ニシキギは渋面で言う。

「エリアEだよ」

とカナメが、

「エリアEだろ」

とニシキギが、同時に言った。

「離れれば離れるほど意識が薄くなっていくな。距離が離れていれば、お互いにより干渉しなくなるのかもしれない……」

カナメは目を閉じた。瑞樹の混乱が、瑞樹の哀しみが、瑞樹の切なさが伝わってくる。自分への思いも、ニシキギへの思いも、デイルフォセカへの思いも……。分かっているのは、自分には何もしてやることができないということだけ。

「でもまだ感じる。泣いてる……」

カナメは目を開けて、怪訝けげんそうに首を傾げた。

「おい、早く行けよ」

ぼんやりしている風情のニシキギが、はっとした顔で頷いて部屋を出て行った。

第十二話 時空の狭間で（3）（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

さて、「コアツウルヴァト」についてのウンチクです。と言っても、以下、「元素からみた地球」島 誠著からの抜粋なのですが……（
ハハヾ

ソ連（現ロシア）の科学者オパーリンが唱えた説で、「コアツェルヴァト」と言われる小滴が、生命発生の一つの道筋として、大きな役割を果たしたとする説

（例として）ゼラチンとアラビアゴム液を混合すると、その中で極めて小さな液滴が分離され、その結果溶液が濁って見えるようになる。この小滴がオパーリンの名づけた「コアツェルヴァト」で、これは一つ一つが互いに分離しながら、周囲の溶液からいろいろの物質を取り込む力があると言われている。つまり、まわりの溶液に有機物があれば、それをとらえて成長することができ。ここに生命のスタートがあるのでないかと言うのがオパーリンの主張する「生命の起源」説である。

へえええ……（@|@）と感心し、小説ネタとして使わせていただきました。以上

第十三話 海の宝玉 蒼穹の欠片（1）

どうしてここへ来てしまうのか。ふらつく足を酷使^{こくし}してまで、回らぬ頭をフル回転させてトウキを巻いてまで、少しの運動で早鐘を打つように拍動してしまふ心臓に吐き気を覚えてもなお、ここに来てしまう。

もしここが地球ならば、私は間違いなく海に来ている。エリアEの湖のほとりに蹲^{うずくま}って切なく思う。

潮の匂いがしたらいいのに。少し湿った砂の上に、小さな生き物たちがサワサワと走り回っていたらいいのに。

どこまでも続く水平線が、穏やかに、ただ広がっていればいいのに。そうしたら、どんなことだって大したことないって、少なくとも、その瞬間は思えるのに……

瑞樹は膝を抱えて丸くなる。

自分で自分を抱きしめて守っているみたい。まるでキャベツだと思ったら、また哀しくなった。

「瑞樹……」

ニシキギは丸まった小さな背中に声をかけた。ぴくりと体が反応したようなのに瑞樹は振り返ろうとしない。

「瑞樹」

ニシキギは、瑞樹の頭をくしゃつと撫でるとその横に座った。

「事情はカナメから聞いた。お前にも分かっているんだろう？ カナメが何を俺に話したか。どう対処するつもりなのかも……」

瑞樹はニシキギを見ないまま頷いた。

「おい、こっちを見ろよ」

ニシキギの言葉に、瑞樹はノロノロと顔をあげる。

「だったら何故悲しんでる？」

瑞樹は何事かをしゃべろうとして口を噤^{つぶ}み、それを三回繰り返し

て、頭を抱え込んだ。今のカナメならば、瑞樹が何を言いたくて、
どうして言えなくしているのか、すっかり分かるんだと思うと、ニシ
キギは言いようのない気持ちで胸がザワザワする。

「……さっき、お前は、俺に会いたくてこちら側へ戻って来たのだ
と言った。嬉しかった。あれは嘘なのか？」

瑞樹は無言のまま首を横に振る。

しばらく待つが瑞樹は口を開かない。ニシキギは足元の小石を湖
に投げ込んだ。小さな水音がして湖面が小さく波立つ。波紋が岸に
たどり着いたころ、瑞樹は重い口を開いた。

「……カナメの考えていることが伝わってくるよ。どんなにディモ
ルフォセカを愛していたか、一緒にいた地下都市での暮らしがどん
なに大切な時間だったか……。その面影を持つ私を見るたびに切な
い気持ちになることも、そのせいで必要以上に私に手を貸してしまう
ことも、時々これじゃいけないと距離をとることも……。私は、日
向瑞樹であることが……。苦しい」

「それは……。仕方がないことだな」

ニシキギは深刻な顔で呟いた。

「……それに、ニシキギが捜し続けて、待ち続けていた人はディモ
ルフォセカなんだよね？」

ハルのアール・ダー村ですれ違った、あのディモルフォセカ・オー
ランティアカをずっと捜してたんでしょ？だから、私は、ディモル
フォセカの姿をしていることも……。辛い。私は自分に何の価値も見
いだせない。やっぱり私はディモルフォセカにこの体を譲るべきだ
ったんじゃないかと……」

瑞樹は言葉を詰まらせて、更に小さく蹲うずくまった。

「……お前、俺をいつでも投げ飛ばせると思ってるだろう？」

何の脈絡もなく飛び出したニシキギの質問に、瑞樹は俯うつむいた顔を
上げた。かつて瑞樹は、出会ったばかりのニシキギの行動に腹を
たてて、投げ飛ばしたあげく、脱臼だつゐさせたことがあった。

「今、ここで俺を投げ飛ばしてみろよ」

「なんで？」

「お前に、そんな力はない。それを証明するためだ」

「怪我人にそんなことできないよ」

瑞樹はニシキギの右手をちらりと見た。

瑞樹は小さい頃に、今は亡き祖父に柔道を習った。相手の力を利用して技をかける柔道は、小柄な瑞樹が身を守るのに役に立つと、祖父が基本を教え込んだ。

「いいから、やってみろって」

瑞樹はしぶしぶとニシキギの手をとり、深く懐に入り込むと技を掛ける。

「あれ？」

何度仕切りなおしてもニシキギの体はびくともせず、そもそも前回技が決まったことが不思議なくらいだ。ニシキギは、逆に瑞樹の足を払うと、バランスを崩して転倒しかけた瑞樹を支えると、そのままゆっくりと地面に押し倒した。

「なっ！」

ニシキギがニヤリとして瑞樹を見下ろす。

「無理だろ？」

ニシキギはやけに嬉しそうだ。ニシキギの体の下で瑞樹は息を弾ませた。

「ひ、ひ、卑怯なっ！こんなに体格差があったら無理だって……」

瑞樹はニシキギを睨みつける。そして、気づく。じゃあ、あの時、何故私はニシキギを投げ飛ばすことができたのか。

ニシキギは軽く瑞樹の額に口づけると体をどけた。瑞樹は赤くなつて、上体を起こした。

「じゃあ、どうしてあの時は技を掛けることができたの？」

「それは、俺がお前に見とれてたからだな」

ニシキギは照れ臭そうに髪をかきあげると、服についた土をパタパタと掃った。

「え？」

ニシキギを投げ飛ばしたあの時、瑞樹は、元の日向瑞樹の姿だった。

「お前、蜃という伝説の魔物を知っているか？」

ニシキギの話に瑞樹は目をぱちくりする。どうもさっきから会話がすこーんと予想外の方へ飛んでいく。スーパーボールを床にたたきつけた時みたいだ。

「シン？何それ？」

「蜃は海にすむ怪物で、巨大な二枚貝の形をしている。この蜃が息を吐き出すと、空中に楼阁ろうかくが浮かび上がるという。蜃気楼という言葉の語源だ。お前の国にも、この話の伝承があるはずだが……蜃とは幻影を吐き出す巨大な蛤はまぐりだとされているようだったぞ」

「へえ、知らなかった」

「ハルにも同じような伝承があるんだ。ただハルではシンは怪物ではない。海を守っている神獣であるとされていた。やはり幻影を生み出して人を惑わすが、それは、その人間が海に仇をなすものだと認められたものに限られていた。蜃はその体内に漆黒の宝玉を抱いていると言われる。その宝玉に海に仇なすものが映し出され、それによって蜃はそのものを罰するのだと言われている。蜃が死ぬとその宝玉が海に零れ落ちて黒真珠となると言われている」

「ふーん、そんな話が……」

「蜃の宝玉は海の宝玉と呼ばれて、海で生業を立てているものに崇められていたそうだ。身に付けていれば、海難を防ぐ不思議な力があつたらしい。しかし、傷つきやすく、頻繁に新鮮な海水に浸す必要があつて、それを怠るといつの間にかひび割れて粉々になってしまうのだそうだ。俺は、初めてお前に会った時、海の宝玉だと思った」

「へ？」

「お前は黒曜石のような漆黒の瞳を持っていた。それを間近で見ようと引き寄せられるままに近づいたら、投げ飛ばされたんだ。まさに蜃に幻影をみせられたようなものだな」

ニシキギの言葉に瑞樹は、苦笑する。私はハマグリかい？

「でも、それなら日本とか、アジアの国に行ったら海の宝玉だらけってことに……」

「蜃の宝玉には続きがあつてな、数百年、海の底で誰にも見つかることなく沈んでいた宝玉は、やがて翠玉に変化^{へんげ}するのだそうだ」

瑞樹はニシキギを見上げる。

「俺がどんなに言葉を尽くしても、俺の気持ちを信用するかしないかは、お前の判断だ。俺は無理強いはしない。だけど、俺は自分お前を諦めるつもりはない。ゆっくり考えるといい。ただ、もう病室に戻れ。トウキが事を大きくして厄介なことになる前にな」

「瑞樹い！」

突然名前を呼ばれて振り向くと、巨大なクマが大腿で走ってくるところだった。もとい、コブが走ってくるところだった。

「生まれた！ 生まれたんじゃけど、ミントにどんだけソーマを飲ませればいいんか聞くのを忘れちよったんじゃー」

コブはワアワア言いながら、走ってきているのだった。

「きゃあああああ、ソーマを忘れてたんだー」

瑞樹が絶叫する。瑞樹は真っ青になる。ハル共和国に來たばかりのころ、ミントの妊娠をカナメから知らされた時に感じた不安はこれだったのだ。

ソーマ。子供を産んだミントにソーマを飲ませるとハルが言っていたのをすっかり忘れていた。隣を見るとニシキギがうるさそうに耳を両手で塞いでいる。

「ニシキギ！ ソーマを手に入れなきゃ」

瑞樹はアワアワと辺りを見回す。あんなのどこに行けば手に入れられるのか。

「ソーマはもう渡してある。行くぞ」

ニシキギは瑞樹の手を握ると管理棟目指して走り出した。

第十三話 海の宝玉 蒼穹の欠片（1）（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

し、しかし…タイトルの半分がこんなオチだとは…後の半分ももしかして…（へへゞ（に、逃げる準備をしなくっちゃ！！（汗））

招夏

第十三話 海の宝玉 蒼穹の欠片（2）（前書き）

ニシキギがディモルフォセカに負目を感じさせてしまうくだりは、「宙の船」第十五話 奈落の底の記憶に記載してあります。よろしかったらそちらを読んでみてくださいませ（＾＾ゞ 招夏

第十三話 海の宝玉 蒼穹の欠片(2)

思うに……他人の中にある自分のイメージ程、見たくないものはないと思う。瑞樹は一人盛大な溜息をついた。

悪気なんて、これっぽっちもなかったのだ。悪い所があったとしたならば、寝ぼけていた……それだけだ。

カナメは、あの後、繋がってしまった瑞樹と自分の意識の間にシールドを施すべく、様々な訓練を瑞樹に課した。カナメ側のシールドだけでなく、瑞樹側にもシールドを築かなければならないのだが、問題は瑞樹の側にあった。

心をシールドする、それだけのことだとカナメは言うのだが、それだけのことが瑞樹にとってはどれほど難しいことなのか。瑞樹は泣き崩れる。

例えて言うならば、ハリー・ Potter が訓練させられていた「閉心術」のようなもののんだけど、ハリーよりも分が悪いのは、カナメがス○イプ先生と違って、虐められっ子ではなかったというところかもしれない。カナメには弱みらしい弱みがなく、逆に瑞樹は弱みだらけだった。

「ほら、僕に心を覗かletくなければ、シールドして」

ス○イプ先生は……もとい、カナメは怖い顔でそう言った。

疲れ果てて眠り込むと、よくハルのハデスの夢を見た。無意識のうちに、カナメの意識の中に入り込んで行ってしまうらしい。何度も注意されるのだが、寝ている間にどうやってコントロールすればいいのか、皆目分らない。

その日も疲れ果てて眠りこみ、カナメの意識の境界線を越えてしまいそうになったらしい。しかし、そこには、もう一人の自分が立ちだかつていた。

『ここから先は、カナメの領域だよ』

もう一人の自分は、そう言った。しゃべり方や、仕草や、声の調子が、自分がイメージしている自分と違って見える。カナメからはこんな風に見えているのか、それともカナメディフォルメがかけられているのか分からなかったが、他人の目を通した自分を見ることは、随分嫌な気分になるもので、夢の中でありながら、瑞樹はスゴスゴと退散した。

それに気を良くしたカナメは、境界線にこれに似た仕掛けをたくさん用意したのだった。

以上の諸々の作業で、シールドは順調に進み、よほどのことがない限り、お互いに干渉しなくなっていくた。

* * *

「！」

瑞樹が僕の姿を見るなり、脱兎だつとの如く逃げ出したのが見えた。僕は肩を竦すくめる。

「瑞樹が来なかったか？」

ニシキギはエリアGの奥から出てきたので、さっきの瑞樹には気づかなかつたらしい。

「今、逃げた」

「逃げた？」

「うん。僕の顔を見て逃げた」

「……なんでだ？」

「意識レベルが微妙にずれていたんだ。瑞樹が逃げなかったら僕が逃げるところだ」

「はあ？」

ニシキギは訳が分からないという表情をした。無理もない。

シールドの構築は順調に進んでいて、お互いの意識が干渉するとは少なくなっていた。

相手が何を考えているのかは、ほぼ分からなくなっているのだが、接近した時に、相手の意識レベルと自分の意識レベルが均衡を保とうとするらしい。

具体的にいえば、相手が悲しい気分の時に自分も悲しければ何の違和感も生じないのだ。

逆に自分が怒っている時に、瑞樹が嬉しい気分……つまり正反対の時もあり違和感はない。

一番問題なのは、微妙にずれている時だ。今のように。

今日、カナメはフローティングシティ基底部の基盤となる新素材がうまく行きそうなことに気を良くしていた。後もう少しだ。少し気分転換をしようと思ってエリアGを出ようとしたところだった。

一方、瑞樹はニシキギと約束があったらしい。ニシキギに会えるのは嬉しいいらしかったが、約束の内容に少し不安があったのだろう、不安定な気分だったようだ。お互いの意識レベルが微妙にずれていた。

微妙にずれている時に接近してしまうと、なんとも言われない不快感が走るのだ。ぐりっと軟骨がずれるような……合わないパズルのピースを無理やりはめ込むような……錆びついた金属の扉が閉まる時の擦れ合う音のような、独特の不快感。

「で、瑞樹はどこに行ったんだ？」

「さあ」

「さあって……」

ニシキギは困惑する。

「今日は何の約束をしていたんだ？」

「ネモフィラに会いに行く予定なんだ」

「……」

「もちろんブラキカムも立ち会う。瑞樹が動揺するようなら、すぐ

に退出させる」

「ネモフィラは瑞樹に会うことを了解しているのか？」

ネモフィラはディモルフォセカのことを良く思っていないはずだ。ディムの外見をもつ瑞樹を襲おうとしたのは、つい最近のことだ。大丈夫なんだろうか。まるで自分のことのように不安が広がる。

「もちろんだ。彼女が会いたがった。瑞樹に事情を話したら、力を貸すと言ってくれた」

「そうか……ブラキカムは瑞樹のことを、瑞樹の中のディムの記憶のことを知っているのか？」

「あんたの了解も貰わずに、悪いとは思ったんだが、俺が知らせた」

「そうか……いや、ならいいんだ。ディムは：君の弟とのことで、随分心を痛めていたようだったから。その記憶を持つ瑞樹も、そしてネモフィラにしても、お互いに辛いんじゃないかと思ったんだ」
「そうだろうな」

ニシキギは否定しなかった。

* * *

お互い辛い出会いになるのかもしれない。ニシキギも考えなかった訳ではない。それでも、少しでも二人の間のわだかまりが和らぐ可能性があるので、試してみる価値はあると思っている。

ニシキギはディモルフォセカがネモフィラに対して負い目を感じていたことを知っていた。そうさせてしまったのは自分だという自覚もある。その想いを、瑞樹がそのまま引き継いでしまっているのなら、なんとかしてやりたいという気持ちがあつた。

決して無駄にはならないはずだ、ニシキギはそう判断した。

瑞樹はドアの前で佇^{たたず}んでいた。この中にネモフィラがいる。シー

カスの恋人だったネモフィラ……

ディモルフオセカとシーカスの結婚が決められてからは、目も合わせてくれなかったことを瑞樹は知っている。やはりディモルフオセカのことを嫌っているんだろうな……。――

協力すると言っておきながら、怖気おじけづいている自分に苦笑する。

瑞樹がディモルフオセカの記憶を持っていることを、ネモフィラは知らされていないとニシキギから聞いている。

彼女は瑞樹のことを、単にディモルフオセカに似ている地球人の日向瑞樹だと思うことだろう。でも……

「どうした？ やめておくか？」

ニシキギが気遣きづかうように顔を覗き込んでくる。

「……やめたら、ネモフィラは気を悪くするよね？」

「それはないだろう。今日お前が来ることは知らせていない」

「え？ そうなの？」

「ああ。だから無理をすることはないんだ」

「……まだ心の準備ができていない気がするよ。少し、待ってもらってもいい？」

「ああ、構わない。カフェテリアにでも行くか？」

「……うん、ごめん……」

「謝るな」

ニシキギは瑞樹の頭をぐりぐりつと撫でると歩きだした。瑞樹はその後をとぼとぼと追う。

「ネモフィラは、私のこと……きっと、嫌いだよね」

昼下がりのカフェテリアは人がまばらに入っていて、程よくざわついていた。ポモナ・ソーダの泡が一つ、また一つとグラスを離れて浮かび上がっていくのをぼんやり見つめながら、瑞樹は呟つぶやいた。

「この前も言ったが、お前は日向瑞樹だ。ディモルフオセカではない。もし、そこを分けて考えられないようなら、お前はネモフィラには会わない方がいい。俺はお前に無理をさせるつもりはない。何

度も言うようだが……」

瑞樹はアール・ダー村でのディモルフオセカの記憶を思い出す。夕刻のジタンが、空を薄紫色に染める美しい夕べのアール・ダー村の森で、二つの影が寄り添っていた。

『いよいよ明日なのね……』

声の主はネモフィラだ。細く透きとおった……震える声。

『……』

『やっぱり嫌、シーカス、私……耐えられそうにない』

『ネモフィラ、僕は……ずっと君のことを……愛しているよ』

シーカスの深い声が聞こえる。

美しく、悲しい……壊してはいけない、壊すことなんかできない。そんな二人を木陰から見つめている自分。ちがう、見つめているのはディモルフオセカだ。ふと、我にかえった。

「うう……」

瑞樹はパシリと胸のあたりを手で押さえると、呻いた。

「おいっ、どうした？」

ニシキギが慌てる。

「ちがう……」

ディモルフオセカはあの二人を見て、綺麗だと思ったのだ、壊してはならないと考えて、逃亡したのだ。なのに。私は……

「違う？」

「私はディモルフオセカと違う。私なら、私だったら……」

もしネモフィラに彼を諦めて欲しいと言われたら、私は……

気づいたら、隣に座るニシキギの胸を頭突ずついていた。涙が零れ落こぼちる。

「最初からお前とディモルフオセカは違うと言っているだろう？ しかも、なんで頭突ずつきながら泣く？」

ニシキギは困惑しながら、瑞樹を抱き寄せて背中をさすった。

「今日は、もうこのまま部屋に戻ろう、な」

「私は……最低だ……」

「瑞樹、もういい。ネモフィラのことは忘れろ。もう直^{じき}、地球へ帰るんだ。このままにしておいたって何も問題はない」

瑞樹は、自分の涙の本当の理由を知ることができないニシギギに安堵^{あんど}する。知られてしまったら……こんな心の狭い、自分本位な自分を知られてしまったら、ニシギギは私のことを嫌いになるだろうか。瑞樹は不安で、いてもたってもいられなくなるのだった。

瑞樹は一人自室にいた。ベッドの上にはクマ太がちょこんと寝転んでいる。地球のハル共和国に置いていた瑞樹の荷物は、すべてニシギギがまとめて持ってきてくれていた。

濃い茶色の毛をフカフカと撫でてみる。

イベリスとエニシダは一足先に地球へ戻った。第二エリアEが心配なのだと言っていた。

森の民は長老を失って、これからが大変な時なのかもしれない。

アドニス^{アドニス}は刑罰として再生停止の刑を受けている。今回アドニスの計画に加担した森の民は、瑞樹の証言も考慮されて、全員刑の執行を猶予された。猶予の条件は、彼らがアドニスなしで森の民の規律を立て直すことだ。アドニスの再生は彼らの再建が条件になっており、しかし、アドニスは再生されても長老になる権利は剥奪^{はくだつ}されるらしい。

ヌンは未だ逃亡中で、事情聴取しなければ法的に判じることとはできないが、アドニスよりも重い刑になることは確定のようだ。

ミントの赤ちゃんは、男の子で、タンジーという名前だ。ミント似のクリクリツとした茶色の瞳が愛らしい。そして、驚いたことに彼は緑色の髪の毛を持っていた。ファームの民の長老カシと同じだ。カシはほぼ白髪になってしまっているの、深緑色の髪の毛をしたファームの民を見たのは初めてだった。ミントは霊薬ソーマのお蔭なのか、とても元気だ。

今のところ、瑞樹の気がかりは二つ。ネモフィラのことと、セルシスのこと。セルシスは勾留（こうりゅう）されていて何度か面会に言ったが、ろくに口もきいてもらえなかった。原因は分かっている。自分が……ネモフィラとの面会以上に怖気づいていたからだ。

せっかく巡り合った兄弟なのだ。何とかしたかった。でも何ともできないまま、正樹からも、ブラキカムからも、カナメからさえもストップをかけられてしまった。

瑞樹は頭を抱え込んで大きな溜息をついた。

強くなりたい。心からそう思う。

第十三話 海の宝玉 蒼穹の欠片（3）

ネモフィラは病室のベッドの上で、最近編集されたばかりの地球の自然アルバム映像をぼんやり見つめていた。何を見ても、何を聞いても頭に入ってこない。

惑星ハルのアール・ダー村を出たこと……それが間違いだったのだと、そうとしか考えることができない。すべてが悪い夢……すべてが罰なのだと。

ノックの音がした。黙っていると、再び躊躇^{ためら}いがちなノックの音がする。ブラキカムや看護師のセンナなら返事がなくても入ってくるはずだった。

「……はい」

ネモフィラは小さな声で返事をする。声を出したのが久しぶりなので、自分の声ではないような気がする。

入って来た人を見て、ネモフィラは目を見張った。

「あの……は、はじめまして、あの、私……」

鮮やかな翠色^{みどりいろ}の瞳が、キョトキョトと室内を見回した。

「ミズキ・ヒュウガさんですね？」

ネモフィラはやっとどうにか、小さく微笑むことに成功した。彼女はデイモルフォセカではない、何度も自分に言い聞かせてきたことが、功を奏したらしい。

「あの……今、大丈夫ですか？もし、不都合なら出直しますけど……」

相手の都合を優先しようとする彼女の態度に心の痛みが増す。デイモルフォセカもこう言う人だった。

嫌だ……この人はあの子に似ている。自分の嫌なところが浮き彫りになる。

「構わないわ。入ってください」

少し棘のある言い方だったかもしれない。だけどその人は、気に

する様子はなく、小さく微笑むと部屋に入ってベッドの脇に立った。
「お見舞いに、果物を持ってきたんですよ。良かったら……」

その人は、赤く熟れたポモナの実をサイドテーブルに三つ並べた。
「あなたは……地球人なのに森の民の力をお持ちだそうですね」

「ええ、そうみたいです」

その人は恥ずかしそうに笑った。

「羨ましいわ。私は森の民なのに……今は何の力もなくて……何の役にも立たなくて……」

「……やっぱり、あなたも森の民の力を使えるようになりたい？」

そう言って、その人は屈託なく笑むと、何の躊躇いもなく私の手を取った。私は瞠目して硬直する。

「これで使えると思うんだけど。そだ、ポモナの種で試してみようか？あ、でもまず実を食べなきゃだね」

その人はポモナの実を一つ手に取ると、私に差し出した。

「……どうして、あなたはこうして、私に親切にするの？会ったばかりなのよ？あなたを誘拐して利用しようとした森の民の仲間だったのよ？あなたは嫌いな人にも優しくする偽善者？」

気づいたら、私はその地球人にひどい言葉をぶつけていた。

「そだね。偽善者なのかもしれない。私は、怖くて仕方がないんだと思う」

私が受け取らなかったポモナの実を掌で撫でながら、その人は言った。

「怖い？何が？」

「……あなたが」

翠色の瞳に射抜かれたようで、私は身を竦めた。

その人から聞いた話はとても信じられないことだった。彼女が見かけだけでなく、デイモルフオセカの記憶も持っているなんて……
「アール・ダー村のことも知ってるの？」

「うん。デイムが知ってることなら、たぶん全部。あ、でも、忘れ

ていることもあるけど……」

「……私とシーカスのことも？」

「うん」

「シーカスとディモルフオセカの結婚のことも？」

「……うん」

「……嘘でしょ？」

「わざわざ嘘をつくために、あなたに会いに来ないよ？」

それはもったもな意見だった。私は緩々（ゆるゆる）と事情を認識する。

「じゃあ、教えてよ。ディモルフオセカは私への当てつけで逃げたんでしょ？ シーカスの気を引きたくて事件を起こしたんでしょ？」

私の不躰^{ぶしつけ}な質問にその人は、少し絶句したようだった。

「……ネモフィラは、そんな風に考えちゃったんだね……」

その人はそう言って、沈黙した。

私は自分の中で、ディモルフオセカを責める言葉が泉のように湧きあがるのを感じて、息がつまりそうだった。この人は記憶を持っているだけだ、ディモルフオセカではない、そう何度も言い聞かせても無駄だった。湧き上がる言葉が今にも噴きだしそうだった。

しかし、その言葉を押しとどめたのは、その人の言葉だった。

「……辛かったよね。ネモフィラはずっと……辛かったんだね。ごめんね。ごめんなさい……」

その人はそう言って涙を零^{こぼ}した。

「なぜ？ なぜ、あなたが謝るの？ あなたはディモルフオセカじゃないんでしょ？」

「でも、一つだけ言い訳をさせて？ ディモルフオセカは、あなたとシーカスの幸せを願ってた。二人の間に割り込んじゃいけないって……そう考えてた。それだけは、信じてあげて？」

確かに彼女のやり方は、配慮が足らな過ぎたんだと思う。あなたやシーカスの幸せを願っての行動だったはずなのに、こんなに苦しめていたなんて、彼女は知らなかったんだよ」

「……そんなことまで知ってるの？」

私は混乱する。そんな言葉を期待していた訳じゃない。私はただ、ただ……

「……」

「あなた、デイモルフオセカなんですよ？だから、そんなこと言えるのよ！」

「それは違う」

「違うわ！あなたは地球人のふりをしているだけなんですよ？別人のふりをして、自分の過ちを赦ゆるしてもらおうとしているんだわ！」

「違う……」

「嘘つき！」

「嘘じゃない！私はデイモルフオセカじゃないよ！その証拠に、私はあなたにニシキギを諦めてほしいって言われても、たぶんできない！」

「え？」

「……デイモルフオセカにはできたことが、私にはできないよ。私はデイモルフオセカじゃない……」

「あなた……」

「私は、地球人の日向瑞樹。自分本位な人間なんだよ……」

その人は、まるで叱られたみたいに項垂うなだれた。

私は、自分を拘束していた鎖の鍵が解錠された音を聞いた。私はただ、自分の犯した過ちを正当化しようとしていただけなのだ。でも、それは間違ってる。

あの時、ハルで私がしなければならなかったのは、シーカスを信じること、シーカスを愛し続けること……それだけだったのだ。それを、私は心のどこかで分かっている……ずっと後悔していた。

だからシーカスに似ているニシキギに、あんな風に拘泥こうでいしてしまっていたのだ。そんなことをしても何一つ解決するものがないことも、自分の行動を正当化することさえできないことも、分かっている。

たのに……

自分を縛りつけていたのは自分だったのだと気付く。涙がひっそりと流れて落ちた。

「……私は、ネモフィラ・メンジーシー、惑星ハルから来た森の民よ。私もひどく自分本位な人間だわ。それに、誤解のないように言っておくけど、私が愛しているのはシーカスであって、彼のお兄さんではないわ」

私は手を差し出した。その人は戸惑った表情で手を差し出した。「握手じゃないわ。もうさっきしたでしょ？ポモナを頂戴」

その人は一瞬ポカンとした様子だったが、やがて破顔して、紅く熟れたポモナの実を私の掌に載せた。

＊ ＊ ＊

「みーずーきー、誰が一人でネモフィラに会いに行っていていいと言っただんだ！」

次の日、エリアEへ行く途中で捕まった瑞樹は、ニシキギにこっぴどく叱られた。拳骨^{げんこつ}で頭を挟まれてグリグリされる。

「いたたた。だ、だって、一人で会っちゃいけないって言われてなかったしい」

「あいつは森の民なんだ。迂闊^{うかつ}に接触してエニシダの時みたいに崩壊でもしたらどうするつもりだったんだ？」

「そんなときは、ニシキギを呼ぶよー」

「俺が近くにいなかったらどうするんだ？」

「えーっと……」

「何も考えていなかったってことだろう？」

「だって、ナンディーの中にいるんだもん、そんなに遠くに離れないでしょ？」

「急用でアグニシティに行くってこともあるんだぞ。大体お前は迂闊^{かつ}すぎるんだ。軽率だ。もう地球に帰るまで自分の部屋で反省しろ」

「ええー、それはひどいよ。今日はこれからミントの所に行く予定だし。明日はナンディーでもファームの民と森の民の交流会を開くから出席して欲しいってセージが言ってるし……」

「そして、その森の民と握手することになって、崩壊だ」

「そんなにたびたび崩壊するわけじゃないじゃん。エニシダのはたまたまだよ。たまたま。それに万が一のことがあっても、ニシキギ、明日はエリアGにいるでしょ？カナメに確認しちゃったもんね」

「……」

「崩壊し始めたら、エリアGまで走ってくよ」

「……」

「あり？ニシキギ、人の話はちゃんと聞してる？」

「……おまえ、今度崩壊しかけて、俺ん所に来たら、キスぐらいじゃ済まないからな。覚悟しておけよ」

「へ？」

そう言い捨てると、ニシキギはエリアGへ行ってしまった。一人残された瑞樹が、ポモナの実のように真っ赤になっていたのは言うまでもない。

第十三話 海の宝玉 蒼穹の欠片（4） 完結

水平線に口づけを始めた太陽が、空を赤く染めあげているサンセツトビーチは、かなりの人で賑わっていた。

潮騒の音が耳に心地よい。タウンバスを降りた瑞樹は浜辺まで駆けだした。

「転ぶなよ！」

後ろからニシキギの呆れた声が追いかけてくる。

久しぶりに帰ってきた地球の空気は濃密で、雑多な匂いで満ち溢れていた。海と大地と植物と動物が発する匂い。瑞樹は胸いっぱい夕刻の涼やかな空気を吸い込む。

「あー、久しぶりの海ー」

赤く大きくなった太陽のやわらかな日差しを堪能する。

「おねーさん、おねーさん」

突然片言のハル語で話しかけてきた人がいた。

「おねーさん、あの時、パラソル買ってくれた人だね？」

瑞樹が声に振り向くと、パラソル売りのサンボが立っていた。

「あー、あの時の……」

サンボは破願した。

「おねーさん、あの後パラソル忘れて行ったね」

「ああ、そうだった」

カフェテリアのテーブルにかけたまま、あの場を逃げ出してしまったのだった。白い花柄とイルカ柄の二本のパラソル。

「こないだ、あのおにーさんを見かけた時に、私、パラソルを渡そうとしたね。そしたら、おにーさんはそんなパラソル知らない言ったよ。おねーさんと一緒にいたおにーさんは双子か？」

「あー、まー、そーかな」

トウキは、私が渡したパラソルのことを他のトウキに秘密にして

いた？ぼんやり考えていた瑞樹の耳に、突然、サンボが口を寄せて囁いた。

「おねーさん、この前のおにーさんとは別れたか？今度はあのおにーさんとデート中か？」

サンボはニシキギを目線で示して言った。

「な、何を言ってるの？トウキとはデートなんてしてないよ」
「トウキ？どっちのおにーさんの名前か？」

サンボはニヤニヤしながら声を潜めたまま話した。

ニシキギが怪訝そうな顔をして近づいてくる。

「瑞樹？どうかしたのか？」

不機嫌そうなニシキギの声に、サンボが首を竦めた。

「パラソルは今度会った時に返した方が良さそうね」

「……」

「おねーさん、デートはね、おねーさんが本当に心から愛している人とした方がいいね。その方が楽しいし、後始末も必要ないしね」

サンボはワザとらしく、しかつめらしい顔を作って言った。

「だからー、トウキ……前のおにーさんとはデートとか、そんなんじゃないかったんだってばー」

瑞樹はムキになって言い返す。ニシキギが隣にやってきた。

「おにーさん、このおねーさん、前にビーチで忘れ物をしたね。私預かってるよ。それを伝えたかっただけね」

サンボの説明に、ニシキギは納得したような納得できないような複雑な表情をした。

「何を忘れたんだ？」

ニシキギは瑞樹に問いかける。

「この前トウキとビーチに来た時に、パラソルを忘れたんだよ」
瑞樹の説明に、ニシキギは納得した表情をした。

「あー、あの時のな。なるほど……」

「……」

サンボは少し気が抜けたような顔で肩をすくめた。

「君……そのパラソルは今すぐ持ってこれるのか？」

「私はカルロって言います。パラソルはカフェテリアの店に置いてあるよ」

「じゃあカルロ、ホテルのフロントまで届けておいてもらえるか？
エウオニムスの名前で予約してあるから」

ニシキギはそう言うと、カルロにチップを渡した。

「了解ねー」

カルロはニツと笑って、親指を立てたガッツポーズを作ると、瑞樹の背中をぽんぽーんと軽く叩いて走り去った。

カルロは再び善からぬそーぞーを巡らせて、そんな行動をとったに違いなく、瑞樹は誤解を訂正しようとして口を開きかけたまま静止した。だって……なんて言い訳をする？ 食事をしにきただけなんだよ？ なんて言い訳をする方が逆にあやしいじゃん。瑞樹はがっくり肩を落とす。

「瑞樹、手」

砂に足をとられそうになったところで、ニシキギが伸ばした手にありがたく掴つかまった。波打ち際を二人で手をつないで歩く。

トウキは、どんな想いであのパラソルのことを秘密にしたんだろうか。瑞樹は切ない気持で砂浜たなずに佇んだ。

「トウキは……私が壊してしまったトウキは、たった一人だけのトウキだったよ」

誰に言う訳でもなく、ポツリと零れてしまった言葉に、ニシキギは何も言わずに瑞樹の頭をポンポンと軽く叩いた。

しばらく沈黙が続いたあと、ニシキギが問いかけてきた。

「ずっと聞きたくて、でもずっと聞けないでいたんだが……おまえ、精神崩壊していた時のことは、何も覚えていないのか？」

瑞樹は視線を彷徨さまよわせる。

「……ところどころ、すっぱり抜け落ちている所もあるみたいなんだけど、たぶん、ほとんど覚えてる……と思う」

「……シオンのことは？」

「もちろん覚えてる。シオンがいたころは、自分の体を誰か別の人が運転してるみたいな状態だったよ。自分は助手席に座って見てるみたいな……」

「……」

「シオンがいなくなってからは、私自身は深い水の底にいるみたいで、そこにただ居て、命令を待っているって感じだった。命令されたことしかしてはいけなくて、そういう状態だった……」

「命令されたこと……」

ニシキギはすごく戸惑っているように見えた。

「じゃあ、俺がシオンに話したことも、お前に命令したことも……全部覚えていえると言うことか？」

「……」

ニシキギの戸惑いの理由が分かる気がして、瑞樹まで戸惑っている。

「俺が、愛して欲しいと言ったことも？」

「……うん……」

「……その後、お前はカナメと意識が繋がったんだよね？」

「ああ、そうだね」

ニシキギの戸惑いの理由は瑞樹が考えているものと少々ずれているような気がして、瑞樹は首を傾げた。

だからなのか。ニシキギは一人納得して眉間にしわを寄せた。

地球に戻る直前、ナンディーのカフェテリアでカナメと会った時のことだ。

「地球に戻ったら、サンセットビーチのホテルで食事をする約束をしているんだって？」

ランチのトレーをニシキギの隣に並べながらカナメが話しかけてきた。

「瑞樹から聞いたのか？それとも自動的にわかるのか？」

「瑞樹に聞いたんだ。もう瑞樹の意識と僕の意識は遮断されているよ。気にしてた？」

「その割にはよくコミュニケーションがとれているようだな」

ニシキギはしかめっ面で言う。

「近くにいるときは、小まめに接触しておかないと意識が微妙にずれて、しょっちゅう嫌な思いをすることになるもんでね。それに……娘をもつ父親の気分なんだ。悪いやつにだまされていないかとか、辛い状況になってないかとか、色々気になってね……」

カナメはニヤリと笑んだ。

ニシキギは大きな溜息をつく。最近、この二人を見ると、微妙に似てきているようで、時々不安になる。同じセリフを同時に口にしたり、同じ動作を同時にしたり、しょっちゅうハイタッチをしていたり……親子だと言われても、兄妹だと言われても、二卵性の双生児だと言われても納得しそうだ。

「瑞樹を……頼むよ。大事にしてやってくれ」

「そんなことあんたに言われなくなったって、大事にするさ」

ニシキギのふてくされた言い方にカナメは苦笑すると、視線をトレーに落とした。

「……僕はね、相手がどんなやつであれ、瑞樹を渡す時には、後悔や喪失感や嫉妬心を感じるんだろうと……ずっと思っていた。ディムを盗られた気分になるんだろうと……そう思っていた」

メインの肉にフォークをグサリと突き刺しながらカナメは言った。

「……違うのか？」

カナメがナイフでゴリゴリと肉を切り分けているのを、引き気味に見つめながらニシキギが問い返す。

「違うな。誤解を恐れずに言う……僕は君が好きだ。あれ？なんで離れるんだ？」

ニシキギはトレーごとカナメから離れていた。

「俺はそう言う趣味はないぞ」

「失敬な。僕にだってそんな趣味はない」

カナメはむっとした表情で、トレーごとニシキギに接近する。

「だったら、そんなに近づくことないだろう？」

体を離すニシキギの耳元にカナメは口を寄せて囁いた。

「最近気づいたんだが、瑞樹が好きなものは僕も好きになるし、僕が好きなものは瑞樹も好きになる傾向があるようなんだ」

「……」

ニシキギは怪訝そうにカナメを見つめる。

「言っている意味が分かるか？」

「……」

ニシキギの背中を嫌な汗がつつたう。

「僕が君を嫌いになれば、瑞樹も君を嫌いになるかもしれないということだ」

カナメはにやりと鮮やかな紅い瞳を細めた。

ブルリとニシキギは身震いする。

俺の気持ちも瑞樹の気持ちも把握したうえで、やつはそう言ったに違いなく、一番性質の悪い人物に弱みを握られているらしいということに、ニシキギは悄然しょうぜんとする。

「あー、空がすごーく広い！」

隣で瑞樹が寝転んで叫んでいた。ニシキギは瑞樹の声で現実引き戻される。

「ニシキギも寝転んでみなよ。すごーく広くて、いい気持ちだよ？」

瑞樹に言われるまま寝転んでみる。夕焼けの空はどこまでも広がっていて、果てがないように思われた。

「……俺にとっては、あまりいい気持ちではないな。なんだか、屋根のない飛行機に乘せられているようで落ち着かない」

不安で落ちつかなくなる。

「そうなの？ かわいそー」

ニシキギは体を起して、水平線を見つめた。どこまでも広がっている空が海と交わっている。逆にニシキギは瑞樹の上に覆いかぶさ

って、見下ろした。

「俺はこっちの方が眺めがいいな」

瑞樹は微笑んで、ニシキギの顔に手を伸ばした。

「青空の欠片ー」

「？」

色素を失って、昼間の青空を見られなくなったと嘆いていたのが、もう随分昔のことみたいだ。

「青空の欠片？」

「うん、ニシキギの瞳」

「ひどいな、俺は海の宝玉だって言っちゃったのに、俺のは欠片か？」

「欠片は欠片でも青空のだよ？ 瞳なんだよ？ 欠片じゃなかったら、どんだけ大きな目なんだしー」

ふくれっ面で文句を言う瑞樹にニシキギは小さく笑んだ。

「瑞樹、水平線を見たか？」

「？」

「空が海を抱きしめている」

そう言うと、ニシキギは瑞樹を抱きしめて口づけた。幾度となく落とされた口づけに、瑞樹は頭の中がじんわりと痺れていくのを感じていた。

だから、気づくのが遅れたのだ……

ざざーっと大波が、瑞樹の背中を這い上がり、戻っていく波に足元の砂がさらわれて抉^{えぐ}られていく。

「きゃあー」

「わあ！」

慌てたニシキギが瑞樹を引き起こしたが、時すでに遅く……全身ずぶ濡れの瑞樹はがっくりとうなだれる。恨めしげに、ニシキギをちら見すると、彼は膝下を濡らしただけのようで、膝についた砂を

払っていた。

「ねー、ずぶ濡れじゃあ、ホテルに入れてくれないよね」
栗色の髪の中からポタポタと滴が落ちる。

「さあな」

ニシキギは肩を竦めた。

「さあなじゃないでしょお？どうしてくれんのよー」

今日のホテルの食事は、海で取れた新鮮な魚介料理と島で採れる南国フルーツのデザートが売りで……瑞樹は、それは、それは、と
ーっても楽しみにしていたのだ。

「おい、寄るな。俺まで濡れる」

瑞樹はニシキギに飛びついてゴシゴシ体をこすりつける。

「ニシキギも一緒にずぶぬれになろーよ。っていうかー、元々ニシ
キギのせいじゃん！」

「おまえが勝手に寝転んだんだろ？放せ！」

「放さないよっ！」

浜辺で延々と追いかけてつこを繰り広げる二人のお腹は、空しく減
っていくばかりなのだった。

＊ ＊ ＊

カナメはラウンジで一人、メモシンのソーダ割りを楽しんでいた。
ナンディー程ではないが、ガルダβは比較的大きな造りの宇宙船で、
人工重力も働いているので快適だ。

ガルダβは火星の衛星フォボスで建造された。今ガルダβが目指
しているのは女神ビーナス。金星だ。

今頃、瑞樹は地球に着いているのだろう。自分の中に二人をつな
ぐ扉がある。何をしているのか知ることも可能だ……おっと、いけ

ない。お互いの領域に侵入しない。これは二人で決めたことだ。僕が決まりを破ってどうする？カナメは苦笑する。

「なんだ、ここにいたのかー」

背後から聞き慣れた声がした。

「なんで君がここにいる？地球に戻ったんじゃないのか？」

振り向くと正樹が立っていた。

「ビーナスに会いに行きたくなったのさ」

「やっぱり地球が恋しくなっちゃって泣いたって、この船は地球には寄らないぞ？」

「泣くか」

正樹はむっとした様子で隣に腰をおろした。

「泣いてるのはあんたの方じゃないのか？瑞樹をさらわれてさ」

正樹の言葉に意外なことを言われたかのように、カナメは片眉を上げた。

「瑞樹をさらわれたと思っているのは君の方だと思っていたよ」

「……いや、不思議とそうは思わなかったな」

扉を……瑞樹を飲み込んだ扉を渾身こんしんの力で開いていたニシキギの姿を思い出しながら、正樹は言った。

「俺は、守り人降板だ。そうだな、どちらかと言うと、肩の荷が下りた気分かな」

「なんだか、ひどい言われようだ」

カナメは顔を顰しかめる。

「ひどくないさ。瑞樹は生まれつきのトラブルテイカーだ。きっと今頃、またトラブルを拾ってるさ。海に落っこちるとかしてなー」

「ありそうだ」

二人して、くつくつと笑い合う。

「金星のフローティングシティは過酷だよ？君は気に入らないと思うな」

「遊びに行くわけじゃないぜ？」

「そうなのか？」

「女神のご機嫌を伺いに行くんだ」

正樹はメモシンのロックが入ったグラスをカラカラと鳴らした。

「なるほど……女性はいブキの専門だからな」

「あんたは男専門なのかよ」

カナメは正樹の言葉に目を見開く。その昔、イブキと似たような会話をしたことがあったからだ。ハルで……今はもうない、あの惑^ほ星^しで……

「なんだよ」

正樹が怪訝そうにカナメを見つめた。

「いや……そうだな、君がいれば心強いよ」

カナメはそう言うのと破顔した。

そうだ……今はハルにいたときとは違う。太陽系を見捨てるために闘っているわけじゃない。拓くために闘っているのだ。

それに、この青い空と蒼い海の宝玉、地球を……どこまで守れるのか挑戦するのもいいじゃないか。

決して変わろうとしない『頑固な過去』、どうなるのか見当のつかない『得体のしれない未来』、その間に挟まれて右往左往する『悩み多き現在』

例え、未来の得体が知れなくても、君たちが一緒なら、それもまた楽しみの一つだ。

未来へ……ガルダβは飛翔した。

〈了〉

第十三話 海の宝玉 蒼穹の欠片（4） 完結（後書き）

惑星ハルシリーズ第二弾「海の宝玉 蒼穹の欠片」これにて完結です。読んでくださった皆様、拙い招夏の作品に、貴重な時間を割いてくださいましたこと、心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。2009年7月20日（月） 招夏

番外編 ソーマ幻想(1) (前書き)

カナメと瑞樹が「時空の狭間」から戻って間もなくの頃です。舞台は宇宙船ナンディー。瑞樹はまだ地球に帰りついていません。

番外編 ソーマ幻想(1)

「靈薬ソーマの賞味期限？まーた何を企んでいるんですかあ？」

ソーマの管理官が胡散臭そうにニシキギを見つめた。

「何も企んでなどいないさ。単なる好奇心だ」

「靈薬ソーマは作ったらずぐに消費してしまうので、賞味期限も消費期限も品質保持期限も分かりかねます」

管理官は面倒臭そうに言った。

ニシキギのポケットには乳白色の液体が入った小瓶が入っている。ミントが出産して靈薬ソーマを使った後、残りをセージから渡された。ミントが服用したのは、たったの一滴。小瓶の中には、ほんとんど手つかずの靈薬ソーマが入っていた。

「ソーマの管理官が聞いてあきれる。何も分かってないじゃないか」

ニシキギは思い切り嫌味を言い返した。

「生憎、靈薬ソーマを無駄にしたことがないんでね、そんなデータはないんですよ。無駄にしてもいいような白色ソーマを手に入れたら、あなたが実験してみてくださいよ。その時は詳細なデータをとってくださいねっ」

管理官はギロリと睨んでから、さっさと踵を返した。

ニシキギもしかめっ面で踵を返すとソーマ管理室を後にした。

白色ソーマを作るには、森の民の命を代償にしなければならない。ニシキギは白色ソーマを偶然ハルから手に入れることができたが、その時の一粒が瑞樹の命を救い、もう一粒がミントの寿命を延ばした。もう一粒は、まだニシキギが持っている。

靈薬ソーマは白色ソーマから作られる。一般人は靈薬ソーマを一滴でも口にしてはいけないとカナメは言った。理性の力で沈めている心の奥底にある欲望を引きずりだす力があるのだと言っていた。

ポケットの中には靈薬ソーマ。消費期限を知ると、服用して自

分の奥底に沈んだ欲望知ると、どちらが良いか。いや、望めば両方選択はできるのだが……。ニシキギは廊下を歩きながら小さくため息をついた。

今、瑞樹は、カナメとつながってしまった意識を遮断するべく訓練を受けている。だから大半の時間をカナメと過ごすことになっていた。

やっと見つけた自分の半身とも思える存在、自分が守りたいもの、守れるもの……。そして、やっとの思いでこちら側に取り戻したもの……。であるハズなのに……。ニシキギは深いため息をついた。

廊下の先に半身がいた。しかし男付きだ。それも性質の悪い男だ。

「ニシキギー、お待たせ」

瑞樹は屈託なく微笑んで手を振った。

「待たせちゃったかな？」

性質の悪い男は爽やかに微笑む。

「で？どうだったんだ？大丈夫だったのか？」

「全然大丈夫じゃない、泣きそう」

瑞樹はしょんぼりと俯いた。

「なんだって？何がこういう風に大丈夫じゃなかったんだ？」

ニシキギは目を見開いて、瑞樹の肩をがっしりと掴み揺さぶった。

瑞樹の頭が前後にガクガク揺れる。

「瑞樹……そんな言い方したらニシキギが勘違いするだろう？」

カナメは気まずそうに言ってからため息をついた。

昨晚、眠っている間も意識を遮断したままでいられるように訓練するとカナメが言った。だから、ベッドを接近させて眠るが構わないかとニシキギは訊かれた。そんなの構うに決まっている。しかし、無意識下でも、意識を遮断したままにできないと後々困ることは分かり切っているので、ニシキギは仕方なく承諾した。

「昨夜はうまく行かなかったけど、別の方法を考えてみるから、も

う少し訓練を続けてみよう」

「……うん、ごめんね」

カナメは、小さく微笑んで瑞樹の頬に軽く触れてからエリアGへ入っていった。

「ニシキギは？仕事ないの？」

瑞樹の問いかけにニシキギはガックリと肩を落とす。こいつ、俺が少しでも長く一緒に過ごしたいが為に、仕事のシフトを組んでい
ることに、いつ気づくんだろうか。きっと、ずっと気づかないに違
いない。

「今日の分の仕事はもうない。食事まだだろ？エリアEのカフェテ
リアに行くか？」

「うん！」

木に実った果物が食べられるカフェテリアはエリアEだけだ。急
に元気が出た様子の瑞樹にニシキギは小さく笑った。

「だからね、意識がない時に領域侵犯しちゃうんだよ。でも、そ
んなのどうやって制御すればいいと思う？」

エリアEのカフェテリアでフルーツ盛りを嬉々として食べながら、
瑞樹はニシキギに愚痴を零していた。

「意識が繋がっているという状態さえ想像がつかないのに、それを
遮断する方法なんて俺が分かる訳がないだろう？」

ニシキギは渋面で返答する。

「私たち、ずっとこのままだったらどうなるんだろう」

二人で一つなんて、恋人同士じゃあるまいし……。そりゃ、カナ
メの事は好きだけど、そういう対象じゃないというか、そんなレベ
ルで考えられるような安易な人じゃないと言うか……。大切で、尊
敬してて……。でも、かつての配偶者で……。ああ、違う。それは私^{なだ}じ
ゃない……。私ではない。突然、薄い膜を隔てた向こう側から、宥め
るような、落ち着かせるような、旋律のような、リズムのような波

動が伝わってくる。私の動揺をカナメが察知したんだと気づく。カナメはいつも厳しいけれど、でも、その厳しさは優しさに裏打ちされたものなんだと分かっている。

「おい、もしかして、カナメと交信中なのか？」

ニシキギが忌々しそうに言った。

「交信してるわけじゃないよ。でもカナメに私の不安が伝わっちゃったみたいで……」

瑞樹は項垂れた。

「もう、あいつと交信できなくなったのか？」

「……絶対できない訳じゃないよ。方法はあるけど……電話をかけるみたいなイメージ？呼び出し音を鳴らして、相手が出れば繋がるみたい……」

「あいつを呼び出すことができるのか」

「今のところは……望めただけど……」

瑞樹とニシキギはエリアEの一般人用医療施設の診察室にいた。

「何？やってみたいことって」

瑞樹はニシキギに問いかける。

「とりあえず、カナメを呼び出してみてくれよ」

「……うん、分かったよ」

なんだかよく分からなかったけど、とりあえずニシキギの言う通りにしてみる。間もなくして、カナメが応答した。

『用事って何？』

瑞樹の声を借りて、カナメがニシキギに問いかける。

「カナメなのか？」

『だから、用事はなんだって聞いてるんだろ？』

声は瑞樹でも、しゃべり方や、声の抑揚がカナメそっくりだ。

「俺、今、霊薬ソーマを持ってるんだ」

ニシキギの言葉に瑞樹カナメは首を傾げた。

「ええ？ 霊薬ソーマ？ なんでニシキギそんなの持ってるの？」

瑞樹が素っ頓狂な声を上げた。

「……今のは瑞樹か？ なんだかごちゃごちゃしいて、分からなくなりそうだから、手っ取り早く説明する。これはミントが使った残りの霊薬ソーマだ。余ったから返すとセージから渡された」

『では、それは瑞樹が作ったソーマだな？』

正確には、瑞樹に宿っていたハルが作ったものだ。

「そうだ。俺はこれを使ってみたいと思ってる。以前、あんたは霊薬ソーマを一般人は一滴たりとも口にしてはならないと言った」

『そうだったね』

理性をぶっ壊し、心の奥底に沈めていた欲望を引きずり出してしまふ作用があるのだと、カナメは言った。

「もちろん、廃棄することも考えた。しかし、霊薬ソーマに関しては解明されていないことも多い。たとえば、その効力の期限だ。それに……白状すると自分が何をしたいのか、その心の奥底の欲望とやらを知ってみたいという好奇心もある」

「えええ、変な欲望がでちゃったらどうすんの？」

「変な……欲望？」

ニシキギが怯んで問い返す。

「裸で走りだしちゃったりとか、逆立ちして踊りだしちゃったりとか……」

『瑞樹、やめてくれ。頼むから、そんな変な想像するの……』

瑞樹カナメが声を震わせる。

「それでだ！ 瑞樹にとりついた状態のあんたに監視をお願いしたい訳だ」

むっとしながら、ニシキギが言った。

『それなら僕がその場にいた方がいいだろう？ 今どこにいるんだ？』

瑞樹カナメは辺りをグルリと見回した。

『エリアEにいるのか……今から行くと少し時間がかかるな』

「いや、やめろ。来なくていい」

ニシキギは慌てたように制止した。

『なんで』

「あんただと、どんなひどい目に遭わされるか分からないからな」

『……ずいぶんな言われ方だな』

瑞樹カナメは不貞腐れた顔をする。

「そうじゃなくて、俺はちゃんとグレイプニルを用意しているんだ。俺自身を拘束する為にだ。だが、グレイプニルは扱いに慣れていないと危険だ。だから使い方に習熟している人であれば誰でもいいんだが、できるなら、あまり……」

『他の人間には見られたくない……ってことか』

「まあ、そういうことだ」

ニシキギは決まり悪そうにそう言った。

グレイプニルはものすごく丈夫な繊維でできた紐状の拘束具だ。しかも形状記憶繊維になっていて、すばやくターゲットを拘束することができる。そして、ひとたび拘束してしまうと、拘束した本人でしか解除できない仕組だ。だから、まかり間違って自分自身の手を拘束してしまうと、専用の工具を使ってでしか解除できなくなる。おもに公安で使う道具なので、しばしば新入りの公安員が失敗して騒ぎになるが、それは新入りに施される洗礼のようなもので笑い話で済まされる類のものだ。しかし、公安以外の人間が、しかもエリアEの診察室でそのような事態に陥るのは、あまり都合の良いものではなかった。

番外編 ソーマ幻想(1) (後書き)

後書き

番外編を書いてみました。二話完結の小品です。よろしかったらおつきあいください。

番外編 ソーマ幻想(2)

『これでよし』

瑞樹カナメは、グレイプニルでニシキギの両手首と診療室の窓際の手すりを結びつけた。

「これでいいの？ なんだかアヤシイ状態だね」

『……』

「……」

薄笑いしながら呟く瑞樹に、二人の男たちは一瞬言葉を失う。

「んで、私がこれをニシキギに飲ませればいい訳だね？」

小さな容器の蓋をキュポンと外す。

「……おい、ちよつと待て、全部飲ますつもりか？」

「ん？ 全部飲まないの？」

『瑞樹、スプーン一杯くらいにしておいた方がいい。彼の為にも、君の為にも……』

カナメが動揺の色をにじませて助言する。

「スプーン一杯ね」

モルオーブンから取り出したスプーンに白いトロリとした液体を注ぐ。

「あ、少しこぼしちゃったー。拭かなきゃー」

白い滴が、二、三滴床に零れてしまった。

『そんなのほっとけば？』

カナメが言うので、瑞樹はスプーンの中の液体をさっさとニシキギの口に投入した。

「うっ、おい、心の準備ができてないのにさっさと入れるなよ！」

突然の投入に、うっかりゴクツリと飲み込んだニシキギは、目を白黒させながら瑞樹に文句を言った。

「だって、なみなみ入っちゃってて、もっと零しちゃいそうだったから……で？ 気分は？」

瑞樹が興味津津な顔で問いかける。

「……」

『瑞樹、ニシキギから離れていた方がいい』

カナメが用心深げに言った。

「……もう、一スプーンくれ。よく分かん」

「へ？」

『え？』

その後、更に追加して霊薬ソーマをニシキギに投入したが、彼に何かが起こった様子はなかった。

『成程、やはり君は森の民なんだ。対の力……ハルが言っていたのはこの事だ。おそらく君の力がソーマの力を打ち消してしまうんだろう』

カナメの言葉に、グレイプニルを外してもらったニシキギは、つまらなさそうに鼻を鳴らした。

「森の民ならば、森の民の力が使えるようになるはずだろ？ 力は使えず、理性の籬たがも外れず……なんだかすごくつまらん」

ニシキギは文句を並べ立てた。

『まあ、いいじゃないか、理性の籬が外れないということは大事なことだ。そういう意味では、君の方が僕よりもずっと優れていると言えるだろう？』

「……あんた理性の籬が外れて、何をしたんだよ。教えろよ」

八つ当たりのようにニシキギはカナメにいちやもんをつける。

『……じゃあ、僕はそろそろ戻ろうかな』

「えー、カナメ理性の籬が外れたことがあるの？ いついつ？ デイムは知らないの？」

瑞樹の発言に、カナメがざっと引いた気配がした。

「あり？ 私言っちゃいけないこと言った？」

「デイムは知ってるんだな？」

ニシキギの目が細められる。

『いや、知らない……知らないはずだ……たぶん』

更に追求するニシキギと、はぐらかすカナメの会話を聞きながら、瑞樹は考えていた。この霊薬ソーマを今の私が飲んだらどうなるんだろう。一度、死にかけていた時に飲んで命拾いしたらいいんだけど、その時のことはあまりよく覚えていない。しかも元気な時には飲んだことがない。

瑞樹は容器の底に少しばかり残っていた霊薬ソーマを口に入れた。

「おい、瑞樹？」

『瑞樹、何やってるんだ？』

今の今まで瑞樹カナメを追求して会話をしていたと思ったら、突然霊薬ソーマを口に運んだ瑞樹にニシキギがあっけにとられ、カナメは動揺する。

「元気な私が飲んだらどうなるかと思って……」

『……』

「おい、大丈夫なのか？」

ニシキギの声に反応したかのように、瑞樹は突然口を押さえて蹲った。

「ううっ」

「おい、瑞樹、しっかりしろ」

ニシキギが慌てて瑞樹を抱きかかえる。

そのころ、瑞樹の頭の中ではカナメの声が響いていた。

『あーあ、ほどほどにしないと知らないよ？まあ、とりあえず僕は退散するよ。さっさと謝って、彼を犯罪者にしないように気をつけるんだね』

そう言って、カナメは意識を遮断した。へ？犯罪者にする？なんのこと？

ふと見上げると、ニシキギが蒼白な顔で瑞樹を抱きかかえて、背中をさすっていた。

ありゃ、演技が過ぎたかな？

「なんちゃって」

ニシキギの青い瞳を覗き込んで、二パツと笑う。あつけにとられたニシキギの顔が凍りつく。ありやりや、こりや怒られるかも。犯罪者になるほど怒る？まさか……。

どんっ！

壁を破壊したいのかと思うほどの勢いで、ニシキギは両手で壁を叩いた。壁とニシキギの間に挟まれて、瑞樹は蒼白になっていた。や、やり過ぎたらしい。

「……瑞樹、俺がどれだけ心配したのか、おまえ分かってるのか？」
「ひっ」

こ、声が一オクターブほど低いのは気のせい？気のせいだね？
「悪い……悪い子だ、おまえは……」

そのまま腕の中に閉じ込められて、深く口づけられる。口づけはだんだん深くなり、荒くなり、首筋を唇が這う。

「や、やめ……」

だんだん怖くなるのに……だけど、だんだん体は熱くなる。何か訳の分からない熱い固まりが体の中心から這い上ってくるようで、その甘やかな恐怖に瑞樹は泣き出した。

「やだ、だやよ、ニシキギやめて。ごめんなさい。ごめんなさい」
瑞樹の言葉にはっとしたように、ニシキギが動作を止めた。そのまま瑞樹を強く抱きしめる。

「おまえのお陰で、俺、犯罪者になりそうだ。そう言えばカナメは？まだいるんだろうな？」

ニシキギは弱弱しく問いかける。瑞樹は首を横に振った。

「カナメは、演技を始めた頃になくなっちゃった。ニシキギを犯罪者にしないようにって言い残して……」

何のことだろう、二人して犯罪者、犯罪者って……。

瑞樹は呆然としていた。惑星ハルは地球とは違うのだと改めて実

感させられる。惑星ハルでのハル連邦でも、地球のハル共和国でも、変わらないシステムというものは実は多々存在する。その内の婚姻に関する法律。

ハル共和国では、婚姻関係にない男女の性交渉は違法とされるのだ。これは、狭い地下都市で人口管理をする必要があった為と、エクソダス計画の為に優秀な遺伝子を残そうと画策したハル政府の思惑によって制定されたものだった。そして、その法律はそのままハル共和国にも引き継がれていた。そんな法律があったら、日本……いや、地球上の多くの国で、犯罪者続出になるんじゃないだろうか。瑞樹は言葉を失った。

言葉を失ったのはニシキギも同様らしく、そんな無法な状態で、人口管理や遺伝子管理はどうしているのかと啞然とする。

「そんなの誰も管理してないよー。か、管理なんてされたくないし」

「なんて無秩序な世界なんだ……おい、ディモルフオセカの記憶にその法律に関する記憶はないのか？」

「自分の記憶だって曖昧な所があるのに、そんなの分かんないよお間に横たわるふかい溝の存在に、ため息をつく二人だった。

『宇宙人め』

心の中で舌打ちしながら、お互いをこう呼んでいたことは二人とも知らない。

こうして、結局、霊薬ソーマの賞味期限も消費期限も品質保持期限も分からないまま、霊薬ソーマ騒動は幕を閉じたのだった。

おまけ

しん、と静まった診察室。床に落ちた小さな白い滴の中から、ぬっと黄緑色の丸っこいものが姿を現した。黄緑色の丸は、少しオド

オドした様子で辺りを見渡し、誰もいないことが分かると、ゴロンと転がり、隣に零れていた滴をペロペロと舐めとった。更にゴロンと転がり、その隣の滴も舐めとると、プルプル体を震わせた。やがて、ピコン、ピコンと二つの足が出てきて、ぴよんぴよんと飛び跳ね始め、開いた窓から逃げて言った。ソレがどこへ行ったのか、誰も知らない。

番外編 ソーマ幻想(2) (後書き)

読んでくださってありがとうございます。ハル連邦のシステムを軽く触れておこうかな～と思って書いてみた小品です。(やめておけば良かったかもしれない……汗) 何が幻想だったのか……それは作者さえ知らない。

(限りなく) 意味不明な番外編、(たぶん) まだ続きます。 c o
m i n g s o o n ^ ^ ;

番外編 ハルの魔術師（1）（前書き）

苦勞して書いた割には、あまり良い出来ではない気が自分ではします（泣）。惑星ハルの荒んだ状況と法律のもつ二面性を描こうと思っただけなのですが（汗）
二話完結の小品です。

番外編 ハルの魔術師（1）

誰かが入ってくる気配がした。真っ暗やみの部屋の中。ネモフィラは身を固くして、暗闇の隅っこで身を固くする。小さなランプの明かりがネモフィラの顔を照らす。

『さあ、おいで。仕事だ』

底冷えのする声だとは度聞いても思う。ネモフィラは唇をわなわなと震わせ、首を横に振る。男は無言でネモフィラの二の腕を掴むと引きずるように部屋から連れ出した。

『いや、もういやよ！ 帰りたい。アール・ダーに帰してえ！』

ネモフィラの悲鳴にも似た叫びに耳を貸すものなんて誰もいない。なぜなら、ここは惑星ハルの奈落の底の底なのだから……

汗びっしょりになってネモフィラは目を覚ました。辺りは柔らかな明かりで満たされている。肩で息をしながらネモフィラは周りを見回した。ここは……どこ？ ああ、ここはナンディーだ。神聖なるナンディー（雄牛）の背に乗っているのだとネモフィラはほっと息をつく、と同時に湧きあがってくる涙。もう何もかも嫌だ……こんな自分なんていない。イラナイ。

「センナ、ネモフィラの様子はどうだい？」

ブラキカムの問いかけに、看護アンドロイドのセンナが首を横に振った。

「成人女性に必要なカロリーの半分も摂取できていません。カロリー補充済みです。また、気分の浮沈が激しく、不安定な状態が続いています」

やっと患者が途切れた昼下がり、医療センターの診察室でブラキカムは大きなため息をついた。瑞樹とネモフィラを会わせるべきではなかったのかもしれない。最近ではそう思う。瑞樹とネモフィラ

が何を話したのかは知らないが、それ以降ネモフィラは泣いてばかりだ。初めは、それが良い傾向だと思っていたのだ。心の中にわだかまっている悲しみをすべて吐き出してしまえば、少しずつ回復するのだろうとそう思っていた。それまでのネモフィラは人形のように反応が薄く、ぼんやりした状態が続いていたから。

ネモフィラを医療設備が整ったエリアHに戻した方がいいのかもしれない。仕事を終えたブラキカムは居住区へと向かいながら考える。ネモフィラを少し落ち着かせたいと思って、居住区の一室で治療を行っていた。医療センターにいれば、被害者であるニシキギと不用意に顔を合わせる可能性もある。彼女が再び動揺することできるだけ回避したかった。

来訪を告げるベルを鳴らすと、看護アンドロイドのセンナが現れた。

「さつき目を覚ましたところです」

センナの言葉に頷くと、ブラキカムは室内に入った。

中ドアを細く開けて、手にしていた鳥のオモチャの顔だけをドアの中に突っ込んだ。丸い顔をした地球の鳥で、瑞樹の国ではフクロウと言うらしい。幸運を呼ぶ鳥なのだから。

「こんにちは、僕の名前はオウル。今日はご機嫌いかがかな？」

声色を変えて中の少女に話しかける。中で小さく吹きだす声だったので、ドアをぐっと開けて入った。

「具合はどうだい？」

すっかりやつれて、瞼を腫らしている少女を見下ろす。もう少し肉付きを良くして、微笑みでもすれば、どんな男だって彼女にメロメロになるだろうと思う。しかし同時に痛ましくも感じて、ブラキカムは小さく溜息をついた。なぜなら、その美貌は彼女にマイナスの効果しかもたらさなかったからだ。あの荒んだ惑星の地下都市では、仕方のないことだったのかもしれないが……

「ドクター、私、いつまでここにいないければなりませんか？私をも

う治っています。治すところもないのに、どうしていつまでもここに
いるんでしょう？」

素人が見ても、治療が必要だろう思う様子の少女は、せっぱ詰ま
った口調で言った。

「ここを出て、何かしたいことでもあるのかい？」

彼女を刺激しないように穏やかに問いかける。

「私、働きたいんです」

「何をして働きたい？」

「もう一度、医療スタッフとして働かせてはくれないんですか？」

ネモフィラの青い瞳が潤んでいる。

「……難しいだろうな」

ブラキカムは眉間にしわを寄せる。ネモフィラは心を病んでいる。
医療器具を凶器として、つまり他者を傷つける道具として振り上げ
てしまった彼女が、再び医療従事者として復職するところは極めて難
しいことだった。ブラキカムの言葉に、ネモフィラの大きな瞳から
大粒の涙が流れ落ちた。

「では、エリアEで……草取りでも、水やりでも何でもします」

小さな肩を震わせて、小さな声でネモフィラは言った。しかし、
ここナンディーではエリアEの維持管理はファームの民が一手に行
っている。森の民である彼女は歓迎されないだろう。しかも、更に
彼女の場合は問題があった。

「ネモフィラ、君は地球に戻るのが一番だと俺は思うよ。あそこの
エリアEなら森の民が管理している第二エリアEがある。このエ
リアEを管理しているのはファームの民だ。君も分かっていると思
うけど……」

ネモフィラが地球に戻りたがらないことを知っていて、これを提
案するのは本意ではなかったが、事情が事情だけに仕方がない。

「最近では、森の民とファームの民の融和が進んでいるって聞きま
したよ？ナンディーのエリアEでも森の民の数人が働き始めたって、
ニュースで言ってたのを聞きました」

ニユースか……ブラキカムは溜息をつく。

「ネモフィラ、君がそこまで言うのなら、これは話しておかなければならないと思う。君も知っての通りファームの民というのは元々頑固な種族でね。身内の結束が固い。だから一旦、心を許した者にはとことん信を寄せる。人種隔離政策撤廃のお陰で、だいぶ排他的なところは治ってきたが、それでも元々あった性質というものは根強いものだ」

「……私では受け入れられないと……そう言うことですか？」

ネモフィラの切羽詰まった様子を見れば、これ以上説明することが良いことなのかどうかブラキカムにも判断がつかない。それでもいずれ彼女の知るところとなるのなら、今知らせても先で誰かから聞いても同じことだろうとブラキカムは判断した。

「ネモフィラ、君は……実に厄介な人を傷つけようとしたんだと言うことに、いずれ気づく時が来るだろう。だから今、少し説明をしておくよ」

「……厄介な人？」

ネモフィラは怪訝そうに言った。

「……瑞樹のことだ」

「瑞樹なら、もう許してくれて……友達になったんですよ？それがどうして……」

ネモフィラはさっぱり分からないという様子で言った。

「そうだ。君たちは友達になった。瑞樹からもそう聞いているよ。これからずっと良い友達でいてほしいと俺も思っている」

「なら、どうして？」

ブラキカムは、ベッドサイドの椅子に腰を下ろすと、ネモフィラを見つめた。

「特にここナンディーのエリアEではね、ファームの民の瑞樹への信頼は絶大なんだ。惑星ハルの守り神が彼女に宿っていると本気で言うファームの民もいるほどだ。馬鹿げた話だよ。俺は、単に彼女が森の民の力を持っている珍しい地球人だと思っているんだけどね。」

それで、彼女を傷つけようとした君のことを快く思わないファームの民が、このエリアEにはたくさんいるんだ」

「でも、瑞樹と私は……」

「もちろん、俺は君たちが仲良くなったことを知ってるし、瑞樹もファームの民には、いちいち説明をしているようなんだが、彼らは彼女の言葉を心からは信用していない。もし、瑞樹が嫌なことを嫌だとはっきり言うタイプの子ならば、もう少し彼女の言葉は信用されるのかもしれないんだけど、あの通り自分よりも人のことを優先するタイプの子だから、心にもないことを言ってる、もしくは言わなきゃいけないと思い込んでると勘違いされてしまうようですね……瑞樹もなあ、もう少ししっかりしてくれればいいんだけど……」

ブラキカムの言葉にネモフィラは項垂れた。

「では、私の居場所は、ここナンディーにはどこもないってことなんですけどね？」

「君の居場所はここだろ？ きちんと心と体を治して、次のことは次に進んでから考えることだよ。きちんと治せば職も見つかるだろうし、君のことを大切に思ってくれるやつだって現れるさ。君は若くて綺麗なんだから……」

黙り込んで俯いてしまったネモフィラを見つめて、ブラキカムは小さく微笑んで見せる。

「……ドクターは、私のことを何も知らないからそんなことが言えるんです。私がハルで何をしてきたか知ったら、誰も私を大切だなんて思ってはくれないわ」

ネモフィラはブラキカムから目をそらして小さく言った。

「……」

「私は……あの惑星ハルの地下都市で……それこそ数え切れないほどの男たちに抱かれたんです……あの暗い地下都市で……」

ネモフィラの全身が痙攣するように震え始めた。

「ネモフィラ、いいから、その話は……」

「私は……私は汚れてるのっ、誰からも愛される資格なんてない……」

…」

ネモフィラは両手で顔を覆って号泣した。

「ネモフィラ……君は……何故そんな目に遭わされたのかということとは分かっている？」

ネモフィラが少し落ち着いてきたのを見計らって、ブラキカムは重い口を開いた。

「何故かですって？それが地下都市で私が唯一できる仕事だったからよ。ヌンがそう言ったわ。私にできることはそれくらいだって……地下都市で私が生きていくためには、そうするしかないって……」
ネモフィラの瞳から大粒の涙が零れ落ちる。ネモフィラの言葉にブラキカムは小さく溜息をついた。

「やっぱり分かかってないな……君は、ヌンに利用されたんだよ」

「利用……された……」

ネモフィラは瞠目する。

「ヌンが欲しかったのは、ハル連邦政府に反抗する反逆者集団だった。惑星ハルで、もしくは新天地で、自分が一国を支配したいとも思っていたのかもしれない。だから自分の言葉に従うもの、もしくは従わざるを得ないものが必要だった。その人集めの為に君は利用されたんだ。自分の思い通りに動かせる人間を手っ取り早く作るにはどうしたらいいと思う？」

「自分の思い通りに……動く人間？」

「簡単だ。相手の弱みを握ればいい。ドロップアウトした連中の弱みを握ることなんて、ヌンにとっては朝飯前だっただろうさ。しかし、ヌンは君を最低の形で利用した。君は、ハル連邦で、ああ、ハル共和国でもこの法律は変わってないな、婚姻関係にない男女の性交渉は違法とされることは知っている？ああ、当然、一部の生業として政府に認められていた人たちは除くけどね」

「知ってるわ。でも、良くないことだけど子供ができてしまえば結婚すればいいんだって……聞いてたわ」

ネモフィラは俯きながら小声で言った。

「そこが森の民と一般人の違うところだよ。一般人がそんな事態に陥れば、即座に法律に則って厳罰が下されていることだろう。ヌンはその法律を利用したんだ。わざと法に触れさせて、弱みを握る。しかも同じ穴のむじなにしてしまえば、互いの結束力も強まる。ヌンの考えそんな薄汚いやり方だ」

「え？」

ネモフィラの視線が宙をさまよう。

「力を必要とされ、増えることを望まれていた森の民と、地下都市の狭い居住区を奪いあいながら暮らしていた一般人とでは、この法律の運用が違っていた。森の民だった君は知らなかったんだろうと思っていたよ」

「ドクターは……知っていたんですね。私が何をしていたか……」

ネモフィラは涙を流しながら静かに言った。

「……俺は医者だから……」

ブラキカムは小さくため息をついた。

番外編 ハルの魔術師（1）（後書き）

読んでくださってありがとうございます
招夏

番外編 ハルの魔術師（2）

ブラキカムはバーのカウンターでメモシンをあおっていた。

「ブラキカム、珍しいな君がこんなところで飲んでるなんて……」

カナメが声を掛けてきた。ブラキカムはカナメをちらっと見ただけで、何も言わずにグラスに視線を落とす。

「どうした？何を拗ねてるんだ？」

カナメはメモシンソーダを頼むと、ブラキカムの隣に座った。

「拗ねてなんかいいよ。おまえは元気そうだな」

「……」

カナメは面白そうにブラキカムを見て肩をすくめると、出されたメモシンソーダを無言であおった。しかし沈黙に耐えられないように口を割ったのはブラキカムの方だった。

「……人は……同じような行動をとっても、同じような結果になるとは限らないもんだな……」

ブラキカムはメモシンをぐつとあおる。

「当たり前だろ？同じ人間が同じ行動をしたって、状況が変われば結果も変わる、別人なら違って当然じゃないか」

「その明暗を分けるのは何だ？神か？」

ブラキカムが視線を上げてカナメを睨みつける。

「どうしたんだ？なんかあったのか？おまえが神を持ち出すときは、決まって何かあった時だよな」

カナメがクスリと笑う。

「……」

ブラキカムは不貞腐れたようにつまみの木の実を口に放り込んだ。

「……運じゃないか？」

カナメの言葉に反応するように、カラリとブラキカムのグラスの氷が音をたてた。

「……ディモルフオセカは運が良くて、ネモフィラは運が悪かった……そういうことか……」

ディモルフオセカの名前が出たことで、カナメの顔から笑みが引いた。

「ネモフィラがどうかしたのか？」

「……詳しくは言えない。ただ、地下都市に不法侵入したこの二人が、どうしてここまで明暗を分けてしまったのか、それが解せなかっただけだ。俺たちはエクソダスを果たすために生きてきた。エクソダスにとって良いことだけ、それだけを善として人々を社会を法で律してきた。しかし一方で、弱いものを犠牲にし、細かな法に適合しないものを排除し、利用できるものは躊躇なく踏み台にした……法とはなんだ？何の為にある？」

「……法は法だろ。それ以上でもそれ以下でもない。ただ、そこにあって、人を、社会を律するものだ。社会が目指すものの為に人を律するものなんだろう。ところが法は人が作るものだ。だから当然無謬^{むみう}ではない。であるにも関わらず、正規の手順以外では決して人は法に手を出してはならない。それが原則だ。法を曲げると言うことは、生き物の骨を砕くようなもので、体形を、つまりこの場合は体制を維持できなくなる……とまあこんな説明でいい？」

「その法をあっさり破って森の民を匿^{かく}ってたおまえに、法について講義をされるとは思わなかったぜ」

ブラキカムはぶつくさ呟いた。

「実は誰かが俺を訴えてくれるのを待っているんだ。そうすれば永久分解処理をされるか、金星あたりで長期労働の刑にされるかじゃないかと思ってるんだが……前者なら今より楽になれるかもしれないとたまに思うんだよ」

カナメが肩をすくめる。

「おまえを訴えようとしてるやつがいたら、俺がぶん殴って止めるさ。おまえはハルの為に永久にこき使われる刑に既に服しているんだから、余計なことをするなってな。おまえ、簡単に楽にしてもら

えると思うなよ。また悪い癖が始まったんじゃないか？」

「たまにって言っただろ？しかし、似たようなことを昔、イブキにも言われたな」

カナメは眉間にしわを寄せて呟いた。

「なあ、俺思うんだけど、今あるシステムは一旦ぶっ壊さなきゃならない時期に来てるんじゃないかな」

ブラキカムのぼやきにカナメはニヤリと笑った。

「ぶっ壊すのは得意分野だ。なんせ、僕は破壊神らしいからね」

カナメは失笑する。

「おお、いつそのこと、ゼーんぶ破壊しちまってくれ、一旦まっ更にしちまえば今度こそ良い国が造れるだろうよ」

カナメはクスクス笑って、破壊に乾杯とグラスを持ち上げた。

「……なあ、ブラキカム、ネモフィラがどんな目に遭ったのか僕は知らない。だからこれは見当外れの意見かもしれないんだけど聞いてくれ。あの二人、ネモフィラとディモルフオセカはアール・ダー村を出た時点で法の岸から落ちたんだ。後は無法地帯の大きな流れに身をゆだねるしかなかった。どこにどのような状態で運ばれるかは運任せだ。しかし流れ着いた後どのように生きるのか、それを決めるのは自分自身だ。少なくともネモフィラはまだ生きてる。岸に着いたばかりだろう？結果を出すのはこれからじゃないのか？しかも彼女は一人じゃない。力を貸そうと心を砕いている君がいる。何が幸せなのか、最終的に決めるのは自分自身だ。違うか？」

カナメは話し終わると、MEMシンソーダーを飲み干してお代りを注文した。

「そうか、そうだな。彼女は岸にたどり着いたばかりなんだよな」
ブラキカムが納得したように小さく頷いた。

「ネモフィラ、明日、俺と一緒にエリアEに行ってみようか？」
相変わらず塞ぎこんでいる様子のネモフィラにブラキカムは声をかけた。

「え？行ってもいいんですか？」

ネモフィラが驚いた様子で問い返す。

「瑞樹にも伝えてあるから、連絡すれば来てくれることになってる。やかましい保護者のニシキギも一緒なはずだ。もし、君が彼らに会う勇気があるなら挑戦してみようか」

ブラキカムの提案に、ネモフィラの不安げな瞳が宙をさまよう。

「大丈夫俺がついてる。君は知らないかもしれないけど、俺はハル一番の名医なんだぜ？」

ネモフィラの背中を押すように付け加えて、ブラキカムは悪戯っぽく笑った。さまよっていたネモフィラの視線が一瞬見開かれ、ブラキカムを見つめてクスリとほほ笑んだ。ブラキカムはその瞳に力強く頷く。

少し荒療治過ぎるのかもしれない。でも岸に着いたのなら、次にすることは一つだ。自分の足で立って歩くこと。

言葉の魔術師、医者の上に俺が目指すのはこれかな。ネモフィラのほほ笑みを眩しげに見つめながら、ブラキカムは心の中で呟いた。

番外編 ハルの魔術師（2）（後書き）

読んでくださってありがとうございます
招夏

番外編 ハルの魔術師（3）（前書き）

割り込み投稿をしました。

番外編 ハルの魔術師（3）

「なんだ、またお前か……」

セルシスは、瑞樹を一目見るなり顔を顰めた。

「……」

瑞樹は少しびくりとした様子で、それでも小さく、ごく小さく、こわばった笑みを浮かべる。

「昨日も来たのに、また何をしに来たんだ？」

セルシスは、薄青い瞳に、嘲りの色を湛えて薄ら笑う。

「本当のことを……話して欲しいんです。ドクターヌンが何をしようとしていたのか、どうしてこんな事件を起こすことになったのか……。公安の人が言っていました。このまま事件に関して黙秘を続けて、何の情報も提供しないのなら……」

瑞樹の言葉を、セルシスがさえぎった。

「金星で、一生苦役を受けるってやつか？それとも分解処理か？それとも発狂するまで大脳コンタクトで情報を搾りとるってやつか？どれにするって言ってた？」

「どの罰を受けてもおかしくない状況だって言っていました」

瑞樹は悲壮な顔で、口を引き結ぶ。

「それで？」

「そんな目に遭いたいんですか？」

「そんな目に遭いたいやつがいたら、相当なマゾだな。重症だ。サドの俺には、ぴったりな人材だが……、もしかして、おまえ、そうなのか？」

セルシスは、身を乗り出して問いかけてから、せせら笑った。

「どうして？どうして、自分を救おうとしないんですか？」

「やっぱりだ、おまえ重症のマゾだよ。あんなに痛めつけられておきながら、俺にここから出てきてほしいと思うってことは、かなり

重症だぞ。カナメはこのことを知ってるのか？弟もびっくりだろうなあ。あ、それに、あの、おまえが二股かけてるやつ、何て言ったっけ……たしか、ニシキギだ。ニシキギもびっくりだろうな」

セルシスは意地悪げに嗤った。

「私は二股なんてかけていませんっ」

「無意識でやるなんて、大した女だなあ。もしかして俺のことも誘ってんの？早く出てきて、もう一度、あの時みたいに痛めつけてくださいってか？もう処置なしだな」

セルシスは大笑いする。

「……っ」

瑞樹は、堪え切れずに口を押えようと、面会室から走り出た。怖くて震えが止まらない。恐怖で涙が零れ落ちる。

「瑞樹！」

外の廊下にニシキギが立っていた。

「……ニシキギ……」

ニシキギにしがみついたまま、がくがくと震える。ニシキギは何も言わずに瑞樹を抱きしめた。

「もうやめろ。見てられない」

やめたい……瑞樹だって、そう思う。でも、でも……もう一人の自分が、心の中で反論する。

セルシスは、もう大脳コンタクトを操れる状態にない。そうと分かっているのに、疎んでしまう、怖気てしまう、震えてしまう。言いたいことの半分も言葉にできない。伝わらない。

「……ニシキギ、どうしてここに？」

ここに来ることは、誰にも告げていない。ここ数日は、カナメとも意識が干渉しないように、距離をとっていた。

「ここ数日、おまえがセルシスに面会に来ていることが、噂になってる。今日来たら、俺に連絡するようにと看守に頼んでおいた」

そっか、噂……人の口に戸は立てられれないと言うことだ。ということは、当然カナメの耳にも届いているに違いない。

「あんなやつを説得して、どうしたいんだ？」

罪がないなんて言うつもりはない。それなりの罰を受けるべきだと考えているし、その罰を厳粛に受け止めて、心を変えてほしいと思っている。そう、瑞樹は、セルシスに更生してほしいのだ。傷つけた人たちに、心から謝罪する気になってほしいのだ。

セルシスは、誰かを殺したわけじゃない。心を傷つけて、利用しようとした。ある意味、救いようがなく悪質とも言えるのだけど、彼の生い立ちを鑑みるに、更生の余地がある気がしてならなかった。治療を受け、罰を受け、更生してほしいと、瑞樹は考えていたのだ。「……永久分解とか、発狂するまで精神攻撃して情報を取るとか、永久過酷労働刑とか、そんな敗者復活が望めない刑じゃない刑を受けて、更生して欲しいんだよ」

カナメの肉親として、という言葉は胸の奥にしまう。この言葉は、ハル内では、ほぼ禁句になっていた。

「あんな根性の腐ったやつが、更生なんてできないさ」

「……そうなのかな……」

瑞樹はため息をつく。

「ほら、もう行くぞ。もうお前は、面会禁止だ。看守にもそう伝えておいた」

ニシキギは瑞樹の背中に腕を回すと、強引にその場から歩き出した。

「そんな！」

そんなニシキギを瑞樹は、哀しげに見上げる。

「カナメからも、そうしてくれと頼まれた」

「……」

灰色のゾーンは、嚴重管理ゾーンの証だ。このエリアには、法を犯した者、法を犯したと疑われて取り調べを受けている者たちが収

容、管理されている。

カナメは、看守に軽く肯くと、一番奥の独房へと歩を進めた。鉄格子越しに会う兄。薄青い瞳が、鋭くカナメを一瞥し、すぐに薄ら笑いの表情に変わった。

「これは、これは、議長候補で、最高技術責任者で、俺の最も愛すべき弟じゃあないか？」

「……セルシス・G・フォティニア、おまえの処分が決定した。永久労働刑は免れたが、基本的には、似たようなものだ。無期永久労働刑、つまり、おまえの今後の態度次第で、永久にも半永久にも長期にもなる。三日後に、金星へ向けて船が出る。それに乗ることになるだろう」

カナメは表情を変えずに、淡々としゃべった。

「……なあ、俺の名前からGの文字を取り去りたいんだが、三日の間にできるかな？」

「……不可能だろう。その名前のまま刑を受け、万が一、復帰することができたら手続きをするがいい。その場合は三日あれば変更可能だ」

「これも刑のうちってか？」

そのまま無言で立ち去ろうとするカナメに、セルシスが声をかけた。

「カナメ、おまえは女運がないやつだよ。あの女に伝えておけよ。もうここに来て俺は会わないからってな」

「……瑞樹のことを言っているのなら、心配には及ばない。彼女はもうここには来ないだろう」

カナメは、醒めた瞳でセルシスを見下ろした。

「やけにあの女と親しそうだな。でも知ってるか？あいつが好きなのはおまえだけじゃないぜ？」

セルシスはニヤニヤしながら言う。

「……言いたいことはそれだけか？」

「おまえも苦労するよなあ、あんなマゾで浮気な淫乱女、どこがい

いんだか……」

ガシャンっ

突然、鉄格子を殴りつける音が鳴り響く。

「何も知らない癖に、瑞樹のことをそんな風に言うな。おまえなんかには、何も分からない。瑞樹のことも、セダム・グラブラのことも、シオン・グラブラのことも……」

カナメの怒声が面会室に響きわたった。

「そうだとも！俺は何も知らなかったよ。何も知らないまま、ただ現実と向き合わされたんだ！あの地獄のようだった現実とな！おまえなんて、この世に存在さえしてなかった癖に！」

セルシスも立ちあがって、怒鳴り返す。

——徐々に壊れていく母親と暮らす経験など、誰がしたいものか。

「……俺は、一人ぼっちだった。周りにたくさん人はいるのに、俺は一人だけのけ者にされて、できることは耐えること、もしくは逃げることで、それだけだった」

子供時代の無力さは、たぶん誰もが感じるものなのだろう。カナメだって例外ではない。その絶望的な、圧倒的な、無力感。

「……」

カナメの紅い瞳とセルシスの青い瞳がぶつかり合う。

「……兄弟がいればいいと思ってた。せめて孤独を分け合える兄弟がいればいいと思ってた。どうせ、俺はその程度の甘ちゃんだったんだ。だけど、もう二度とおまえに会うこともないだろうさ。まあ、せいぜいハルの為に働けよ、おまえもな」

セルシスは視線を外して、気まづげに吐き捨てるようにそう言った。独房の奥に立ちさろうとしているセルシスを、カナメが呼びとめる。

「……あんたは犯罪者で、僕の大事なハルの人々や瑞樹を苦しめた悪人だ。もし、瑞樹が、あんたを更生させたいと本気で願ってくれなければ、僕は、今日、この場に来てはいなかっただろう」

カナメは、一つ大きく深呼吸をしてから続けた。

「……僕は、ずっと、ここへ来るべきではないと、来てはいけな
と思っていた。あんたは犯罪者だ、大事な人たちを傷つけた悪い奴
だ。話し合う余地なんてない……そう何度も何度も自分に言い聞か
せた。……そうしないと、会いたいと思う気持ちを押えられなかつ
たからだ。僕には、兄がいた、一人ぼっちじゃなかった、そう思う
だけで……気分が楽になる自分が許せなかった……」

哀しげな瞳が、宙でぶつかり合う。

「……、甘ちゃん加減が似ているな……」

セルシスが弱く笑った。

「あんたは、金星に行つて、もう僕に会うこともないと思っている
ようだけど、僕はフローティングシティの最高技術責任者として、
しょっちゅう行くから、せいぜいこき使つてやるよ。楽しみにして
ろよ」

カナメも小さく笑った。

瑞樹が、とぼとぼと当てもなくナンディーの廊下を歩いていると、
前方からカナメが歩いて来るのが見えた。推測するに、瑞樹とカナ
メの意識レベルには、かなりな差があるようだ。しかし、今さら逃
げだす気力もなく、瑞樹は立ち止まったまま、ぼんやりとカナメを
見つめる。

カナメは、小さく笑んで、手を高く掲げた。ハイタッチの合図だ。
瑞樹もつられたように手を上げる。カナメは、通りすがりに、軽く
瑞樹の手に触れると、そのまま何事もなかったように歩き去った。

その瞬間、瑞樹の心の中にカナメの意識が滑り込む。その圧倒的
な充足感に、瑞樹は、息を飲んだ。ぼうっとしたまま目を見開いて
立ち止まる。瑞樹の脳裏に次の言葉が浮かんで、心の表面に心地良
いさざ波をたてた。

——救いは一歩踏み出すことだ。更にもう一歩。そして、たえず
その同じ一歩を繰り返すことだ。（サン・テクジュペリの言葉より）
瑞樹は、カナメの背中を追いかけて駆けだした。

番外編 星ぶどう狩りの夕べ（1）（前書き）

久々の番外編です。たぶんこれで番外編も終わり…でしょう。たぶん…。実は、もう一話書いておきたいことがあるのですが、こちらは超短なので、番外編のどれかに、こっそり、付け足しているかも知れません（^^）。「星ぶどう狩りの夕べ」四話ほどの作品です。よろしかったら少しばかりお付き合いくださいませ！

番外編 星ぶどう狩りの夕べ(1)

『これはゆゆしき問題ですぞ、議長!』

かなり年配に見える厚生省大臣が、顔を赤くしてまくしたてた。

『早急に、物品に関する所有制限法の復活をお願いしたいっ』

ぜいぜいと肩で息をしている。厚生省大臣がこんなに血圧の高い様子では、国民が不安になるかもしれないと、カナメは小さくため息をついた。

『物品に関する所有制限法の復活は認めない。その代わりにいくつか別のルールを定めよう。物品の保管の為だけのスペースの貸与に関しては、従来通り、地下都市では認めない。そのような事例が見つかった場合は、見つけ次第ペナルティとして保管している余剰物品の没収を行えるようにし、没収した余剰物品は、政府の判断で分解処理することを可能にしよう。しかし本人への罰則はなしだ、そして……』

会議は思ったよりも長引いた。ハル共和国の議会は、夕刻から始まる。議会が行われる場所はメインコンピュータの最深部。関係者以外は完全にシャットアウトされ、侵入禁止となるが、議会の内容は逐一全国民に中継される。

大脳コンタクトを使用しての出席となる為、基本的には何処にいても構わない。装置があるところであれば、地球の地下都市ハル共和国にいても、火星のアグニシティにいても、もちろんナンディーにいても参加可能だ。ただし場所によっては、会話に多少のタイムラグが発生することは否めない。

システム上、議会へは、自分のコンパートメントからも参加できるわけだが、大抵の人は気分を切り替える為に、職場のデスクを使うことが多い。それに自室から参加可能とはいえ、さすがに寝室で横になりながら……と言う訳にはいかないようだ。リラックスしす

ぎていると顰蹙を買うことになるからだ。

カナメは、職場があるエリアGのデスクの椅子に寄りかかりながら、背伸びをする。正直疲れた。

「議長、お疲れさまでした。お茶をどうぞ」

ノックの音とともに、イベリスが入ってきた。カナメは顔をしかめる。

「イベリス、議会以外で議長と呼ぶのはやめてくれないか？息がつまりそうになる」

カナメの弱り切った顔に、イベリスは肩をすくめて笑った。

宇宙船ナンディーが地球に着いてから、ハルでは色々なルールが変わった。否、変えてきた。ハル連邦からハル共和国へ、人種隔離政策の撤廃、メインコンピューター主導から議会主導へ切り替える為の様々な権限移譲、エクソダスの為だけに敷かれた細々とした規制法の緩和……。

惑星ハルでの窮屈な暮らしを一新すべく、『物品に関する所有制法』をいち早く撤廃することを提案したのはカナメだった。この法律は、惑星ハルの狭い地下都市で、お互いに軋轢なく暮らす為に、個人が所有できる物品量を制限する法律で、かなり厳しい罰則が設けられていた。撤廃は全会一致で承認され、国民もこの政策を歓迎した。

ところが、それを撤廃した途端、地下都市に個人所有の物品があふれ出した。更には、物品の保管の為に、政府は、もっとゆとりのあるスペースを全国民に支給すべきだ、などと抗議集会まで行われるようになり、結果として、居住区の管理を管轄していた厚生省大臣の血圧を上げる事態にまで発展したと言わなければならない。

個人のコンパートメントは、ハル政府が管理・貸与している。だから職場の異動や居住区管理上の都合で、住居変更させられることは、よくあることなのだ。運べるだけの荷物にしておいた方がいいことくらい、ちょっと考えれば分かりそうなものを……カナメはイベリスが淹れてくれたお茶をすすりながら、大きな溜息をついた。

「色々な物品を所有できるようになって、みんな喜んでるんですよ」

イベリスがとりなすように言った。イベリスの人懐っこそうな茶色の瞳が、細められるのを見ると少し心が和らぐ。カナメは小さくため息をついた。

「しかし、何事にも限度と言うものがあるだろう？」

カナメは眉を寄せる。

物がドアの外にまであふれ出している、という通報があって行ってみると、こいつは一体どこで暮らしているんだ？と疑問に思うほどの物品が、コンパートメントの中に積み上げられている。処分するように指導しても、どれも必要なものだからと処分することに抵抗する。物品に関する所有制限はないはずだと居直る。個人所有物となると固有財産となる為、いくら政府と言えど勝手に処分することができない。『物品に関する所有制限法』がなくなったので、政府はお手上げ状態となった。

「どうして、そう考えなしに物を所有しようと思うんだ？ハル国民は子どもか？」

カナメは、情けない顔をしてイベリスを見上げた。

「子どもというものは、ルールを知りません、もしくは知るだけの能力が未発達なんです。だから子どもらしい行動をとるのですよ。色々なルールが変更されて、ハル共和国国民は、子どもにならざるを得ないような環境におかれているのです。ルールがあろうとなかろうと自分の信念のままに生きて、それでも問題なく過ごせてくれたカナメさんとは違うんですよ」

イベリスはにっこり笑った。

「……君に、そんな皮肉を言われるようになるとは思ってなかったな」

カナメは、恨めしげにイベリスを見上げた。

「いっ、いえ、僕はそんな……皮肉だなんて……」

イベリスは慌てた。

「冗談だよ。意見はどんどん言ってくれ。色々な意見を聞かなければ、僕はもう一步も前に進めそうにないからね」

カナメは弱弱しく微笑んだ。

「あ、そうだ、ニシキギさんお待ちですよ。なんだか大事な話があるとかで……。でもカナメさんは、少し休憩が必要だからと言ったら、遅くなっても構わない、いつまでも待つと言っていました」

「ニシキギが？」

彼とは、さっき議会で会ったばかりだ。何か重大な事案でも持ち上がったんだろうか。カナメは表情を引き締めてニシキギに連絡をとった。

ニシキギのコンパートメントに呼び出されたので、居住区へ出向く。直接会って話さなければならぬ要件とは何だろうか。カナメは緊張した面持ちで、ニシキギのコンパートメントの呼び鈴を鳴らした。

ドアが開いた途端に、南国ムード漂う緩やかな音楽が、耳ざわりでない程度の音量で流れてきた。部屋の隅には、地上で時々見かける植物の鉢植えが置いてあって、ふっくりとした白いつぼみを重そうにつけている。リビングのテーブルの上には、お茶の準備がしてある。甘い匂いがすると思ったら、お茶に添えてある焼き菓子の匂いらしい。

「議長殿、悪いな、わざわざ呼び出して」

ニシキギはティーポットを片手に持ったまま現れた。

「……だーから、僕のことを議長と呼ぶのは、議会議中だけにしてくれと何度も言ってるだろう？」

カナメはイライラして文句を言う。

「あー、悪かった悪かったよ。そう怒るなよ。まー、ソファにでも座ってくつろいでくれ」

ニシキギは、とってつけたような笑顔で、駄々っ子をあやすような口ぶりでカナメをなだめた。

「で？話って何だ？」

カナメは真剣な面持ちで問いかける。

「まー、その前にお茶でも……」

そう言いながら、ニシキギは、ぎこちない手つきでティーポットからお茶を注いだ。深く濃く紅いお茶が、ティーカップの中でたゆたう。

「このティーセットは？購入したのか？」

白いポットに優美なユリの花が描かれていた。

「ああ。どうだ？こういうのは好きか？」

ニシキギが心配そうに問いかける。

「……別に、好きでも嫌いでもないけど……」

カナメは怪訝そうに答えた。

「そうかー」

ニシキギのがっかりした様子にカナメは首を傾げる。

「じゃあ、これはどうだ？」

ニシキギは焼き菓子を取り上げてカナメにすすめる。

地球産の焼き菓子は、ハル共和国で大いに流行っているらしく、

特に女性や子供から熱烈に歓迎されているらしい。

「うん、これは結構いける」

焼き菓子は、バターがよく効いていて風味がよく、甘さもしつこくなく美味だ。議会で疲れているせいで、甘いものがいつもより美味しく感じられるだけなのかもしれないが……。ところが、お茶をすすって顔をしかめた。

「これは渋すぎないか？」

「なに？そうか、茶葉をどれくらい入れればいいか分からなかったからな」

ニシキギは本格的に茶葉まで購入したらしい。

最近では、ハル共和国でも地球産の輸入品を簡単に手に入れられるようになった。ハンサビーチとサンセットビーチの中間辺りに巨大なショッピングモールが建設されて、そこに入っている地球産の

輸入品の店が、大人気なのだそう。ハル製のものならば、モルオーブンから簡単に取り出せるし、比較的安価なのだが、「地球産の天然もの」という響きにハル国民は弱いらしく、多少高くても購買意欲を損なわれることがないしかった。

モルオーブンから取り出したものだって結構イケるとカナメは思うのだが、分解再生装置の開発者の一人である自分がそれを言う、ひがみっぽいととられそうなので、口には出さないことにしている。ティーポットの蓋を開けて見て、カナメは遠い目になった。中には、どこにお湯が入るのかと首を傾げるほど、ぎっしりと茶葉が詰まっている。

「こりゃ、入れ過ぎだろう？ 誰が見ても……」

カナメは顔を顰めて、手にしていたティーカップをテーブルに戻した。

「ややっ？ こんなに入れなかったんだが……膨らんだのか？」

ニシキギは茫然とする。

茶葉がお湯を吸って膨らむことなど、知る由もない宇宙人のニシキギである。

「で、話はなんだよ。さっさと話せよ。寝る前に明日の議会の資料を読んでおきたいんだから」

カナメは、ソファアにズリりと沈みこんで溜息をついた。

「この部屋の居心地を聞きたかったんだ」

ニシキギは、身を乗り出して、カナメの顔色をうかがう。

「は？」

カナメは、ソファアに沈みこんだまま啞然とニシキギを見上げた。

「来週、瑞樹が帰ってくるんだ」

ニシキギは照れ臭そうに顔をほころばせた。他所では、あまり見ることのできない珍しい表情だ。

「……それと僕となんの関係があるんだ？」

カナメは首を傾げる。カナメの問いに、ニシキギは一拍間をおいてから顔を顰めた。

「あんたが言ったんだろ？瑞樹の好きなものは自分も好きになるし、自分が嫌えば瑞樹も嫌いになるようだって！瑞樹が、ここを気に入るかどうか感想を聞かせてくれよ」

「……」

カナメは、呆然と心の中で問いかける。それは今、この議会で忙しい時期に、わざわざ呼びつけて訊かなきゃならないことなのか？そして心の中でうめいた。自分が余計なことを言ってしまったのかもしれない。わがハル国民は、子どもだと思っておいた方が、間違いはないようだ。

番外編 星ぶどう狩りの夕べ（2）

明日、瑞樹が日本から帰ってくる。『夏休み』とらやらに入って、既に一週間が経ってるはずなのだ。長い休みには、ハル共和国に会いに来る、それが瑞樹と交わした約束だった。それがもう一週間も過ぎていく。ニシキギは、不機嫌そうにコンパートメントを後にした。

瑞樹は今、タンダイと言う日本の学校に通っている。ハル共和国で起こっていた事件が解決して、瑞樹が日本に帰ったころには、受験シーズンがほぼ終了していて、今通っているタンダイくらいしか受験できなかったらしい。もう少し遅く帰しておけば、そんな学校などに行かず、すぐにハル共和国に連れて来れたものをとニシキギは後悔した。二年も日本で暮らさせておいたら、どんな悪い虫がつかか……考えただけでも眠れなくなる。護衛としてトウキを付けたいと申し出たのだが、ハル政府からは、事件は解決したのだから必要なしと却下され、瑞樹からは、そんなに自分が信じられないのかと怒られた。瑞樹が信じられないのではない。瑞樹の周りにいるであろう男たちが、信じられないのだ。

数ヶ月前、瑞樹を日本の実家まで送り届けた。瑞樹の両親はとても喜んでくれたし、感謝もされた。親子の感動の対面は、他人であるニシキギでさえ心温まるものだった。幼少時に家族と離れ離れになったニシキギには、特別な感慨があったのだ。その後、食事にも招待されて、和やかなムードは続いた。ニシキギが、両親の前で瑞樹に結婚を申し込むまでは……

「な、な、何を急に言い出すんだね！」

何故か瑞樹の父親が、一番動揺して顔を紅潮させた。父親にプロポーズしたわけではないのだが……ニシキギは首を傾げる。

そもそも惑星ハルでは、婚姻を政府が管理していたので、親が婚姻について干渉することがなかった。ニシキギにとって、瑞樹の父親の反応は想定外だったのだ。

「ニシキギ？どしたの？急に……」

瑞樹は少し面食らった様子で言った。

急にはない……とニシキギは思う。ここに来るまでの間ずっと結婚しようと言っていたではないか。しかも瑞樹だって、『分かった分かったそのうちにね』と言っていた。それがいつとは、明確にしていなかったが、全然急ではない。

「あらあ……」

瑞樹の母親だけが、嬉しそうな表情をした。瑞樹の母親の表情を見て、ニシキギはほっと胸をなでおろす。自分の日本語が通じていなかったわけではないらしい。

しかし、その後の日向家は大混乱で、結局、瑞樹が、両親と話し合いたいから返事は保留にしてほしいと言いだして、この話題は棚上げにされた。

日本では、未成年の婚姻には親の承諾が必要で、仮に成人していても、親が婚姻に口を挟むことはよくあることなのだ、とニシキギが知ったのはその後のことだった。大事に育てた娘を手放せないと、場合によっては父親に殴られるケースもあるらしい。全くもって理解不能だ。習慣の違いというものは、実に深淵だ。ニシキギは海溝ほどの深さのため息をつく。

議会の会期が終了した日の夕刻、ニシキギのコンパートメントのドアを激しく叩く音がした。議会中はどうしても睡眠不足になりがちだ、仮眠をとっていたニシキギは、むっとした表情でドアを開ける。

「よう！ニシキギ、あれ？もしかして寝てたか？」

マサキが爽やかな表情で立っていた。瑞樹の幼馴染のこの男は、

地球人であるにも関わらず、すっかりハル共和国の国民として馴染みきっていた。惑星ハルで、その顔を知らないものはいないと言われるイブキ・ピラミダリスにそっくりな容貌の彼は、最近では、自分が地球人だと説明すると、驚かれるまでになっているらしい。

「何の用だ」

ニシキギは白っぽい金色の前髪をかき上げながら、面倒くさそうに唸った。惑星ハルで、ニシキギはイブキ・ピラミダリスの下で働いていた。イブキのことを尊敬していたし、またニシキギの目標でもあった。だからこそイブキのライバルであり友人であったカナメ・グラブラに対して、必要以上に反発してしまう訳なのだが、マサキに関しては、更に複雑だった。当然彼はイブキではないのだから、尊敬する対象にはないのだが、この男、顔ばかりでなく性格もイブキにそっくりなのだ。人懐っこくて押しが強いところとか、無邪気な顔でとんでもないことを頼んでくるとか。しかし胡散臭い割には、さほど誰からも憎まれない、そんなところまでが似ていた。

「あれ？ニシキギの所が集合場所だって聞いたんだけど……」

「集合場所？何の集合だ？誰がそんなことを言った？」

「え？聞いてないの？何日か前に、電話で瑞樹から連絡があったんだけど……瑞樹は？居るんだろ？」

マサキはコンパートメントの中を覗いて瑞樹を探す。

そんなマサキに、おまえの幼馴染は、ただひといトラブルテイカー（トラブル拾い）なのかと文句が飛び出しそうになるのを、ニシキギはぐっと飲み込んだ。

すべて承知の上だったはずだ。ニシキギは小さくため息をつく。

「ここに瑞樹はいない」

ニシキギは仏頂面で答えた。

「え？そうなの？ありゃ？俺、来るの早かった？じゃあ少し待たせてもらうかあ」

マサキは、ニシキギの返事も待たずに、さっさと部屋の中へ入り込んで、ソファにどっかりと腰を下ろした。

「おいっ」

瑞樹は、昨日、ハル共和国に帰ってきた。

「ニシキギ！迎えに来てくれたの？」

空港のターミナルまで迎えに出ていたニシキギに、瑞樹が飼い主を見つけた子犬のように飛びついてきた。ニシキギは瑞樹を抱きしめ返す。久しぶりの瑞樹。こんなに甘やかな声だっただろうか、こんなに柔らかくてしなやかな髪だっただろうか……こんなに愛らしかっただろうか。再会できた、ただそれだけのことに、ひどく高揚している自分に驚く。

ところが、その愛らしい瑞樹の声が、次に紡ぎだしたのは、実に不愉快な内容だった。

「……カナメがいる。この近くにカナメがいるんでしょ？」

少し驚いたように、少し嬉しそうに、辺りを見回す瑞樹に、ニシキギは表情を曇らせた。

カナメ・グラブラは、実に忙しい男で、火星と宇宙船ナンディーと月と金星を行ったり来たりしているのだが、瑞樹がハル共和国に来る時期にターゲットを絞ったように、地球に戻ってきた。カナメと瑞樹は、過去の事件のせいで、互いの意識がつながってしまうというアクシデントに遭った。その後、互いの意識を遮蔽しあうことで、それぞれ独立した意識を保ってはいるが、近くにいれば、どうしても干渉しあってしまうらしい。近くに居るかどうか程度ならば、かなり離れていても感じ取れるのだという。

カナメに会わなければならないと瑞樹が言い張るので、議会終了後、瑞樹をカナメの部屋に連れて行ったのだった。

カナメの部屋に入る直前、瑞樹の体が強ばったのには気づいていた。久しぶりに会うので緊張しているのだと、その時は思ったのだ。相手は、あれでも一応ハルの議長だ。平たく言えば、ハル共和国を率いるトップなわけで、大抵の人間は緊張する。その類のことだと思っていた。

「……ニシキギ……」

頼りなげに見上げた瑞樹の瞳を見た時に、やめさせておけばよかったのだ。

部屋に入った瑞樹は、カナメに触れた途端あつという間に気を失った。カナメの手を握ったまま瑞樹が気を失ったので、崩れ落ちる寸前で、ニシキギが瑞樹を抱きとめた。

「ああ、今日会うのは、まずかったかもしれないな」

カナメは眉間にしわを寄せた。ついさっきまで議会の議長をしていたのだ。海千山千の議員たちとの丁丁発止のやりとりを終えた後で、カナメの疲労はピークに達していた。カナメにとっては、ひどい疲労感程度で済んでいる精神的肉体的消耗も、瑞樹にとっては耐え難いものだったに違いなかった。

「瑞樹、瑞樹大丈夫か？」

ニシキギが瑞樹の頬を軽く叩いても、体を揺さぶっても、青白い顔をして固く瞼を閉じたまま瑞樹は目を覚まさなかった。

「眠っているだけなんだ。心配はない。ただ……これは単なる直感なんだけど、手は繋いでおいた方が良い気がする」

とカナメが言うので、そのまましばらく様子を見た。しかし、瑞樹が目を覚ます気配はなかった。その後、瑞樹が目覚めたら部屋へ連れて行くとカナメが言うので、ニシキギは一人自室に戻ったが、その日、瑞樹がニシキギの部屋に来ることはなかった。

「僕が信用できないのか？」

なかなか瑞樹を置いたまま自室に戻れないでいたニシキギに、カナメが仏頂面で問いかける。そんなの信用できないに決まっている。そう言うのと、ならば君もここで一緒に休めばいいと言われたが、さすがにそれはあまりにも異様な構図になりそうだったので、辞退した。ニシキギは自室に戻って小さく溜息をつく。やはり一緒にカナメのコンパートメントに泊めてもらえば良かったかもしれない。

『ニシキギ、ごめんね、やっぱり私、カナメと一緒に生きていきたくない』

そんな言葉を残して、瑞樹がカナメと手をつないだまま歩き去る。眠れぬ夜、軽くMEMシンをあおって眠ると、そんな嫌な夢ばかりみた。正直、ニシキギのイライラはピークに達していた。

「で？何の集合なんだ」

のどが渴いたと五月蠅いマサキに、ただの水を出しながらニシキギは唸る。

「何も知らされてないなら、直接瑞樹から聞いた方がいいんじゃない？」

ニシキギの嫌みをこれっぽっちも気にする様子もなく、マサキは出された水をごくごくとうまそうに飲みほした。

「……」

「それよか、この部屋、居心地がいいなー。俺の部屋もこんな感じにしようかな。やっぱり植物があると、空気が新鮮な気がするなー」マサキは大げさに深呼吸をしている。白い大きな蕾を重そうにつけているのは、月下美人と呼ばれる地球の植物だ。地球の植物は、瑞樹から力を奪わない。できることならば、瑞樹をハルの植物に触れさせたくないとニシキギは思う。森の民と同等の体質を持つ瑞樹には、ハルの植物を操る力がある。しかし、その力の行使は命を削るのだ。それを思うだけでニシキギは息苦しくなる。

月下美人は夜に咲く大輪の一夜花だ。昨夜一輪だけ開花した。甘い芳香が部屋中に広がって、一人ぼっちのニシキギを更に孤独にしたものだ。本来ならば瑞樹と一緒に見るはずだった。今夜あたりたくさんの花が開きそうだが、今夜もどうなることやら。ニシキギは一人ため息をついた。

「何の集まりかさえ、俺は教えてもらえないわけか？だったら俺のコンパートメントを集合場所などにしなければいいだろう？」

つつい目の前のマサキに当たってしまう。

「なんか、イライラしてるな。どうした？老人性うつ病か？」

マサキは、きょとんとした顔でニシキギを見上げた。

「俺を、三百年も生きてる爺と一緒にするなっ」

ニシキギは、声を張り上げた。

「あれ？ニシキギって何百年生きてます系のハル人じゃないの？誰かが教えてくれたんだけど、再生治療をすると色素が抜けるから、色素が薄いやつは大抵ウン百年生きてる場合が多いって。しかもニシキギとカナメって仲良しみたいだし、古なじみなんだろう？」

「俺の色素が薄いのは生まれつきだっ、しかもカナメ・グラブラとは、古なじみでも仲良しでもないっ。あいつは疫病神だっ」

ニシキギがぜいぜいと肩で息をしながら怒鳴ったところで、背後から声がした。

「疫病神で悪かったな。返事がなかったけど、でかい声が廊下まで響いていたから勝手に入らせてもらったよ」

カナメが肩を竦めて言った。カナメの後ろには瑞樹がくっついてる。

「ごめんね、ニシキギ。さっき目が覚めたの」

瑞樹が少し困ったような顔をして、ほほ笑んだ。

番外編 星ブドウ狩りの夕べ(3)

瑞樹に星ブドウ狩りを知らせてくれたのは、ファームの民のセージだった。星ブドウ狩りは、元々森の民の祭なのだけど、今年はファームの民も一般人も合同で行うことになったのだそうだ。だから、その日には、是非ハル共和国に戻って来てほしいと、日本にいた瑞樹にわざわざ電話をくれたのだ。ミントも地球に来てい言う。その日は、既にハル共和国に帰っている日だ。瑞樹は二つ返事で出席すると伝えた。

星ブドウ狩り……なんて魅惑的な響きだろうか。デイモルフオセカの記憶では、星ブドウ狩りは、アールダー村で一番の大祭だった。収穫祭のメインのイベントとして行われ、子供も大人も、それはそれは、楽しみにしている祭だったのだ。

「アールダー村でもエリアEでも、星ブドウ棚は見たことがあるけど、星ブドウ狩りは、初めてだ」

カナメが子供みたいに目を輝かせた。この人は不思議な人だと瑞樹は思う。何百年生きていても、ハル共和国の議長になっても、なにも変わらない。まるで少年みたいだ。瑞樹は小さく笑む。

「ニシキギは？ あんた森の民だったんだろ？」

マサキがニシキギに問いかける。ニシキギは、エリアEへ向かう一団の後方で、一人仏頂面でついて来ていた。

「もう忘れた」

取り付く島もないニシキギの返答に、マサキは肩をすくめる。

実際のところ、ニシキギには、星ブドウ狩りの記憶が、ほぼ無い等しかった。ニシキギがアール・ダー村に居たのは十歳までだったし、その頃には既に、彼が傍にいと森の民の力をコントロールできないという噂が広まっていたので、そのような行事にニシキギが

参加することは、誰からも歓迎されなかったのだ。

疫病神だったのはむしろ俺の方だった、ニシキギは苦い思いで、気の進まぬ歩を進めた。瑞樹は、そんなニシキギの気持ちを知らずか、カナメとばかり楽しげに話している。

エリアEは、既に、夕刻の弱い日射しで満たされていた。地球にある地下都市は、惑星ハルにあったそれと違って、太陽の恩恵を最大限利用できるように、様々な工夫がなされている。採光の為に、地下深くまで無数のグラスファイバーが通され、電力の大半を太陽光がまかなっている。地熱発電も利用しているが、蓄電技術が発達しているのも、太陽光のみでも、さほど不自由することがなかった。惑星ハルに居た時とは異なり、地下都市建設に当たって、それだけの時間的、材料的、技術的余裕があったのだ。

地下都市の採光を太陽光に頼っているということは、当然地下都市にも朝と夜が訪れる。次第に闇に沈んでいくエリアEとは逆に、賑やかなお祭りムードが高まっていく。笛や弦楽器が奏でる賑やかな調べが、心を浮き立たせる。中には音楽に合わせて踊り始める人たちも出てきて、お祭りムードは最高潮だ。

「ミントお！」

「瑞樹！」

瑞樹はファームの民のミントと、女子高生のように手を取り合っではしゃぐ。最後に宇宙船ナンディで会ってから、随分時間が経っていた。

「タンジーは？」

ミントは、つい最近ママになった。瑞樹の問いかけにミントは少し離れた後方を指差す。でっかい人影と、それよりも少し小さめの人影が、しきりに議論を戦わせている。小さい方が森の民の長老カシで、大きいほうの人影が、赤ん坊らしいものをちょこんと抱えていた。あんな大きい人は、彼以外に考えられない。

「もしかしてコブも来ているの？」

瑞樹は目を見開く。

「そうよ、お祖父ちゃんったらタンジを離そうとしないの」

ミントは肩を竦めた。タンジと言うのがミントの子供だ。深い緑色の髪と浅黄色の肌をした賢そうな男の子だ。ファームの民でも緑色の髪を持つ者は珍しいらしく、カシもこのタンジがかわいくて仕方がないらしい。今ではすっかり白髪になってしまっているが、カシもまた、若いころは緑色の髪を持っていた。ファームの民の長老であるカシはコブの伯父にあたる。

「ねえ、瑞樹、いつになったらハル共和国で落ち着くの？」

ミントが満面の笑みを湛えて問いかける。

「え？落ち着く？それって……」

瑞樹は戸惑って、言葉を濁す。短大を卒業するまでには、身の振りがたを考えなければとは思っているのだけど……何をして働くとか、そもそもどっちの国で暮らすのかさえ、何も決心がついていなかった。色々悩みは尽きないのだ。

「いつまでもニシギギさんを待たせちゃ可哀そうよ？」

ミントが悪戯っぽく笑った。

「ねえ、瑞樹は知ってるの？もし、あなたがエリアEに一人で来たのを見かけたら、すぐにニシギギさんに通報がいくことになるのよ？彼が、エリアEにいる人たちに頼んで回ったんですって。あなたのことが、本当に大事なのね」

「……知らなかったよ」

ミントの言葉に、瑞樹は黙り込んだ。

星ブドウ狩りは、すっかり日が落ちてから行われる。その理由は、たわわに実った星ブドウを実際に見れば、すぐに合点がいくことだろう。

「うわあ、キレイだねー」

瑞樹は、星ブドウ棚を見上げてため息をつく。明るいうちは、普通のブドウと何ら変わりが無い。しかし、日が落ちてしまうと、星

ブドウ棚は満天の星空のように輝いた。まるで光の粒を大量に零してしまったみたいだ。

完熟した星ブドウの表面には、白い粉のようなものが付着する。これが暗闇で蛍光を放つのだ。だから、暗闇になれば、どれが完熟しているものなのか、一目で分かると言うわけだ。

収穫した星ブドウは、その場でジュースにされる。子供たちは、この搾りたてのジュースを飲むことをとても楽しみにしている。何故なら、搾りたてのフレッシュな星ブドウジュースは、この時にしか飲めないからだ。搾った果汁の半分は加熱されて、ジュースとして保存される。だから加熱していないフレッシュなジュースは、年に一度、収穫時にしか飲めないことになる。

残りの半分は加熱されずに、そのまま樽の中に貯蔵されるが、一日も経つと、それは子供が飲めない液体に変身してしまう。なぜならば、加熱していない星ブドウジュースは、かなりなハイスピードで、星ブドウ酒になってしまうからだ。星ブドウの表面に付着している蛍光を発する粉は、実は細菌の一種で、星ブドウの糖分をアルコールに分解するのだ。

新しい搾りたての星ブドウ果汁を入れる為に樽を開封するので、星ブドウ狩りの祭りでは、この開封したての星ブドウ酒が、大盤振る舞いされる。ちなみに、星ブドウ酒を蒸留するとメムシンになる。

瑞樹は、冷ややかに光を放っている星ブドウの房に手を添えると、注意深くハサミを入れた。ずしりと重い星ブドウの房が掌に落ちてくる。それを手近の籠に入れる。みんなでやると、籠はあっという間に一杯になった。

「瑞樹、あの上の方のを採るかい？」

カナメが抱き上げて、上の方の星ブドウを採れるようにしてくれた。

「うわー、これはすごく粒が大きいよ」

瑞樹は、嬉しそうに、採った星ブドウの房をカナメに見せる。

「本当だ」

二人で顔を見合わせて、ほほ笑みあう。

「瑞樹……言わなくても分かっていると思うけど……」

カナメが悪戯っぽく瑞樹の瞳を覗きこむ。

「ああ、言わないで、分かっているから。言わなくても分かっていると思うけど……」

瑞樹はカナメの言葉を遮った。

「君の気持は……よく分かるよ。だけど、君が考えていることは、恐らく彼は望まないと思う……かつて僕がそうだったみたいに……」

カナメは、静かに瑞樹の瞳を覗きこむ。

「……うん、そうだね……だけど……」

踏み切れないのだ。瑞樹は視線をさまよわせる。

「悩んで、考えて、立ち止まることは、悪いことじゃない。だけど

……」

「分かっている。分かっているよ……」

瑞樹はカナメの言葉を再び遮った。

「君が分かっていることは、分かっているんだけどね……」

カナメは苦笑する。

「おまえら、何、お互いに分かっている分かっているって言いあっているんだ？ 気味わり」

マサキが近づいてきて、怪訝そうに眉間にしわを寄せた。

「……」

マサキの言葉に、瑞樹とカナメは同時に肩をすくめる。

カナメとは、お互いに意識を遮蔽しあって、独立した自我を保っているが、接近するか、もしくは接触すれば、お互いに表層思考が見えてしまうのだ。特に、表層思考のコントロールが不得手な瑞樹の考えは、カナメにほぼ筒抜け状態になってしまう。このことは、二人以外に、ニシキギしか知らない。

「さっきさあ、すつごくキレイな子がいたんだよ。上の方の星ブド

ウを探りたい様子だったから、手伝ってやろうかと声をかけたら、ブラキカムが猛然と間に割って来てさ、踏み台を持ってきたから必要ないって、すごい剣幕で追い払われたよ」

マサキが不満そうに言うのと、カナメが吹きだした。

「それは、災難だったな。ブラキカムは、以前イブキにフィアンセ候補を盗られたことがあるもんだから、君に過剰反応してしまったんだろうよ」

カナメは涙を拭きながら言った。笑い過ぎたらしい。

ハル脱出時にイブキの配偶者だったフェリシアは、もともとブラキカムのフィアンセ候補だった。カナメは、かなり後になってから、そのことをイブキから聞かされた。

ブラキカムとネモフィラは、あれ以来、良い感じで付き合っている様子だ。カナメは楽しげに笑んだ。

「全く、イブキのお陰で、俺は割を食うことばかりだぜ」

マサキは憤慨して言ったが、それはカナメを更に笑わせただけだった。

星ブドウ狩りが終了すると、星ブドウ酒と料理が振舞われた。参加者には、後でお土産に星ブドウジュースか星ブドウ酒が一人一本ずつ配られるとアナウンスがあった。会場がどっと沸く。今年はかなり豊作だったようだ。

「瑞樹、これを……」

カナメが、瑞樹にグラスを二つ手渡しながら目配せをする。

「……ありがとう」

瑞樹は、少し頬を染めて、グラスを受け取ると、少し離れたブドウ棚の下へと向かった。

「……ニシギ、星ブドウ酒、持ってきたよ」

ニシギは星ブドウ棚の下で、腕を枕に仰向けに寝転んだまま目を閉じていた。結局ニシギは星ブドウ狩りには参加せずに、ここ

で転寝をしていたらしい。瑞樹の声にも反応しない。眠り込んでいくようだ。瑞樹は傍らに座って、星ブドウ酒のグラスをニシキギの頬にくっつけた。

「……」

「ニシキギ？眠ってるの？」

ニシキギも昨日まで連日、議会に出席していたのだ。疲れているのだろう。グラスを近くにある小さな丸テーブルに置いておこうと、瑞樹が立ちあがろうとしたところで、腕を掴まれた。

「うわっ、とと……ニシキギ、急に掴まないでよ、零れちゃうよお」

ニシキギが目を薄く開けて瑞樹を見上げている。碧い瞳に吸い込まれそう。いつ見てもニシキギの瞳には釘づけになる。その透明な碧。でも今は、心なしか怒っているように見える。気のせいではなさそう。瑞樹は肩を竦めた。

「……赤と白があるよ。どっちがいい？」

瑞樹は、右手と左手それぞれに持った星ブドウ酒のグラスを交互にあげて見せた。

「赤」

ニシキギは感情の见えない声で言った。しかし、瑞樹が差し出したグラスには手を伸ばさずに、瑞樹の頭に手を回す。

「え？、あの、ニシキギ？」

「動くなよ。零れるんだろ？」

そのまま引き寄せられて、口づけられる。瑞樹は、両手のグラスから星ブドウ酒を零さないようにするのが精いっぱい、されるがままになってしまう。

「あん、ニシキギ、零れちゃうったら……んっ……」

砂漠をさまよっていた旅人が、やっとの思いで見つけた井戸の水を夢中で飲むように口づけをかわす。気づいたら、グラスのワインは半分ほどになってしまっていた。

「あーあ、随分こぼしちゃった」

抱きしめられたまま、両手に持っていたグラスを見て、瑞樹は小

さくため息をついた。

「飲んでしまえばいい。紅い方は俺が飲む。癪に障るから」

そう言いながら、ニシキギは星ブドウ酒を一気に飲み干した。

「なんで癪に障るの？」

瑞樹は、きょんとした顔でニシキギを見上げる。

「赤を見ると、誰かを思い出すからな。昨夜は何もされなかったんだろうな」

ニシキギの仏頂面を見つめて、瑞樹はクスリと笑った。

「ごめんね、心配かけて……」

瑞樹は、白というよりも金色に近い液体をコクと一口呑み込む。

深みのある幽かな甘みとフルーティな香りが口中に広がった。

「……それでは、質問に対する答えになってないな」

不機嫌そうなニシキギの声に、瑞樹は苦笑する。

「ニシキギが心配するようなことは、何もないよ」

「当然だ。何かあったら、ただじゃ済まさない」

ニシキギはそう言い捨てると、再びドサリと横になった。どんな答えも、結局は、ニシキギの気には入らないようだ。瑞樹はグラスを脇に寄せると、ニシキギに寄り添って横になる。

「ねえ、キレイだね。星ブドウ」

「……」

星ブドウ棚には、まだ未成熟果がかなり残されている。熟したものに比べれば、光の強さはさほどではないが、こうして棚の下から見上げれば、等級の低い星ばかりの夜空を見上げているようだ。

「……アールダー村で、こんな星ブドウ棚をシーカスと眺めたことがあった。シーカスが、まだほんの小さな子どもだったころだ。シーカスは、星ブドウの光を本物の星だと思い込んで、あれは何座かとしつこく訊いてきて……煩かったな」

ニシキギが小さく笑う。

「煩いなんてひどいなあ。かわいいじゃない。で？なんて答えたの？」

惑星ハルの夜空にも星座があった。星空を見上げて、その光の粒を線でたどって絵を描く。それは知力を授けられた生物共通の振舞いなのかもしれない。

「なんて答えたかな……まあ、テキトーに、六角形座とかブドウ座とか言ったような気がするな」

「本当にテキトーだねえ」

瑞樹はくすりと笑う。惑星ハルに、そんな星座がなかったことをデイモルフオセカの記憶で知っていた。苦笑する瑞樹の頬に、ニシキギが口づける。

「星座など、見たいように見えるものだ。俺にはすべての星が、おまえの瞳に見える。すべての星が俺を見てくれていれば、それでいい……」

瑞樹は、微笑むとニシキギの胸に頭を乗せた。少し早い、でも規則正しいニシキギの鼓動。

ハル共和国に来る直前に、両親がニシキギとの婚約を認めてくれた。当面は婚約ということにしておいて、結婚するなら、短大をきちんと卒業してからにしなさいと言われていた。それは瑞樹が望んだことだったし、ニシキギもそれを望んでくれると思う。にもかかわらず、それをニシキギに告げるべきか否か、瑞樹は迷っていた。

「ねえ、ニシキギ、私が地球に戻って間もないころ……もしかして、様子を見に来てくれた？」

ずっと気になっていたことだった。

「……ああ。……誰から聞いた？」

ニシキギの言葉に、瑞樹は胸の奥がじんわりと温くなる。ママが言ったことは本当だったのだ。

「ママから聞いたの。家まで来てくれていたなら、声を掛けてくれれば良かったのに……」

あの頃は、ニシキギが自分のことをそんな風に思ってくれているなんて知らなかった。

「あの時は時間がなかった。もしおまえが幸せそうでなかったら、そのまま連れて帰ろうと思っていたのに、結構幸せそうにしていたんで、正直言って、がっかりした」

ニシキギは小さく笑う。

大荷物を抱えた怪しげな金髪の外国人。その時は、ただ怪しい人とは思わなかったのだとママは言った。それが、ハル共和国に行った瑞樹が、事件に巻き込まれて具合が悪くなった時、頻繁に連絡をくれたニシキギと、ある日突然リンクしたのだと母は言う。この人は、あの時の人だったと。

『あの人はね、瑞樹のことを本当に大事に考えてくれているのよ』母はそう言って、父を説得してくれた。

ニシキギを大事だと考えているのは、瑞樹も同様だ。

——だからこそ、迷う。

「ニシキギ、これ飲んで？これ以上飲んだら、私酔っ払っちゃいそう」

瑞樹は、一口しか飲んでいない星ブドウ酒をニシキギに手渡した。

「……」

ニシキギは無言のままグラスを受け取ると、中の液体を一気に飲み、瑞樹をぐっと引き寄せると口づけた。驚いて目を見開いたままの瑞樹の喉を、甘くて熱い液体が滑り落ちていく。

「ニシキギっ」

「酔ってしまえばいい。俺が連れて帰ってやる」

番外編 星ぶどう狩りの夕べ（4）

この甘やかな芳香は、夏の夜の匂いがする。

ソファーに座らされたまま、瑞樹はぼんやりと考える。部屋の奥のスポットライトの下に、いくつもの大きな白い蕾が重そうにぶら下がっていた。今にも咲きそうにふっくりとしている。少し開き始めた花卉の奥から、その甘やかな香りは漂っていた。

何度か深呼吸をして、瑞樹は小さくため息をついた。胸の真ん中が焼けつくように熱くて、少しドキドキする。それなのに体中の血液が、いつもよりゆっくり流れているようで、けだるい。思考がのろのろとしか働かない。ニシキギに飲まされた星ブドウ酒は、アルコールにめっぽう弱い瑞樹にとっては、結構な量だったようだ。

「大丈夫か？」

ニシキギが冷たいお茶を持ってきてくれる。すっきりとした味と香りのハーブティーで、それは胸のドキドキをなだめるように喉を下った。

「月下美人だね、きれい」

瑞樹は、白い花を見つめて言った。

「……なぜ黙ってた？」

ニシキギは、不機嫌さが最高潮な様子でそう言うと、瑞樹の隣に腰を下ろした。

「……」

星ブドウ酒で、すっかり酔っ払って足取りがおぼつかなくなってしまう瑞樹は、ニシキギに背負われて、この部屋まで戻ってきた。エリアEからこの部屋までの間、ニシキギは一言も口をきいてくれなかった。原因はマサキちゃんの一言だ。言いたくなくて黙っていた訳ではない。言いそびれていた。言い出すきっかけを掴めずにいた、それだけだ。瑞樹は、心の中でため息をつく。

酔って動けなくなってしまった瑞樹は、ニシキギに抱きかかえられるようにして、エリアEの管理棟まで戻った。そんな瑞樹に正樹が声をかけたのだ。

「ん？瑞樹い、いくら親からお許しが出たって、熱々過ぎないか？」

「お許し？何のことだ？」

正樹の言葉に、ニシキギが眉間にしわを寄せる。

すぐ事情に気づいたカナメが、正樹の口を封じて連れ去ったが、時は既に遅かった。正樹は、瑞樹の両親がニシキギと瑞樹の婚約を許したことを親経由で聞いていたらしく、瑞樹がニシキギに伝える前に知らせてしまうという、実にタイミングの悪い状況を招いてしまったのだった。

どのように話せば自分の気持ち伝わるのか、回らぬ頭で考えていると、ニシキギの傷ついたような瞳と目があった。

「気が変わって、俺には話したくなっていた、そう言うことか？」

「違う！そうじゃないよ……そうじゃない」

瑞樹は視線をさまよわせる。さまよう視線が、見事に開いた月下美人の花に吸い寄せられる。

「ねえ、どうして月下美人を選んだの？」

瑞樹の否定に、ニシキギは少し緊張を解いて、小さくため息をついた。

「……地球の植物ならどれでも良かった。花が咲けばより良いと思った。手入れが簡単なのが良かった。そう言ったら、花屋の店員がこれを勧めたんだ」

「一晩しか咲かない花なのに……」

「花なんて咲かなくなっちゃって良かった。地下都市が苦手なお前が、それを見て、少しでも気持が和らぐのなら、どんなものだって良かった。そして一番肝心なのは、おまえの命を削らないことだった。で

きることなら、おまえには、ハルの植物に一切触れてほしくない」
「ニシキギ……私は……たぶんハルの植物が望めば、力を使ってしまうと思うよ」

瑞樹は唇を噛みしめる。必要とされれば、抗えない……たぶん。かつてディモルフオセカがそうだったように……

「……分かってる。本当は分かってるんだ。シーカスがそうだった。力を持つ森の民は大抵そう言うな」

「……」

「だけどエリアEには、おまえ一人で行くな。せめてそれくらいは約束してくれ」

ニシキギの言葉に胸が詰まる。

「……森の民と同じ体質なら、私はそれほど長く生きられない……そう言うことだよ」

「……」

「実はね、カナメと意識がつながった時に、私が再生できないタイプなんだって知ったんだよ。それって、私にとっては当たり前のことだったんだよね。地球人にとっても、ディモルフオセカの記憶を内包してからだって、彼女の認識とは、ほぼズレてなかった」

でも、地球に辿りついたハル人はすべて、カナメとイブキが開発した分解再生装置で、何度でも再生することができる。ニシキギだって同様だ。意識がつながった時に、カナメの悲しみが、やるせなさ、ダイレクトに伝わってきた。

「ハルの植物に触れても触れなくても、恐らく早い段階で、私はあの扉の向こう側に行くことになる……」

一度だけ、瑞樹はあの扉の向こうから戻ってくることができた。それは、カナメとニシキギとハルと、その他医療スタッフの絶妙なパワーバランスの賜物だった。それは、奇跡以外の何ものでもなかったのだ。

「行かせない！」

ニシキギは瑞樹を抱きしめた。

でも、ニシキギだって分かっているのだ。いつまでもこうしてられない現実を……だからこそ、恐れる。

「私は……ニシキギを悲しませるだけの存在になりたくない。もしニシキギが、私なんかよりも……」

言い終わらないうちに、大きな掌で柔らかく口を塞がれた。

「もしおまえが、そんなことを理由に、前に踏み出すことを躊躇っているのなら、今、この場で有無を言わず、おまえを俺のものにしてやる……」

「……」

瑞樹は切なげにニシキギを見上げる。

「言っておくが、再生治療だって万全ではない。何度でも際限なく繰り返し再生できるわけじゃない。色素の定着率が悪くなるのが、その良い例だ。永遠なんて……この世には存在しない」

瑞樹の瞳から涙が零れ落ちる。ニシキギは口を塞いでいた手を外して、瑞樹の頬の涙を拭った。

「その目でちゃんと見ろよ、そして、その悪い頭で考えろ。一晩しか咲かない花が、どうしてこんなに美しいのか。一年限りで命を終える草が、どうして毎年花を咲かせるのか。信じられないくらい長い歲月、多くの命を育んできた惑星が、どうして滅びるのか……」

「ニシキギ……」

「仮に、おまえのいない永遠をくれると言われても、おまえがいる一瞬と取り換える気なんて、俺は、これっぽっちもないぞ」

「……頭悪いのは、ニシキギの方だよ」

泣き笑いの顔で見上げる。

「ああ、おまえのせいで頭がイカれちゃったからな。でも、もう手遅れだ」

ニシキギは小さく笑むと、強く瑞樹を抱きしめた。

——今、この一瞬を止めてしまうことができたなら、私は幸せだろうか？

きつと違う。時が流れるからこそ、その一瞬一瞬が大切に愛しいの

だ。

——では、その一瞬を、どうしたら、もっともつと輝かせることができる？

それは、一夜限りで咲く花さえ知っていることだ。こんな時、言葉にはなんの力もない。答えは目の前にあった。

瑞樹は、ニシキギを強く強く抱きしめ返した。

番外編 星ぶどう狩りの夕べ（4）（後書き）

これにて、本編、番外編ともに完結です。貴重なお時間を割いて私の拙い小説を読んでくださった皆様、本当に、本当にありがとうございます。

平成22年5月28日 招夏

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9686f/>

海の宝玉 蒼穹の欠片

2011年8月30日03時17分発行